

第Ⅱ部

遺構の分析

Asahi ruins



1 遺跡の層序

蔭山 誠一

2 遺跡の調査成果

蔭山 誠一

3 中世から近世の遺構

蔭山 誠一



II 1

遺跡の層序

平成10年度より平成15年度に発掘調査を実施した地点の遺物包含層以下の堆積について東西と南北の柱状断面図を作成した(図2-1-1)。調査箇所 conditions により柱状図が弥生時代の遺物包含層のみの場合や基盤堆積物が記録できなかった地点もあるが、本報告の調査地点の基本的層序は上から現在の道路建設に伴う盛土、近代以後の水田耕作土層、古墳時代以後の湿地状堆積物、弥生時代の遺物包含層(黒色土、ここでは暗色シルト・細粒砂)、弥生時代以前の自然堆積による基盤堆積層(従来の基盤砂層と青灰色シルト)からなる。居住域や墓域が形成される地点では表土掘削において近代以後の水田耕作土以後の堆積を掘削するとその直下に弥生時代の遺物包含層が現れる場合が多く、古代以後の湿地堆積物は部分的にみられる。一方、旧河道の谷Aや谷Bの地点では古代以後の湿地堆積物が厚く堆積している状況が見られた。

今回の発掘調査においては、「調査の方法」において触れたように、堆積物の色調・粒度・包含物について一定の基準を設けて可能な限り記述の統一に努めた。ただし、各地点の柱状図は各調査区の担当者によって作成された土層セクション図

にもとづいており、調査区の特徴、調査時の天候や湧水、シートパイルの色調等の条件によって微妙に異なる記述がされており、厳密な地層対比はできていない。

以下において各断面図を詳しくみていくが、色調は朝日遺跡の堆積物が無彩色に近い特徴を活かして色調を明色:明度6~8、中間色:明度4・5、暗色:明度1~3に分類し、粒度をシルト(粘土)、細粒砂、中粒砂・粗粒砂に分類して表現した。したがって分析は色調の明度と粒度によって記述する。

(1) 南北断面

A. 02Aa区~03Aa区(図2-1-2、A-B)………

北居住域の外北東部から北居住域の東縁部にあたる南北約270mの断面図である。柱状図数は9本である。

暗色シルト・細粒砂は北居住域の外側にあたる02Aa区の層厚が約20cm、北居住域の環濠帯にかかる03Aa区の層厚が約30cmと薄く、北居住域の内部に入る01Aa区や99Ac区において層厚約80cmと厚く堆積している。暗色シルト・細粒砂の上面は層厚の厚い地点においては標高2.6m

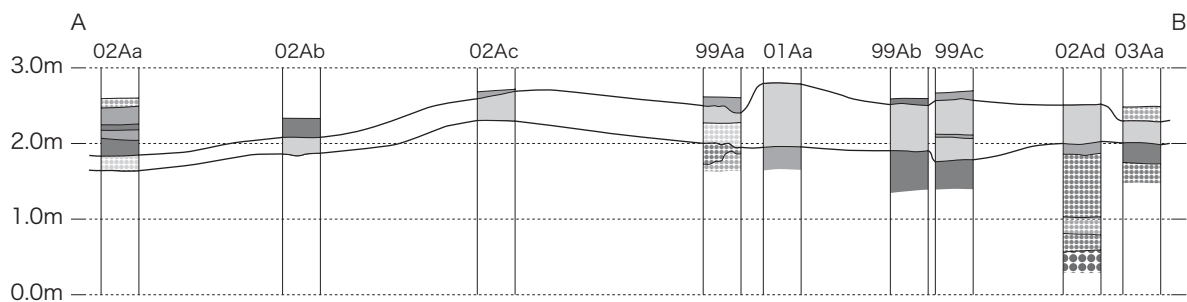


図2-1-2 02Aa区~03Aa区 堆積層柱状断面図(垂直方向は1:100、水平方向は1:2,000)



～2.7m前後にて、02Aa区のように層厚の薄い地点においては標高1.8m前後にて検出される。暗色シルト・細粒砂の下面も同様に層厚の厚い地点において標高2.0m前後と比較的高く、層厚の薄い02Aa区では1.65m前後と北側の地点程低くなる。したがって、暗色シルトの・細粒砂の堆積が薄い北側の02Aa区や02Ab区においては古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）の堆積が厚くなり、堆積が厚い地点においては暗色シルト・細粒砂の上にはあまり残存していない。

基盤堆積物上面の高さは暗色シルト・細粒砂の下面と同一であるが、99Aa区～03Aa区において上側に中間色～明色のシルト、下層において明色～中間色の中粒砂がみられる傾向がある。基盤堆積物は全体に粒度の淘汰が良いが、地点による堆積物の微妙な起伏があり、堆積環境の変化が伺われる。

B. 02Ba区～03Ba区（図2-1-3、C-D）……………

北居住域の東環濠帯の外縁部にあたる南北約270mの断面図である。柱状図数は7本である。

暗色シルト・細粒砂は北居住域の外側にあたる02Ba区の層厚が約20cmと薄く、北居住域の北東にある墓域になる02Bb区から03Ba区において層厚約30cm～60cmと比較的厚く堆積している。暗色シルト・細粒砂の上面は層厚の厚い地点においては標高2.2m～2.5m前後にて、02Ba区のように層厚の薄い地点においては標高1.8m前後にて検出される。暗色シルト・細粒砂の下

面も同様に層厚の厚い地点において標高1.8m～2.15m前後と比較的高く、層厚の薄い02Ba区では1.65m前後と低くなる。古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は01Ba区や03Bb区のように暗色シルト・細粒砂の堆積が厚い地点ではほとんどなく、その他の地点で暗色シルト・細粒砂の堆積が薄くなる分その上部に古代以後の湿地堆積物が厚みを増して堆積する状況が伺われ、古代以後の地形の起伏を反映している可能性がある。

基盤堆積物は02Ba区と02Bb区において中間色～明色のシルトが上面にあるが、その他の地点では上面に中間色の細粒砂が堆積しており、02Bb区は基盤堆積物の粒度が細かい点や暗色シルト・細粒砂の上面がやや低く古代以後の湿地堆積物がやや厚く堆積している点から、弥生時代においても全体に窪地であった可能性がある。基盤堆積物の下方への変化は03Bb区の下層において中粒砂に変化していく状況があるが、03Ba区の下層においては中間色のシルトが堆積しており、基盤堆積物の堆積が一様でないことを示すであろうか。

C. 99Ad区～01Dc区（図2-1-4、E-F）……………

北居住域の南縁部から谷Aを経て南居住域西側を縦断する部分にあたる南北約190mの柱状図である。柱状図数は6本である。

暗色シルト・細粒砂は北居住域南縁部にあたる99Ad区の層厚が約40cm、北居住域の南環濠帯にかかる01Ac区・01Ad区の層厚が約40cm前後、南居住域の内部に入る02Dc区～01Dc区におい

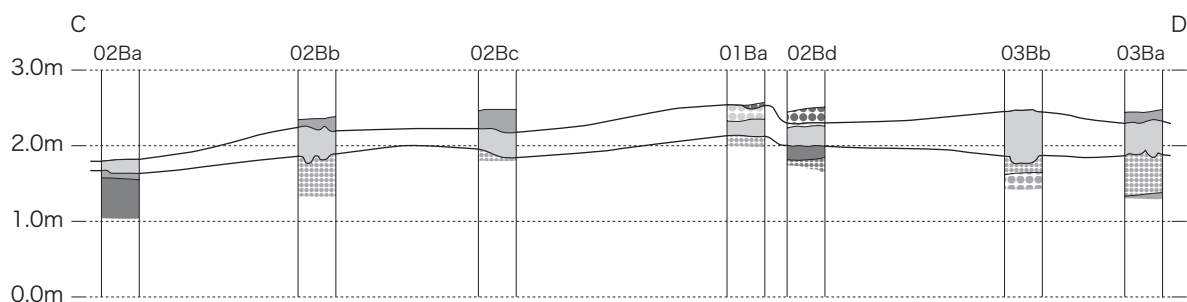


図2-1-3 02Ba区～03Ba区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）

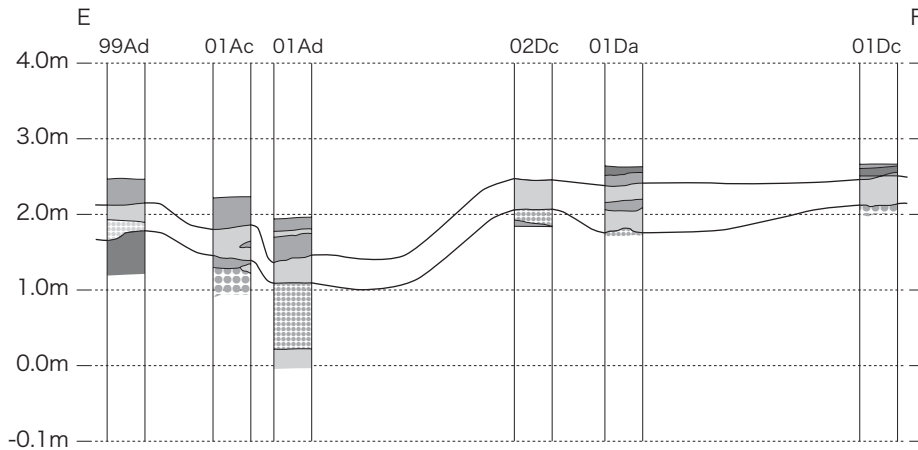


図2-1-4 99Ad区～01Dc区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）

て層厚約40cm～55cm堆積している。暗色シルト・細粒砂の上面は北居住域に入る99Ad区にて標高2.1m前後、北居住域の南環濠帯から谷Aにかかる01Ad区では標高1.4m、南居住域に入る地点において標高2.4m～2.5mにて検出される。暗色シルト・細粒砂の下面は、南北の居住域に入る地点において標高1.7m～2.1m前後と比較的高く、谷Aにかかる01Ad区では標高1.1m前後と低い。古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は、南北居住域の地点には30cm前後の堆積があり、環濠帯から谷Aにかかる01Ac区・01Ad区では古墳時代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルトが厚く堆積している。

基盤堆積物は99Ad区上面において明色のシルト、01Ad区上面において中間色の細粒砂、02Dc区・01Da区上面において中間色の細粒砂、01Dc

区上面において中間の中粒砂がみられる。他の地点においてみられる上方細粒化の傾向が適応できるなら、南居住域北側の02Da区から01Dc区のある南居住域の南にかけて基盤層の高まりがみられる可能性がある。

D. 02Dd区～98Dc区（図2-1-5、G-H） ……

南居住域の南縁部から南に展開する墓域を経て南の低い地点に至る南北約300mの柱状図である。柱状図数は14本である。

暗色シルト・細粒砂は南居住域南縁部にあたる02Dd区と02De区の層厚が約60cm前後、南の墓域になる01De区～01Dh区の層厚が約10cm～35cm前後、南の墓域の外縁部から遺跡の南限の溝が検出された01Di区と99Da区において層厚0cmと15cm、さらに南の水田域が推定される低い地点である99Db区～98Dc区では、北

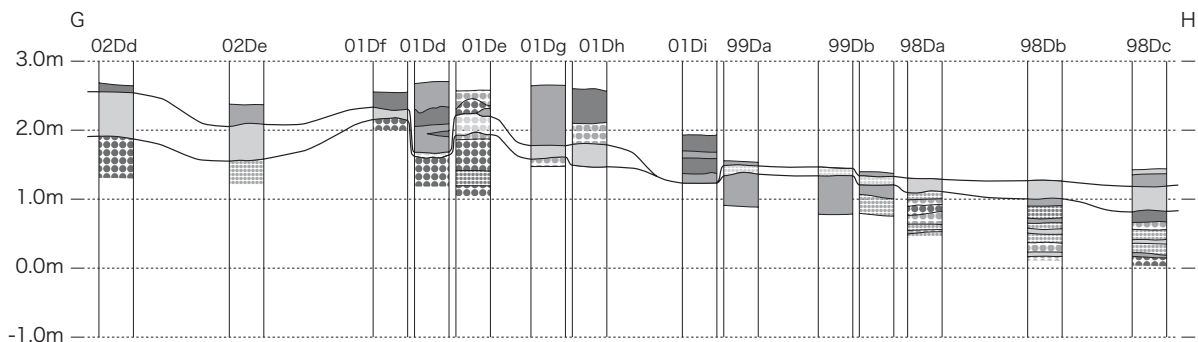


図2-1-5 02Dd区～98Dc区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）



側の99Db区において層厚13cmと薄く、一番南の98Dc区において層厚35cmと厚く堆積している。暗色シルト・細粒砂の上面は南居住域に入る02Dd区にて標高2.65m前後、南の墓域北側の01De区・01Df区では標高2.3m前後、南の墓域南側に入る01Dg区・01Dh区において標高1.8m前後、遺跡の南限の溝が検出された99Da区から南の低い地点にかけては標高1.2m前後にて検出される。02De区・01Dd区・01Di区では古代以後の湿地堆積物が深く暗色シルト・細粒砂を削薄しており、01Dd区・01Di区の暗色シルト・細粒砂の層厚はほとんどなくなってしまっていた。下面は、南居住域～南の墓域に入る地点において標高1.5m～1.9m前後と比較的高く、遺跡の南限の溝が検出される99Da区が1.35m、一番南の98Dc区が0.85mと南の墓域の外側は急速に下がっていく傾向がみられる。古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は、南居住域の地点には10cm～30cm前後の堆積があり、南の墓域から遺跡の外側である南にかけて50cm前後から先に述べた01Dd区の1.0mと

古墳時代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルトが厚く堆積している。

基盤堆積物は南居住域から南の墓域にかかる02Dd区～01Dg区の上面においては明色～中間色の細粒砂～中粒砂がみられ、遺跡の南限の溝が検出される99Da区とその南の99Db区上面において中間色のシルト、さらに南の98Da区～98Dc区においては中間色の細粒砂～明色のシルトが上面にみられる。他の地点においてみられる上方細粒化の傾向が適応できるなら、南居住域の南縁部に当たる02Dd区から南の墓域南側の01Dg区にかけて基盤層の高まりがみられ、遺跡の南外側に当たる地点では明色～暗色のシルト～中粒砂と暗色の腐植物を含む堆積などが互層になって薄く堆積している状況が見られる。

E. 01Cb区～98Ch区（図2-1-6、I-J） ……

南居住域の東縁部から南東の墓域を経て南の低い地点に至る南北約520mの柱状図である。柱状図数は17本である。

暗色の堆積物では、暗色中粒砂（上部に細粒

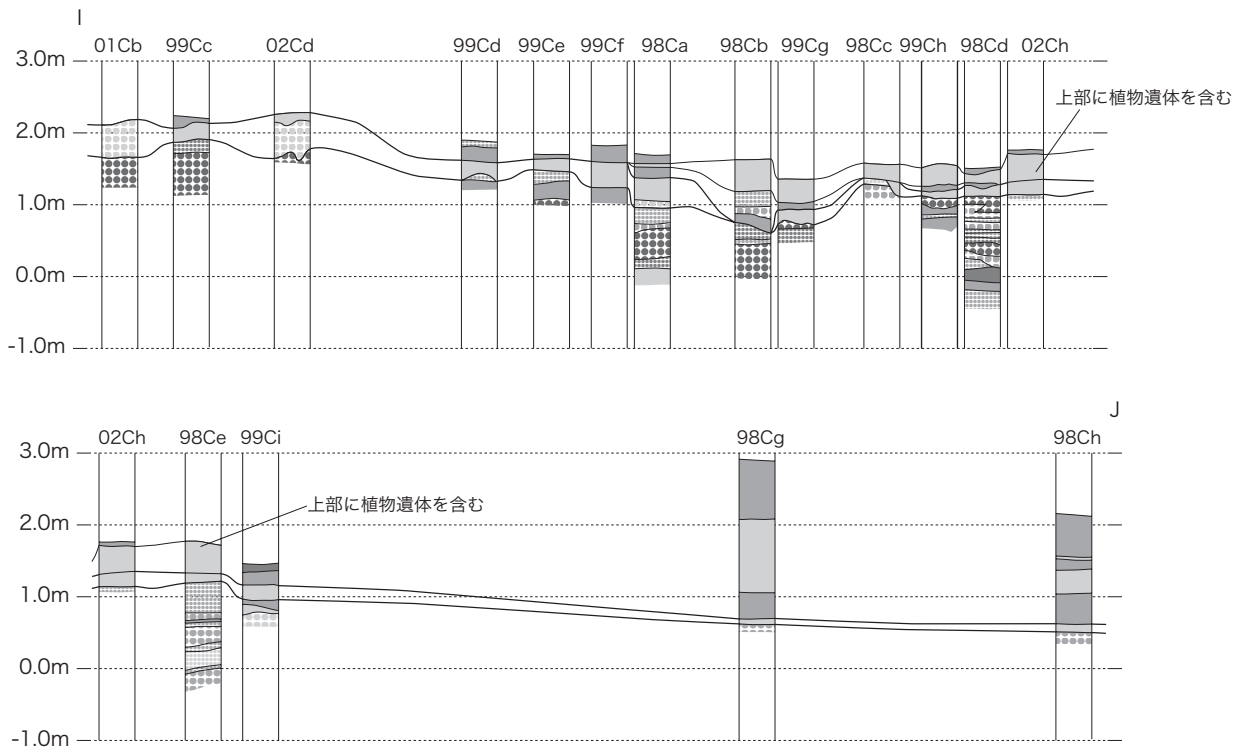


図2-1-6 01Cb～98Ch区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）

砂)が堆積する01Cb区・02Cd区と暗色シルト・細粒砂が堆積する98Ca区～98Ch区・99Cc区～99Ch区・02Ch区の大きく2つに分かれ、ほぼ南居住域がかかる地点とその外縁部の地点に分かれる。また暗色の堆積物の層厚では南居住域東縁部にあたる01Cb区と南居住域の弥生時代後期環濠を挟んで南東に位置する02Cd区の層厚が50cm前後、南東の墓域になる99Cc区～99Cf区と南の墓域の外縁部にあたる98Ca区の層厚が約15cm～40cm、さらに南の低い地点である98Cb区～98Ch区では、0cm～20cmと大きく3つに分けられる。98Cb区では上部に堆積する古代以後の湿地堆積物により暗色シルト・細粒砂が全て削薄されている地点もある。暗色シルト・細粒砂・中粒砂の上面は南居住域に入る01Cb区と居住域から墓域に変遷する99Cc区・02Cb区にて標高2.2m～2.3m前後、南の墓域の99Cd区～99Cf区では標高1.65m前後、南の墓域の外縁部にあたる98Ca区から南の低い地点である98Ch区にかけて、標高1.35m前後から0.60m前後へとやや凹凸はあるが南に緩やかに傾斜する地形が推定される。暗色シルト・細粒砂・中粒砂の下面は、南居住域に入る01Cb区と居住域から墓域に変遷する99Cc区・02Cb区にて標高1.65m～1.9m前後、南の墓域の99Cd区～99Cf区では標高1.25m～1.45m前後、南の墓域の外縁部にあたる98Ca区から南の低い地点である98Ch区にかけては0.5m

～0.95mとやや凹凸はあるが、居住域から墓域を経てその外側の南にいくにつれ、低くなる傾向が見られる。古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト(腐食物を含む)は、南居住域の地点には0cm～15cm前後と後世の開発によりほとんど削られており、南の墓域から墓域の外縁部に当たる99Cd区～98Ca区では5cm～30cm前後と近代以後の水田耕作土の下から薄く残る。墓域の南の地点である99Cb区～98Ch区では50cm以上堆積する地点がほとんどで、層厚1.0mをこえる地点も確認された。

基盤堆積物は居住域の遺構が形成される01Cb区・99Cc区・02Cd区の上面においては明色～中間色の細粒砂～中粒砂がみられ、南の墓域の地点である99Cd区～99Cf区では中間色のシルト・細粒砂、さらに南の98Cb区～98Ch区・99Cg区～99Ci区・02Ch区においては中間色～明色のシルト・細粒砂・中流砂が上面にみられ、下部の状況もこれらの各層が互層となり多様である。

(2) 東西断面

A. 01Ab区～01Bd区(図2-1-7、K-L)……

北居住域南縁部から東環濠帯を経て北東の墓域に至る東西約200mの柱状図である。柱状図数は7本である。

暗色シルト・細粒砂は後世の削平により残存状態が不良であった01Bb区を除いて、層厚30cm

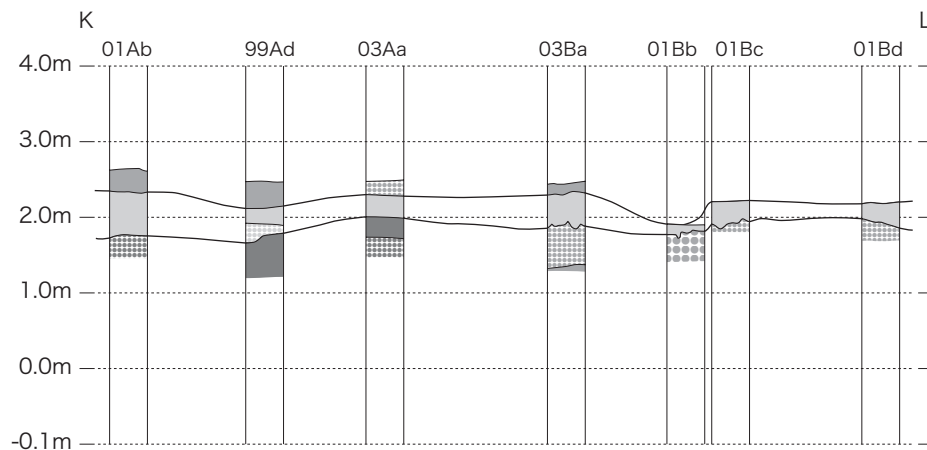


図2-1-7 01Ab～01Bd区 堆積層柱状断面図(垂直方向は1:100、水平方向は1:2,000)



～60cm前後あり、中でも01Ab区のある北居住域南縁部に厚い堆積がみられる。暗色シルト・細粒砂の上面は先に述べた01Bd区の標高1.9mを除くと標高2.15m～2.35mとほぼ均一である。下面は、北居住域南縁部に当たる01Ab区・99Ad区において標高1.75m前後、北居住域の東環濠帯に当たる03Aa区から東の01Bd区にかけて標高1.9m～2.0mとやや高くなっており、微高地の北東が高くなる状況を示す。

古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は、北居住域の地点にみられるように20cm～30cm前後の堆積が近代以後の水田耕作土下に存在したものと考えられるが、北東の墓域にかかる01Bb区～01Bd区ではほとんど残存していなかった。

基盤堆積物は上面に明色シルトがみられる99Ad区と03Aa区、明色～中間色細粒砂がみられる01Ab区・03Ba区・01Bc区・01Bd区、中間色中粒砂がみられる01Bd区があり、全体では北居住域に当たる地点より北東の墓域にかかる地点において粗粒の堆積物が基盤堆積物の上面に堆積しており、上方細粒化の現象がみられるならば、北東の墓域に入る地点の方が北居住域における地点よりやや基盤堆積物の高まりが推定される。

B. 02Be区～02Bi区（図2-1-8、M-N）…………

谷Aを挟んで東墓域にあたる約200mの柱状図

である。柱状図数は7本である。

暗色シルト・細粒砂は谷Aにあたる02Bg区・99Bb区の西に位置する02Be区と03Bd区においては層厚45cm～75cmあり、東に位置する02Bh区において25cm前後と東側において薄くなっている。また02Bi区・02Bj区においては後世の削平により残存状態が不良で、ほとんど残存していなかった。暗色シルト・細粒砂の上面は先に述べた谷Aの西に位置する02Be区と03Bd区にて標高2.1m～2.15m、東に位置する02Bi区・02Bj区にて2.15m～2.35m以上となりやや谷Aの東に高くなる傾向がある。02Bh区の上面は1.75mとやや低く、谷A戸の関連が推定できる。下面は、谷A堆積物による基盤堆積層の削薄が谷Aにあたる02Bg区・99Bb区の他に03Bd区と02Bh区にもみられ、西は02Be区の1.7m、東は02Bj区2.35mから谷Aの中央部分に当たる99Bb区の-0.4m前後に落ち込んでいる。

古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は、谷A中央部にあたる99Bb区において弥生時代中期前半の遺物包含層の上に約2m前後の堆積があり、その周辺の02Bg区・02Bh区にかけて上面が標高2.1m～2.3mまで堆積している。

基盤堆積物は谷Aにあたる02Bg区・99Bb区以外では上面に明色～中間色のシルト・細粒砂がみられ、谷の下面部分は細粒砂～中粒砂になっている。

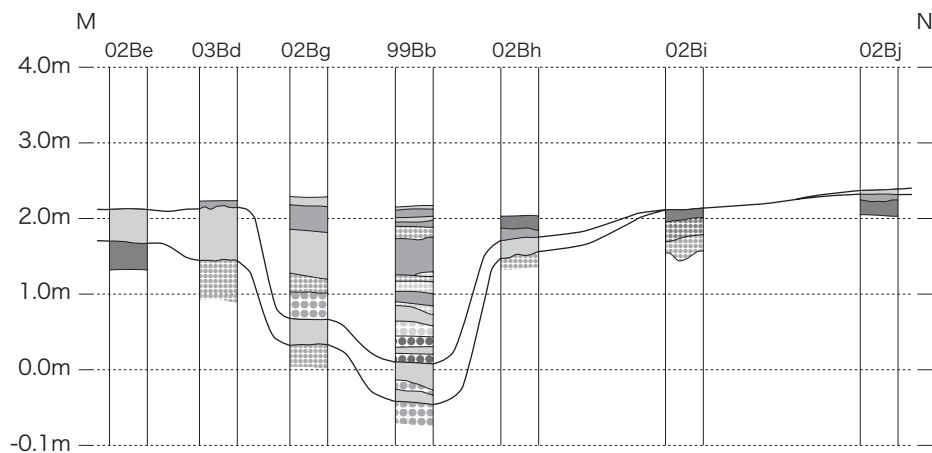


図2-1-8 02Be区～02Bi区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）

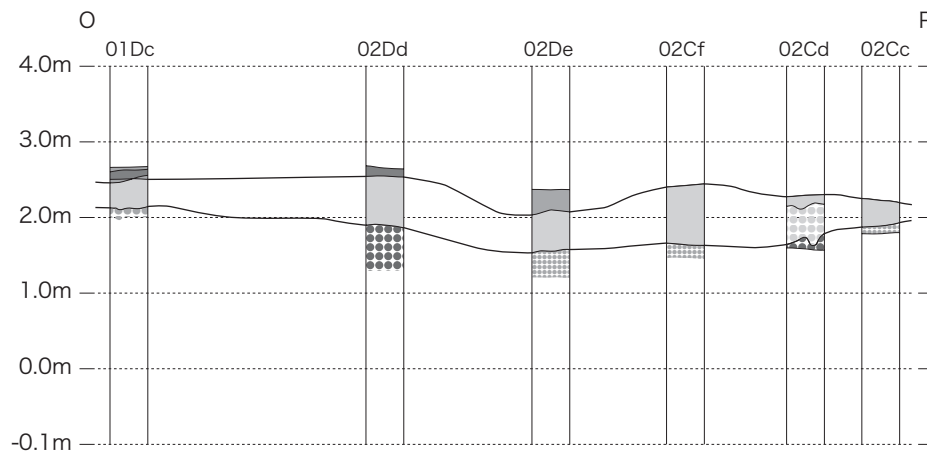


図2-1-9 01Dc～02Cc区 堆積層柱状断面図（垂直方向は1：100、水平方向は1：2,000）

C. 01Dc区～02Cc区（図2-1-9、O-P）………

南居住域南縁部をほぼ横断し、南東の墓域に至る約200mの柱状図である。柱状図数は6本である。

暗色シルト・中粒砂は02Dd区・02De区・02Cd区・02Cf区において層厚0.55m～0.8m、01Dc区と02Cc区の層厚35cmより厚く堆積しており、居住域における縁辺部分において堆積が薄くなる傾向を示している可能性がある。暗色シルト・中粒砂の上面は標高2.25m～2.5mと比較的高く、02De区のように古代以後の湿地堆積物による削薄が少なければ、ほぼ均一な高さになるように思われる。下面は、南居住域の環濠帯付近にある02De区・02Cf区・02Cd区において1.6m～1.65mと南居住域にある01Dc区・02Dd区、東の居住域縁辺に位置する02Cc区の1.9m～2.1mに比べて低くなっている。

古代以後の湿地堆積物である中間色～暗色のシルト（腐食物を含む）は、南居住域にかかる01Dc区・02Dd区・02De区において層厚10cm～30cm前後残存していたが、02Cc区・02Cd区・02Cf区においては後世の削平により残存してい

なかった。

基盤堆積物は上面に明色～中間色の中粒砂がみられる01Dc区・02Cd区・02Dd区と中間色細粒砂がみられる02Cc区・02Cf区・02De区があり、南居住域南縁部に位置する01Dc区・02Dd区を中心に砂堆積の高まりが存在する可能性がある。

（3）谷Aを挟む南北の微高地の特徴

以上、以前から指摘されているように谷Aを挟んで東西にのびる微高地上に形成される南北の居住域を中心に暗色シルト・細粒砂が厚く堆積し、その周りに展開する墓域、さらにその周りに展開する水田域へと順次層厚を薄くしていく傾向が読み取れる。また暗色シルト・細粒砂の上面は谷A北側の北居住域の地点が、南側の南居住域の地点より高く、基盤堆積物上面の高さも同様の傾向がある。基盤堆積物の上面には、北居住域の地点では細粒砂～シルトがみられる地点が多く、南居住域の地点では細粒砂～中粒砂がみられる傾向がある。とくに今回調査を行った地点では南居住域南側の地点において中粒砂が上面にみられる状況から、砂堆積の高まりが推定できる。



Ⅱ 2

遺跡の調査成果

今回発掘調査した地点は87か所に及び、地点も散在している。また各調査区の面積が100m²前後の小規模なものがほとんどであることから、昭和57年に愛知県教育委員会により報告された調査成果（以下「県報告」）と平成3年に財団法人愛知県埋蔵文化財センターにより報告された調査成果（以下「財団報告I」「財団報告V」）を含めた状況を参考に、検出した遺構の理解の助けとしたい。そのため本分析では、2か所～数カ所程度の調査区のまとまりごとに、これまでに明らかにされている主要な遺構データと合成した大きく3時期の400分の1平面図を作成し（図2-2-1の地区割り図参照）、遺構の概要を述べる。

（1）北居住域東縁部

A. 位置とこれまでの成果（図2-2-1）……………

北居住域の東縁部に位置する地点で、99Aa区～99Ac区・01Aa区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域の中心部側を79区～84区、7期の内環濠がめぐる地点側を72区～74区として調査されている。

これまでの調査成果において、北居住域内部の成果としては、北側の環濠帯にかかる84区北側においては7期の内環濠SD367が確認されている。他は3条の溝が確認されているのみであるが、その南側79区～84区南側においては2期・3期の円

形・隅丸長方形の竪穴住居3棟（建て替えを含めると5棟）・隅丸方形竪穴住居3棟・中型土坑5基・大型土坑23基、4期～5期の隅丸方形～長方形の竪穴住居1棟・中型土坑3基・大型土坑31基、6期の中型土坑1基・大型土坑10基、7期の長方形竪穴住居1棟・中型土坑1基・大型土坑5基・溝1条、8期の溝1条が確認されている。他にも時期不明の大小の土坑が多数検出されている。弥生時代中期から後期（2期～7期）にかけての居住域が展開していることが推定できる。7期においては81区SD380のように北居住域内部を北西から南東に流れる幅1m以上の溝がみつかり、北居住域を区画する溝の存在が想定されている。8期以後は北居住域南縁部に沿ってはしると思われる幅1.7mの79区SD371があるが、その他の遺構は検出されていない。

北居住域東縁部の7期の内環濠がめぐる72区～74区では、7期以後の遺構は7期の内環濠がめぐることが確認されているだけであるが、弥生時代中期には2期・3期の中型土坑1基、大型土坑1基、4期～5期の大型土坑7基、6期の中型土坑1基、大型土坑4期が検出されており、竪穴住居の検出はないものの時期不明の大小の土坑が多数見つかることから2期から6期にかけて居住域の存在が推定されている。

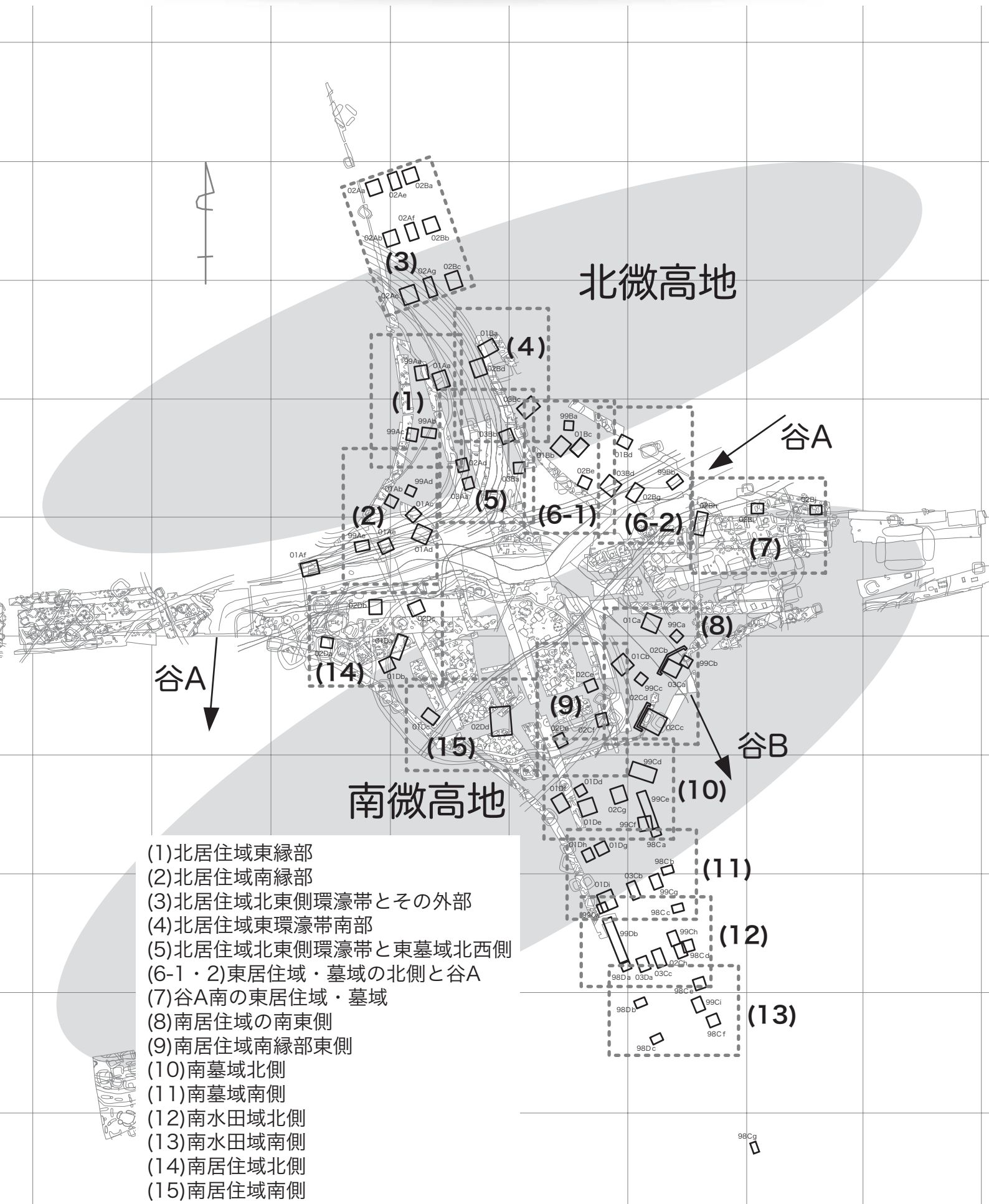


図2-2-1 平面図の地区割り (1 : 5,000)

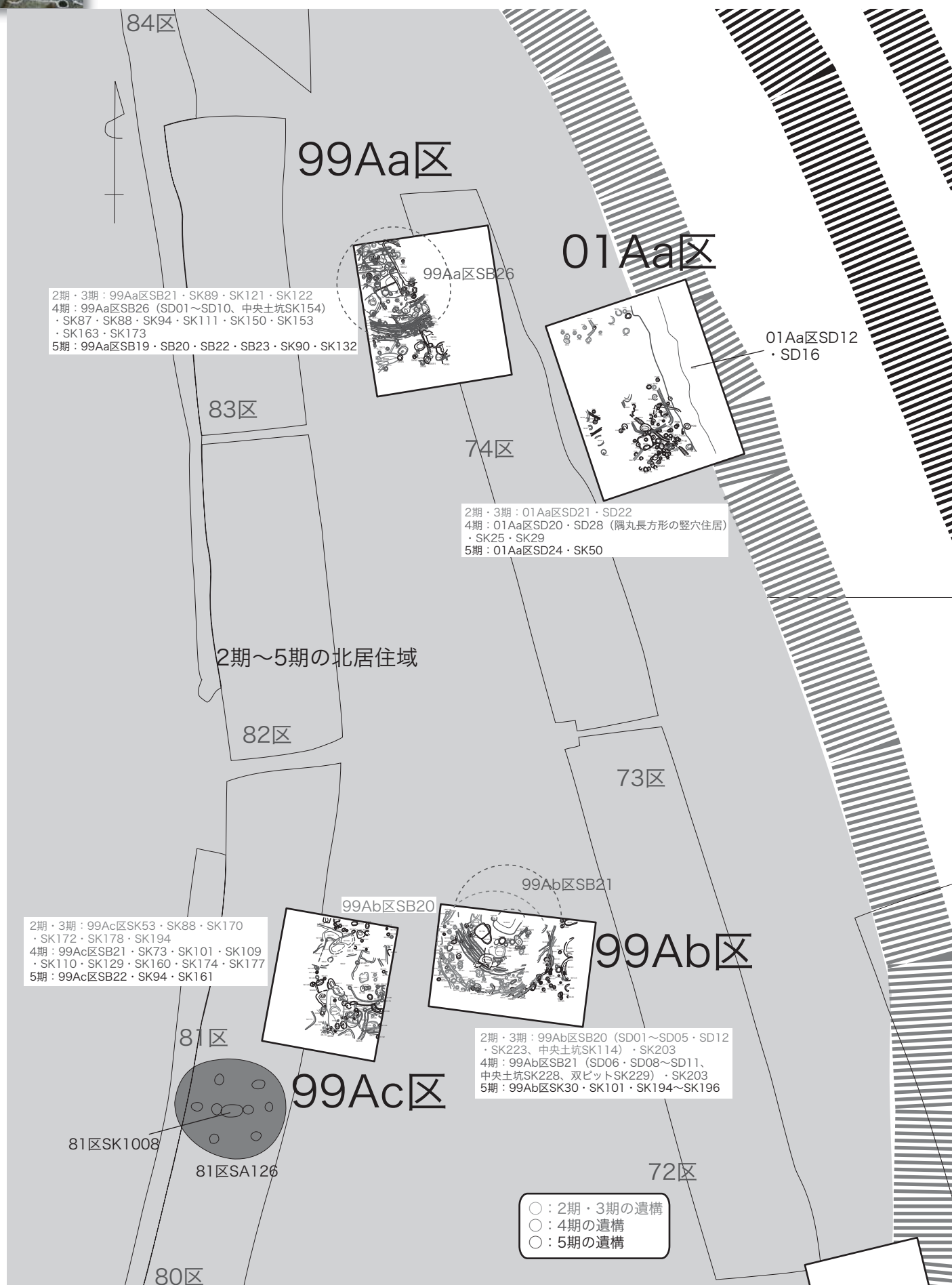


図2-2-2 2期～5期の北居住域東緑部 (1:400)

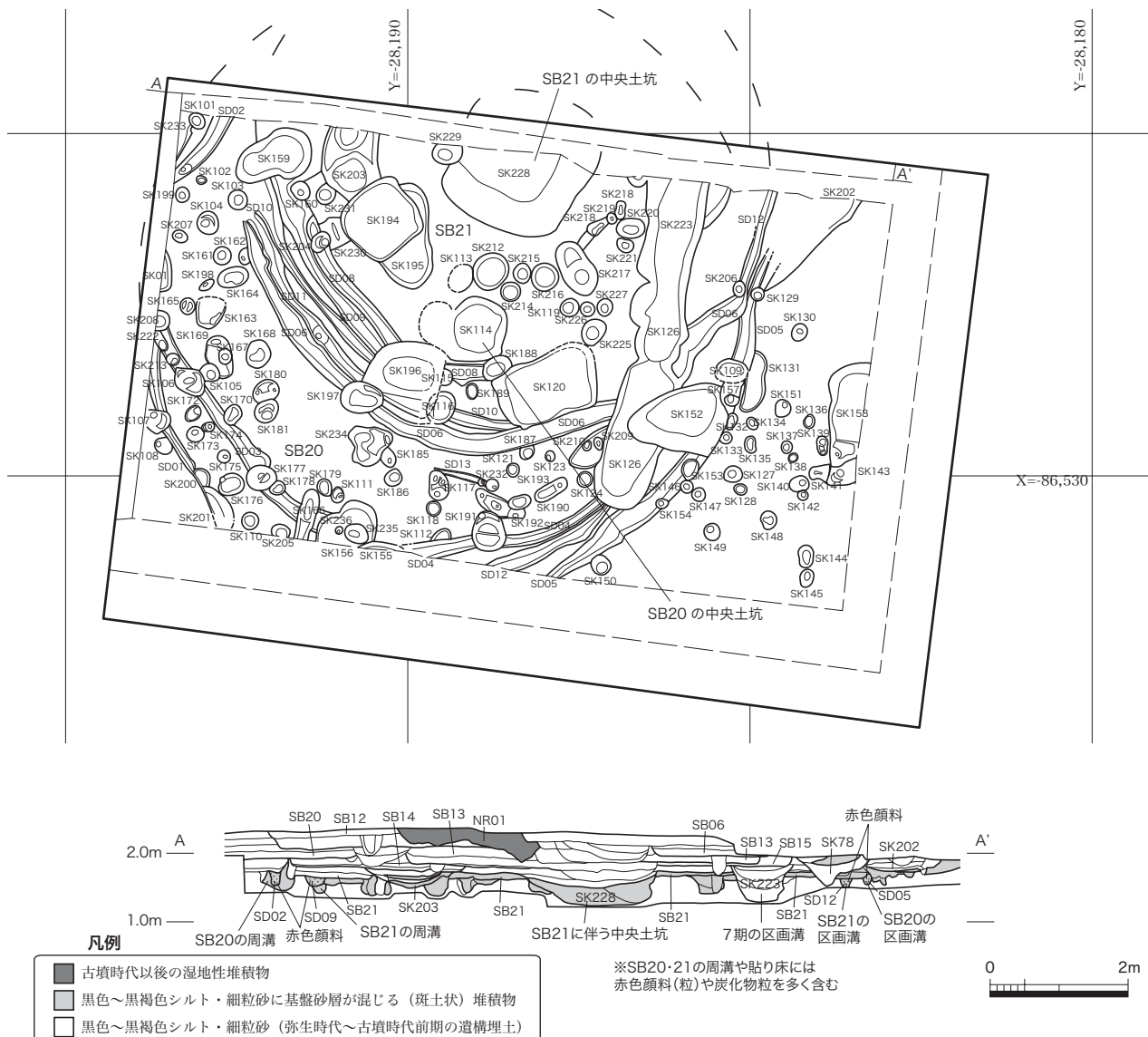
第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果

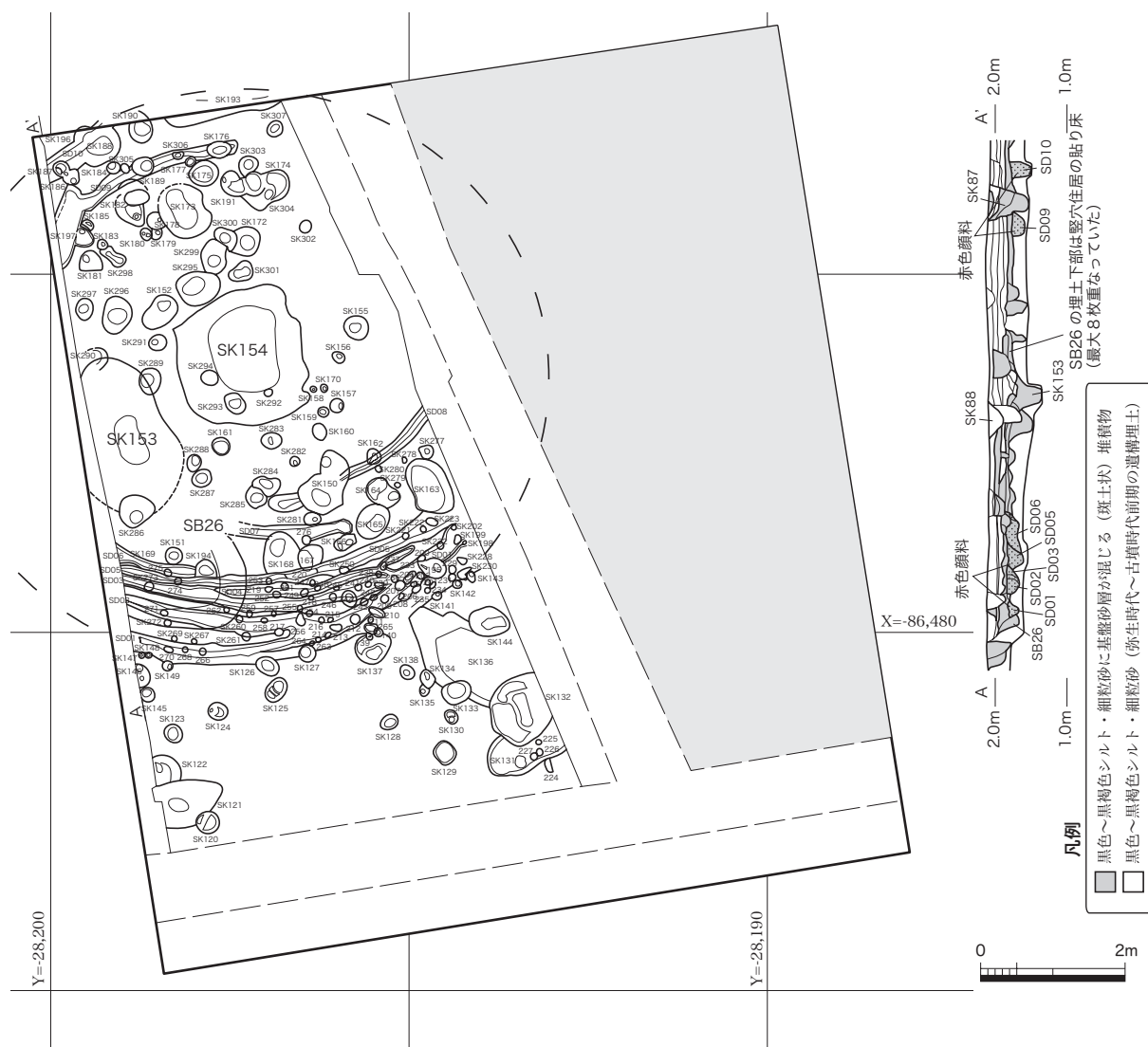
B. 今回の調査成果

a. 弥生時代中期の内環濠（図2-2-2・写真2-2-1）

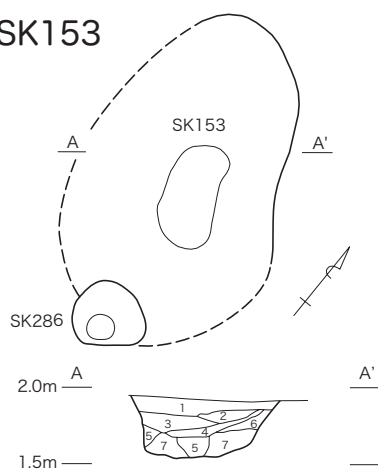
01Aa区において、財団報告により2期にさかのぼる可能性がある環濠の存在が指摘されていた部分において、7期の方形周溝墓の周溝01Aa区SD02・SD06・SD10の下から弥生時代中期の溝2条（上部をSD12、下部をSD16として検出）をほぼ同一経路にて検出できた。溝は検出面において幅4.0m以上あり、溝の東肩は調査区外にある。溝の最深部はSD12が標高1.88m、SD16が

標高1.04mである。SD12の最上部（黒色シルト）は6期後半の土器が比較的まとまって出土し、上層から下層にかけてハマグリを主体とする貝殻が廃棄されていた（貝層A・B）。SD12の北側に堆積するのが貝層A、SD12南側に堆積するのが貝層Bで、貝層Aが新しい堆積である。貝層からは4期・5期の遺物とともに少量の6期の遺物が混じることから、5期後半から6期にかけて廃棄されたものと考えられる。出土遺物からはSD12の最下層は4期～5期の溝の堆積、SD16の最下層は2期～4期の溝の堆積と考えられる。溝の西側（居



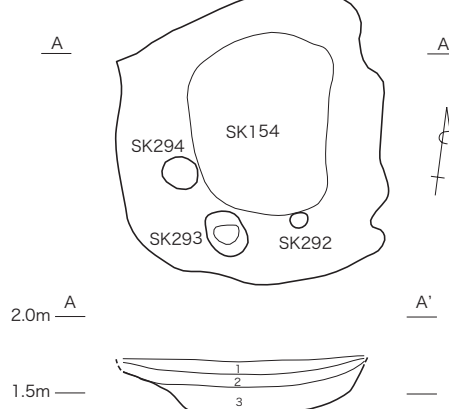


SK153



- 1 10YR2/1黒色シルト
- 2 5Y6/2灰褐色シルト 多量の灰含む
- 3 N1.5/O黒色炭化物 多量の炭化物含む
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト (焼土) 10YR2/1黒色シルト 炭化物含む
- 5 10YR4/2灰黄褐色シルト N1.5/O黒色シルトの斑土
- 6 7.5YR5/4にぶい褐色シルト 炭化物獣骨含む
- 7 5Y8/4淡黄色シルト N1.5/O黒色シルトの斑土

SK154



- 1 10YR2/1黒色シルト 炭化物、貝、獣骨含む 5YR5/4にぶい赤褐色焼土含む
- 2 7.5R2/1赤黒色シルト 7.5Y2/1黒色シルトと2.5Y8/3淡黄色シルトの互層
- 3 N1.5/O黒色シルト 多量の炭化物、貝、獣骨含む

図2-2-4 99Aa区 SB26・SK153・SK154 (上段1:100、下段1:50)

住域内側)に土塁状の堆積は確認できなかった。
また、この内環濠が弥生時代中期の間連続して存在した場合、内環濠と01Aa区において検出できた遺構の存在の仕方が複雑な状況になるだろう。

b. 弥生時代中期の居住域

北居住域東縁部の99Aa区～99Ac区・01Aa区は弥生時代中期においては、環濠の内側である居住域の地域で、以下にあげた各時期の主要な遺構内容からみても、竪穴住居や土坑、竪穴住居の周溝と考えられる小溝がほとんどで、遺構の種類から大きな変化を読み取ることは難しい。よってここでは以下に弥生時代中期各時期の主要遺構を抽出し、竪穴住居・土坑の形態や特徴について述べる。

弥生時代中期前葉(2期・3期)の主要遺構(図2-2-2)

99Aa区SB21・SK89・SK121・SK122、99Ab区SB20(SD01～SD05・SD12・SK223の周溝からなる平面円形住居)・SK203、99Ac区SK53・SK88・SK170・SK172・SK178・SK194、01Aa区SD21・SD22等がある。

竪穴住居では、平面円形の「松菊里型住居」に分類できる99Ab区SB20(図2-2-3)と平面方形状住居である99Aa区SB20がある。99Aa区SB20は調査区南西隅にて検出したもので、全容はわからないが埋土は黒褐色シルトである。99Ab区SB20は2回以上の建て替えがみられ、最も大きい外側の周溝のめぐる部分を竪穴住居の大きさと考えると径8.3m程となる。周溝(SD01～SD05・SD12・SK223)は幅10cm～35cm、深さ5cm～10cm前後の溝で、埋土はオリーブ黒色シルトに赤色顔料(ベンガラ粒)が混じる。周溝の内側で床面と思われる黄色シルトと赤色顔料が混じる面がみられた。中央土坑と考えられる位置に径1.2m程のSK114(黒色～オリーブ黒色シルトに炭化物や赤色顔料が少量混じる埋土)があり、遺構の層位と出土遺物から5期以後の土坑と考えられるため、中央土坑はSK114により壊されている可能性が高い。01Aa区のSD21・SD22

も平面方形状住居の周溝と考えられる幅10cm前後の溝である。

土坑では99Aa区においてSB21の前後に重複してSK89・SK121・SK122が掘削されており、99Aa区SK89は長径2.0m、短径0.9mの平面楕円形丸底の大型土坑で、埋土は上層に黒色シルト、中層に褐灰色シルト、下層に黒灰色シルトに基盤砂層と炭化物が混じる。99Ac区SK88とSK178は上下に重複する土坑で、同一の土坑の上層(SK88、黒色シルト)と下層(SK178、黒褐色シルトに炭化物、貝殻を多量に含む)の部分の可能性が高い。特にSK178の最下層においてマガキを主体に少量のハマグリを含む貝層がみられる。SK171は断面「V」字型の大型土坑で、黒褐色シルトに多量の炭化物が入る。SK172は長径1mを超える平面円形状土坑で、深さ6cmで、竪穴住居の可能性のあるものである。99Ac区SK194は5期の竪穴住居SB21の下にて検出した土坑で、径0.6m～0.7m前後、深さ40cm前後を計り、埋土は暗オリーブ褐色シルトに炭化物が混じるものである。

弥生時代中期中葉前半(4期)の居住域(図2-2-2)

99Aa区SB26(SD01～SD10と中央土坑SK154からなる平面円形住居)・SK87・SK88・SK94・SK111・SK150・SK153・SK163・SK173、99Ab区SB21(SD06・SD08～SD11と中央土坑SK228、双ピットの1つSK229からなる平面円形住居)、99Ac区SB21・SB22(平面方形状竪穴住居と思われる)・SK101・SK109・SK110・SK129・SK157・SK160・SK173・SK174・SK177、01Aa区SD20・SD28(平面隅丸長方形の竪穴住居になる)・SK25・SK29等がある。

竪穴住居では、平面円形の「松菊里型住居」に分類できる99Aa区SB26(図2-2-4)・99Ab区SB21(図2-2-3)と平面方形状住居である99Ac区SB21・SB22がある。99Aa区SB26は上面の遺構により床面部分が残存していたのみであるが、竪穴住居の周溝として南側を弧状にめぐるSD01～SD08、北側を弧状にめぐるSD09・



写真2-2-1
01Aa区の弥生中期の内環濠SD12・SD16（南より）



写真2-2-2 01Aa区4面全景（西より）



写真2-2-3 99Aa区SB26周溝（東より）



写真2-2-4 99Aa区SB26の貼り床断面（東より）



写真2-2-5 99Ab区4面全景（北より）



写真2-2-6
99Ab区SB21内SK228付近の堆積（南東より）

SD10 (SK193もSD10の一部分の可能性があり) が確認でき、南側の8条の溝が1棟の建て替えによるものと考え、最低7回以上の建て替えがみられ、調査区西壁に残っていたSB26床の断面においても基盤砂層に掘り込まれた掘り方の上に黄灰色～灰オリーブ色シルト層と赤色顔料（ベンガラ）層、炭化物を含むオリーブ黒色～黒褐色シルト層の順に厚さ5mm以下の薄い3層からなるセットが8面以上確認できた（写真2-2-4）。SB26に関係する周溝の最も大きい外側の周溝のめぐる部分を竪穴住居の大きさと考え、と径8.5m程となる。周溝（SD01～SD10）は幅10cm～35cm、深さ10cm～30cm前後の溝で、埋土は灰色～灰オリーブ色シルトに炭化物や赤色顔料が少量混じる。南側の周溝は内側のSD06からSD01へと外側に順に変遷していくようである。SK154がSB26の中央土坑と考えられ、平面隅丸方形に近い円形の径1.8m前後、深さ0.5m前後、埋土は赤褐色～赤黒色シルト（焼土、ベンガラ粒を含む）と黒色シルト、淡黄色シルトが班土状になる部分と互層になる部分があり、下層では貝殻や獣骨が含まれていた。このSK154からは土器片の他に下呂石やサヌカイトの小剥片、ヒスイ・緑色溶結凝灰岩の小剥片など玉作関連の資料が多数みつけれ、SB26からも勾玉や管玉等の玉製品がよく見られた。双ピットはSK152等SK154の周辺にある小型土坑と思われるが、特定はできなかった。またSB26の範囲に柱穴と思われる小型～中型土坑が50基弱あり、南側集溝の付近には壁材を押さえた可能性のある径10cm前後の小ピットが多数みられた。後述するSK153やSK88・SK173・SK153はSB26の柱穴とは考えられない土坑で、SK153は玉作り関連遺物が出土しているが、SB26との関係は不明である。

99Ab区SB21も上面の遺構により床面部分が残存していたのみであるが、竪穴住居の周溝として弧状に南にめぐるSD06・SD08～SD11が確認でき、平行する5条の溝から4回以上の建て替えがみられ、調査区西壁に残っていたSB26床の

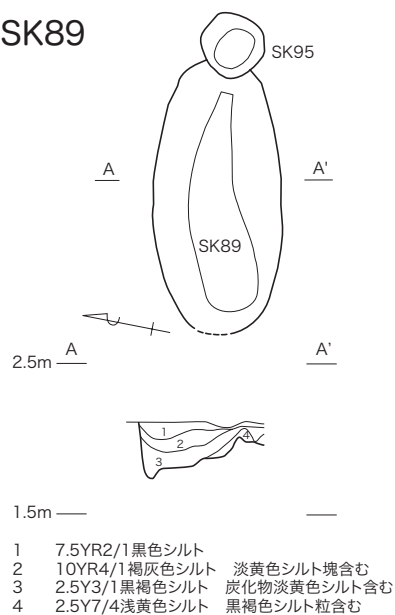
断面においても基盤砂層に掘り込まれた掘り方の上に黄灰色～灰オリーブ色シルトと赤色顔料（ベンガラ粒）、炭化物を含むオリーブ黒色～黒褐色シルトの混ざる床面が確認できた。SB21に関係する周溝の最も大きい外側の周溝のめぐる部分を竪穴住居の大きさと考えると径8.8m程となる。周溝（SD06・SD08～SD11）は幅10cm～35cm、深さ10cm～20cm前後の溝で、埋土は黄灰色～灰オリーブ色シルトに黒色シルトや炭化物、赤色顔料が少量混じる。周溝は内側のSD08からSD06へと外側に順に変遷していくようである。SK228がSB21の中央土坑と考えられ、平面円形の径2.0m前後、深さ0.4m以上、埋土の最下部は黄灰色シルトと灰オリーブシルト、炭化物が互層になり、赤色顔料が少量混じるがその上にはSK228より新しい遺構の埋土と考えられる堆積が西から斜めに流入する状況が観察できた（写真2-2-6）。また、調査区を囲むシートパイル打ち込みの影響の為か、SK228から立ち上がる部分の床面も大きく歪んだ構造になっていた。双ピットの1つはSK228の西に接するSK229が考えられるが、東側のピットは確認できなかった。またSB26の範囲に柱穴と思われる小型～中型土坑が15基程あり、周溝のSD06の底に壁材を押さえた可能性のある径10cm前後の小ピットを断面にて確認した。

99Ac区SB21は平面方形状、長径4m程の住居で埋土は黒色シルトと浅黄色シルトの班土であった。このSB21も床面中央部がゆるやかに凹む状況になっており、大型の土坑になる可能性もある。01Aa区SD20・SD28は別遺構として調査しているが、本来は同一の竪穴住居の周溝である可能性が高いもので、平面隅丸長方形の形態と考えられる。溝の幅15cm前後である。

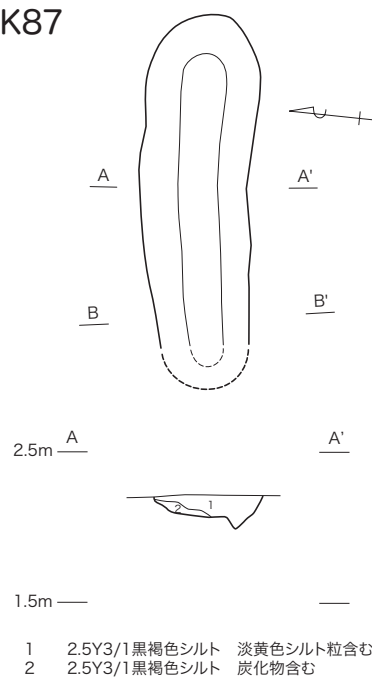
土坑では99Aa区と99Ac区において4期の大型土坑が多くみられ、炭化物・灰層や焼土が顕著にみられるものが多い。99Aa区SK153はSB26より新しい土坑で、長径2.0m以上、短径1.2m以上の平面楕円形丸底の形態で、埋土は上層に黒色シ



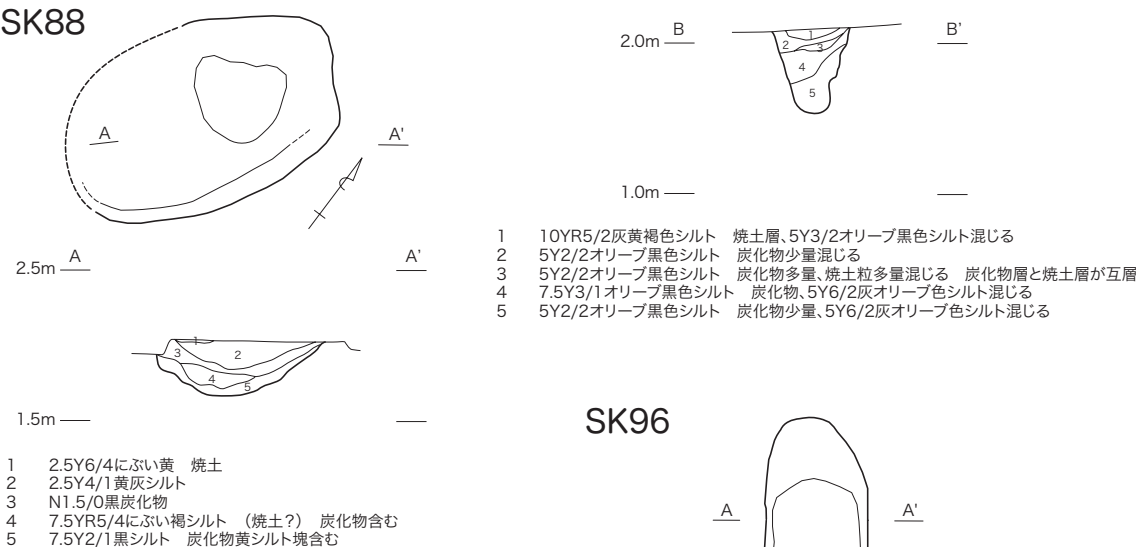
SK89



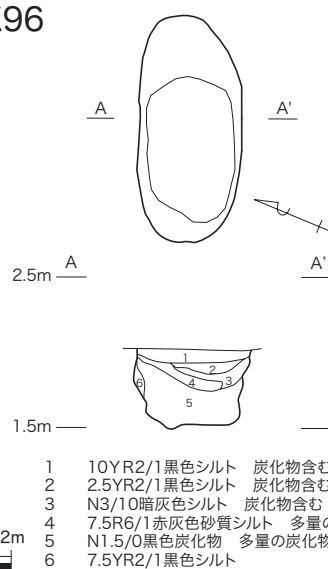
SK87



SK88



SK96



SK45

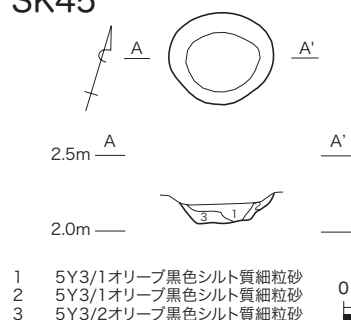


図2-2-5 99Aa区の2期～6期の土坑1

ルト、中層に灰層と炭化物層、焼土層のラミナ堆積がみられ、下層に黒色シルトと淡黄色シルトの班土が堆積していた。99Aa区SK87は長径2.2m以上、短径0.7m以上の平面長楕円形丸底の土坑で、埋土は黒褐色シルトに炭化物と基盤砂層の小ブロックを少量含む。99Aa区SK88は長径1.8m以上、短径1.25m前後の平面楕円形丸底の土坑で、黒色シルトと基盤砂層の班土に焼土層や炭化物層が互層になって埋没していた。99Ac区SK157は深さ0.5m前後の丸底の土坑で、埋土は黒褐色シルトに基盤砂層の小ブロックと炭化物が下層に混じる、平面形は不明。99Ac区SK160は長径2.2m前後、短径1m前後の平面楕円形丸底の土坑で、基盤砂層の小ブロックを少量含む黒褐色シルトの薄い堆積が7層堆積しており、下部の堆積層において多くの炭化物を含む。

弥生時代中期中葉後半(5期)の居住域(図2-2-2)

99Aa区SB19・SB20・SB22・SB23・SB24・SK90・SK92・SK132・SK136、99Ab区SK30・SK101・SK114・SK194～SK196、99Ac区SB22・SK94・SK161、01Aa区SD24・SK50等がある。

5期の遺構は99Aa区において竪穴住居と中型～大型土坑が、99Ab区において大型土坑が認められた以外は、6期以後の遺構により削られた(6期以後の遺構と重複する)為かあまり残存していない。各調査区の出土土器の量や出土頻度から考えると他の時期において検出できた遺構数と大きく変化しないと思われる。99Aa区にて検出できた竪穴住居(SB19・SB20・SB22・SB23・SB24)は、平面隅丸方形形状の形態のもので、黒色シルトに基盤砂層の小ブロックや炭化物が少量混じる。土坑では99Aa区にて検出した土坑は全て丸底のもので、中型土坑のSK90とSK92の埋土は黒色シルトに少量の基盤砂層が入るのみであるが、大型土坑のSK132・SK136は少量の基盤砂層の小ブロックを含む黒褐色シルトに炭化物が多く混じる。99Ab区において検出できた土坑は、長径1.0m～1.5m前後の大型土坑で、深さ0.5m前後、丸底の形態である。埋土は4期以前の竪穴住居と重複するSK114・SK194～SK196は竪穴住居の埋土の影響を強く受けているようで、黒色シルトに炭化物や赤色顔料が混じり、調査区東側にて検出できたSK30とSK101は黒色シルトに基

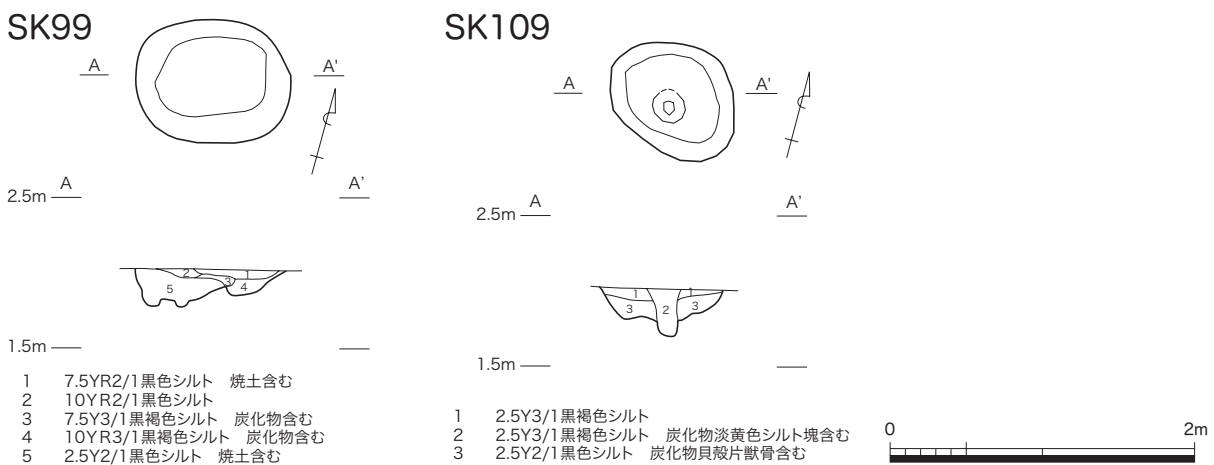


図2-2-6 99Aa区の2期～6期の土坑2

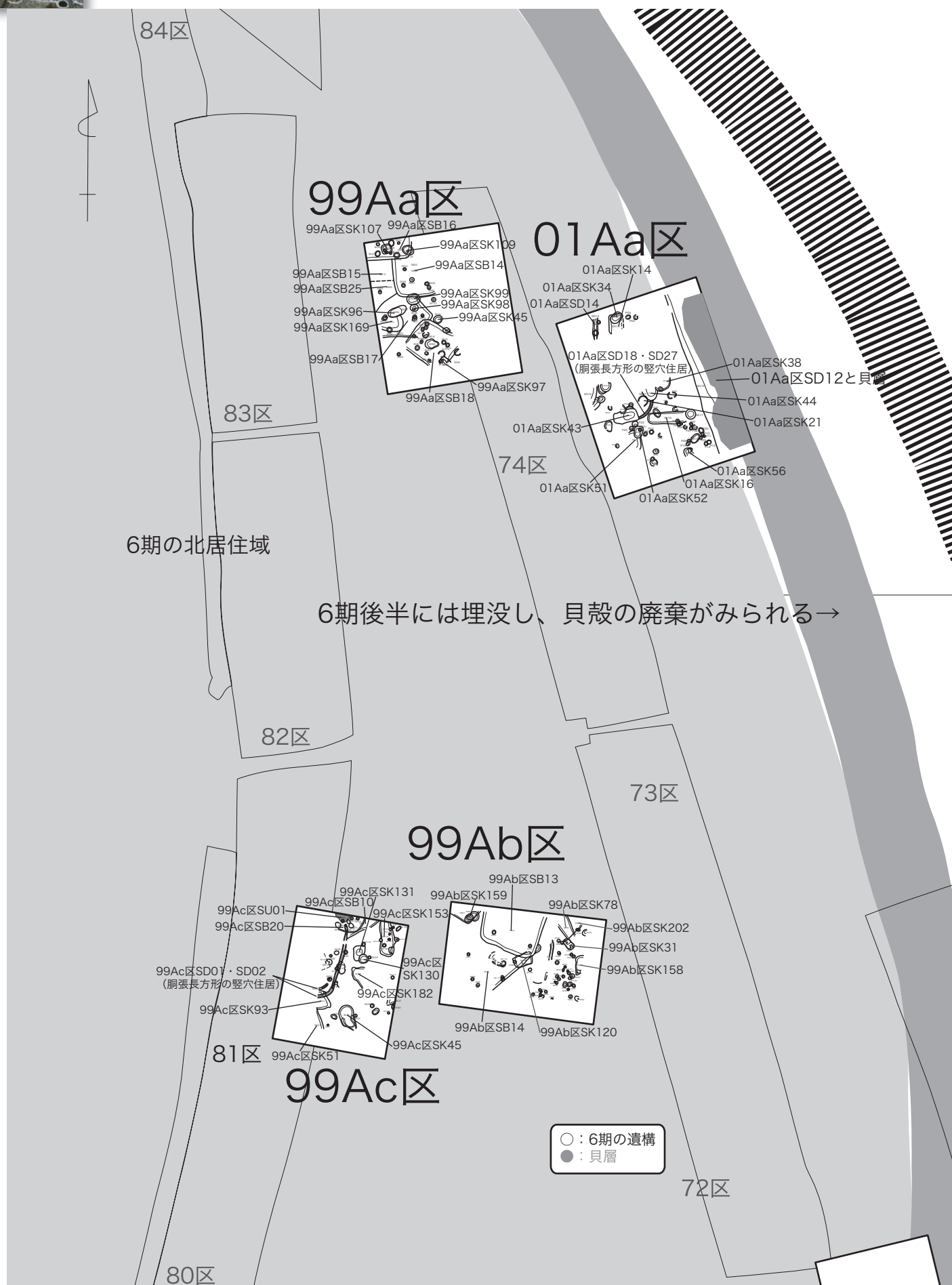


図2-2-7 6期の北居住域東縁部 (1:400)

盤砂層が少量混じる堆積である。

弥生時代中期後葉（6期）の居住域（[図2-2-7](#)）

99Aa区SB14～SB18・SB25・SK45・SK96～SK99・SK107・SK109、99Ab区SB13・SB14・SK31・SK78・SK120・SK158・SK159・SK202、99Ac区SB10・SB20・SD01・SD02・SK45・SK51・SK93・SK130・SK131・SK153・SK154・SK182・SU01、01Aa区SD18・SD27（平面胴張長方形竪穴住居）・SK14・SK16・SK21・SK34・SK38・SK43・SK44・SK51・SK52・SK56等がある。

竪穴住居では平面隅丸方形～長方形の住居が検出できた99Aa区（SB14～SB18・SB25）・99Ab区（SB13・SB14）と平面胴張長方形の住居が検出できた99Ac区（SB10・SB20・SD01・SD02）・01Aa区（SD18・SD27）がある。6期の遺構も、7期以後の遺構と重複している為、99Aa区を除いて、6期の堆積層が良好に残存していなかったが、竪穴住居と中型・大型土坑の重複例が他の時期のこの地点に比べて多い。

01Aa区の竪穴住居は一辺3m～5mの小型のものが主体で埋土は黒色～黒褐色シルト、99Ab区の竪穴住居は全体が不明であるが一辺5mをこえるやや大きいものになるものと思われる。99Ac区SD01・SD02や01Aa区SD18・SD27は竪穴住居の周溝部分のみ検出できたもので、住居の短辺がやや張り出す形態のものである。99Ac区のSB20も平面胴張長方形の形態と思われ、SU01として取り上げた土器群はこの住居の可能性が高い。

土坑では形態が平面楕円形の大型丸底のもので、99Aa区SK96のように黒色シルトに多量の炭化物を含む層やほぼ炭化物層といえる堆積があるもの（他に99Ac区SK130）と99Ac区SK45のように黒色シルトであり炭化物がみられないもの（他に99Aa区SK97・SK99、99Ab区SK158、99Ac区SK131・SK153、01Aa区SK43・SK44・SK52）にわかれ、後者の01Aa区SK43・SK44・SK52では基盤砂層が黒褐色シルトとやや

互層状に堆積している。

c. 弥生時代後期（7期）の居住域（[図2-2-10](#)）

99Aa区SB07～SB13、99Ab区SB06・SB07・SB09・SB11・SB12・SK01・SK152、99Ac区SB07・SB08・SB11・SB13・SB16～SB18・SD03・SK46・SU02等がある。01Aa区を除く99Aa区～99Ac区は弥生時代後期（7期）の内環濠の内側、居住域内部となる為、多数の一辺3m～5m程（最小のものとして短辺2.1mの99Ab区SB11がある）の隅丸長方形の形態の住居が検出できた。埋土は黒色～オリーブ黒色シルトが主体のものである。この中で、99Ac区SB07は平面やや台形状隅丸方形の竪穴住居（[図2-2-8](#)）で、西壁中央付近から床面中央部にかけて敷き藁（わら）状の炭化物が検出できた。（[写真2-2-8](#)）大型土坑では99Ab区SK01・SK09がある。どちらも平面楕円形、丸底の比較的浅い土坑で、埋土は黒色～黒褐色シルトである。この中で、99Ab区SK01の中位ベルト内から虬龍文鏡の破鏡が出土した（[図2-2-9](#)・[写真2-2-9](#)、[2-2-10](#)）。SK01からは比較的一括性の高い土器群が出土し、7期末～8期初頭の時期が考えられる。

また、99Ac区では調査区南西隅からやや北に振る軌道をもつ東西溝SD03を検出した。SD03は長さ6m以上、幅1.1m～1.2m前後、深さ0.50m（溝底の標高1.85m）で、99Ac区東側にて立ち上がっている。81区にのびていく居住域内を区画する溝の可能性がある。

d. 弥生時代後期（7期）の墓域（[図2-2-11](#)・[写真2-2-11](#)）

01Aa区において方形周溝墓を2基（SD02・SD04・SD09に囲まれたSZ01とSD10・SD11に囲まれたSZ02）確認した。西に隣接する74区の遺構との関係では、財団報告において74区北側と中央付近においてSD367から東に枝分かれする溝について1基の方形周溝墓が想定されており、その方形集溝墓に対応するのが01Aa区北側のSZ02に充てるのが妥当と思われ、74区中央付近のSD367から東に枝分かれする南側の溝が

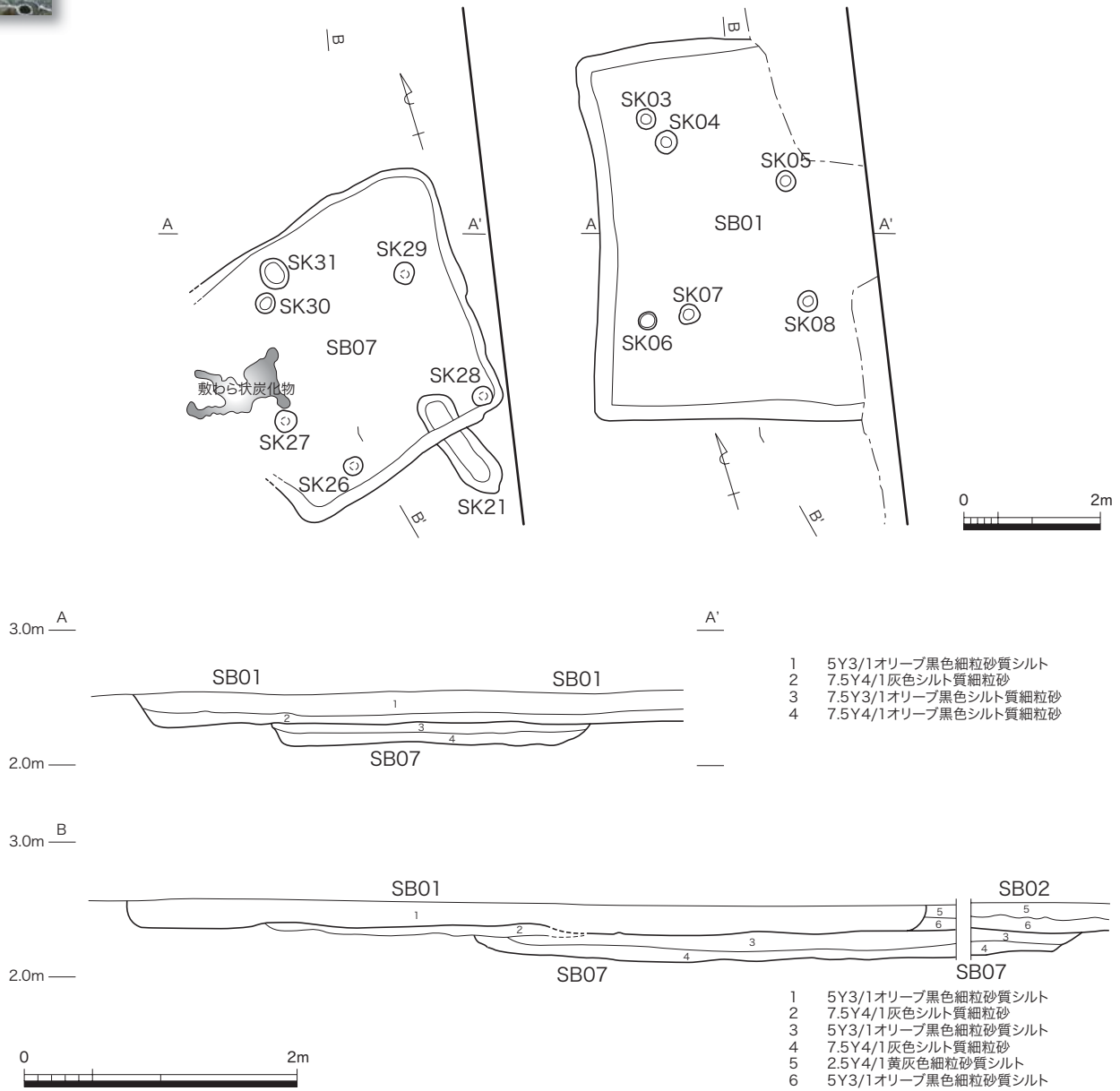


写真2-2-7 99Ac区1面 全景 (北東より)

写真2-2-8
99Ac区SB07 敷わら炭化物 (南東より)

01Aa区南側の方形周溝墓SZ02の北溝SD09に対応するものと考えられる。

01Aa区SZ01の墳丘は東西8.8m、南北8m前後になるもので、周溝の幅は2m前後、深さ0.9m前後で、周溝の角部がやや立ち上がっている。墳丘の回りをめぐる溝からは7基の弥生土器が多く出土した。SZ02の墳丘は東西9m前後で、南北は74区の東にのびる溝間で考えると約13mとなる。周溝はSD10において幅2.8m、深さ0.9m前後で、上部には湿地状堆積物と考えられる黄灰色

シルトが堆積していた（NR01）。

SZ01の墳丘上では内部主体の可能性のある隅丸長方形～楕円形の土坑6基（SK08～SK12、SK09はSK12の内部土坑とSK11はSK10の内部土坑）を確認した（写真2-2-12）。SZ01検出面上にて確認できた5基の土坑は重複しており、内部主体として考えた場合の土坑掘り方と考えられるSK08・SK10・SK12は長軸が2.0m、短軸1.5m、深さ0.18m前後を超える大型土坑で、埋土は黒褐色シルトに黄色シルトの小ブロック（基盤砂層か）

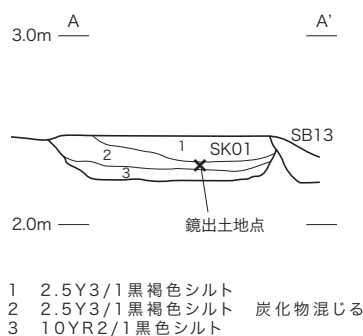
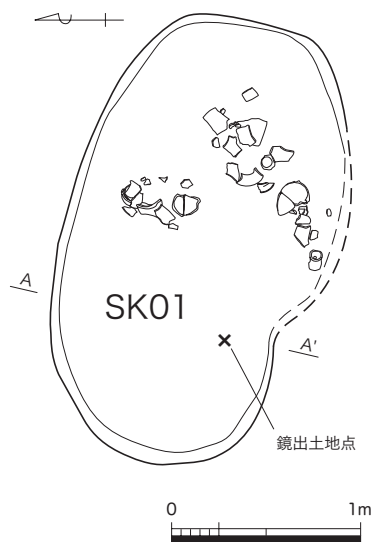


図2-2-9 99Ab区SK01 (1:40)



写真2-2-9 99Ab区SK01 遺物出土状態（南西より）



写真2-2-10 99Ab区SK01 竈龍文鏡出土状態（北西より）

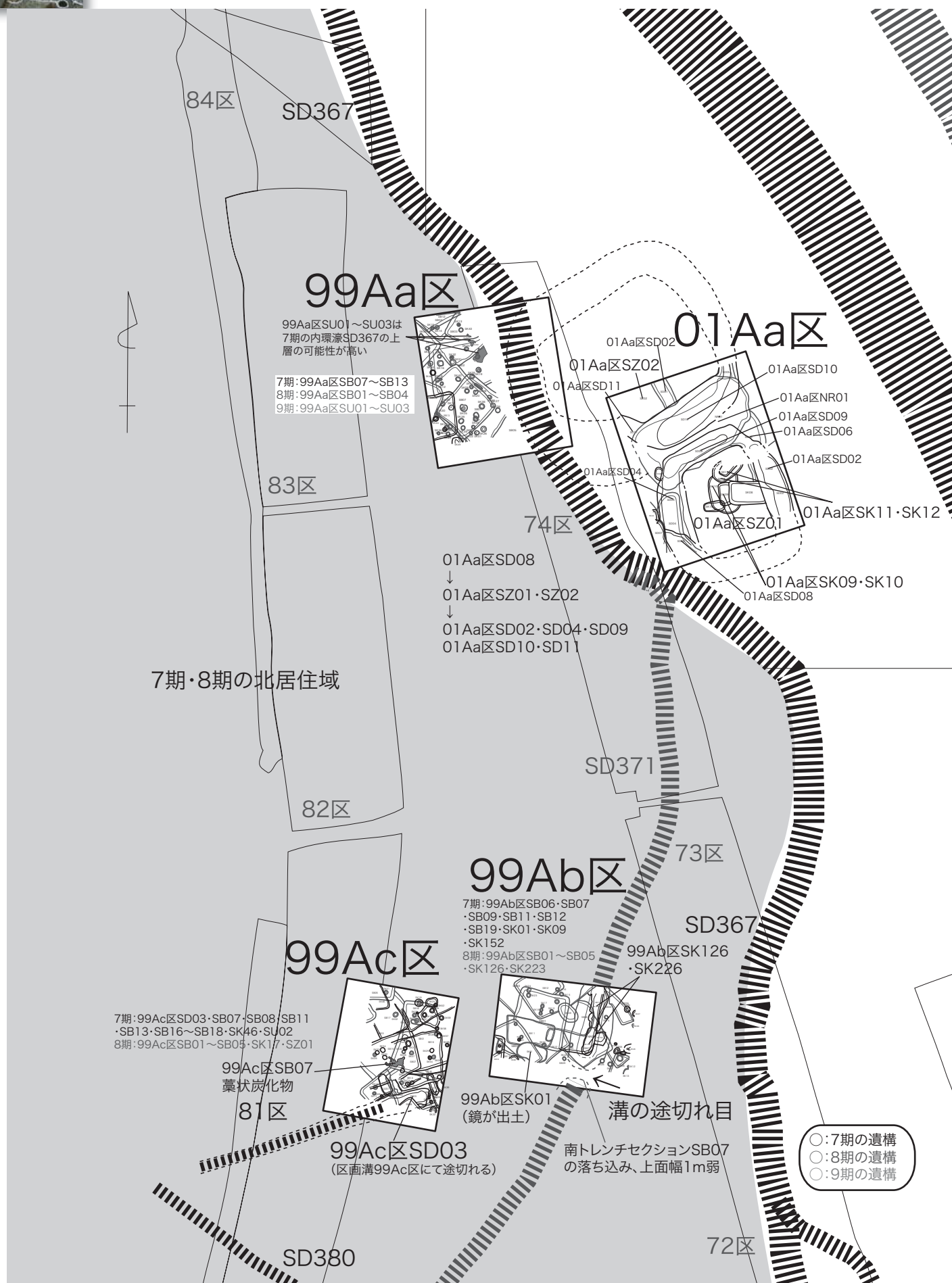


図2-2-10 7期～9期の北居住域東緑部 (1:400)

が混じる班土であった。内部主体を想定して検出したSK09・SK11の埋土も外側の土坑と同様な班土で、大きさは短軸0.5m前後で、SK09の長軸は2.1m、深さ0.18m前後である。もう1基のSK15はSZ01墳丘下部において検出したもので、長軸1.7m、短軸0.8mの楕円形の土坑で、6期の土坑としたがSK16も同様な性格をもつ可能性がある。SZ02内部にて検出されたSD01は7期の遺物が出土するが、方形周溝墓に伴うか不明である。

また01Aa区南西隅にて検出できたSD08は7期の断面「V」字状の溝で、明らかにSZ01の西溝SD04より古く、溝底も標高0.95mであり、上部に炭化物が混入する黒色シルトが堆積し、下部に黒色シルトに基盤砂層が堆積する。このSD08は位置から推定すると、財団報告により弥生時代後期の内環濠に推定されてきた軌道に対応し、74区にあるSD367に合流する。よって01Aa区の方形周溝墓は7期の内環濠の埋没後形成されたものといえ、SZ01墳丘内部から7期の土器が出土するものもSZ01形成時の墳丘盛土に由来する可能性

がある。

e. 古墳時代前期前半（8期）の区画溝とその周辺（図2-2-12）

99Aa区SB01～SB02・SB04・SB06・SU01～SU03、99Ab区SB01～SB05・SK126・SK223、99Ac区SB01～SB03・SB05・SK17・SZ01、01Aa区SD07等がある。

8期に74区南側にてSD367から南に枝分かれする溝の延長部分として99Ab区のSK126・SK223が対応するものと考えられる。1面にて8期以後の新しい流路状の自然堆積NR01（検出面の幅3.0m、深さ0.20m程、埋土は浅黄色シルト）として掘削した遺構のほぼ下部に対応するもので、2面ではSB15として誤認して掘削した。SK223とSK126は01Ab区北壁から連続してある幅0.8m～0.9mの深さ0.50m程（北壁部溝底の標高1.26m、埋土はオリーブ黒色シルトに炭化物が少量入る）、丸底のもので、SK126の南端にて溝が立ち上がる可能性が高く、南壁にて確認できるSB07にある落ち込み層（底の標高2.00m）と



写真2-2-11 01Aa区 SZ01・SZ02（西より）



写真2-2-12 01Aa区 SK09・SK10（南より）

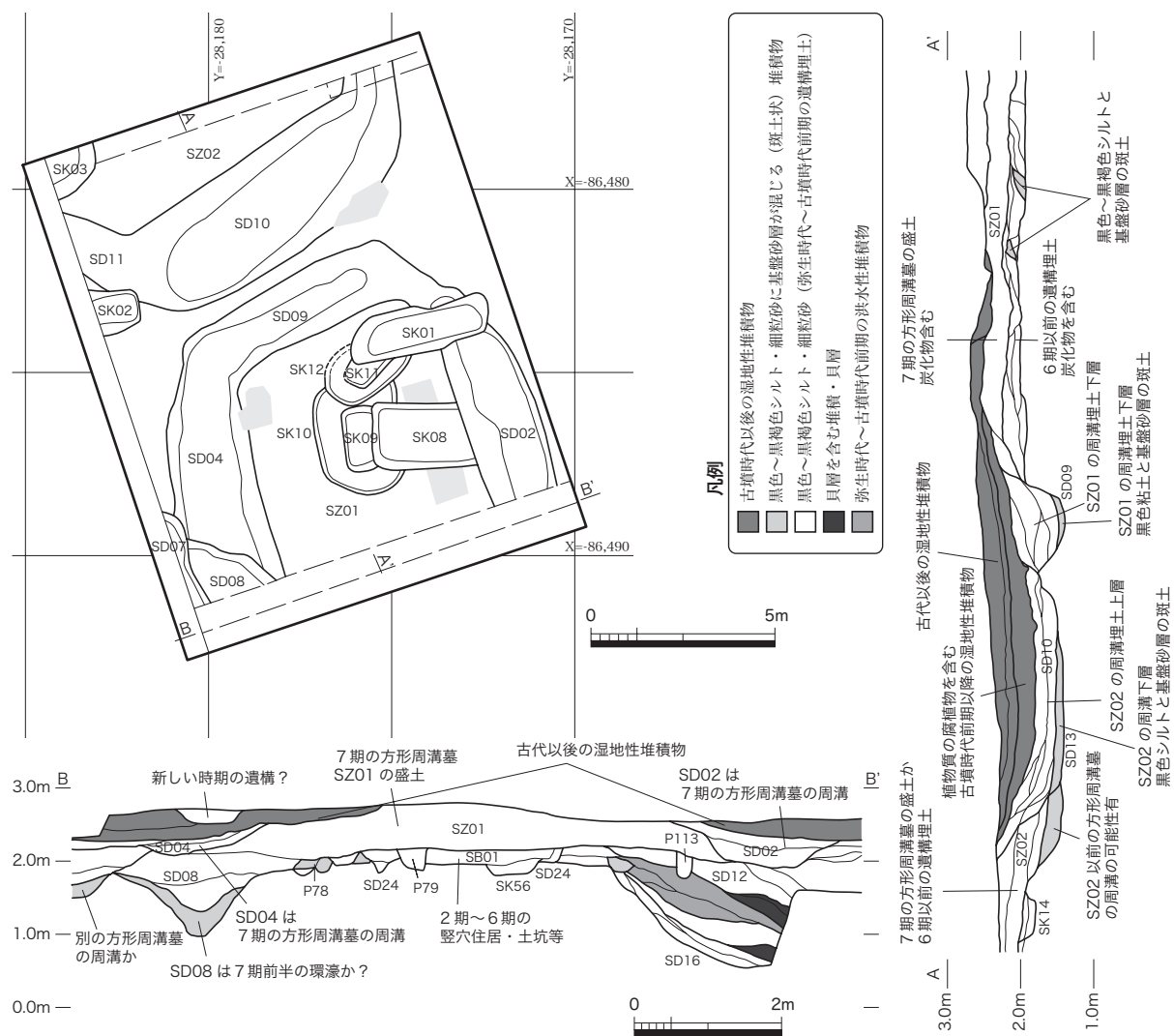
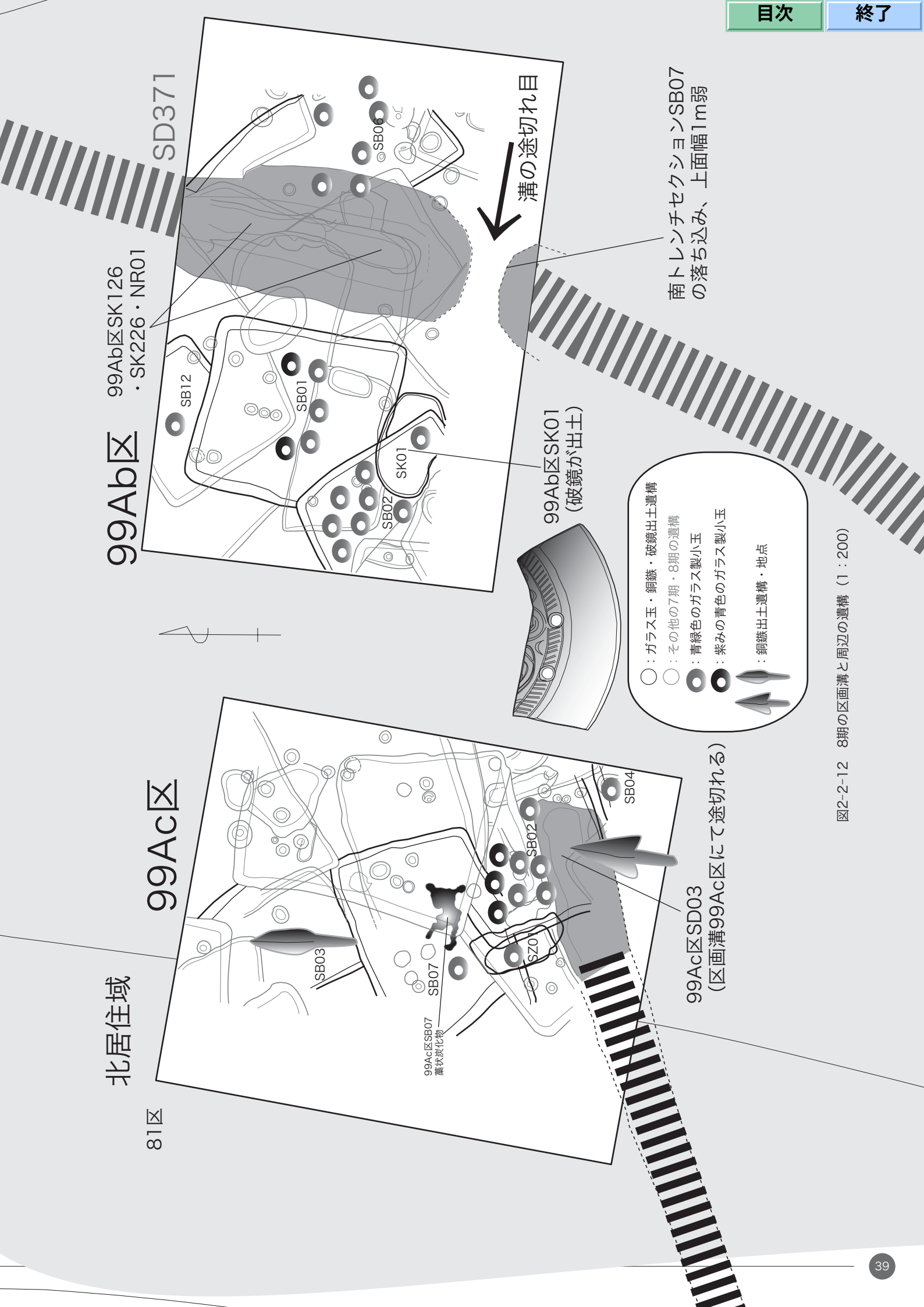


写真2-2-13 01Aa区 SZ04遺物出土状態 (北東より)



写真2-2-14 01Aa区 SD10高杯等出土状態



北居住域

81区

99Ab区

99Ab区SK126
・SK226・NR01

99Ac区

溝の途切れ目

99Ab区SK01
(破鏡が出土)南トレンチセクションSB07
の落ち込み、上面幅1m弱

- : ガラス玉・銅鏃・破鏡出土遺構
- : その他の7期・8期の遺構
- : 青緑色のガラス製小玉
- : 紫みの青色のガラス製小玉
- : 銅鏃出土遺構・地点

99Ac区SD03
(区画溝99Ac区にて途切れる)

図2-2-12 8期の区画溝と周辺の遺構 (1:200)



対応する可能性がある。よって99Ab区において溝の陸橋状部分が存在したものと考えられる。また、南壁の土層観察では01Aa区SZ01の西溝SD04より埋没が古い溝にみえる01Aa区南西隅部にあるSD07も溝底の深さが標高1.5m前後に想定できる溝があり、7期の内環濠の溝と考えられるSD08とは異なる軌道をもつことから、74区SD371が7期のSD367にほぼ沿って北にのびていくものと思われる。このような状況を示唆するものとして、99Aa区SB02からSB03の上面にて検出できた土器溜まりSU01～SU03がある。SU01～SU03は黄灰色シルトの堆積中にあり、SB02とSB03に伴うと考えるよりは99Aa区東側、74区北側を南北に流れる7期の内環濠SD367の上層部分の可能性があり、さらに出土した土器の時期から考えると8期のSD371の北側部分の上層部分に想定できるであろう。

次にこの8期の区画溝（99Ab区SK126・SK223・01Aa区SD07）とその他の遺構との関係であるが、99Ab区SB01～SB04はこの溝と同時存在が可

能であるが、SB05は重複しており、上部にあるNR01との関係から考えるとSB05は溝以前の遺構である可能性が高い。このような状況から考えると8期の遺構はSK126・SK223以西の99Ab区西側と99Ac区には重複して竪穴住居が検出できたのに対して、99Ab区東側や74区SD371の北東側に位置する01Aa区では遺構がほとんどない。一方、74区SD371の北西側に位置する99Aa区では8期の遺構（竪穴住居）が顕著にみられた。

8期の竪穴住居は一辺5m前後（4.3m～5.6m）の平面隅丸方形・長方形（隅丸方形が主体）で、埋土上面が8期以後の堆積と考えられるやや褐色～白色化した黒褐色シルトの堆積を目安に検出した。埋土中層以下は黒褐色シルトである。



写真2-2-15 99Ac区2面全景（北より）

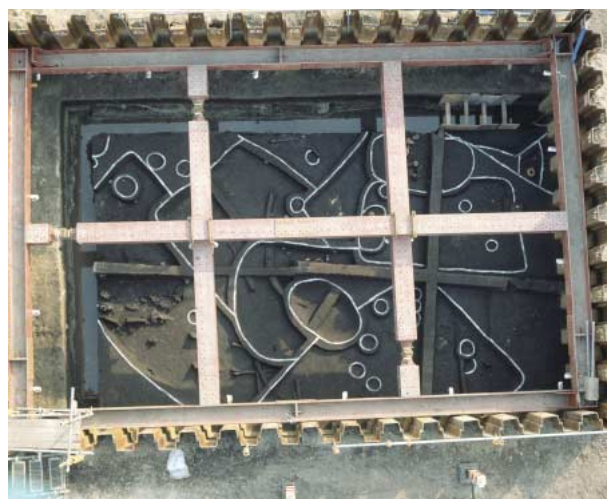


写真2-2-16 99Ab区2面全景（北より）

(2) 北居住域南縁部

A. 位置とこれまでの成果……………

北居住域の南東に位置する地点で、北居住域を廻る環濠帯を含めた部分である。99Ad区・99Ae区・01Ab区～01Af区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域の中心部側を78区～80区、環濠帯にかかる調査を63D区・68区・77区として調査されている。

これまでの調査成果において、北居住域内部の成果としては、77区～80区において2期・3期の円形・隅丸長方形の竪穴住居6棟・大型土坑12基、4期～5期の隅丸方形～長方形の竪穴住居3棟・中・大型土坑22基、6期の大型土坑1基、7期の長方形竪穴住居1棟・大型土坑1基、63D区北側に4期～5期の中型・大型の土坑7基、6期の中型土坑2基が確認されている。弥生時代中期前半である2期から5期にかけての遺構が多数存在することが推定できる。7期においては63D区SD09

のように北居住域を区画するような南北に流れる溝がみつかり、北居住域をいくつか区画する溝の存在が想定される。北居住域内部と関連する環濠帯に関わる成果として北居住域の南を流れる谷Aの北岸に2期から3期にかけての環濠が1条(63D区SD06)、5期の環濠が2条(63D区SD05・SD07)、逆茂木の溝1条、その南側を乱杭とされる木材列が検出されている。6期には環濠の可能性のある溝として63D区SD04があるが環濠としては廻らないとされている。7期に3条の環濠(63D区SD01・SD02・SD03)が掘削され、8期に埋没する。また墓域に関する成果では、7期の78区において北居住域の内環濠78区SD367(財団報告63D区SD01に対応する)に接して方形集溝墓SZ133(財団報告)が確認されており、北居住域内の南縁部に墓が形成されることが明らかになっている。



写真2-2-17 内環濠の断面(01Ac区南壁)

左側の溝が弥生時代中期の内環濠(01Ac区SD02・03)、右側の溝が弥生時代後期の環濠(01Ac区SD01)

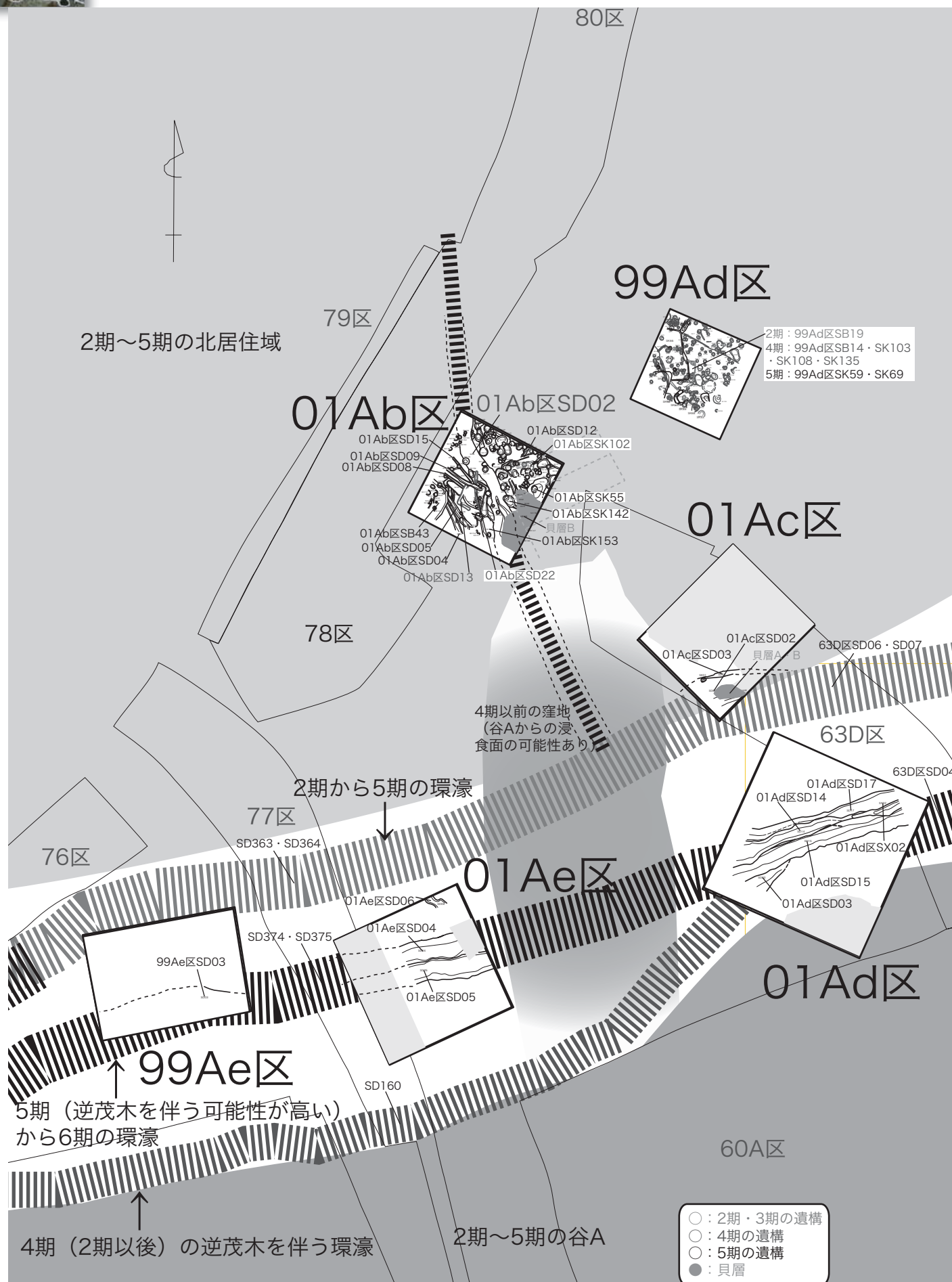


図2-2-13 2期～5期の北居住域南緑部 (1:400)

B. 今回の調査成果

a. 北居住域南環濠帯

今回の調査成果では、2期～4期とされる溝（溝と考えられる堆積層）は確認できなかったが、弥生時代中期中葉（5期）の時期に北居住域南側を2重にめぐる環濠を確認し、弥生時代中期後葉（6期）においても2重にめぐっていた外側の1条の環濠は機能していた可能性が高い。弥生時代後期（7期～8期）については3重にめぐる環濠の内、外側2条を確認した。これらの環濠は、ほぼ同じ経路で同じ時期において複数の溝が確認できたことから、弥生時代中期～後期において連続して掘

削され続けたことが明らかと思われる。また、6期については外側の環濠においてSX01がつくられ、溝がその部分において途切れることが確認できた。平成16年度の調査では、7期の環濠も01Ad区の西において途切れることが確認できている、一連の現象として理解できる。以下において各環濠について述べる。

尚、01Af区は弥生時代中期（4期～5期）の外環濠などの遺構が予測される地点であったが、近年の攪乱により弥生時代以後の遺物包含層が消失していた。

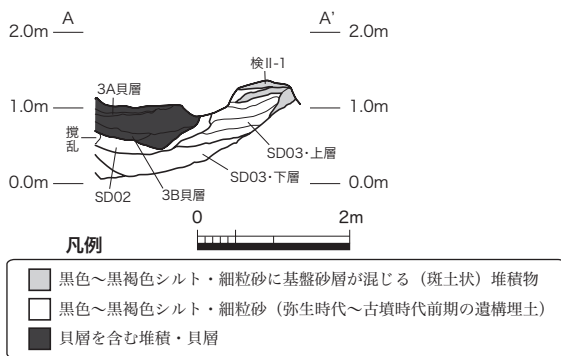


図2-2-14 5期～6期の内環濠
01Ac区SD02・03断面（1：100）



写真2-2-18 01Ac区SD02（北より）



写真2-2-19 01Ac区SD02・03断面（南壁）

※上の写真ではSD02の肩の部分を含めてSD03が下方に存在する。

※5期～6期の溝として認識できた堆積は2条の溝のみであったが、左の南壁断面のSD03の左下にSD03より古い溝の堆積がある。調査区外に別の時期の溝の堆積が存在するものと考えられる。

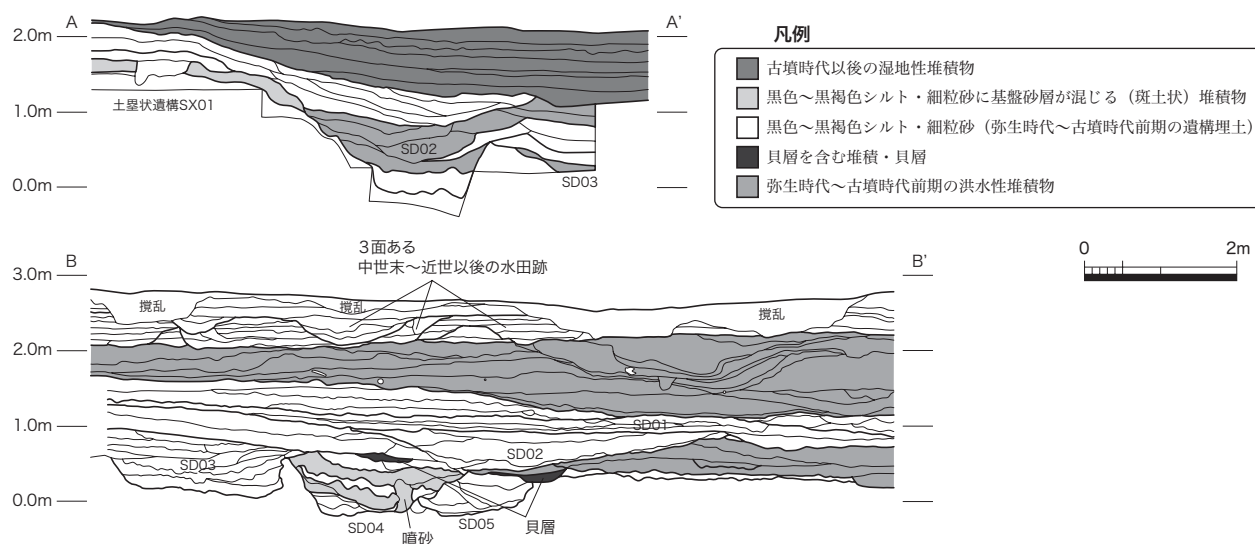
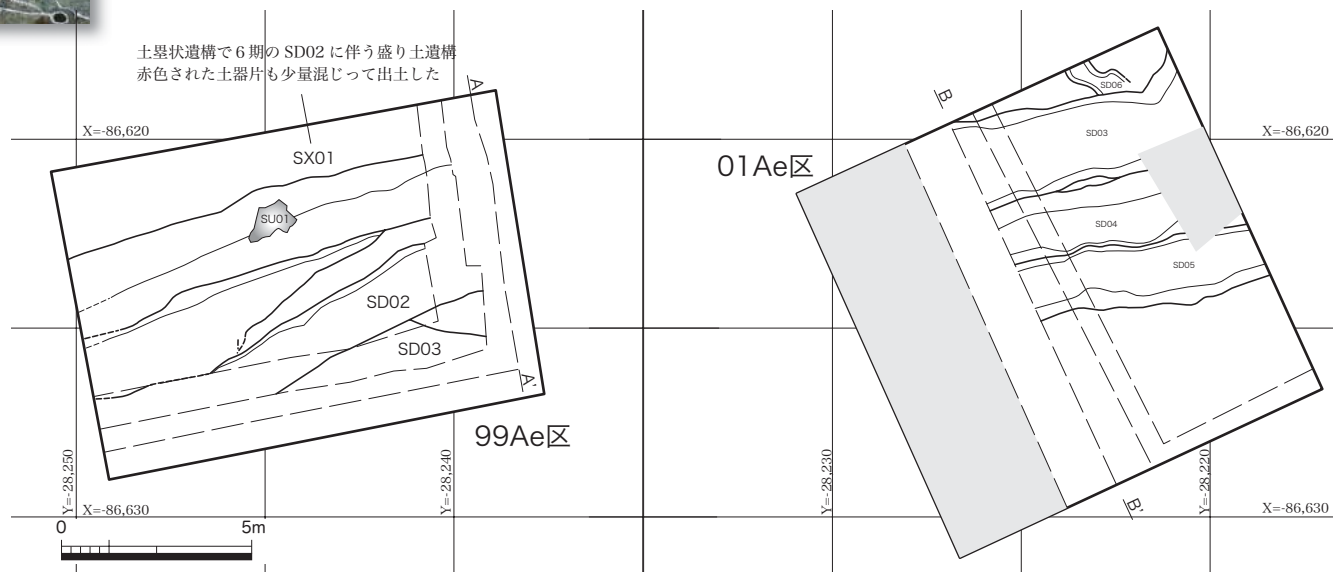


図2-2-15 弥生時代中期の環濠（平面図1：200、断面図1：100）

※右写真の下側が土壘状遺構SX01、上側が
環濠SD02・SD03。



写真2-2-20 99Ae区1面全景

b. 弥生時代中期の環濠（図2-2-13～図2-2-16、写真2-2-17～写真2-2-20）

内環濠：01Ac区において検出できたSD02・SD03がある。2条の溝は先に述べたように63D区SD07・77区SD363に対応する溝と考えられる。63D区SD07の下層において認識された2期・3期のSD06・77区SD364に対応する溝は確認できなかった。01Ac区SD02・SD03はほぼ重複しており、新しいSD02が幅4.0m程、深さ1.0m前後にて検出できた。どちらも断面緩い「V」字状丸底の形態をしており、溝の堆積が確認できたSD02においては溝の比較的下部から上部において破碎貝層が堆積しており、出土土器は4期・5期のものが主体であるが、上部出土のものに6期の土器が少量混じるので、機能していた時期は5期で6期には埋没していたものと考えられる。SD03の出土土器は、4期・5期のものがみられ、機能し、埋没したのは5期と考えられる。

外環濠：99Ae区SD02・SD03、01Ae区SD03～SD05、01Ad区SD04～SD07、SD09～SD18があり、西において調査されている77区SD374・SD375と東において調査されている63D区SD04・SD05に対応する5期の99Ae区SD03、01Ae区SD04・SD05、01Ad区SD11・SD14・SD15・SD17・SD18と6期の99Ae区SD02とSD02に伴うSX01、01Ae区SD03、01Ad

区SD04・SD06・SD07・SD09がある。01Ad区SD15は01Ad区の西隅部より溝の軌道が南西に振れる可能性が高く、68区SD160・61A区SX02につながる可能性が高い。また、6期の01Ad区SD09の南側にSD09にやや並行しながらはしる幅0.8m～1.0m程のSD08があり、SD09と同様に上部に破碎された貝層が一部残存していた。01Ad区のSD群は幅1.5m前後にて検出でき、上部を6期のNR02中層によって削平された状態が想定できることから、本来はもう少し溝の幅が広く、深い溝であった可能性が高い。これは5期から6期への99Ae区のSD03からSD02への変遷、01Ae区のSD05からSD04、SD03への変遷は旧河道Aのある南側から北側へと集落のある微高地部分を削りながら溝を移し替えていく傾向が読み取れ、6期において99Ae区SD02に伴うと考えられる土塁状遺構SX01を確認し、SX01の上端からSD02の溝幅を測ると幅4m～5m、深さ1.5m以上あることから可能性が高いものと考えられる。西にある01Ae区において幅2.0m前後で検出されたSD群にも同様なことが考えられる。よって北居住域南側の環濠帯では、内環濠と外環濠の間にも幅5m以上の土塁状遺構が存在した可能性が高い。これは続く後期の環濠が中期の環濠の居住域内側に掘り直されていく一貫した状況といえる。

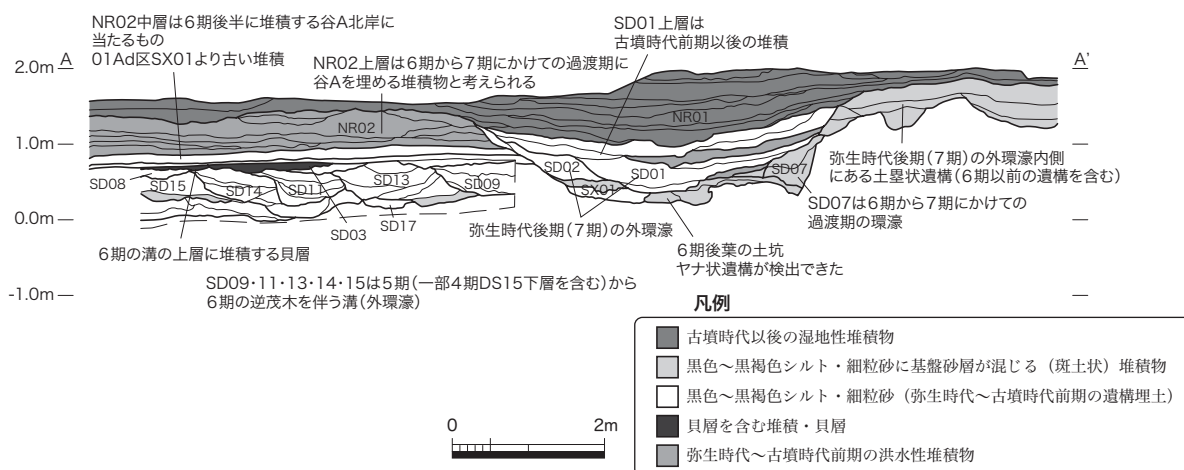


図2-2-16 01Ad区SD群の堆積 (1:100)

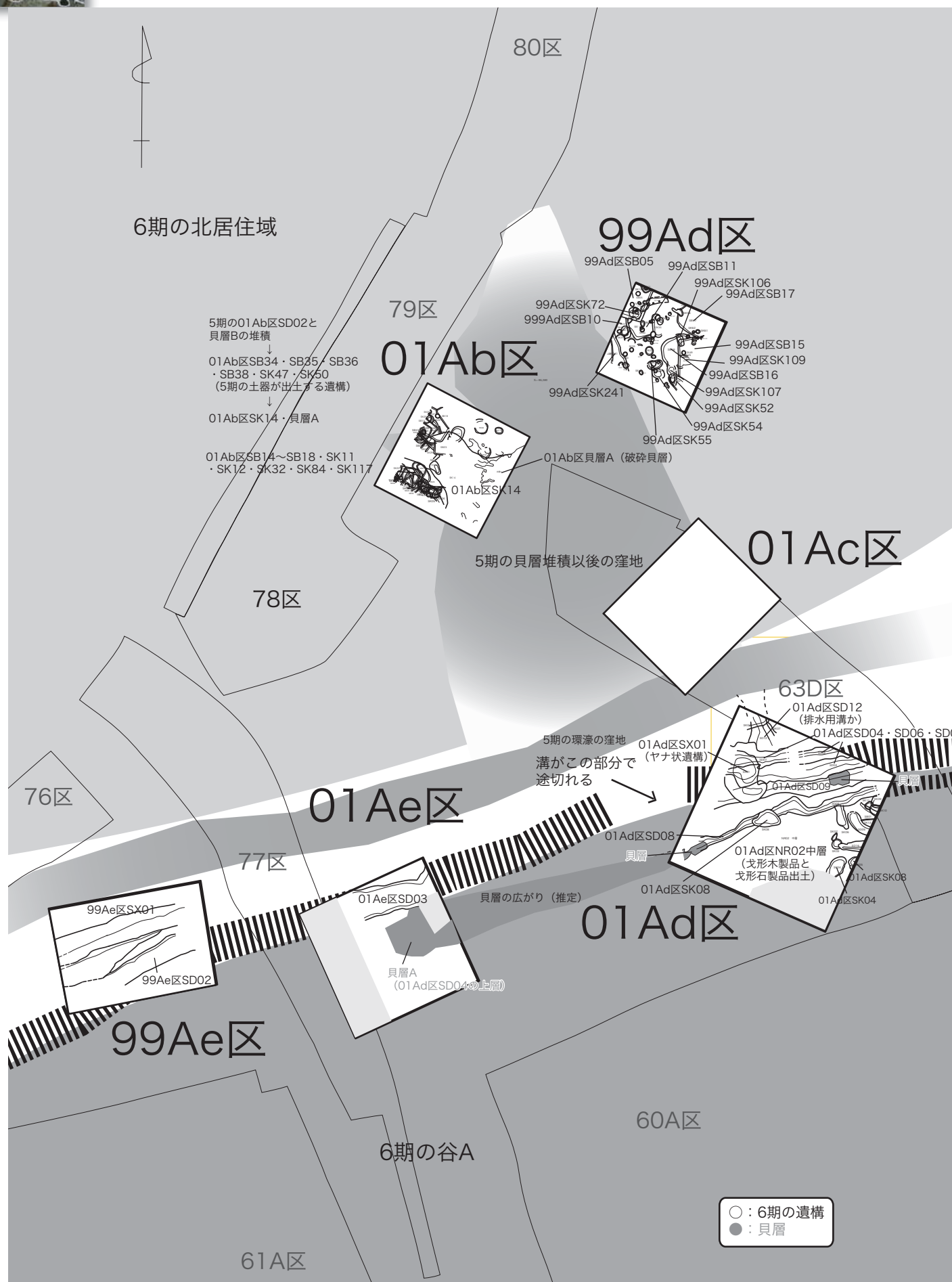


図2-2-17 6期の北居住域南縁部 (1 : 400)

c. 弥生時代中期後葉（6期）の環濠の有無（図2-2-17・図2-2-18）

さて、これまでの調査成果では、6期には環濠の掘削が存在しなかった可能性が報告されている。確かに遺物の出土状況からは、99Ae区SD02、01Ad区SD09、01Ae区SD03において6期の土器が出土し、6期において溝が埋没する状況が読み取れる。また01Ad区においては外環濠SD09の埋没した後、旧河道Aの堆積であるNR02中層、続く上層堆積がみられ、その後植物による護岸施設と考えられるSX01が形成され、相前後して後期の外環濠の軌道にのって中期から後期への過渡期と考えられる時期のSD04、SD07、SD06が次々と掘削され、埋没していく状況が見られる。また6期のNR02中層が堆積する

以前の北居住域外環濠外側において、SD08の上から柱状片刃石斧や木材破片が出土したSK08、木製掘削具未製品が出土したSK08、他にもSK05等土坑が多数展開する段階があり、遺構の埋没状況から考えると、先に述べたSD08・SD09に破砕された貝層が堆積する相前後に位置づけられる（01Ae区SD04上層に堆積する貝層Aも01Ad区SD08と一連の堆積の可能性がある）。よって中期環濠の外環濠の最終局面は6期にあり、01Ad区付近において一時木製品加工場が存在した可能性が高い。一方で6期から7期と考えられる洪水堆積の前後にて7期の環濠と同様な溝群が掘削されている事実は見逃せない。したがって調査成果からは環濠が埋没し、存在しないのは6期の中の一部の時期と考えられる。

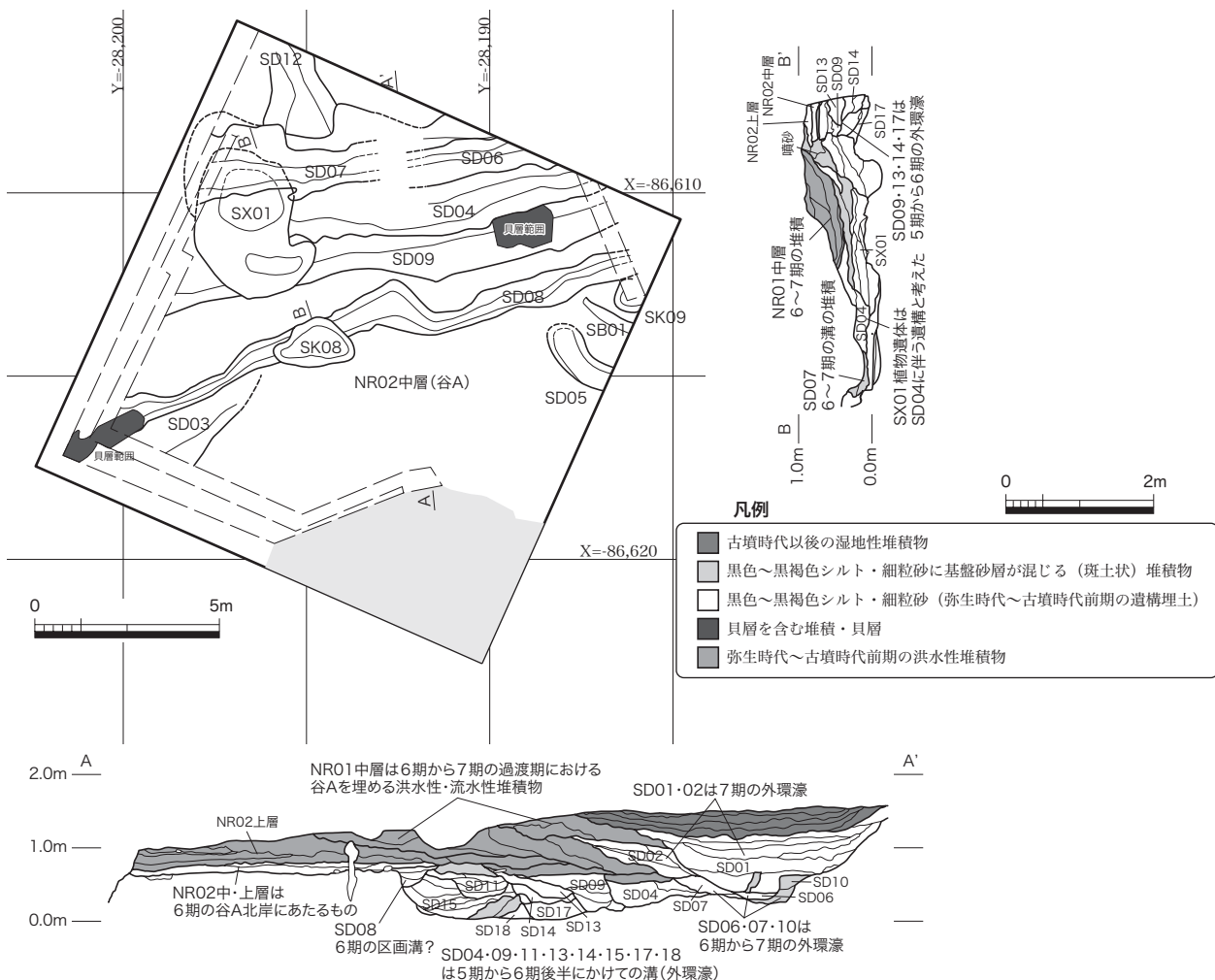




写真2-2-21 01Ad区SD15とSX01 (北東より)



写真2-2-22 01Ad区SD15 (東より)



写真2-2-23 01Ad区SD09・SD11 (東より)



写真2-2-24 01Ad区SD08とSK08 (東より)



写真2-2-25 01Ad区SD04・SD07 (南東より)



写真2-2-25 01Ad区SD04・SD07とSK群 (西より)

d. 弥生時代中期中葉（4期・5期）の逆茂木遺構

弥生時代中期の外環濠の変遷において述べたように、中期の外環濠は北居住域外側から内側へ着け替えられて掘削されていく傾向がみられた。溝の埋没状況においても、各溝の下部において基盤砂層の灰黄色細粒砂と黒色細流砂・シルトのブロック状の班土が堆積し、その上部に黒色細粒砂・シルトを主体とした班土の堆積がみられ、溝の上部において木製品をはじめとする木材が多数出土した。またこの堆積パターンを一つの鍵として溝の遺構検出を行った。この状況を鑑みるに、溝（環濠）の軌道を変更する掘削においては以前

に存在した逆茂木を解体・引き抜き、一部は次の溝（環濠）に再利用したものと考えられた（写真2-2-26）。したがって、中期の外環濠には常時逆茂木が存在した可能性が高く、これまで外環濠の旧河道A側に確認されていた逆茂木遺構も中期の外環濠の一部と考えられ、外環濠は一時期1条かあるいは01Ad区の西隅部から枝分かれた環濠と考えられる。68区SD160が県報告において朝日式～貝田町式段階の遺構と報告されていることから、一時期には1条の逆茂木のある外環濠が存在した可能性が高いものと考えられる。

加飾のある木製鉢は01Ad区SD15より出土した。



図2-2-26 01Ad区SD13出土逆茂木の残材（東より）

※逆茂木と考えられる分枝のある木材が倒れた状態で出土した。他の多様な形態の木材とともに出土しており、逆茂木を抜き取った残骸が埋没したものと思われた。



写真2-2-27
01Ad区SD15木製鍵状製品出土状態（北より）



写真2-2-28 01Ad区SD11獣骨出土状態（南より）



写真2-2-29
01Ad区SD15植物製編物出土状態（南より）



写真2-2-30
01Ad区SK04下層木材出土状態（東より）



写真2-2-31
01Ad区SK04上層木製広鋏未製品出土状態（西より）



写真2-2-32
01Ad区NR02中層木製櫓出土状態（北より）

e. 01Ad区SX01出土植物遺体（ヤナ状遺構、[図2-2-19](#)～[図2-2-25](#)、[写真2-2-33](#)～[写真2-2-35](#)、[表2-2-1](#)）

01Ad区SX01は調査区西北側にて検出できた南北4.1m、東西2.8m、深さ0.6m前後の平面楕円形的大型土坑で、埋土上部の黒褐色シルトと黄灰色中粒砂の班土が10層程堆積しており、その下から当初「上り梁」に類似したと考えられた植物遺体が検出できた。その為、調査時から「ヤナ状遺構」として、詳細な調査を行った。SX01は6期の遺構と考えられ、6期の外環濠SD09の埋没後、遺構検出時には6期に堆積するNR01中層（堆積後）の上からの掘り込みとして認識して遺構検出を行った。またSX01は6期～7期と考えられる外環濠SD04の下に埋没している遺構である。

「ヤナ状遺構」はSX01掘り込み後、黒褐色シルトや黒褐色中粒砂の班土をおいた土の上、SD04に対して西に傾けて据えられたような状態で出土した。「ヤナ状遺構」の植物遺体の最上部はSX01西側にて標高0.45m前後で、最深部はSX01東側の標高0.05cm前後で、SD04の溝底の標高0.04m前後とほぼ一致している。しかし当初「上り梁」を想定して調査を行ったが、SX01は西側が立ち上がる土坑であることが判明し、SX01出土植物遺体の性格は「上り梁」の可能性はなくなった。結果としてSD04もこのSX01西側肩部において溝が立ち上がる状況が観察できたこととなり、外

環濠SD04に伴う陸橋の東裾部に当たる可能性が高くなった。よってSX01出土の植物遺体は「上り梁」の施設等、植物を利用した施設が流れ着いたものか（埋没した）、外環濠SD04に伴う陸橋の護岸施設の一部である可能性が高い。後者である可能性が高いのは、SD04の後に掘削されるSD07により、SX01出土植物遺体の北側がやや攪乱されて、壊れている状況が観察できる点でも有効な状況と考えられる。

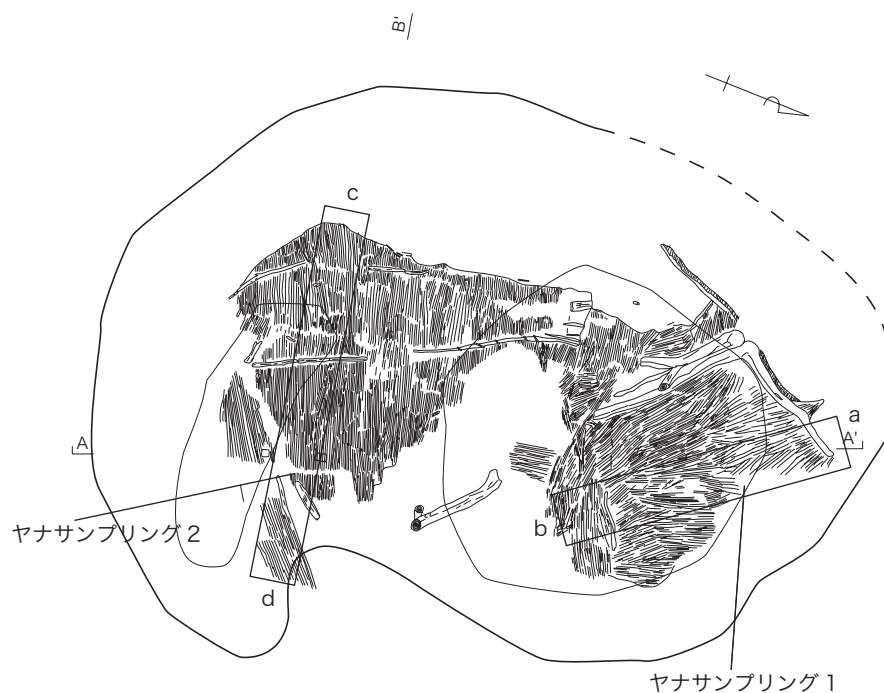
「ヤナ状遺構」の構造は、ヨシ属の茎をそろえたものを、径2cm程のコナラ属コナラ節を中心とする広葉樹の枝（クワ属製のもの1点とムクロジ製のもの1点、ヤナギ属製のもの1点もある、図面上はタテ木と表現した）とタケ亜科の幹（図面上では樹皮と表現、幅3.2cm～4.0cmの帯状に押しつぶされた状態で出土）を用いて蔓性の細い植物によって束ねたもので、その下部が残存したものであった。残存した部分では、上部に木本を中心とした枝を下部にタケ亜科を用いた枝によりヨシ属の茎を束ねていた状況を観察できた。またヨシ属の束の間やその下部には、コナラ属コナラ節をはじめとする広葉樹・クワ属・クリ・ヤナギ属の枝や茎、広葉樹の茎・葉が挟まって出土した。これらの枝・茎はこの植物遺体を構成する部品の樹種と重複するので、その壊れた残材的なものが残存していた可能性が高い。



写真2-2-33 01Ad区SX01堆積状況（北より）



写真2-2-34 01Ad区SX01出土ヤナ状遺構（東より）



- 1 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂のラミナ
- 2 5Y 2/1 黒色シルトと2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/2 灰オリブ色中粒砂の斑土
- 3 2.5Y 2/1 黒色砂質シルト 植物遺体比較的多量含む(SD13覆土)
- 4 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂のラミナ
- 5 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルト
- 6 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂のラミナ
- 7 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂の薄ラミナ
- 8 2.5Y 3/1 黒褐色シルト
- 9 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルト
- 10 5Y 4/1 灰色中粒砂
- 11 5Y 4/1 灰色中粒砂
- 12 5Y 3/1 オリーブ黒色中粒砂
- 13 5Y 4/1 灰色中粒砂

- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂のラミナ
- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルト
- 2.5Y 4/1 黄灰色砂質シルト
- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂の斑土
- 5Y 4/1 灰色中粒砂
- 5Y 2/1 黒色シルトと2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/2 灰オリブ色中粒砂の斑土
- 2.5Y 3/1 黒褐色シルト 砂粒含む(NR02上層)
- 5Y 2/1 黒色シルトと2.5Y 3/1 黒褐色シルトの斑土(NR02中層相当)
- 7.5Y 6/1 灰色中粒砂
- 2.5Y 3/1 黒褐色中粒砂
- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂の斑土
- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルトと5Y 4/1 灰色中粒砂の斑土
- 2.5Y 3/1 黒褐色砂質シルト
- 2.5Y 4/1 黄灰色中粒砂
- 7.5Y 5/1 灰色中粒砂
- 2.5Y 3/1 黒褐色中粒砂 植物繊維多量含む(ヤナ部)

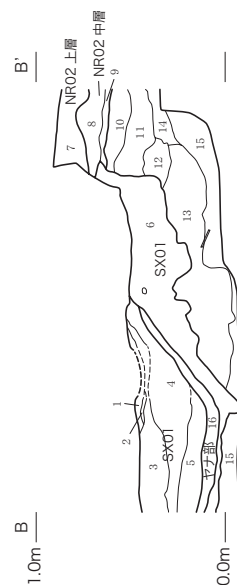


図2-2-19 01Ad区SX01植物遺体出土状態図 (1 : 40)

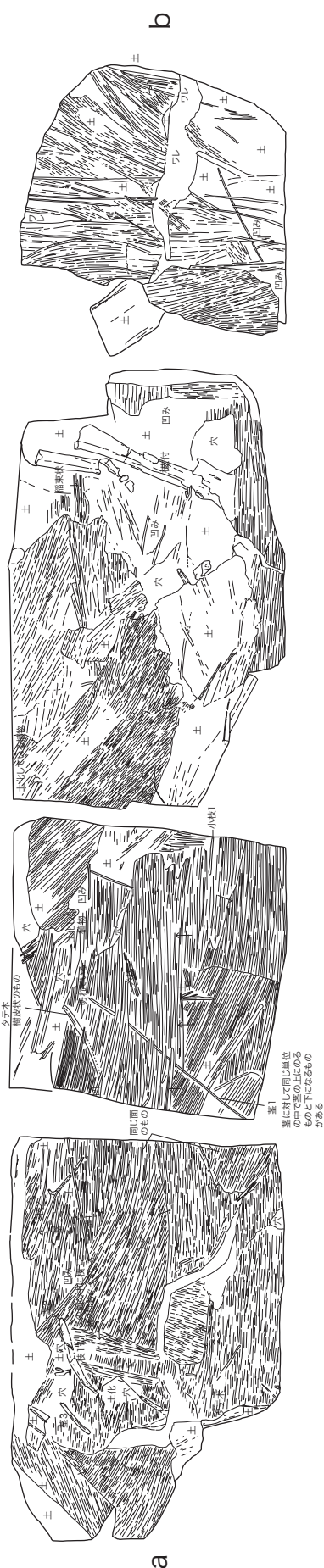


図2-2-22 01Ad区SX01出土植物遺体部分（ヤナサンプリング1）実測図b（1：8）

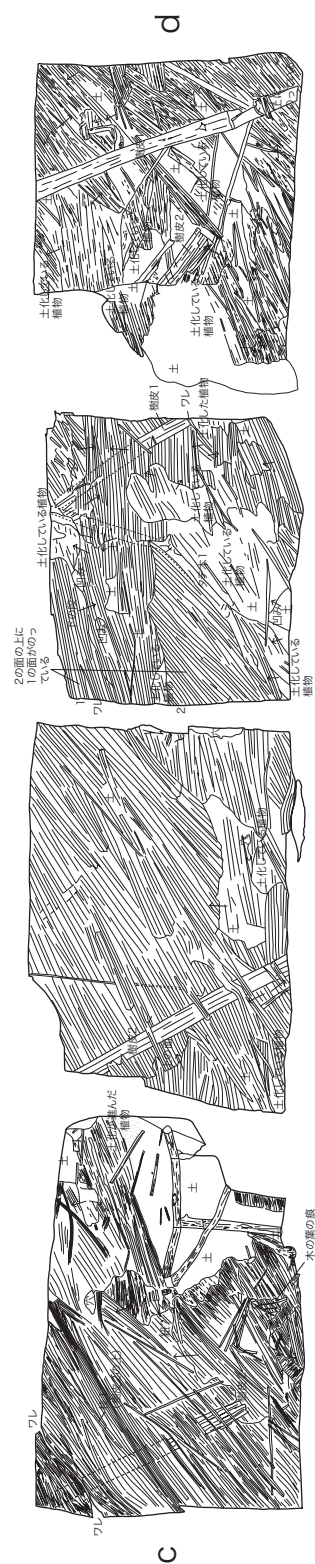


図2-2-23 01Ad区SX01出土植物遺体部分（ヤナサンプリング2）実測図c（1：8）

第Ⅱ部 遺構の分析 — ②遺跡の調査成果

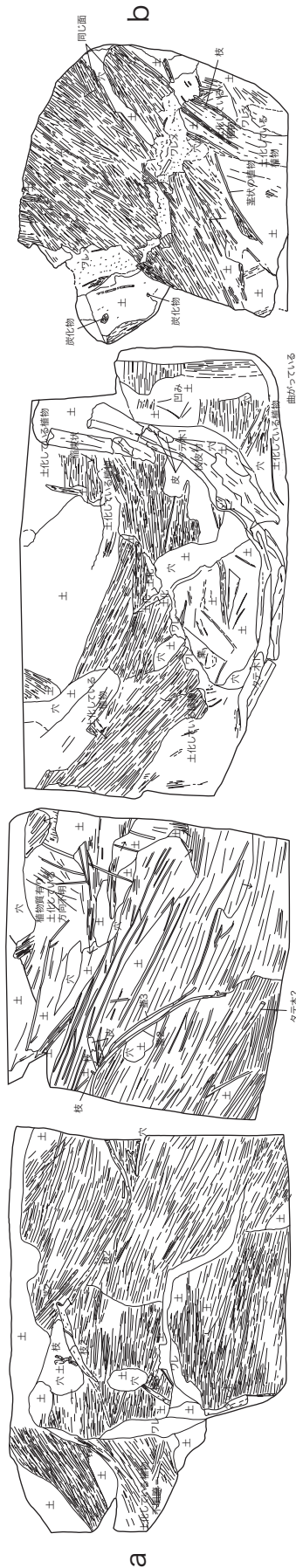


図2-2-24 01Ad区SX01出土植物遺体部分（ヤナサン
プリング1）実測図c（1：8）

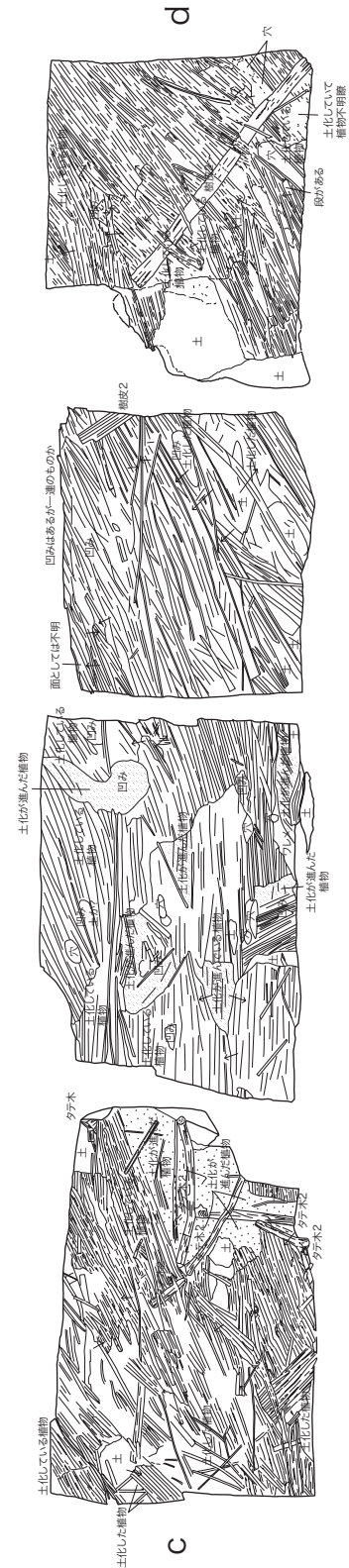


図2-2-25 01Ad区SX01出土植物遺体部分（ヤナサン
プリング2）実測図d（1：8）



表2-2-1 01Ad区SX01出土植物遺体の構成材

ブロック	ヤナサンプリング1						ヤナサンプリング2												合計	
	枝・茎		タテ木			立木	枝・茎				樹皮				タテ木					
	1	2	1	3	4	1	1西	1東	2西	2東	1西	1東	2西	2東	1西	1	1東	2西		2東
ヤナギ属	10	2	2	1			2		1	1									1	20
ヤナギ属根？								2												2
広葉樹a	1	4					5	3	1											14
コナラ節	1						12	4		1					1		1	1	1	22
コナラ節根										1										1
広葉樹	1	1												1						3
環孔材					1		1									1				3
エノキ属						1														1
クリ							2													2
クリ？根	1																			1
ガマズミ属	1																			1
クワ属									1						1					2
ムクロジ																1				1
蔓性							1			2										3
針葉樹									2											2
単子葉		1					2		1				1							5
タケ亜科											2	1	2	2						7
タケ亜科根茎									1				1	3						5
合計	15	8	2	1	1	1	25	9	7	5	2	1	4	6	2	2	1	1	2	95



写真2-2-35 01Ad区SX01出土植物遺体（ヤナ状遺構）

f. 弥生時代後期の環濠（写真2-2-36～写真2-2-39）

弥生時代後期の北居住域南側の環濠3条の内、真中の63D区SD02に対応する01Ac区において検出した7期～8期のSD01、最も外側の63D区SD03に対応する01Ad区において検出した7期～8期のSD01・SD02がある。

01Ac区SD01は、一部分の調査でまさに63D区SD02の一部である。63D区SD02は1度掘り直しがあり、01Ac区SD01においても2段階の溝がみられる。63D区SD02-2の財団報告にもあるが、溝埋土下部に黒色細粒砂・シルトの班土からなる堆積があり、上部に植物遺体を多く含む古墳時代以後の堆積がみられる。一方63D区SD02-1に対応すると思われる堆積層では、SD01下部に破碎された貝層がみられ、63D区SD01西側に見られる貝層と同様に、6期以前に北側居住域に堆積した貝層の再堆積の可能性がある。

01Ad区のSD01・SD02は先に述べたように、

6期と考えた同SD04・SD06・SD07とほぼ同じ軌道をもつ溝で、7期と考えられる赤彩土器片1点が同SD04から出土しているが、同NR01中層がSD04とSD02間層として堆積し、さらにSD02とSD01の間にもNR01中層として掘削した洪水堆積性の砂層を挟んでいることから、SD04・SD06・SD07を6期の溝と分類し、NR01中層以後の溝を遺跡環境の変化も考慮して、財団報告と同様7期以降の溝と考えた。01Ad区SD02はSD01の下部にて、黒色細粒砂・シルトに基盤砂層の小ブロックを含む班土状堆積が一部みられただけであるが、SD01は下部に黒色細粒砂・シルトの班土状堆積があり、上部には植物遺体を多く含んだラミナ堆積がみられ、上面に7期以後のNR01上層の暗オリーブ色を中心としたシルトに腐植物を多く含んだ堆積により埋没していた。NR01上層では木材が多量に出土した。SD01は幅3.5m～4.0m程で、北側の土手からの深さは＊mである。



写真2-2-36 弥生時代後期（7期～8期）の環濠
（01Ac区SD01、写真の右側の溝）



写真2-2-37 01Ac区SD01の下部に堆積する破碎貝層



写真2-2-38 01Ad区2面全景（西より）

※左側が弥生時代後期（7期）の外環濠SD01、中央が6期～7期の洪水性堆積NR01中層、右側が弥生時代中期後葉（6期）の谷A NR02上層（下部にて木材が多量に出土した）写真2・2・39参照）



写真2-2-39 01Ad区NR02上層木材出土状態（東より）

g. 弥生時代後期の墓域（図2-2-26、写真2-2-40・写真2-2-41）

墓域に関する成果では、7期において78区方形集溝墓SZ133（財団報告）の東に接して一辺7m～8mのマウンドをもつ方形周溝墓の東溝01Ab区SD01を検出した。出土した土器はほとんどが弥生時代中期のものであるが、部分赤彩された鳥形土器片1点が出土しており、層位から考えると7期の遺構と考えられ、SZ133と連続して造墓さ

れた7期初頭のものと思われる。今回の調査成果からはこの方形周溝墓の東には弥生時代後期以後の方形集溝墓は展開しない。63D区の外環濠の内側において骨片が出土した土坑SX01が検出されており、方形集溝墓の南側において土壇墓などの墓域が展開する可能性もある。

01Ae区において8期（廻間Ⅱ式）の方形状にめぐるSD01を検出しており、方墳になる可能性がある。

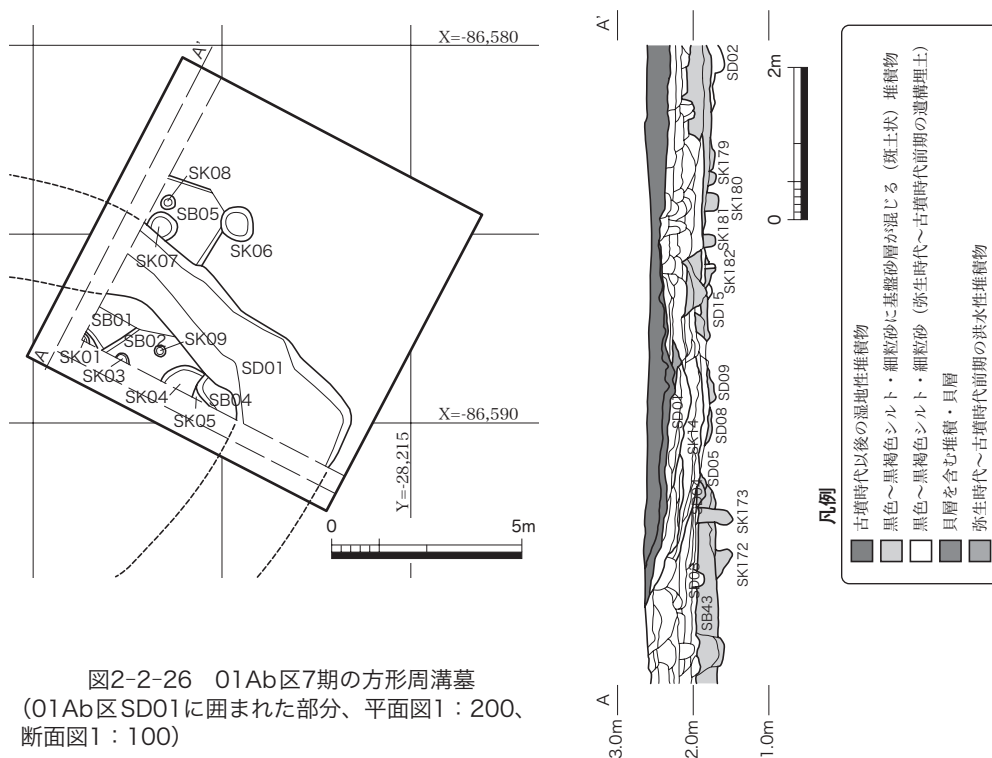


図2-2-26 01Ab区7期の方形周溝墓
(01Ab区SD01に囲まれた部分、平面図1：200、
断面図1：100)



写真2-2-40 01Ab区1面全景（東より）

※写真右側を囲む溝が01Ab区SD01



写真2-2-41 01Ae区1面全景（西より）

h. 北居住域南縁部の区画溝 (図2-2-27)

北居住域内側の区画溝として5期の01Ab区SD02を検出した。SD02は幅1.2m、深さ0.5m前後にて検出したが（79区SK945・SK946に対応するか）、溝下部に黒色シルト・細粒砂の班土が堆積した後、01Ab区から63D区北側に展開する貝層（本調査の01Ab区貝層B）が堆積し、その後6期のSK14が破碎貝層（01Ab区貝層A）を伴って堆積している。貝層BはSD02から東1.5mに位置する5期の遺物が出土するSK55（下部SK192に柱材が出土）の上部を覆っていたことから5期

から6期の溝と考えられる。

7期には北居住域の外側に99Ae区SD01と01Ae区SD02がみついている。99Ae区SD01は居住域の内から外の谷Aに流れ込む状態で検出された幅1m程の溝で、溝の東肩にあたる位置で廻間II式の土器が出土した（SU01）。また01Ae区SD02は北北東から南南西にはしる幅約3mの溝で、北居住域南東部から南居住域にのびるものと思われるが、これまでの調査においては確認できていない。

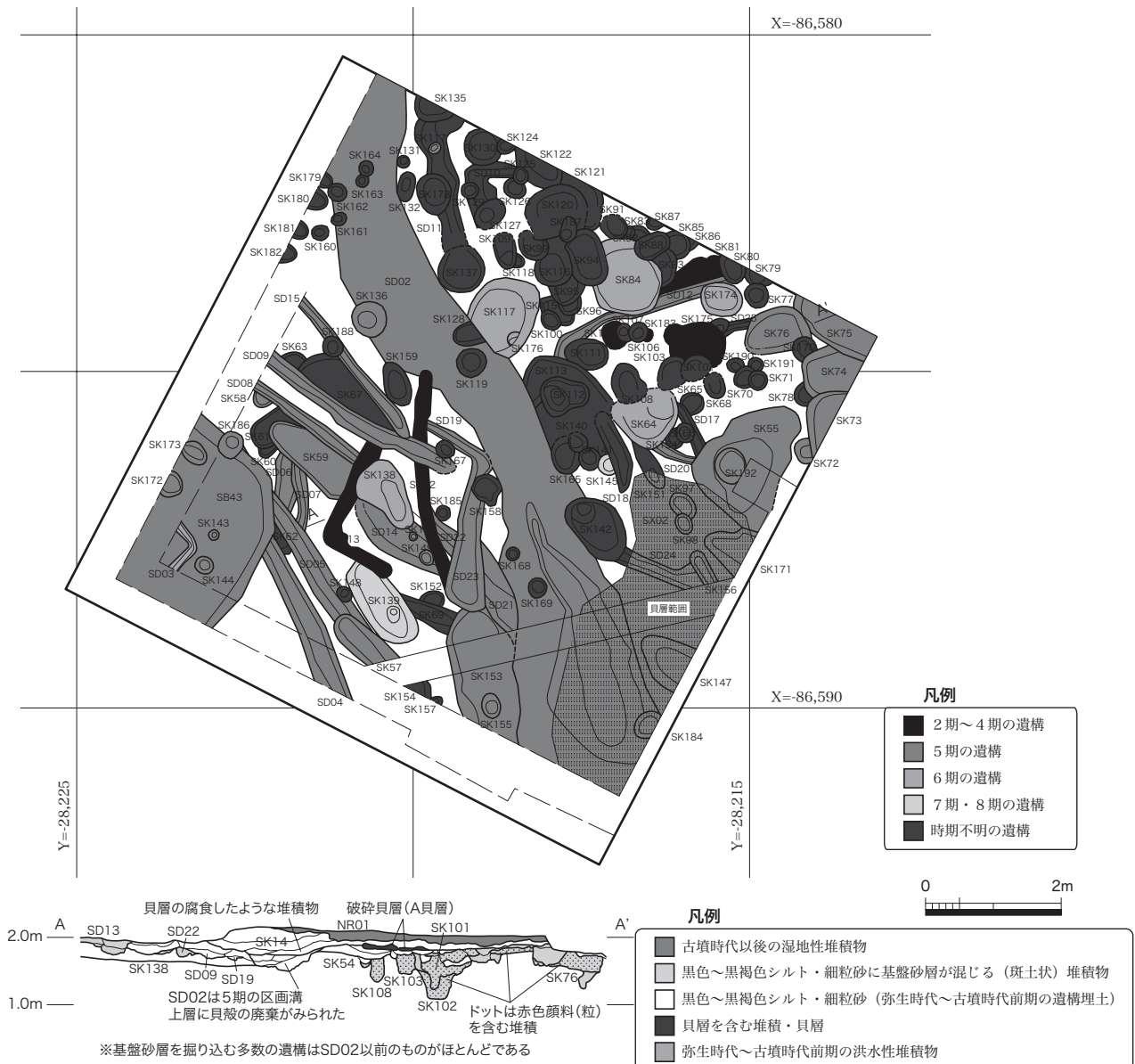


図2-2-27 01Ab区6面（基盤砂層上面）における遺構（1：100）

i. 弥生時代中期前葉～中葉（2期～5期）の北居住域南縁部（図2-2-27・図2-2-28）

99Ad区と01Ab区がある。2期・3期の遺物は比較的多く出土しているが、遺構として考えられるものは少なく、99Ad区SB19など少数である。

続く4期の遺構としては、99Ad区SB14・SK103・SK108・SK135・SK140、01Ab区において円形住居の周溝と考えられるSD02、方形住居の周溝と考えられるSD03やSK102があり、99Ad区において4期までの土器が出土する遺構が多数ある点と4期の土器が比較的多く遺物包含層下部において出土することから、99Ad区4面にて検出した遺構の多く（遺物が出土しない土坑など）を4期と考えた。一方5期までの遺物が出土する遺構は、99Ad区ではSK59・SK69のみで、01Ab区においては胴張方形の竪穴住居である

SB43をはじめとする方形状竪穴住居の周溝と考えられるSD04・SD05・SD08・SD09・SD12・SD15・SD23、SK55・SK142・SK153などの大型土坑が比較的多くみられることと5期の土器が比較的多く遺物包含層下部において出土することから、01Ab区6面にて検出した遺構の多く（遺物が出土しない土坑など）を5期と考えた。しかし、99Ad区4面においては、径50cm未満の小型土坑や径50cm以上100cm未満の中型土坑が99Ad区の北隅から南隅を結ぶ帯状に密集して多数見つかっており、さらにその土坑の密集する帯状部分から調査区の東側に土坑が多数展開する状況がみてとれる。99Ad区のこの密集する小型・中型土坑からは2期～7期にかけての遺物が出土しており、密集して検出された土坑群の時期は6期前後に連続して営まれた建物、柵列の存在を反

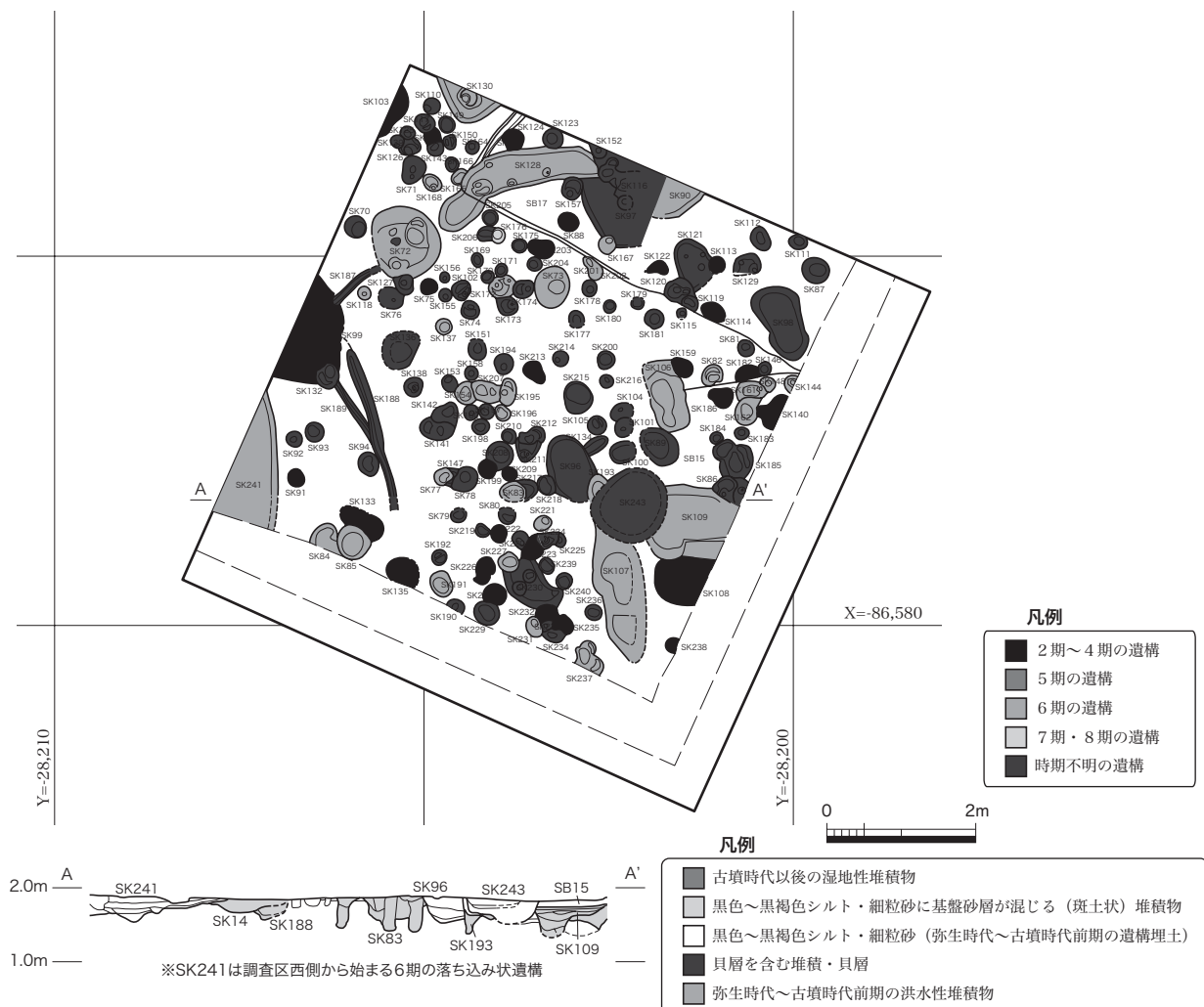


図2-2-28 99Ad区4面（基盤砂層上面）における遺構（1：100）



映している可能性が高い。一方01Ab区6面において検出された小型・中型土坑は明らかに01Ab区東側に多く、密集してみつかっており、4期の土器を出土する小型土坑が少数ある他は、遺物をほとんど含まない。よって01Ab区の密集する小型・中型土坑は4期前後に営まれた建物などの存在を示す可能性が高い。

興味深い遺構としては、01Ab区SD02は復元

径9m前後の円形住居と考えられるもので、SD02の埋土中にベンガラ粒が多数含まれ、上面にてチャート製の剥片が4点出土した。SD02に伴う柱穴を密集する土壌群から特定することは困難であるが、中央土坑と考えられる土坑は位置から考えると、SK55であるが、出土土器の時期等も考えるとSK102がそれにあたる可能性が高い。



写真2-2-42 01Ab区 SD02 (5期の区画溝、北西より)



写真2-2-43
01Ab区 SD02出土チャートの剥片出土状態 (西より)



写真2-2-44
01Ab区 南壁SD02の上層に堆積する貝層 (北より)



写真2-2-45
01Ab区 SK55 (SK192) 出土柱根 (南西より)



写真2-2-46 99Ad区 2面全景 (西より)



写真2-2-47 99Ad区SB18の土器置き炉(6期、南より)

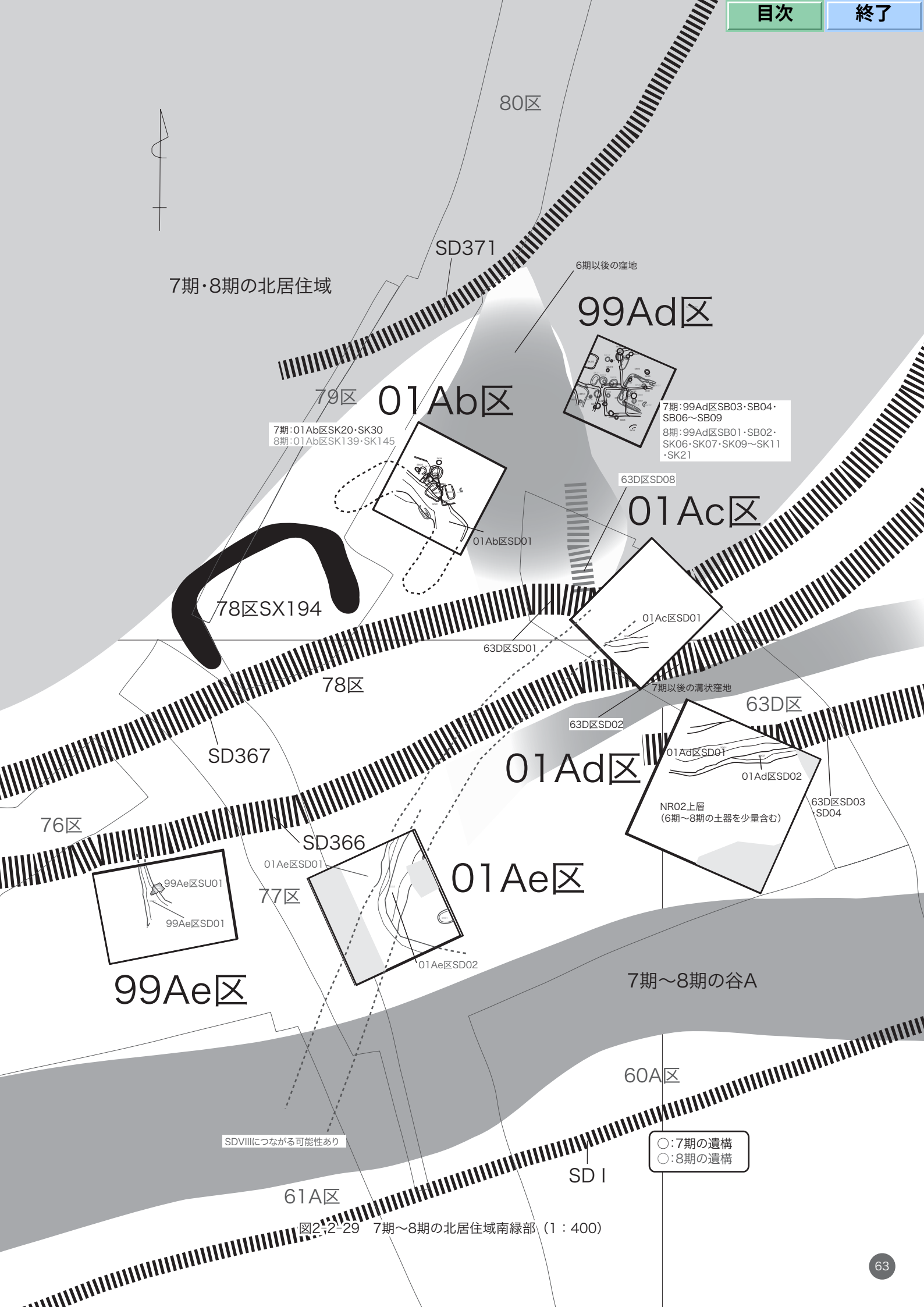


図2-2-29 7期～8期の北居住域南縁部 (1:400)



j. 弥生時代中期後葉（6期）の北居住域南縁部

99Ad区では西隅にあるSK241が01Ab区に続く窪地状落ち込みの東肩に当たる部分と考えられ、その東側に遺構が展開する。竪穴住居としてはSB05・SB10・SB11・SB15～SB17、土坑はSK52・SK54・SK55・SK72・SK107・SK109があり、SB11に伴うと思われる土器置き炉が検出できた（写真2-2-47）。

01Ab区では5期にSD02が掘削され、その後01Ab区東側が大きな窪地の状態になる（写真2-2-48）。その後、窪地部分の西側に残っていたSD02の上部に貝殻が廃棄され（貝層B）、さらに窪地を拡大させるSK14の堆積がみられる（このSK14の堆積に伴う破碎貝層として貝層A）。そのためか、調査区西側にSB14～SB18・SK11・SK12・SK32等の遺構が密集するが、東側にはSK84・SK117等の土坑が少数点在する程度となり、7期以後もこの傾向が続く（写真2-2-49）。

k. 弥生時代後期～古墳時代前期前半（7期・8期）の北居住域南縁部（図2-2-29）

99Ad区では6期に続いて多くの遺構が形成され、竪穴住居では平面隅丸方形のSB03・SB04・

SB06・SB07～SB09、中型土坑SK34がみられる。8期の遺構は埋土の明度がやや明るい状態のものを検出しており、この基準で検出した99Ad区の遺構はやや希薄となる（写真2-2-50・写真2-2-51）。平面隅丸方形のSB01・SB02、中型・大型土坑のSK06・SK07・SK09～SK11・SK21がみられる。99Ad区の1面・2面において検出した土坑は、SK34を除いて比較的浅い土坑である。

01Ab区では7期前半に方形周溝墓が調査区西側に残る高まりを利用して形成され、その後7期～8期と考えられるSK20・SK30・SK129・SK145がみられる。SK129は7期の方形周溝墓のマウンド上に掘られているので、SD01がある程度埋没した後に部分的に土坑等が形成された可能性が高い。

7期におけるこの地点の状況は、99Ad区と01Ab区状況と01Ab区北隅の北3mの地点で確認されている7期の竪穴住居79区SA118の存在から考えると、竪穴住居を中心に遺構群が形成されるが、径5m～10m前後の遺構の希薄な部分も含んだ状況が推定でき、8期のこの地点は遺構がより散在的状況になる。



写真2-2-48 01Ab区SK14土器出土状況（東より）



写真2-2-49 01Ab区4面全景（南東より）

※01Ab区SK14は5月のSD02が埋没後堆積した貝層から腐食したものが起源のものと考えられ、SK14の南肩部からは6期後葉の土器がまとまって出土した（2-3-●）。写真2-3-●では中央にSK14があり、その南下（東側）にSK14の下層に堆積する破碎貝層が白くみえる。

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果

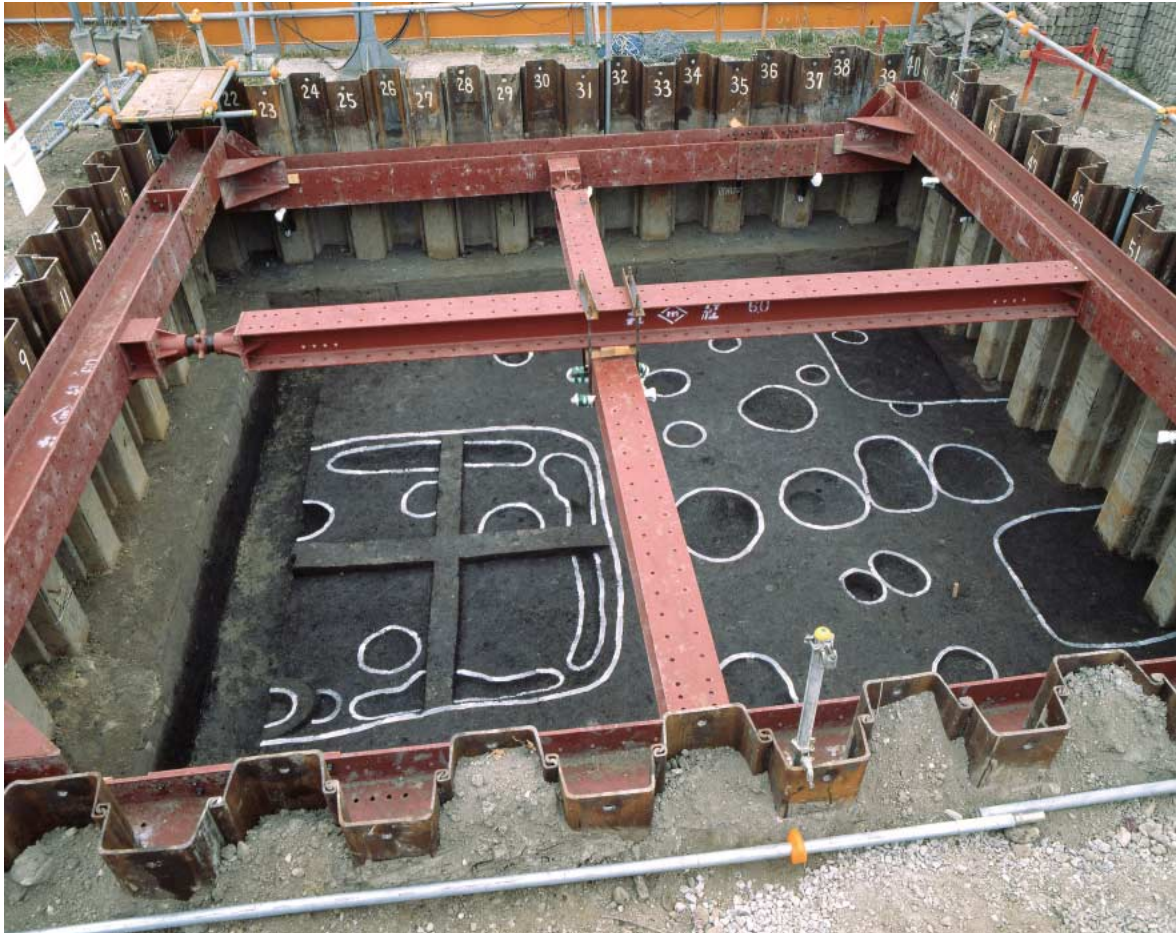


写真2-2-50 99Ad区1面全景（北より、8期の遺構群）



写真2-2-51 99Ad区2面全景（西より、6期から7期の遺構群）



(3) 北居住域北東側環濠帯とその外部

A. 位置とこれまでの成果……………

北居住域の北東側環濠帯からその外部に位置する地点で、02Aa区～02Ac区・02Ae区～02Ag区・02Ba区～02Bc区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域北東側環濠帯部分にかかる調査を85区～87区、その外部にかかる調査を88区・89区として調査が行われている。

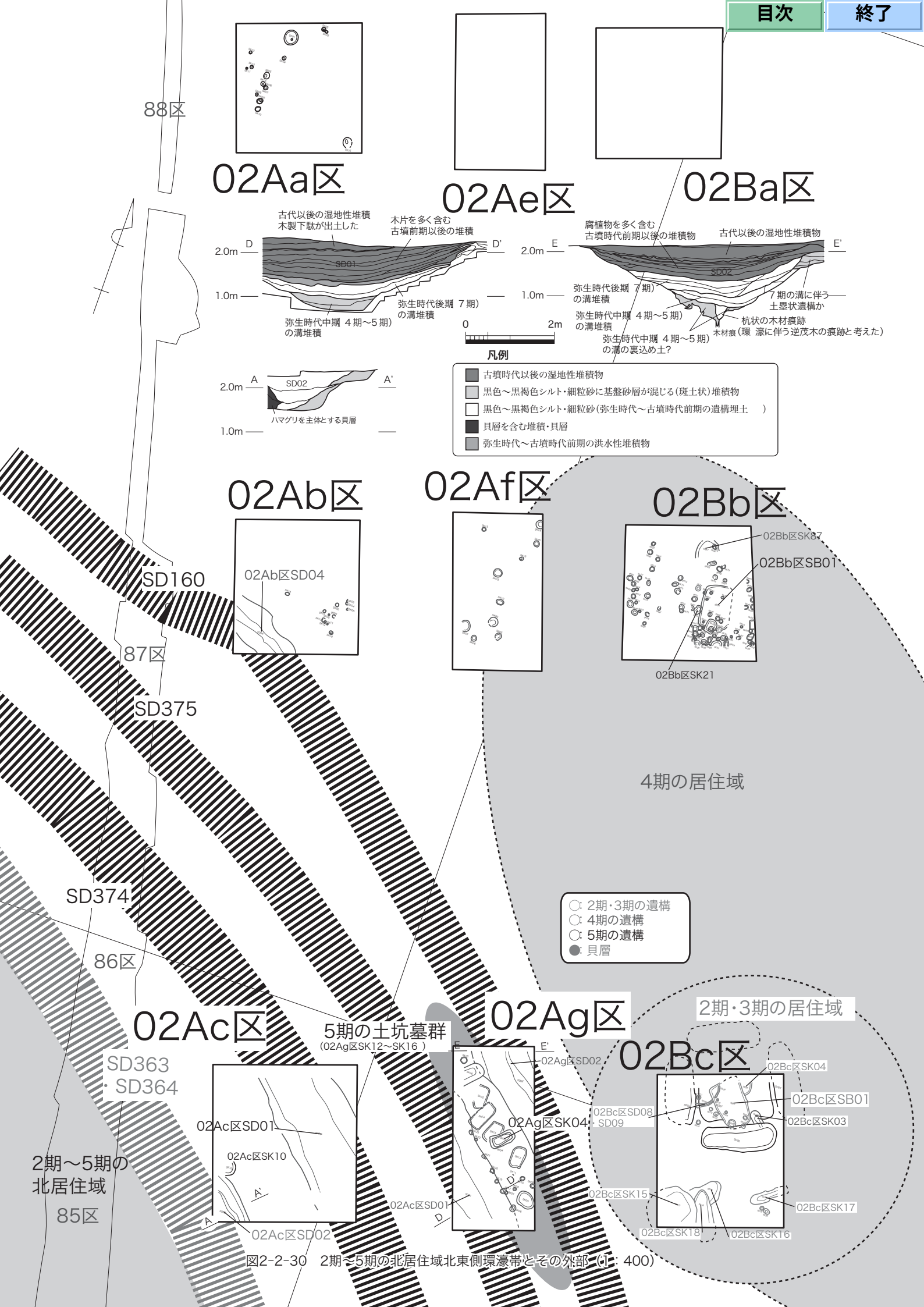
北居住域北東側環濠帯の成果としては2期～5期の環濠と考えられる溝3条、7期の環濠と考えられる溝5条（4条は財団報告による見解）と6期

の方形周溝墓2基、85区において4期～5期の大型土坑3基、7期の竪穴住居1棟をはじめとする竪穴住居・小型土坑多数が確認されており、大きくは弥生時代中期前半と弥生時代後期に環濠が掘削される段階と環濠掘削の前後に居住域の北東端としての遺構群や弥生時代中期後葉（6期）の墓域が展開する。環濠帯の外部の成果としては、6期と考えられる方形周溝墓（県報告では4期～5期の認識）1基と時期不明であるが財団報告において方形周溝墓の周溝と想定された溝6条、他土坑数基が確認されている。



写真2-2-52 北水田跡（02Ba区1面全景、南より）

※写真の左側にみえるのが古墳時代前期後葉（9期）のNR01、右側が弥生時代の水田跡、9期のNR01に削られている。





B. 今回の調査成果……………

a. 北居住域北東側の環濠帯 (図2-2-30)

北居住域の環濠について財団報告において2期・3期の環濠と考えられる溝の痕跡は確認できなかったが、4期～5期を中心にした環濠を4条、7期を中心にした環濠5条確認した(7期の一番内側の環濠を含まない、一番内側の環濠を含むと7期の環濠は6条めぐることになる)。財団報告による解釈との相違は、02Bc区西側において検出した7期のSD01の発見により、これまで弥生時代後期(7期)の最外縁をめぐる環濠として考えられてきた74区SD367が87区SD160とつながる可能性は少なくなり、74区SD367は02Bc区SD01を経て02Bd区SD03につながりさらに北上して外側により大きくめぐる可能性が高くなった。よって財団報告において推定された60E区SD01と60E区SD02・SD21が87区SD363において合流すると考える必要がなくなり、今回確認できた02Ac区と02Ag区の4条の溝を87区において確認されている4条の溝と対応させる考え方がより合理的推定と思われる。以下溝の堆積状況が重要と思われるので、内側の溝から順に説明する。

02Ac区SD02は調査区南西隅にて一部が検出できたのみで、出土遺物のみから考えると4期の溝と考えられる。しかし、この地点を通る溝として2期～5期とされる86区SD363・SD364が7期

とされる86区SD366の大きく2条の溝が想定されるが、どちらか1条の溝なのか、2条の溝がみえているのかは確認できなかった。断面やや平底で、深さはSD02東肩より0.90mである。埋土は東肩部から下に基盤砂層が混じる黒褐色シルトが堆積し、溝中央付近の下部に黒褐色シルトにハマグリを中心とした貝層が混じる状況がみられた。上部まで黒褐色シルトが堆積する。

02Ac区SD01は調査区東側を北東から南西にはしる(写真2-2-53)。SD01も4期・5期と7期の大きく2条の溝が想定されるが、7期の溝部分のみ確認できた。検出面における溝の幅は7mを超え、深さ1.4m、断面やや緩やかな立ち上がりの丸底の溝である。断面の観察からは2段階の埋没が確認でき、溝が西から東に振れる状況が見られる。前段階の埋土は下部に基盤砂層が混じる黒褐色シルトが堆積した後、黒褐色シルトが上部に堆積する。後段階の埋土は最下層に黒色シルトに腐植物が多量に混じる堆積がみられ、その後褐色灰色シルトに腐植物が多量に混じる堆積がある。上部は黄灰色シルトに腐植物が混じる明らかに古墳時代以後の堆積があった。

02Ag区SD01は4期・5期と7期の大きく2段階の堆積として溝を掘り分けた(写真2-2-55)。4期・5期の溝はSD01の最下部の黒色シルトに基盤砂層が混じる層の部分で断面やや「V」字状丸



写真2-2-53 02Ac区1面全景(北西より)

※写真2-2-53下側にみえるのが7期の環濠02Ac区SD01



写真2-2-54 02Ab区3面全景(東より)

※写真左上隅側にみえる溝が弥生時代中期の外環濠02Ab区SD04

底の形態である。溝の底は標高0.75m前後である。7期の溝はその上部、SD01下部の黒色・黒褐色シルトの堆積層の部分で、断面やや緩やかな丸底の形態で、溝の底が標高1.0m前後である。7期のSD01は下部の上層に褐灰色中粒砂に木片が多量に混じる層や黄灰色シルトの薄い堆積があった後、古墳時代以後の木片を多く含む灰色～黄灰色シルトの1m弱の堆積が溜まる。検出面には古代～中世と思われる灰黄色粘質シルトが堆積し、木製の下駄が出土した。7期のSD01の幅は全体を確認できていないが、検出面にて5m～6m程になる。

02Ag区SD02はSD01と同様に4・5期と7期の大きく2段階の堆積として溝を掘り分けた。4期・5期の溝はSD02の最下部の黒色シルトに基盤砂層が混じる層の部分で断面「V」字形の底になる(写真2-2-56)。溝最深部に杭状の木材痕が確認でき、その上部に黒色シルトの小柱穴状の落ち込みがみられた。調査時にはこの痕跡を環濠に伴う「逆茂木」の痕跡と考えた。溝の底は標高0.45m前後である。7期の溝はその上部、SD02下部の黒褐色シルトの堆積する断面丸底の部分で溝の底が標高0.70m前後である。7期のSD02は下部黒褐色シルトの標高1.0m前後に堆積状況の違いが見られ、上部の黒褐色シルトは溝埋土の中層にある腐植物を多く含む黒褐色～灰白色シルトの堆積

に近い状況が見られる。溝上層は古代以後と思われるオリーブ色～オリーブ黒色の粘質シルトが堆積する。7期のSD02の幅も全体を確認できていないが、検出面にて5m前後になる。

02Bc区SD01は検出面の幅が3.2m程、深さ1.2m前後の断面緩やかな「V」字形の溝で、溝底の標高が1.2m前後である。堆積状況は大きく暗灰黄色シルトの上層、黒褐色～暗オリーブ褐色シルトに下部に植物遺体が含まれる中層、黒褐色シルトが堆積する下層に分けられ、上層・中層を掘削した際に、7期～8期と思われる赤彩土器片1点出土した。SD01は5期～6期と考えられる方形周溝墓の西溝SD04を切って掘り込まれていることから弥生時代後期(7期)の溝と考えた。

02Bb区SD03は02Bb区南西隅にて検出された溝で、東肩のみ確認できた。出土遺物は4期の土器のみで、SD03の東にある6期の方形周溝墓と一連の方形周溝墓の東溝の可能性もあるが、6期のSD01の上を完全に覆う堆積(黒褐色シルト層や古墳時代以後の堆積と思われる暗灰黄色～灰黄褐色シルト)がSD03に流れ込む状況が明確に残っていることから、7期の溝と考え、02Bc区から北にのびる溝の一部と推定した。溝の下部は黒褐色～暗オリーブ褐色シルトで、最下部には基盤砂層が混じる。



写真2-2-55 02Ag区2面全景（北より）

※写真左が02Ag区SD02（7期）、右が02Ag区SD01（7期）



写真2-2-56 02Ag区SD02断面（北より）

※弥生時代中期の環濠まで掘削した状態

02Aa区SD01

02Ae区ST01～
ST08、ST10～
ST20、SD05

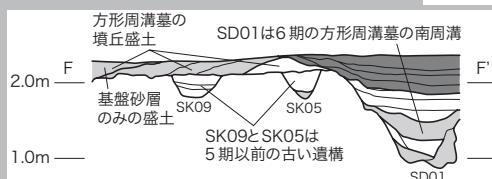
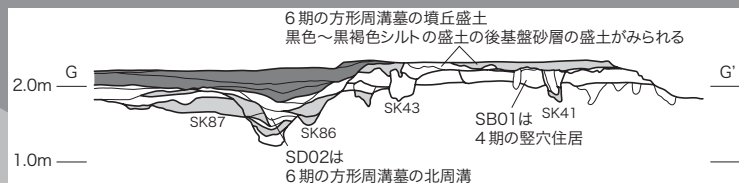
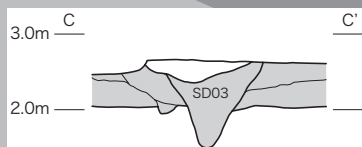
02Ba区ST01～ST11

02Aa区

02Ae区

02Ba区

北水田域



凡例

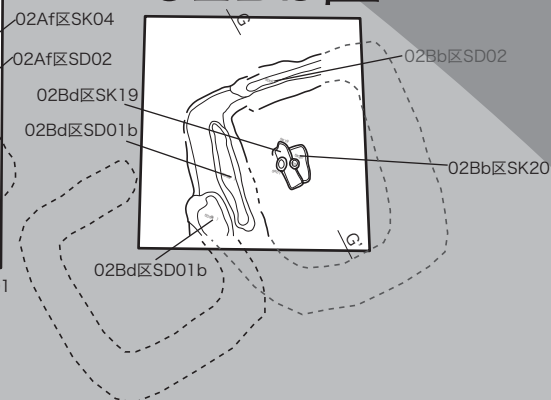
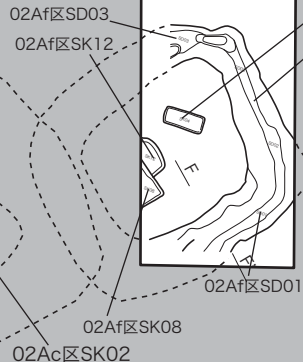
- 古墳時代以後の湿地性堆積物
- 黒色～黒褐色シルト・細粒砂に基盤砂層が混じる(斑土状)堆積物
- 黒色～黒褐色シルト・細粒砂(弥生時代～古墳時代前期の遺構埋土)
- 貝層を含む堆積・貝層
- 弥生時代～古墳時代前期の洪水性堆積物

02Ab区

02Af区

02Bb区

0 2m



6期の北東墓域

SD374

5期の環濠が埋没し、窪地状に残る。
6期には、環濠間の高まりと環濠の埋没した窪地を利用した方形周溝墓が形成される。
環濠帯も墓域化する

○ 6期の遺構

02Ac区

02Ag区

02Bc区

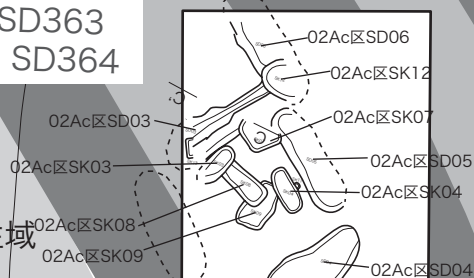
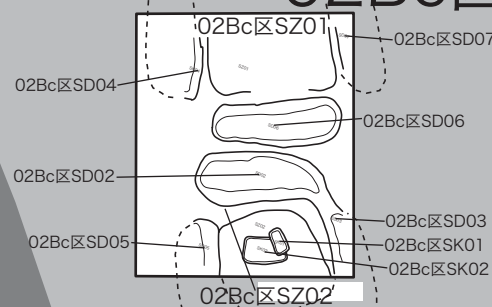
SD363
・SD3646期の
北居住域
85区

図2-2-31 6期の北居住域北東側環濠帯とその外部 (1 : 400)

b. 弥生時代中期後半（5期・6期）の墓域（[図2-2-31](#)、写真2-2-57・写真2-2-58）

方形周溝墓が推定されるのは、02Ac区の7期のSD01とSD02に挟まれた土手の部分に切られる形で2基、02Ab区東南隅に1基と02Af区西側に1基が隣接する形で2基、02Bb区東側に1基、02Bc区の南北に隣接する2基が確認できた。その他にも02Bb区SD01bの南側にSD01bより新しいSD01aがあり、02Af区東隅にかけてもう1基存在した可能性がある。02Aa区西隅にて検出したSD01も方形周溝墓の周溝になる可能性がある。

墳丘の平面形態は検出面における墳丘の大きさが一辺5m～7m程、墳丘端（周溝の内側の下端）の大きさが一辺8m～10m程の平面方形のものである。墳丘をめぐる周溝の形態は全ての方形周溝墓の周溝が方形にめぐる角部において溝底が立ち上がる傾向があるが、明瞭に四隅が途切れる形で検出できたのは02Ac区南側の方形周溝墓と02Bc区北側の方形周溝墓である。02Ac区南側の方形周溝墓は北側の方形周溝墓の南溝SD03に切られ

る形で存在し、02Bc区北側の方形周溝墓SZ01は6期に周溝が埋没するが出土遺物からは5期にさかのぼる可能性があることから、北居住域環濠帯から北東外部に展開する方形周溝墓は5期末から6期前半にかけて形成された可能性が高く、この地点において古い方形周溝墓は墳丘の四隅が途切れるタイプから始まって、新しい方形周溝墓は墳丘の一隅が途切れるタイプに変化していく可能性が高い。

周溝の形態は02Ac区南側の方形周溝墓の周溝（02Ac区SD04・SD05）と02Bc区北側の方形周溝墓の周溝（02Bc区SD06）の断面が比較的緩やかな丸底であるのに対して、02Ab区SZ01北東溝SD01や02Ac区北側方形周溝墓南東溝のSD03、02Af区方形周溝墓周溝SD01～SD03、02Bb区方形周溝墓北溝SD02のように断面やや「V」字状になる状況がみられ、周溝の断面形態が緩い丸底の形態からやや「V」字状の形態に変化する傾向が見られる。

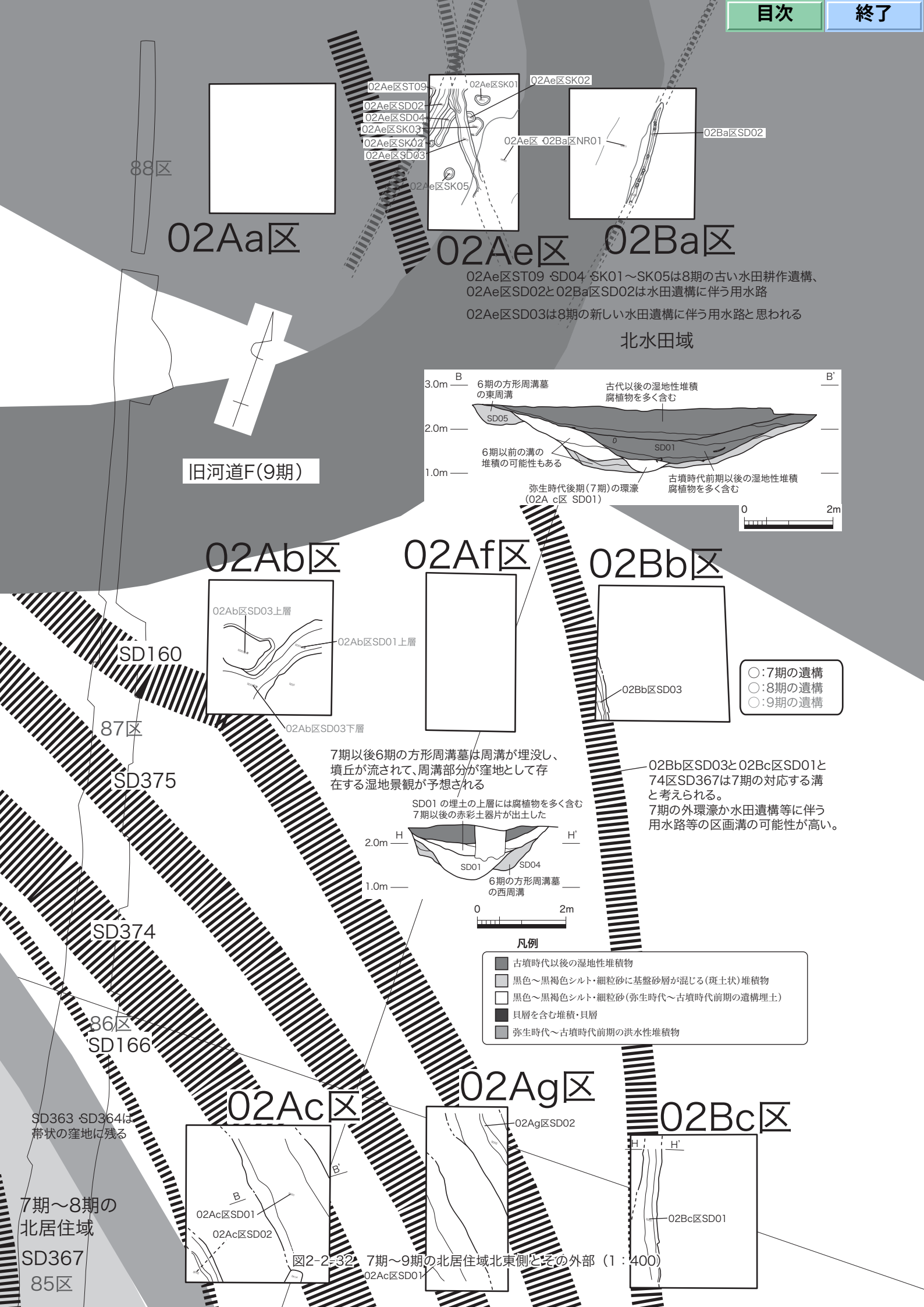
墳丘の形成は02Bb区の方形周溝墓に特徴がみられる。4期と考えられる竪穴住居SB01の埋没



写真2-2-57 02Af区1面全景（南より）



写真2-2-58 02Bc区SZ02（北西より）



後、墳丘北縁部にSD02の掘削に伴うと思われる黒褐色シルトと黒色シルトの班土が堆積し、その後墳丘内側を中心にSD02の掘削に伴うと思われる基盤砂層の堆積がみられ、その上から方形周溝墓の内部主体と思われるSK19・SK20が形成されていた。このような状況は02Af区の方形周溝墓の南溝SD01の掘削においてもみられ、墳丘の南縁に沿って黒褐色シルトの堆積があり、その後その内側に黒色・黒褐色シルトと基盤砂層の班土の堆積があり、その内側に基盤砂層の堆積があった。02Af区方形周溝墓の内部主体と考えられるSK04は方形周溝墓東溝SD02掘削に伴う堆積以前に形成されており、内部主体の形成と周溝の掘削・墳丘の形成は多様なパターンが存在した可能性がある。同様な状況は02Bc区南側方形周溝墓にもみられる。

方形周溝墓の内部主体と推定される土坑はこの地点において12基確認されており、形態は02Ab区SK02・02Af区SK04・02Bb区SK19・02Bb区SK20のように、長さ2.0m前後、幅0.7m～1.0mの平面長方形の比較的形が整った形態のものと、02Ac区SK03・02Ac区SK03・02Ac区SK08・

02Ac区SK09・02Bc区SK02のように長さ2.5m前後、幅1.0m～1.7m程の平面隅丸長方形のやや大型の形態のもの、02Bc区SK01のように長さ1.4m、幅0.7mの平面隅丸長方形の小型の形態のものがある。その他に6期の壺を用いた土器棺を埋設する02Ab区SK01（径0.8m～0.9m）がある。内部主体と思われる土坑は02Ab区SK01が02Ab区SK02を切るように、同じ墳丘内においても重複関係をもつものが複数みられ、埋没状況を誤認している可能性もあるが、明確に方位を変えて土坑が掘削されているものもあることから、墳丘内に複数の内部主体が築かれ、土坑が重複関係をもつ点をこの地点の方形周溝墓の特徴と考えたい。他の内部主体としては、02Ag区の環濠SD01とSD02に挟まれた土手状部分に検出できた平面隅丸長方形、長さ2.3m～2.7m、幅1.0m～1.3m、深さ10cm前後の土坑（02Ag区SK04・SK05・SK12～SK16）がある（写真2-2-60）。この中で02Ag区SK04は方形周溝墓でみられる内部主体と思われる土坑の形態に近く、木棺状の痕跡も断面において確認できた（写真2-2-59）。



写真2-2-59 02Ag区SK03・04（北東より）



写真2-2-60 02Ag区3面にて検出した大型土坑群（南より）



c. 北水田跡（図2-2-33、写真2-2-52・写真2-2-61・写真2-2-62）

02Ae区と02Ba区において耕作土層が黒色・黒褐色シルトの弥生時代中期以後の水田跡と耕作土層が暗灰黄色シルトの古墳時代前期前半の2時期2面の水田跡が確認できた。

弥生時代と推定できる水田跡の畦畔は標高1.7m～1.8m前後においてN-40°-E～N-50°-Eとそれにほぼ直行する方向に検出面幅0.5m前後、基部幅0.7m前後にて検出できた。水田面は02Ae区において19筆、02Ba区において11筆確認でき、一筆の大きさは一辺1.0m～3.0m程の方形～長方形のものと長辺3m程の五角形のもの（1筆のみ）がある。水田耕作土は基盤砂層を掘り込むものはほとんどなく、深さ10cm～20cm前後残存していた。02Aa区の西端において検出できたSD01は溝の流れる方向から弥生時代の水田跡に伴う可能性がある。

古墳時代前期前半の水田跡は02Ae区SD02と02Ba区SD02の用水路と思われる溝と02AeSD02に伴う02Ae区ST09・02Ae区SD04、02Ae区SK01～SK05がある。02Ae区SD02は幅0.6m前後、深さ40cm前後、02Ba区SD02は幅0.4m前後、深さ0.5m前後にて検出でき、2条とも北から南の方向に流れる。02Ae区ST09は調査区西端

において検出したもので、耕作土層は黒色シルト層の上に深さ8cm残存していた。02Ae区SD04とSK01～SK05は黒色シルト層に掘り込まれた古墳時代前期前半の水田耕作土層と考えられ、02Ae区SD04は隣接するSD02の畦畔を形成する際に掘り込まれた部分と考えられる。また古墳時代前期前半の水田跡を掘り込む02Ae区SD03（幅0.55m前後、深さ0.5m前後）があり、この溝は9期（松河戸Ⅱ式）のNR01に削平されていることから、8期の中でもう一段階の遺構形成が行われた可能性が高い。

d. 古墳時代前期後半の旧河道（図2-2-32）

02Ae区の東側と02Ba区の西側にて検出できたNR01は8期前後に流れていた幅12m～13mの自然河道で、最深部は遺構検出面である標高2.0mから深さ4m以上ある。この旧河道は県報告の87区にある「旧河道F」に対応するもので、02Ba区NR01側や「旧河道F」の87区南側に流路の下剋した痕跡がみられることから、南東に流路攻撃面をもって膨らんで北東から南西方向に流下していたものと考えられる。NR01下層から多量の木材が出土した。02Aa区SD01の上面や02Ab区SD01上層やSD03上層・下層の上には腐植物を含む堆積があり、「旧河道F」の流路周辺の堆積物の可能性が高い。



写真2-2-61
02Ae区3面全景（北より、写真2-2-52の西5mの地点）



写真2-2-62 02Ae区3面SD02・SD04断面（南より）



(4) 北居住域東環濠帯南部

A. 位置とこれまでの成果……………

北居住域の環濠帯の東南東側に位置する地点である。02Ad区・03Aa区～03Bb区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域の中心部側の環濠帯（02Ad区と03Ba区の西に接した地点）を71区・72区、環濠帯中心部分（02Ad区・03Aa区の東と03Ba区・03Bb区の西の間の隣接した地点）の調査を61E区、北居住域環濠帯の最外縁部から弥生時代中期中葉の墓域部分（03Ba区・03Bb区の東に接した地点）の調査を17区として調査されている。

これまでの調査成果においては、財団報告による61E区の発掘調査において、北居住域の東側環濠帯の状態と環濠帯からその外縁部に展開する弥

生時代中期～弥生時代後期の墓域の存在（4期～5期の方形周溝墓を3基、7期の方形周溝墓を3基）を示した点と、それまでの県報告では、部分的な溝（環濠）の検出に留まっていた状態であったが、85区～87区において検出されていた溝（環濠）群との関係を復元し、多重の環濠（弥生時代中期5条、最外縁部の溝17区SD158を含む、弥生時代後期5条）に囲まれた北居住域の形態を明らかにできた点が大きな成果と思われる。またその他の成果では72区において4期～5期の土坑1基、6期の土坑1基の他、時期不明であるが多数の小型～大型土坑、17区において2・3期の竪穴住居2棟・土坑2基、61E区SD21（7期以後）においてヤナ遺構1基、61E区南側において溝群の護岸施設状遺構SX01（5期頃）が検出されている。



写真2-2-63 02Ad区7面全景（北より）

※02Ad区で検出できた北居住域の内環濠は4期から6期にかけて6条の溝が連続とほぼ同一の軌道上でめぐることが分かった。写真2-2-63は4期のSD08とSD09

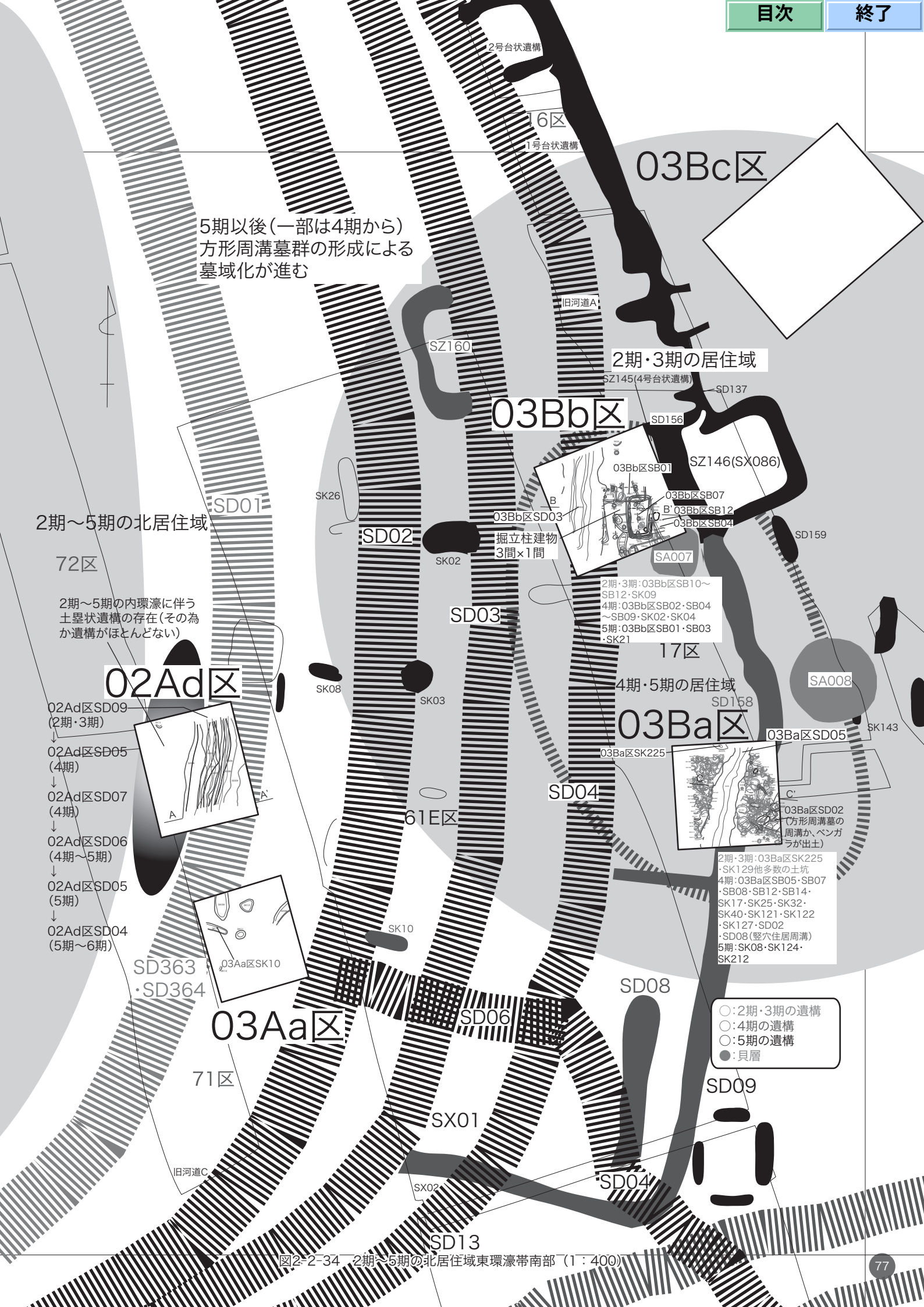


図2-2-34 2期～5期の北居住域東環濠帯南部(1:400)



B. 今回の調査成果

a. 弥生時代中期の内環濠の調査 (02Ad区・図2-2-34参照)

02Ad区において弥生時代中期の内環濠と考えられる溝を6条検出した。全ての溝がほぼ同一の埋没順において異なる軌道上で確認できた。財団報告において2期・3期の環濠と考えられる溝1条(01Ad区SD09)、4期の環濠と考えられる溝2条(02Ad区SD07・SD08)、4期～5期の環濠と考えられる溝1条(02Ad区SD06)、5期の環濠と考えられる溝1条(02Ad区SD05)、5期～6期の環濠と考えられる溝1条(02Ad区SD04)を確認した。財団報告による2時期における環濠として60E区SD01(2期～4期の溝の堆積と5期～6期の溝の堆積を確認)・県報告による2時期における環濠として71区SD363(4期～5期)・SD364(2期・3期)と考えられてきた溝と対応する。よってこれまでの弥生時代中期における内環濠の掘削が大きく2段階の時期に行われたという想定から2期から6期にわたる連綿とした内環濠の形成が存在したことが説明できるようになった。

02Ad区SD04～SD09は調査区東側にて全体で幅5m程の大溝として検出でき、調査区南東側にて後に述べる6期の方形周溝墓の周溝と考えられる02Ad区SD01・SD02により掘り込まれており、調査区北側において同じく方形周溝墓の周溝の痕跡と考えられる02Ad区SD03に掘り込まれている。全体としては弥生時代後期以後のNR03(黒褐色シルト)によって覆われている(図2-2-

-35)。各溝は上面の幅で4m前後になると考えられ、断面形は緩い「V」字形である。溝底の標高は2期・3期のSD09が標高0.15m、6期のSD04が標高0.87mと時期が下がるにつれて溝底が高くなり、したがって溝の深さは2期・3期のSD09が6期の縦穴住居床面付近の標高2.0mより深さ1.85m、6期のSD04が1.13mと浅くなる。2期・3期のSD09の段階の居住域内側の土塁がどの程度存在したかは不明であるが、6期のSD04埋没時には標高2.0mより高い位置に溝の西肩があったものと思われる。溝の埋土は上部の溝となるSD04～SD07は黒褐色シルト～黒色シルトの班土が主体で、各溝の下層において貝殻(ハマグリ・シジミ類)や炭化物、植物遺体などが少量混じる。上部の溝となるSD08・SD09ではSD08・SD09上層は黒褐色シルトを中心に若干の基盤砂層の小ブロックを含む班土、SD08下層は黒褐色シルトと基盤砂層からなる班土、SD09下層は主に基盤砂層からなる班土に少量の黒褐色シルトの小ブロックが混じる程度となる。溝の埋土は2期・3期のSD09から6期に埋没するSD04にかけて基盤砂層から黒褐色シルトへと変化し、貝殻は4期のSD08上層から少量混じるようになる。尚、調査区南側SD09の埋土を分断し、SD06の埋土の下で止まっている噴砂の砂脈を確認した、弥生時代のものである可能性もあるが、堆積構造の質によるならば弥生時代中期以後で時期は限定できない。

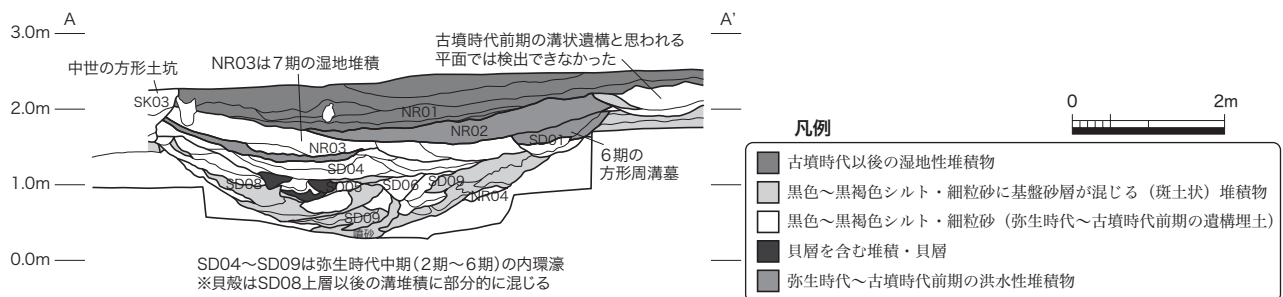


図2-2-35 02Ad区南壁断面 (1:100)

b. 弥生時代中期前半の外環濠（図2-2-34・図2-2-36・図2-2-37）

03Ba区中央部にて4期の溝堆積である03Ba区SD05と03Bb区の中央西寄りにて4期の溝堆積である03Bb区SD03を検出した。03Ba区SD05は財団報告により北居住域南東側環濠帯最外縁の溝である17区SD158（貝田町期）と61E区SD09（4期）に対応し、03Bb区SD03は財団報告による北居住域の外環濠61E区SD04（5期）と17区旧河道Aに対応する。よって財団報告による溝の時期認定においてやや問題を残す。

03Ba区SD05は幅2.5m前後、溝底の標高0.95m（溝西肩の想定できる調査区西側の竪穴住居検出面の高さ標高2.3mより深さ1.35m）、断面丸底の

溝で、03B b区SD03は幅5.5m前後、溝底の標高0.55m、溝埋土上部の底（逆茂木抜き取り痕と考えた）が標高0.84mで丸底であった。溝の埋土は03Ba区SD05の上層は黒褐色シルトに基盤砂層の小ブロックを少量含む班土、下層は基盤砂層と黒褐色シルトの班土である。03Bb区SD03は基盤砂層と黒色シルトの混じる下部を逆茂木の根固めの為の堆積と考え、黒褐色シルトに腐植物が混じる上部を逆茂木抜き取り痕と考えた。実際に溝下部より逆茂木の残存と推定できる幹が出土した（写真2-2-65）。03Bb区SD03の最上層には自然堆積と考えられるオリーブ黒色細粒砂混じりのシルトが堆積していた。

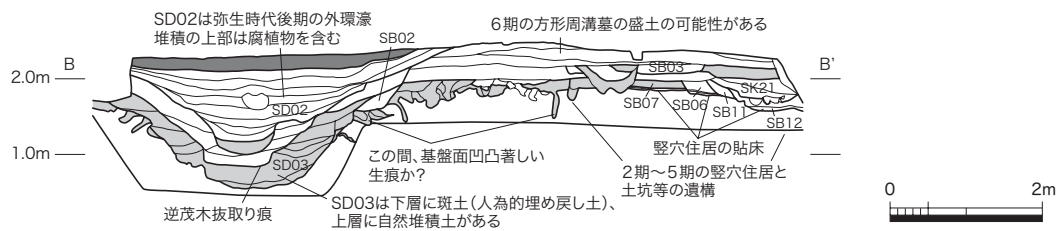


図2-2-36 03Bb区SD02・SD03外環濠と竪穴住居・土坑の関係（1:100）

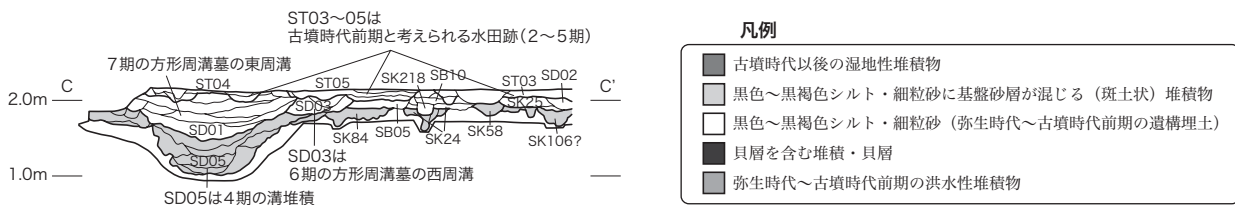


図2-2-37 03Ba区SD05（大溝）と方形周溝墓の周溝の断面（1:100）



写真2-2-64
03Bb区SD03出土逆茂木残痕1



写真2-2-65
03Bb区SD03出土逆茂木残痕2



写真2-2-66 03Ba区5面全景（南より、写真中央に見える溝がSD05）



写真2-2-67 03Bb区4面全景（東より、写真上側に見える溝がSD03）

c. 弥生時代中期前半（2期～5期）の居住域（図2-2-34）

2期・3期は03Ba区と03Bb区に遺構がみられ、61E区を挟んだ02Ad区と03Ba区にはこの時期の遺構がみられない。17区において竪穴住居や土坑が検出されていることから、2期・3期の居住域は東側に展開していた可能性が高い。2期・3期の主要遺構としては、03Ba区SB05・SB07・SB12・SB14・SK17・SK25・SK33・SK40・SK129・SK225、03Bb区SB10～SB12・SK09等がある。竪穴住居では03Bb区SB11・SB12が17区SA007に対応する竪穴住居の西側である可能性が高く、SB12は南北3.2m、東西3.8m程の平面隅丸方形の竪穴住居で、幅0.15m前後の周溝がめぐる。03Ba区では一辺2m程の平面隅丸方形の竪穴住居がみられる。土坑では03Ba区SK129が黒褐色シルトと基盤砂層の班土の埋土で、03Ba区の出土遺物がない土坑の多くが同様の埋土で2期・3期の遺構である可能性がある。

4期も2期・3期と同様の傾向が見られ、61E区の西では03Aa区において溝状の大型土坑SK10があるのみで、その傾向は61E区において確認されている遺構の状況と類似する。

03Ba区と03Bb区において引き続き遺構がみられることから、61E区の東に居住域が展開していた可能性が高い。4期の主要遺構としては、03Ba区SK10、03Ba区SB08・SD08（竪穴住居の周溝と思われる）・SK121・SK122・SK127、03Bb区SB02・SB04～SB09、SK02～SK04等がある。竪穴住居では03Bb区SB07のみ全体が検出でき、平面隅丸長方形長軸3.9m、短軸2.1mの小型のもので、幅0.15m～0.30mの周溝がめぐる、周溝には壁柱穴と考えられる小型土坑が確認できた。SB07の埋土は黒褐色シルトに基盤砂層が混じるもので、暗灰黄色シルトの貼床が確認できた。

住居内には径0.5m程の土坑が2基確認できたが、支柱穴か断定はできない。その他の竪穴住居も平面隅丸方形のもの、部分的ではあるが規模は短軸が2m前後、長軸が3.5m前後の小型の住居と思われる。03Bb区のSB07と重複する位置において、径0.3m～0.45m程の小型土坑からなる桁行3間（4.6m）、梁行1間（2.1m）の掘立柱建物（03Bb区SB13）が確認できた。建物北側梁行の柱穴が2基ずつ重複していることから、1度建て替えが行われたようである。土坑では03Ba区において中型土坑と思われるSK121・SK122と大型土坑になるSK127があり、平面楕円形状丸底で黒褐色～暗オリーブ褐色シルトの埋土である。4期の溝と考えた03Ba区SD05がこの時期に併存することから、居住域の遺構との関係を完全に同時存在する遺構と考えるべきか、前後関係で考え、溝の存続時期が短いと考えるべきか判断が難しい。

5期も02Ad区・03Ba区においては遺構が希薄で、4期まで比較的遺構が多かった03Ba区・03Bb区でも遺構数が少なくなる傾向が見られる。5期の主要遺構は02Ad区SK15、03Ba区SK08・SK124・SK212、03Bb区SB01・SB03・SK21等がある。竪穴住居03Ba区SB03は長軸3m前後、短軸2.1mの平面隅丸長方形で、掘り方南側に周溝がめぐる。土坑では短径0.55m、深さ0.28m程の楕円形状土坑03Bb区SK21があり、中から5期の細頸壺がほぼ一個体分出土した。このSK21が存在する03Bb区南側は17区において5期の方形周溝墓SZ145の南に位置することから、5期以後墓域化が進行したと考え、SK21と土坑出土細頸壺も土器棺墓になる可能性がある。また02Ad区SK15の存在は続く6期への居住域形成の始まりの痕跡とも考えられる。

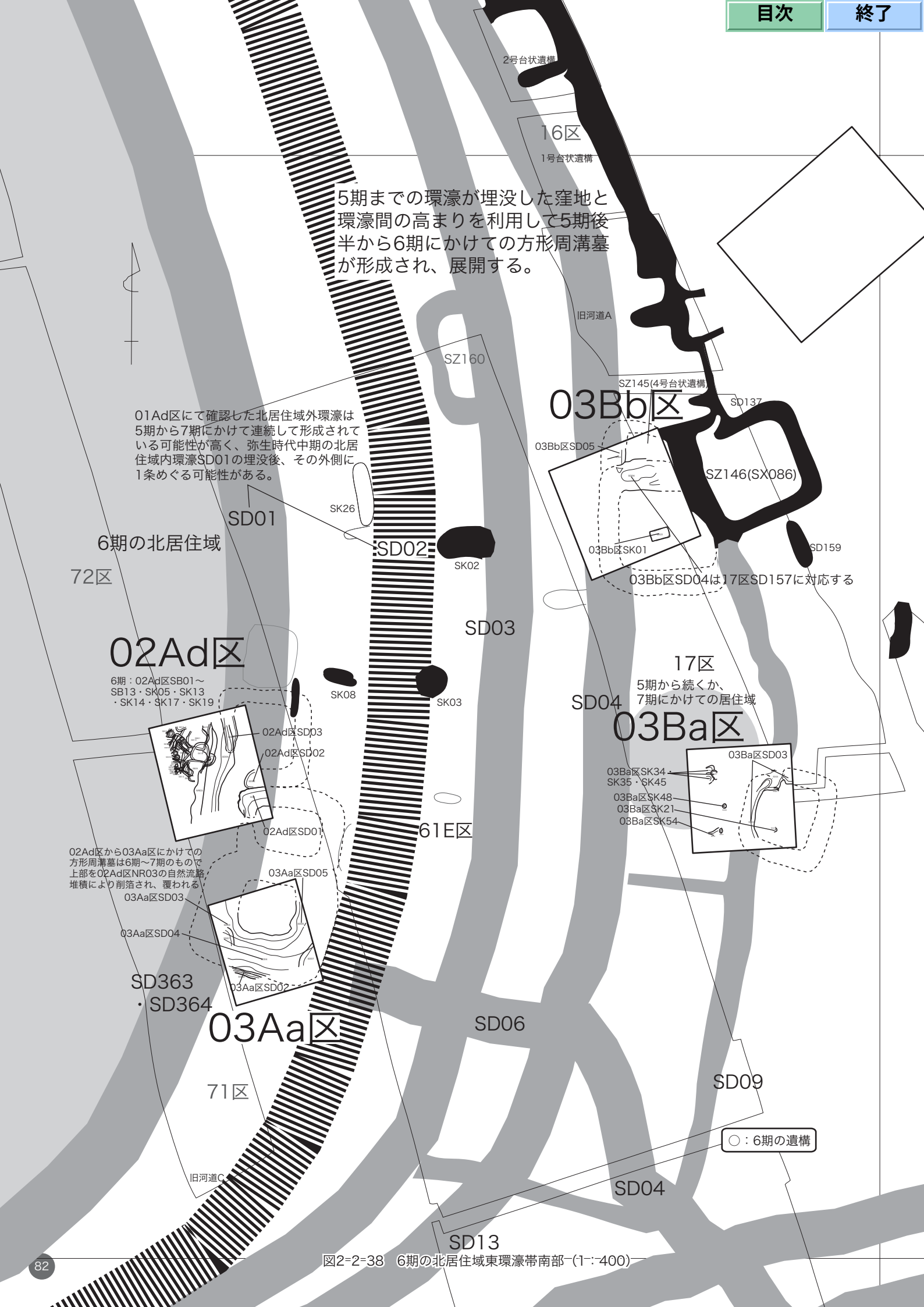


図2-2-38 6期の北居住域東環濠帯南部(1:400)

d. 弥生時代中期後葉（6期）の居住域と墓域（図2-2-38）

6期と先に考えた弥生時代中期の内環濠02Ad区SD04は6期に入ると間もなく埋没したようであり、その動向に対応するかのように02Ad区西側において竪穴住居や土坑等の形成が始まり、埋没した内環濠SD04の東には方形周溝墓が展開するようになる。5期末とされる61E区SK08を4隅が途切れる方形周溝墓の北溝と考えると、その南西側に接して02Ad区において検出したSD02（西溝）とSD03（南溝）から推定される方形周溝墓1基、02Ad区SD01（北溝）から推定される方形周溝墓1基、さらにその南側03Aa区SD03（西溝）・SD04（南溝）・SD05（東溝）からなる方形周溝墓1基が連続して形成された可能性が高い。また02Ad区SD04に並行してはしるSD02は墓域を区切る境界的な溝の可能性もある。02Ad区西側において検出した竪穴住居も短軸2.0m前後～2.5m程の平面やや台形状になる隅丸方形の小型住居ばかりであり、竪穴住居と重複して小型～大型土坑の掘削がみられる。61E区の東に位置する03Ba区と03Bb区においても4期を中心に存在した外環濠の溝状落ち込みを利用した方形周溝墓が形成される（03Ba区SD03を西溝とする方形周溝墓1基と03Bb区SD04を東西溝とする方形周溝墓1基～2基）。とくに03Bb区SD04は財団報告において5期の方形周溝墓SZ145（県報告17区4号台状遺構）の南溝（17区SD157に対

応する溝）であり、03Bb区SD05はその西溝に当たる。そして02Ad区SD04の南側において検出したSK01（長軸1.85m、短軸1.00mの平面長方形土坑）は内部主体の可能性のある土坑であり、SZ145の南側にも方形周溝墓が存在した可能性が高い。SD04の南側は5期の竪穴住居SB01の上に盛土（黒褐色シルトの0.3m前後の堆積を確認、墳丘検出面の上面標高2.5m前後）をしている。ただし03Ba区西側において小型～中型土坑数基（03Ba区SK34・SK35・SK45・SK48・SK54等）も存在することから、03Ba区西側には墓域に伴う施設か小さい居住域が存在した可能性がある。方形周溝墓は全て平面方形のマウンドの一隅に陸橋をもつタイプと思われ、03Ba区の方形周溝墓の墳丘が一辺7m前後、03Bb区の方形周溝墓の墳丘が6m前後、03Bb区の北側方形周溝墓周溝SZ145の墳丘が5.5m前後で小型のものである。墳丘をめぐる溝は03Aa区の方角周溝墓南溝SD04の幅が3.5m、03Bb区の北側方形周溝墓SZ145南溝SD04（17区SD157）が幅2.8mを計るが、その他は比較的に残りが良いもので、幅1.5m～2m程である。03Ba区の南西隅にて検出した幅1.2mのSD02はSD03を方形周溝墓の拡張した溝と考えるとそれ以前の方角周溝墓の周溝の可能性もある。溝埋土からベンガラが検出できた、出土遺物は4期のものが主体であるが、5期以後の可能性が高い。



写真2-2-68 02Ad区3面全景（西より、写真左下が6期の竪穴住居や土坑、写真右上が6期の方形周溝墓の周溝SD01・SD02）



写真2-2-69 03Aa区4面全景（西より、6期の方形周溝墓が1基みつかった）

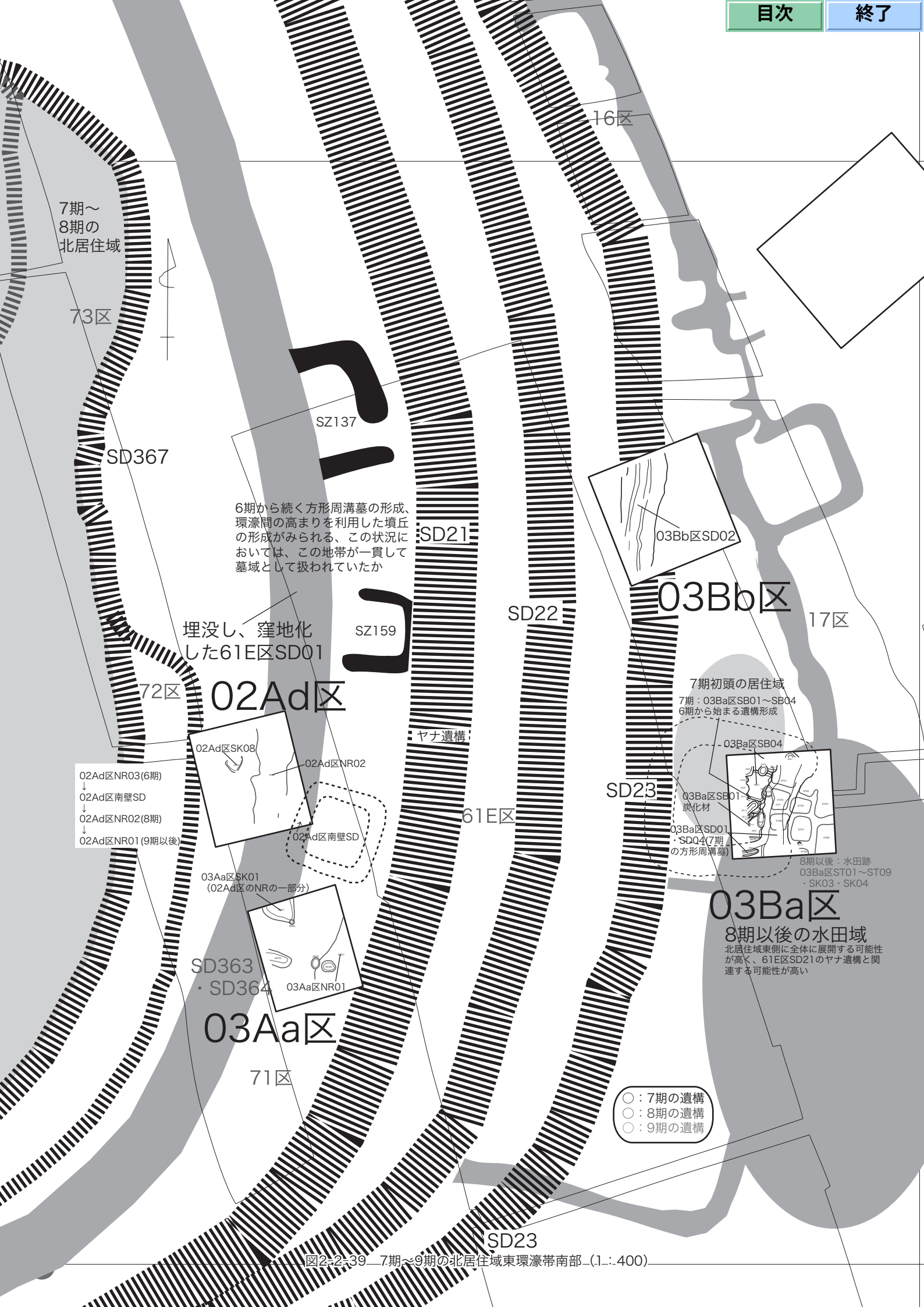


図2-2-39 7期～9期の北居住域東環濠帯南部(1:400)

e. 弥生時代後期（7期）の墓域と環濠（図2-2-39）

7期になると、北居住域側の02Ad区と03Aa区では再び遺構が少なくなり、02Ad区SK08のような若干の土坑や03Aa区SD03、02Ad区南壁の溝のような方形周溝墓の可能性のある溝が検出されている。全体としては墓域が継続していたと思われるが、02Ad区において検出したNR02・NR03のような自然堆積により方形周溝墓等が大きく削剥されている環境が考えられる。61E区東の03Ba区では、6期にみられた土坑からの連続的形成と考えられる平面隅丸方形状竪穴住居4棟と土坑13基の形成がみられ、その後7期中に03Ba区SD05の溝部分とほぼ同じ軌道をもつSD01が掘削された方形周溝墓が形成される。この方形周溝墓は7期の西側居住域部分を墳丘にしたもの

で、北東隅部に周溝が途切れる可能性がある。7期のSD01より古い溝は03Ba区のさらに北にのびており、方形周溝墓が存在している可能性が高い。

7期の外環濠が03Bb区SD02として確認できた。ほぼ4期の環濠SD03の上に掘削された断面「V」字形の溝で、上面における検出幅4m前後、溝底は標高1.00m（深さ東側肩から1.4m）を測る。溝の埋土は大きく4層に分かれ、上部から黒色シルトの古墳時代以後の堆積、腐植物を多く含む黒色シルトの古墳時代前期頃の堆積、黒色シルトの7期外環濠が溝機能時から埋没していく過程の堆積、最下層に基盤砂層と黒色シルトの班土からなる溝掘削時に近い堆積がみられる。03Bb区ではその他の遺構は確認できなかった。



写真2-2-70 03Ba区3面全景（西より）

※写真2-2-70の上側（西側）には7期前葉までの竪穴住居と土坑があり中央付近に7期の方形周溝墓の東周溝SD01、下側（東側）に6期の方形周溝墓の周溝SD03がみえる。



写真2-2-71 03Ba区SD01、SD05断面（北より）

※03Ba区SD01とSD05はほぼ同じ位置に掘削されている。



f. 古墳時代前期初頭頃の水田跡（図2-2-39）

03Ba区において8期と考えられる水田跡を検出した。7期の方形周溝墓東溝SD01の埋没した凹み部分に形成され、残存していた部分のみが検出できたものと考えられる。03Ba区西側において検出したSK03・SK04も水田耕作土の一部（畦畔脇の掘り込みと推定できる）と考えられることから、8期の水田遺構の広がりや水田遺構の検出できた03Ba区東側以東の地点だけではなく、03Ba区西側付近にも展開していた可能性が高い。

検出できた水田遺構は幅0.3m～0.7m前後の畦畔に囲まれた一辺1.3m～2.2mの隅丸形状の水田耕作土面9筆で、水田耕作土の深さは0.05m～0.15m程残存していた。水田遺構の上部は後世の自然堆積NR01（暗灰黄色シルトやオリーブ褐色シルトの堆積）により削平されているものと思われる。水田耕作土は黒褐色～灰黄褐色・褐灰色シルトで耕作土の母材となる土壌はSD01の上層堆積物が主体になるものと思われる。



写真2-2-72 03Ba区2面全景（北東より）

※7期の方形周溝墓の周溝がほぼ埋まった状態の地形を利用して形成された水田遺構、61E区SD21にて検出されたヤナ遺構の営みと連動した遺構展開も想定できる。

(5) 北居住域北東側環濠帯と東墓域北西側**A. 位置とこれまでの成果……………**

北居住域の環濠帯の北東側に位置する地点である。01Ba区・02Bd区・03Bc区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域環濠帯の最外縁部から弥生時代中期中葉の墓域部分(01Ba区・02Bd区に接した地点)の調査を16区、その南側で03Bc区の西側を16区として調査されている。

これまでの調査成果においては、県報告において16区の北端から北北西にのびる溝が検出され

た点、その西側を南北にはしる「旧河道A」と4期～5期と推定した4基の台状遺構を確認したことである。その後財団報告により、「旧河道A」は北居住域最外縁の環濠であることが61E区の調査で明らかにされ、16区から17区に展開する溝に囲まれた台状遺構は弥生時代中期中葉の方形周溝墓と推定された。またその他の成果では時期不明であるが少数の小型～大型土坑が検出されている。



写真2-2-73 02Bd区SD01断面(北より)

※有肩袋状鉄斧は7期の環濠SD01のやや凹んだ部分から出土した。
上層には古墳時代前期の湿地状堆積とともに多量の木材が流れ込む形で出土した。
鉄斧が出土した層位は木材の下層である。



写真2-2-74 02Bd区SD01有肩鉄斧出土状況(南より)

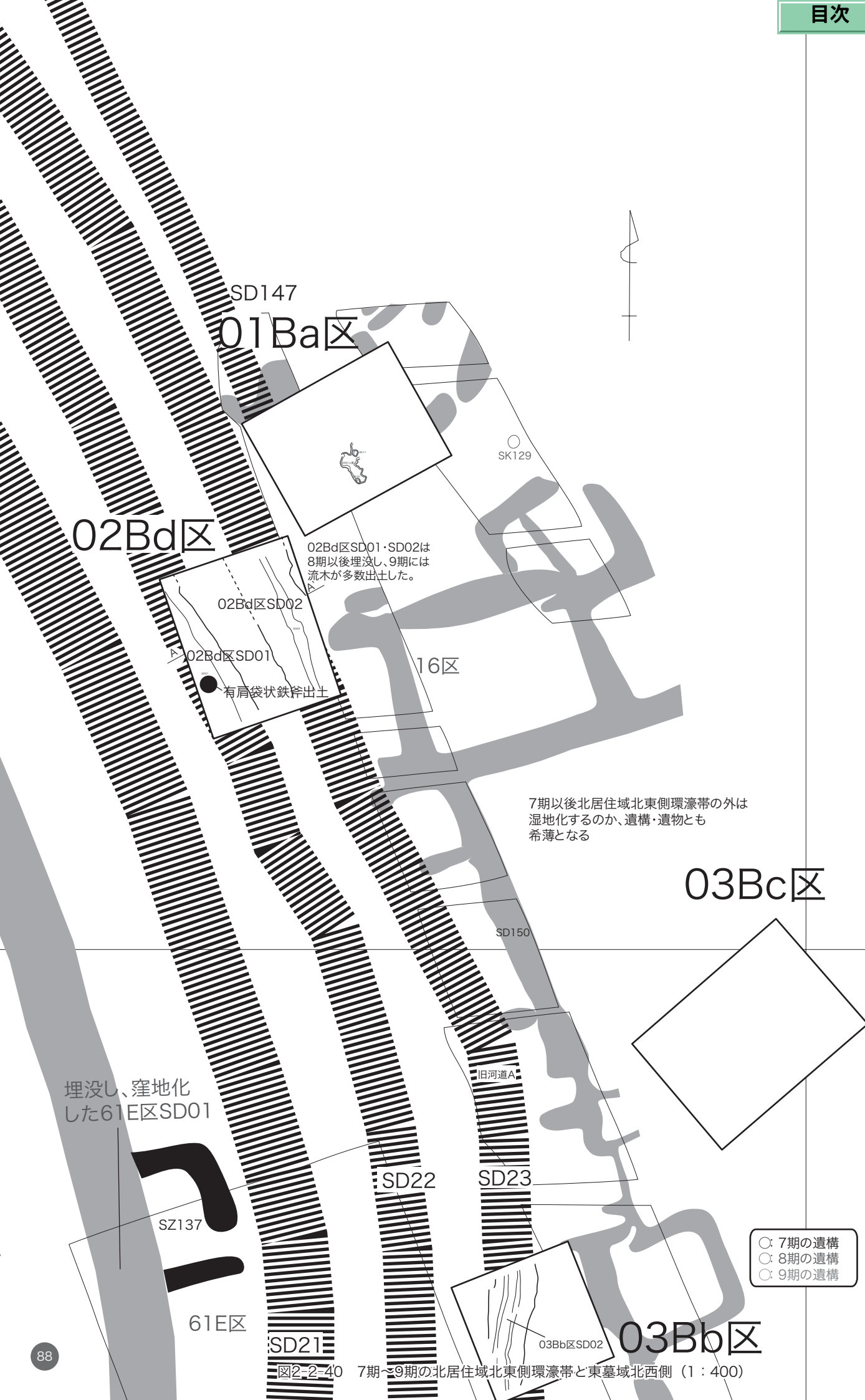


図2-2-40 7期～9期の北居住域北東側環濠帯と東墓域北西側 (1:400)

B. 今回の調査成果

a. 北居住域の最外縁の環濠（02Bd区）と鉄斧の出土（図2-2-40・図2-2-41）

02Bd区西側にて02Bd区SD01と同東側にて02Bd区SD02を検出した。両溝とも4期～5期と7期の溝堆積を確認し、02Bd区SD01は財団報告の61E区SD03・SD23に、02Bd区SD02は北居住域東側環濠帯最外縁の溝である61E区SD04・SD22（県報告16区・17区旧河道A）に対応する。

02Bd区SD01は幅4m以上、4期～5期の溝底が標高0.75m前後、7期の溝底が標高1.25m前後（SD01とSD02の間にある堤状部分上面の高さ標高2.45m）、どちらの時期も断面やや緩い丸底の溝で、02Bd区SD02は幅5.0m前後、4期～5期の溝底が標高1.00m前後、7期の溝底が標高1.20m前後、4期～5期の溝底は丸底であるが、7期の溝底は断面やや「V」字形であった。溝の埋土は上部にある7期の溝（SD01・SD02）は上層に黄灰

色を中心とした古代以後の湿地堆積物が堆積しており、中層には黒褐色～暗灰黄色シルトに流木を含む木材（片）が多量に埋没していた。7期のSD01下層には黒褐色～オリーブ黒色シルトの堆積が、SD02下層には最下部に黒色シルトがありその上に基盤砂層起源の可能性がある黄灰色シルトが堆積していた。4期～5期のSD01は下層のみであるが、黒色シルトと褐灰色～灰色中流砂が大きく互層になる形で堆積しており、SD02も黒色～黒褐色シルトの堆積と黒褐色シルトと灰白色中流砂のラミナ堆積が大きく互層になって堆積していた。よって4期～5期の溝は流水性の高い堆積を含め、3回以上の堆積の画期があり、7期の溝ではほぼ同じ位置を同様な経過を経て堆積していることが明らかである。また7期のSD01の溝底において有肩袋状鉄斧が単独で出土した（写真2-2-76）。

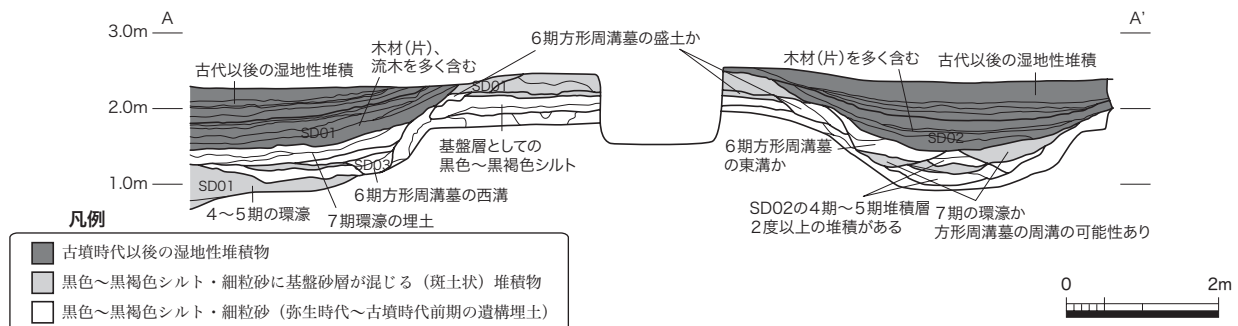


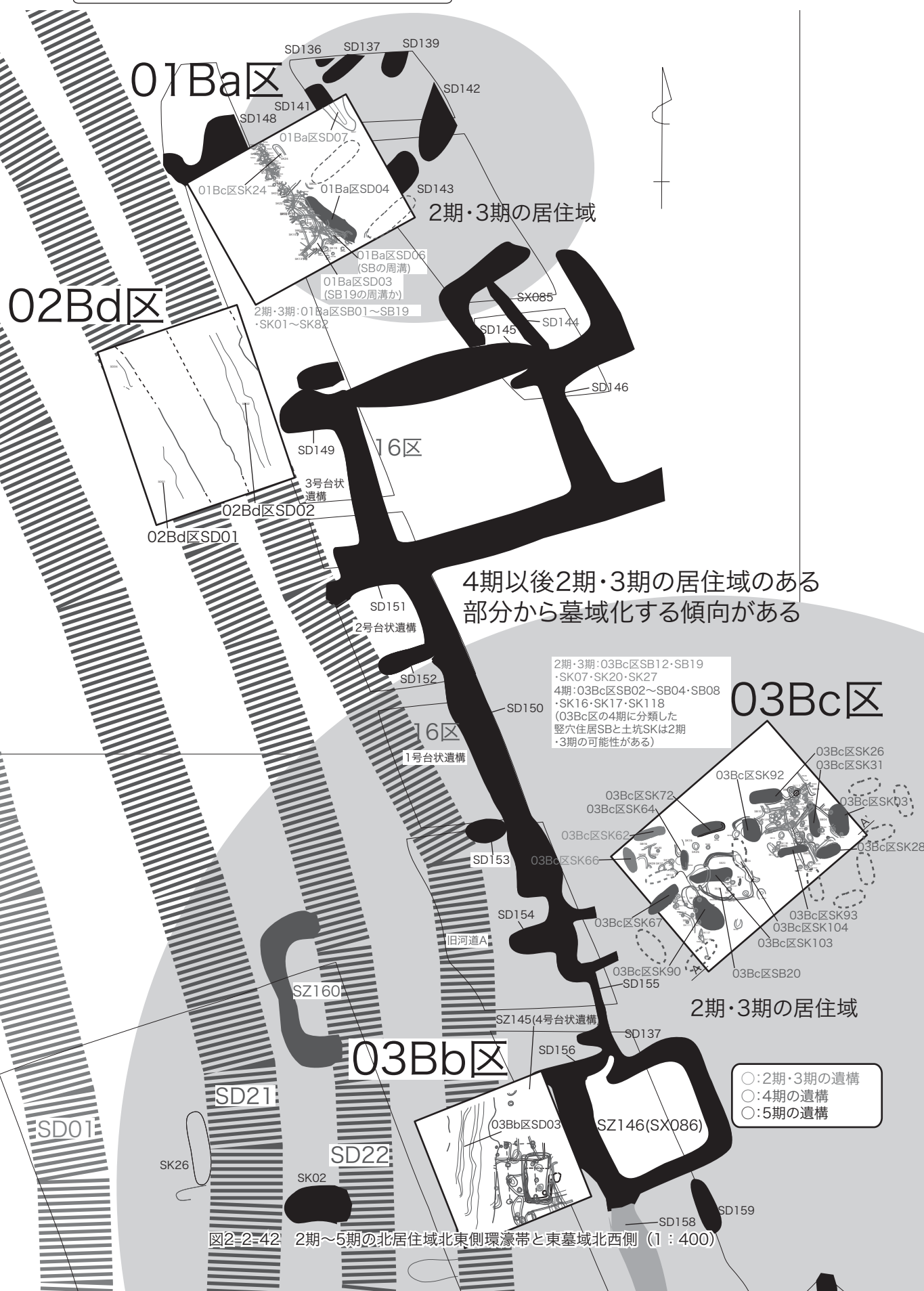
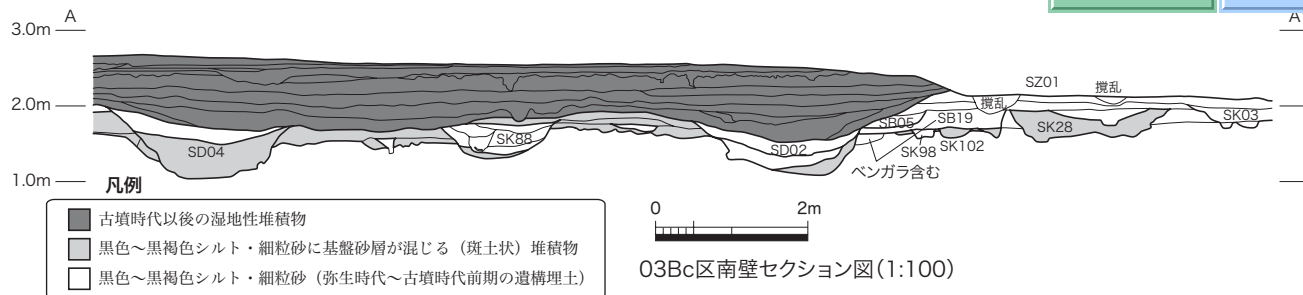
図2-2-41 02Bd区SD01・SD02（環濠）断面図（1：100）



写真2-2-75 02Bd区SD01・SD02（環濠、北より）



写真2-2-76 02Bd区SD01の有肩鉄斧の出土状態（南より）



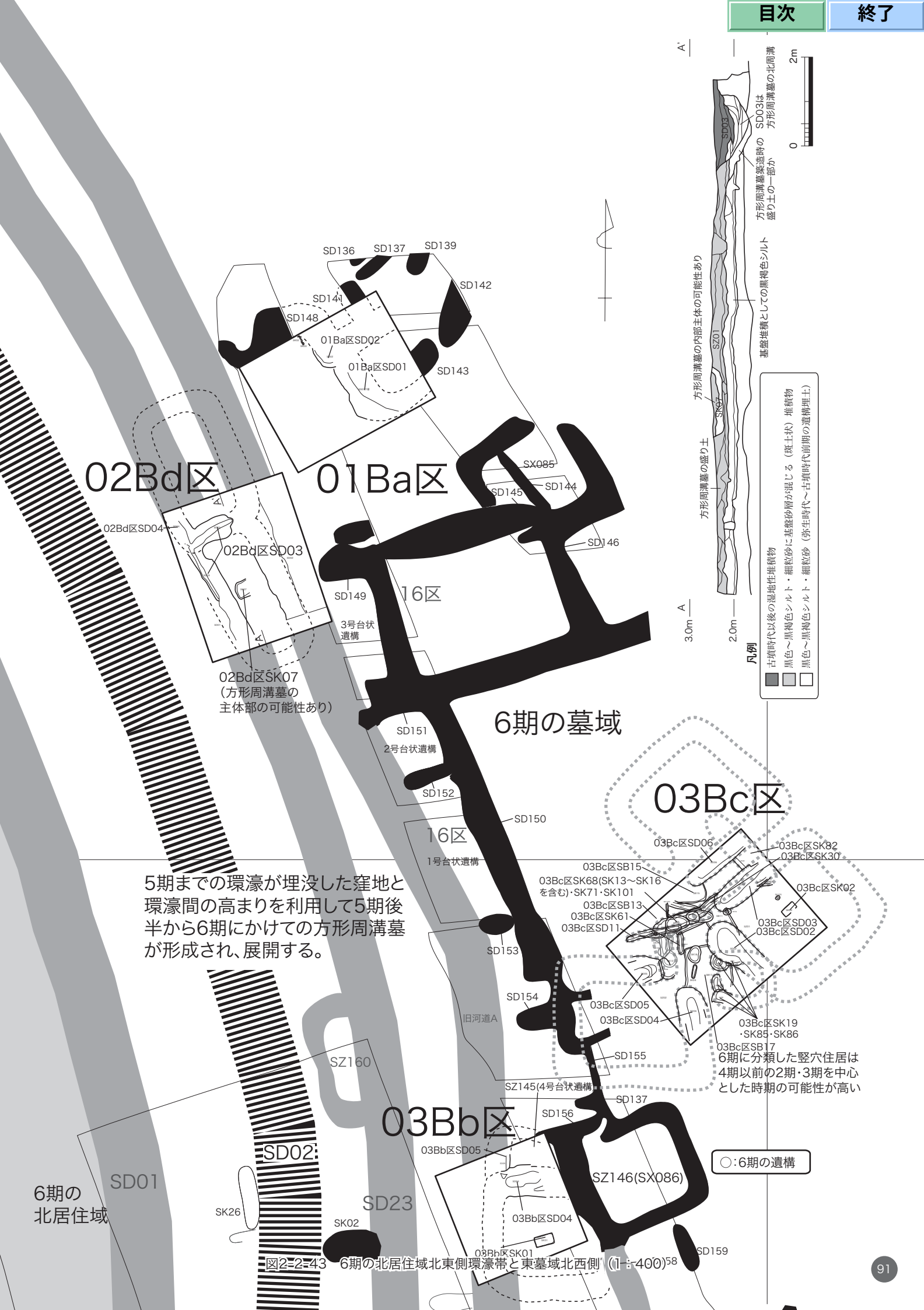




写真2-2-77 02Bd区方形周溝墓（東より）



写真2-2-78 02Bd区SD03（西より）



写真2-2-79 03Bc区3面全景
（北より、2期～6期の方形周溝墓がみられる）



写真2-2-80 03Bc区の6期の方形周溝墓（北より）

b. 弥生時代中期中葉から中期後葉の墓域の変遷
(図2-2-42・図2-2-43)

今回の調査において4期～6期の方形周溝墓が17基推定できるようになった。以下においてその変遷を述べたい。

4期以前の可能性の高い方形周溝墓は6基あり、01Ba区SD04に伴うものが1基、01Ba区北東隅にて検出したSD07に伴うものが1基、03Bc区西隅部にSK62（北溝）とSK66（西溝）とSK64（東溝）で1基、その南に接してSK67（北溝）とSK90（東溝）で1基、03Bc区東側にてSK92（西溝）・SK26（北溝）・SK31（東溝）・SK93（南溝）に囲まれる一辺4.0m～4.5mの方形状の墳丘の1基、その東に接してSK03（西溝）に伴うものが1基、その南に接してSK28に伴うものが1基推定できる。5期の可能性の高い方形周溝墓は2基あり、03Bc区南側にSK85（北溝）とSK86・SK88（西～南溝）に囲まれる一辺3m前後の方形状の墳丘をもつ1基、その北西にSK71・SK72・SK101・SK63・SK68・SK69・SK103（北溝～西溝～南溝）に囲まれた一辺3.5m～4.0m程の墳丘をもつ1基（4期にも同じ位置に重複して存在している可能性がある、6期の可能性もある）が推定できる。6期の可能性の高い方形周溝墓は9基あり、01Ba区中央付近にて検出されたSD01に伴うものが1基、その北側にSD02として溝の一部が検出されたものが1基、02Bd区のSD01とSD02に挟まれた高まり（幅3.5m程）をSD03によって南北に分割された北側に1基（SD04が西溝として伴う）、南側に1基（SD03が北溝）、03Bc区北隅にて検出されたSD06とその北側に推定できる1基、その南東側にSD03（北溝）とSD02（西溝）に囲まれた東側に1基（03Bc区SZ01）、03Bc区南西側にて検出されたSD05（北溝）とSD04（東溝）に囲まれた西側に1基（03Bc区SZ02）、その北側に接してSD11（北溝）と

SK61（東溝）に囲まれた1基（南溝はSD05か）、03Bc区北側にてSD03とSD06に掘り込まれている溝でSK73とSK82に囲まれた北側に1基が推定できる。

5期までの方形周溝墓はマウンドを囲む溝の4隅が途切れるタイプのもと考えられ、溝幅が0.5m～1.0mとやや溝が細く、6期の方形周溝墓はマウンドを囲む溝が1隅のみ途切れるタイプのものになり、溝幅も2mをこえる比較的深い（断面やや「V」字形）形態のものとなる。

これまでこの地点における方形周溝墓は「旧河道A」とした北居住域最外縁の環濠と16区において検出されたSD150に挟まれた高まりをSD149・SD151～SD154に区切られた台状遺構が4期～5期の遺構として認識されてきた。しかし今回の調査では4期～5期までの方形周溝墓が北居住域を廻る環濠の外に展開するのに対して、6期の方形周溝墓は5期までの環濠に挟まれた高まりをも利用して埋没した環濠に周溝を掘削して形成されていることが明らかになり、周囲に広く展開している可能性が高い。ただし、今回の01Ba区と16区の調査地点の位置関係が確定できず、微妙な溝の位置関係が復元できなかった事は、今後の検討課題である。

02Bd区の方形周溝墓の墳丘には基盤砂層を起源とする盛り土（4期～5期の環濠掘削に伴う可能性もある）が層厚0.25m程残存していた。また高まり上面にて検出された02Bd区SK07は幅1.5m程の平面隅丸方形状平底の土坑で02Bd区南側の方形周溝墓の内部主体の可能性はある。埋土の上部は暗オリーブ褐色細流砂と基盤砂層の班土、下部は暗オリーブ褐色細流砂で土坑を埋める上層に基盤砂層を載せた堆積が存在した可能性がある。その他にも03Bc区SK02は長径1.4m、短径0.7mの長方形平底の土坑でSD02とSD03に囲まれた墳丘に伴う内部主体の可能性はある。



c. 弥生時代中期前葉の居住域 (図2-2-42)

竪穴住居や土坑は01Ba区と03Bc区において確認され、02Bd区ではなかった。

01Ba区の狭い範囲ではあるが、方形周溝墓の周溝になる遺構の存在を考慮すると、2期・3期に考えられる竪穴住居20棟、大小の土坑76基が確認できた。中でもSB19は幅0.5m～0.8m程のやや幅広い周溝がめぐる短軸4.8m前後の隅丸方形の竪穴住居で、同じ面において検出できた幅0.2m前後のSD06も同様な形態の竪穴住居の周溝になる可能性が高い。

03Bc区においては出土遺物には4期から6期の

土器が出土する竪穴住居20棟、土坑多数を検出できているが、先に述べた方形周溝墓に関連する遺構との重複関係を考慮すると、居住域として営まれた時期は2期・3期が主体と考えられる。このような前提において検討すると、03Bc区にて検出された竪穴住居には一辺3.6m前後のSB05やSB20のような隅丸方形のものとSB19（南西側の周溝がSK104、SK70に対応すると短軸5.2m程）のように竪穴掘り方の短辺が丸みをもつ胴張り長方形の平面形をもつものがある（SB19のみであるが）。

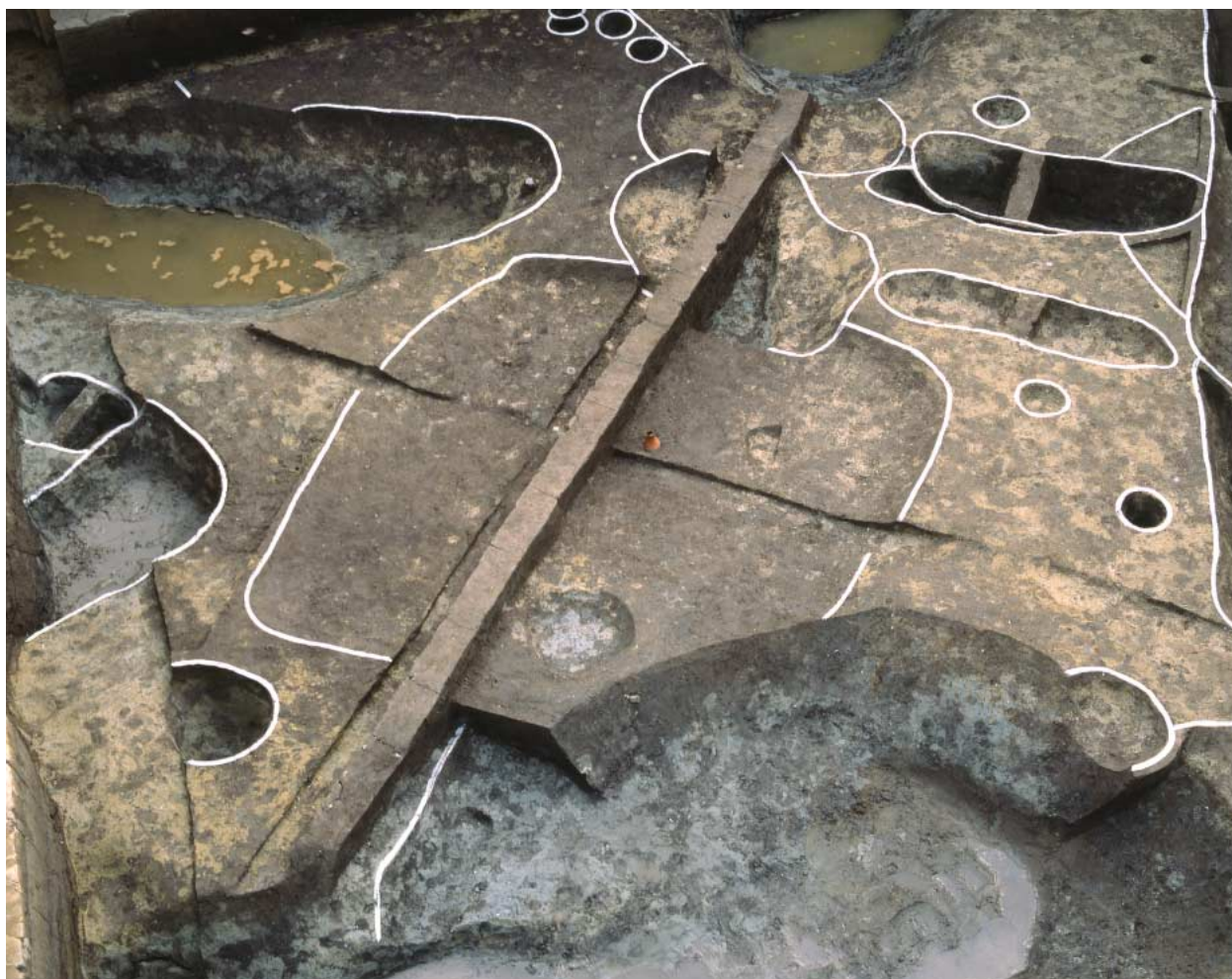


写真2-2-81 03Bc区にて検出できた竪穴住居

(6) 東居住域・墓域の北側と谷A

A. 位置とこれまでの成果……………

北居住域の環濠帯をはさんだ東側で、谷Aより北に位置する地点である。99Ba区・99Bb区・01Bb区～01Bd区・02Be区・02Bg区・03Bd区の調査区がある。これまでの調査では、北居住域環濠帯に近い弥生時代中期中葉の墓域から谷Aにかかる部分の調査を63N区、谷Aとその南岸の調査を63A区、谷Aの北に展開する弥生時代中期前半の居住域と墓域の部分を14区・15区として調査されている。

これまでの調査成果においては、財団報告において63A区の北側において縄文時代後期にさか

のぼる旧河道の堆積を確認し、7期にも旧河道が存在する事を明らかにした点、この谷Aに沿って63N区の南端において検出したSD02とSD03が14区の中央付近において検出されたSD119と結ばれる2期・3期の溝として並行する可能性を指摘した点（2条の溝に挟まれた高まり部分を谷Aの堤機能や道としての機能を推定している）、谷Aより北の地点において2期・3期を中心にした竪穴住居や土坑の存在（15区・63N区において2期～4期の竪穴住居7棟、時期不明の土坑多数）から居住域が展開し、4期以後の方形周溝墓からなる墓域へ変化したことが明らかにされている。



写真2-2-82 99Ba区の4面検出の方形周溝墓
（北より、4期のもの）



写真2-2-83 99Ba区SD03の構内土坑
（西より、埋葬土坑か）



写真2-2-84 99Bb区2面NR01、2・3期の貝層（南より）



写真2-2-85 99Bb区NR015C貝層断面（南西より）



B. 今回の調査成果……………

a. 谷Aの調査（99Bb区・02Bg区、[図2-2-45](#)参照）

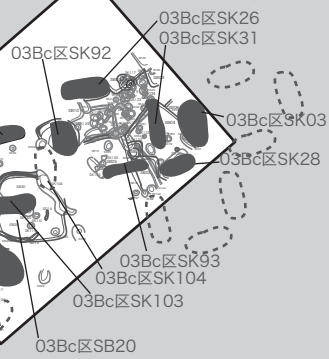
谷Aにかかる部分として99Bb区と02Bg区を調査した。99Bb区において谷Aのほぼ中央部分を、02Bg区において谷Aの北肩側を調査した。谷Aの流れとしては99Bb区の東にて北東から流れてくる河道が一度南に振ってから02Bb区付近で北にやや振る幅約25mの流路が推定できる。99Bb区では流路（99Bb区NR01・02Bg区NR04）の底を標高-0.75m付近において確認し、少量ながら2期・3期の土器が出土した。最下層はオリーブ黒色シルト～細粒砂と灰色中粒砂～細粒砂が互層状に堆積し、その上層標高-0.15m～0.45mの深さにおいて貝層が幅2m～4mの範囲で流路の軌道に併せて堆積し、5D貝層から5C貝層、5B貝層、5A貝層の順に層厚0.20m前後の堆積が西から東へと上にずれて堆積している事が確認できた。貝層からの出土遺物はほぼ2期・3期のものに限られ、棒状鹿角製品や猪牙製飾り、そ

の他の骨角製品が出土した。その上層には黒色～オリーブ黒色と灰白色のシルトと中粒砂が互層状に3度流れを変えて堆積しているのを確認し（標高0.10m～1.00m前後）、その上部にて5期～6期の弥生土器がわずかに出土した。流路の上部はその後オリーブ黒色細粒砂が層厚0.3m～0.4m程堆積した後洪水性堆積である灰オリーブ色中粒砂の堆積があり、その後は古代以降の灰色シルトが0.7m前後、木材等の腐植物を多く含むシルト層が標高2.0m前後に層厚0.3m前後堆積し、最上部を中世以後と思われる黄灰色や黒褐色のシルトが覆っていた。02Bg区の標高1.5m前後まで堆積した上部のオリーブ黒色細粒砂（02Bg区においてはシルト）から02Bg区NR02として掘削した断面やや「V」字形の溝が確認でき、出土遺物からは7期～8期の溝と考えられる。上部は後世の堆積により削剥されているが、最下層にオリーブ褐色中粒砂、その上部を黒褐色シルトが堆積していた。この溝は03Bd区SD03の堆積と対応する可能性が高い。

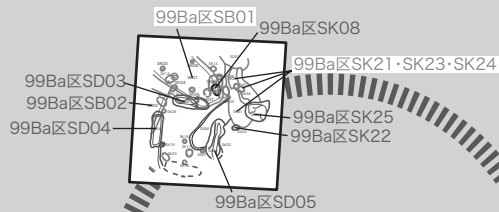


写真2-2-86 99Bb区NR01（西より、南壁、谷Aの最深部にあたる）

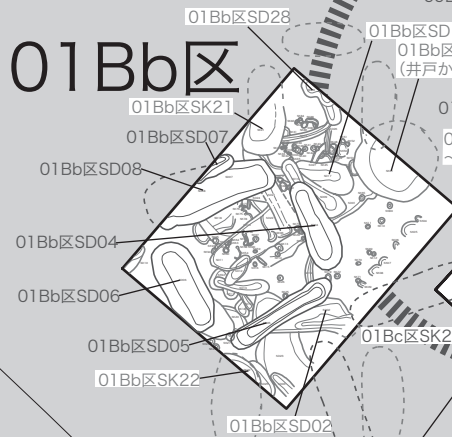
03Bc区



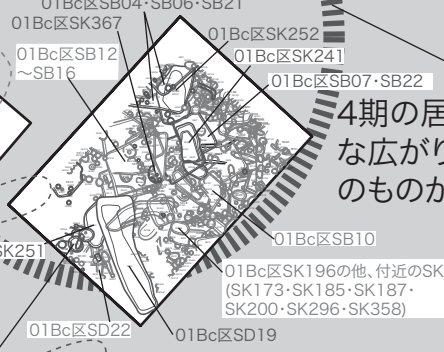
99Ba区



01Bb区



01Bc区

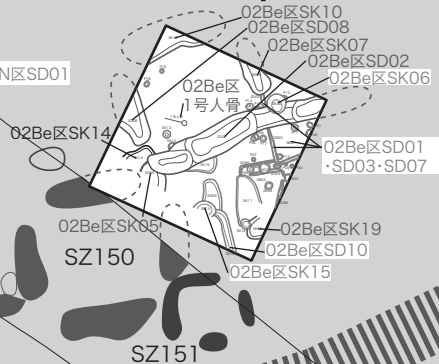


4期の居住域は小規模な広がりで散在的狀況のものが残るとされる

2期・3期の居住域

4期以後、方形周溝墓の展開する墓域化

02Be区



03Bd区

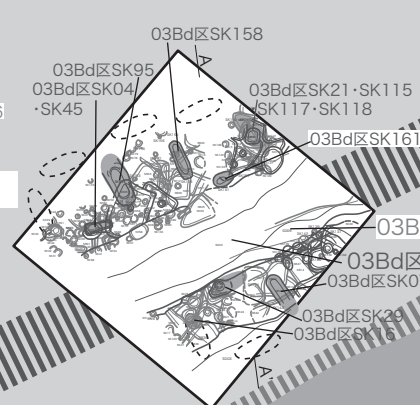


写真2-2-87 02Be区出土人骨

- : 2期・3期の遺構
- : 4期の遺構
- : 5期の遺構

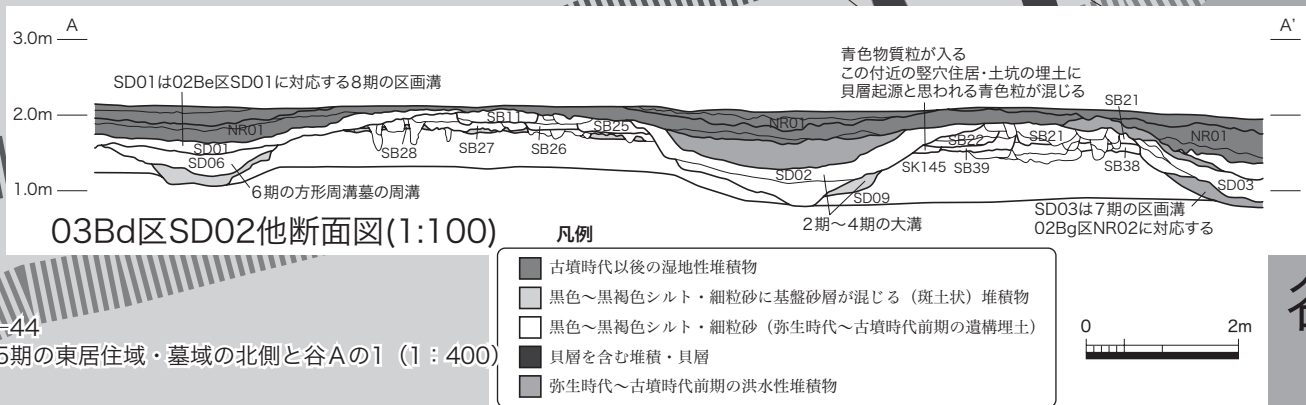


図2-2-44
2期～5期の東居住域・墓域の北側と谷Aの1 (1:400)

谷A

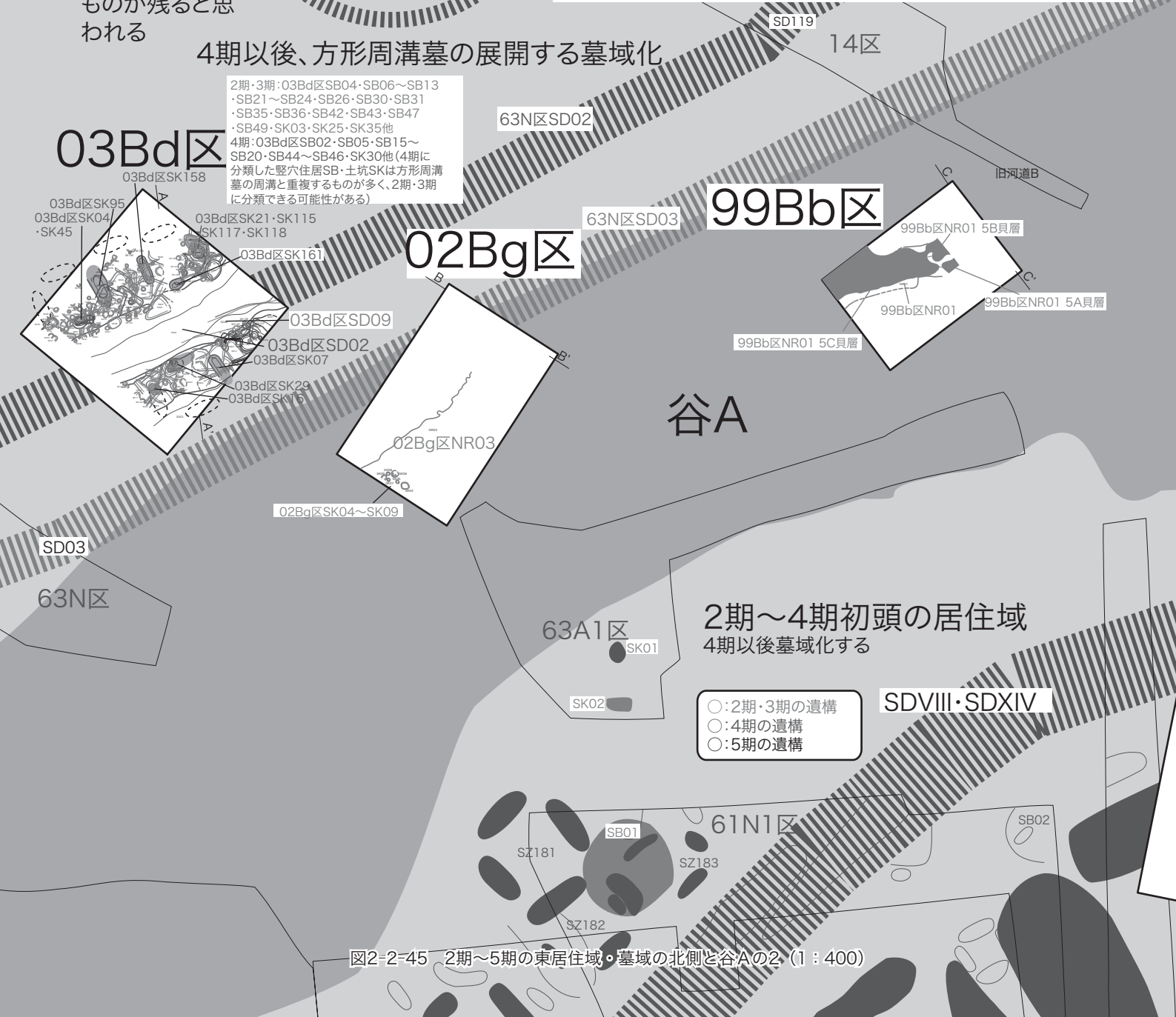
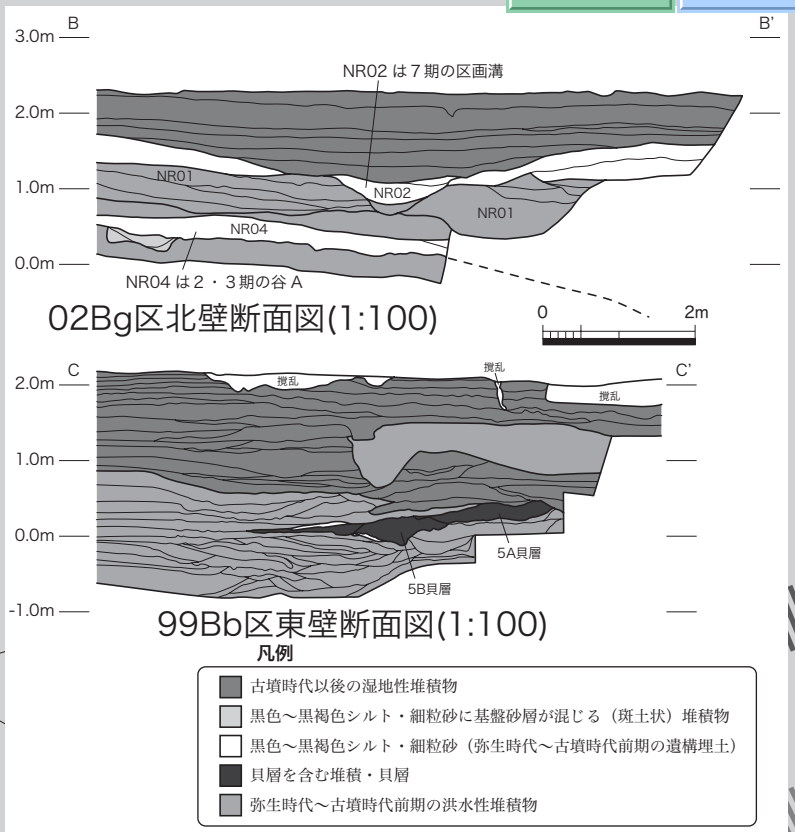
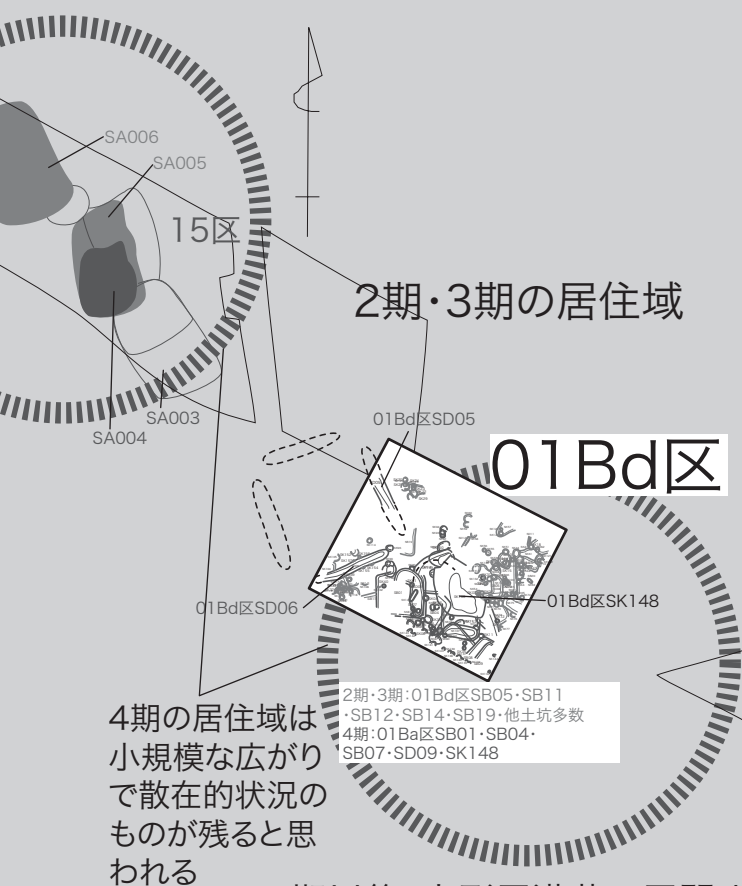


図2-2-45 2期～5期の東居住域・墓域の北側と谷Aの2 (1:400)

b. 弥生時代中期前半の大溝（2期～4期、[図2-2-44](#)・[図2-2-45](#)）

63N区のSD02とSD03から東に続く溝として、03Bd区SD02とSD09がある。03Bd区南隅にて検出したSD03も当初は63N区SD03から続く同じ溝と考えたが、出土する遺物が7期のものである点や、東に隣接する02Bg区において検出されたNR02との対応関係については先に述べた。したがって63N区SD03は03Bd区のより南を通るか、この地点では旧河道Aの堆積により削平されている可能性が高い。また03Bd区SD09は03Bd区SD02より先行する溝で、下部のみを確認し

た。このSD09は03Bd区東隅側にてやや南に軌道を変えて東にのびていく状況がうかがえ、3期の弥生土器が出土する。溝の上部は同じ2期・3期と考えられる土坑等によりその上層から掘り込まれており、その後03Bd区SD02が掘削された状況に調査時は見えた。03Bd区SD02は幅4.2m前後、深さ0.9m前後の断面丸底の溝で、中層と下層の黒色シルトの堆積層からは2期～4期のものが出土し、上層の洪水性堆積である黄灰色中粒砂からは6期の土器片が出土した。このSD02の同一軌道上において再掘削の痕跡は確認できなかった。

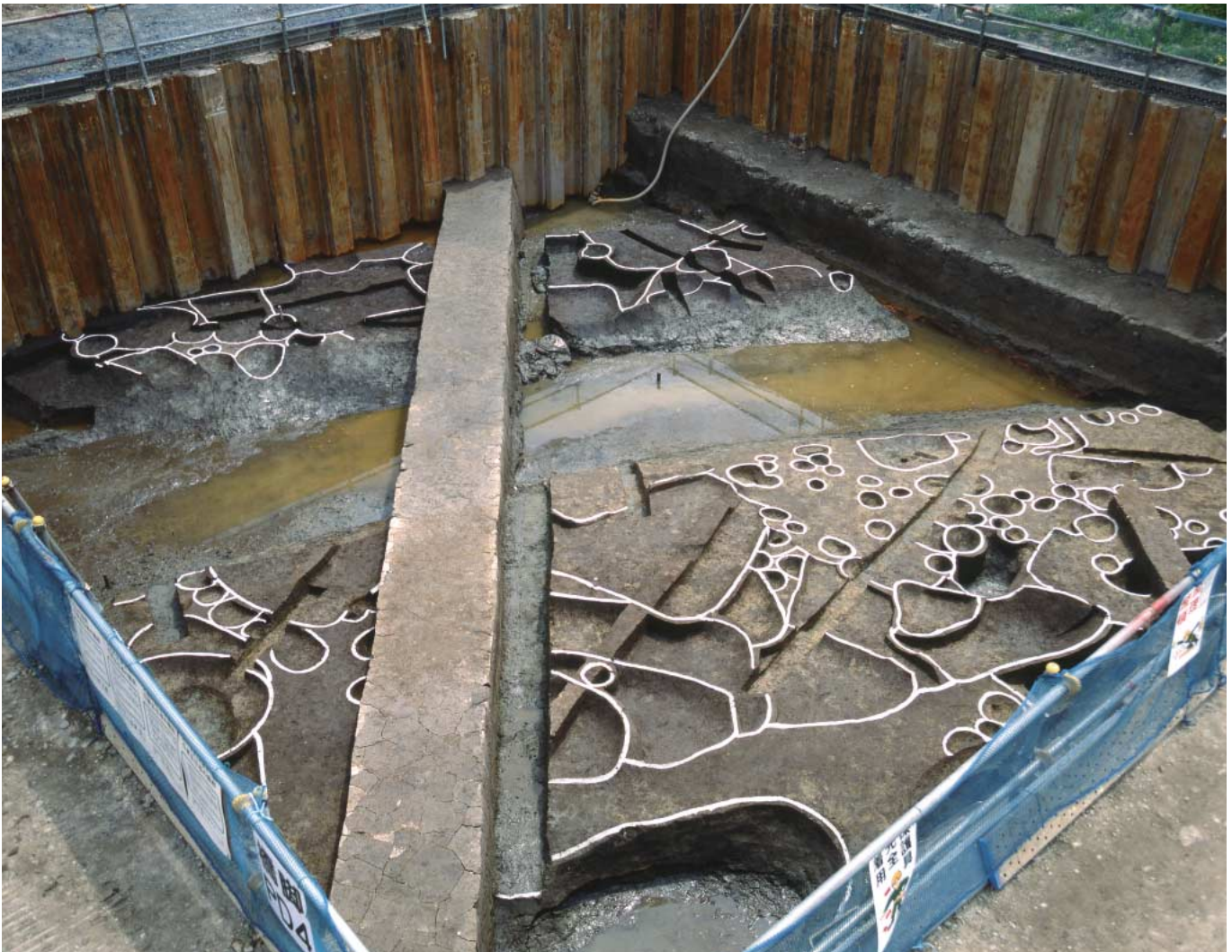


写真2-2-88 03Bd区3面全景（北より、写真中央を流れるのが2期～4期のSD02）



c. 弥生時代中期前半の居住域（2期～4期、図2-2-44・図2-2-45）

2期～4期の竪穴住居や土坑は谷Aのかかる99Bb区と02Bg区を除く他の調査区で確認でき、特に01Bc区・01Bd区・03Bd区において密に遺構が確認できた。特にこれらの調査区では小型土坑や細い溝等が多く検出できたが、遺物が出土しないため確定ではないが、4期において方形周溝墓からなる墓域に変遷する地点である事から、これら遺物の出土しない遺構は2期・3期の遺構である可能性が高い。

2期・3期の主な遺構として、99Ba区SB01・SB02・SK21、01Bb区SK01、01Bc区SB10・SK196等SB10付近のSK・SB12～SB17(図2-2-46・図2-2-47)・SD22・SK241、01Bd区SB14・SB15、02Be区SB01(SD03を含む)、03Bd区SB04～SB10・SB13・SB21・SB22・SB23・SB24・SB26・SB30・SB31・SB35・SB36・SB42・SB43・SB47・SB49等がある。竪穴住居では長軸2.5m～4.0m、短軸1.5m～2.5m程の小型で平面隅丸長方形～隅丸長台形のものばかりで、住居内部に支柱穴の配置や炉も確認できていない。これらは平面と掘り方の底が平底になる形状から住居と分類しているが、やや不明のものもある。埋土では03Bd区東側にて検出した03Bd区SB13・SB21・SB22・SB23・SB24・SB35・SB36・SB42・SB43・SB47は黒色～黒褐色シルトに貝層が溶けたような青色～白色の粒子が混ざる特徴のある埋土で貝層等が混じるもののように観察できた。土坑では99Ba区SK21が長径3.0m以上、短径1.5m前後、深さ0.5m前後の平面長楕円形の大型土坑で埋土上層が暗オリーブ褐色シルト、下

層が暗オリーブ褐色シルトに基盤砂層が混ざるもの。01Bb区SK01が径4.1m、深さ0.4m程の平面円形状平底の大型土坑で周囲から黒褐色シルトが流入して埋没する状況が観察できた。

4期の主な遺構として、99Ba区SK08・SK22・SK25、01Bc区SB04・SB07・SB09・SK241・SK248・SK251・SK252、01Bd区SK148、02Be区・SK05・SK19、03Bd区SB02・SB05・SB15～SB20・SB44～SB46・SK30・SK137等がある。竪穴住居としては2期・3期と同様に小型の平面隅丸長方形の形態のもので、03Bd区のは方形周溝墓の周溝と考えられる溝と重複し、前後を逆にして調査している事から、2期・3期の時期のものになる可能性がある。土坑では99Ba区SK22と99Ba区SK25が径1mを超える平面円形状断面丸底の大型土坑で埋土は暗オリーブ褐色シルト、01Bc区SK241は長径2.0m、短径1.0m、深さ0.55m程の平面やや不整な隅丸長方形断面丸底の大型土坑で埋土下層に黒褐色シルトが堆積し、その上部に炭化物が少量混じる、上層は褐灰色シルト、01Bc区SK251は長径2.4m、短径1.0m以上、深さ0.35m以上の平面楕円形の大型土坑で、埋土の上層が少量の炭化物が混じる黒褐色シルト、下層が灰オリーブ色細粒砂、01Bc区SK252が長径3.1m、短径1.6m、深さ0.55m程、平面楕円形断面やや擦鉢形丸底の大型土坑で、埋土の上層が炭化物を少量含む黒褐色シルトと基盤砂層の班土、下層が黒褐色シルトであった。01Bd区SK148は長径3.2m、短径2.0m前後、深さ0.6m前後の平面不整楕円形丸底の大型土坑で、6期のSD03と重複しており、埋土は黒褐色シルトが主体のものであった。

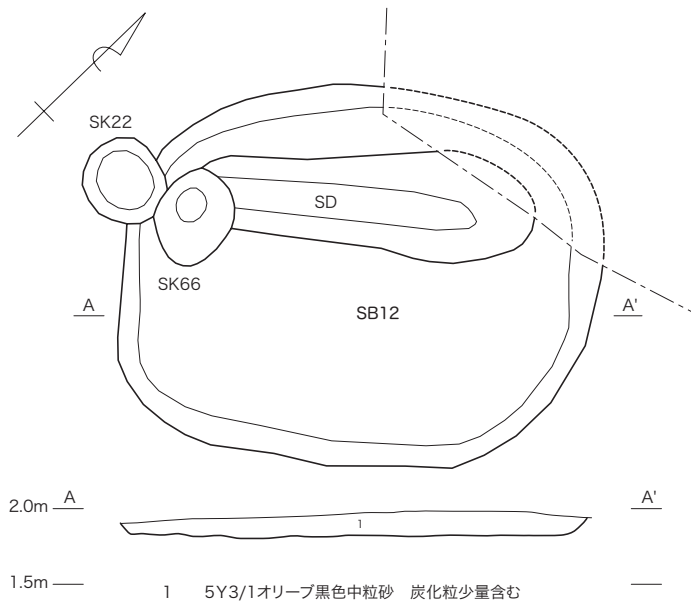


図2-2-46 01Bc区SB12 (1 : 50、2・3期の竪穴住居)



写真2-2-89 99Ba区SB01・SB02 (北より)



写真2-2-90 01Bc区2面全景 (北西より)

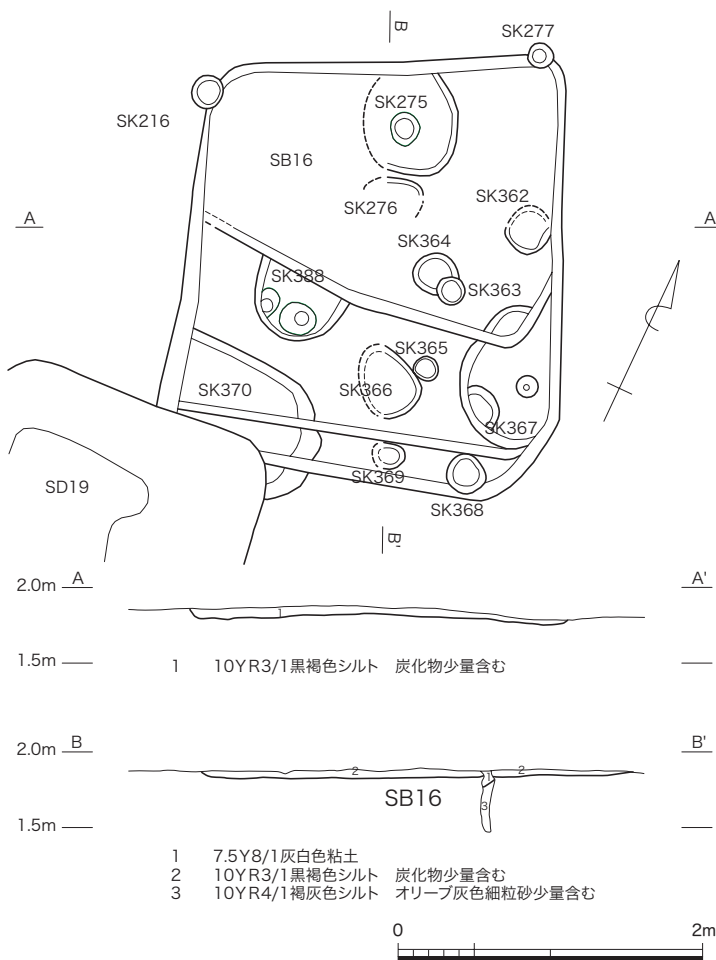


図2-2-47 01Bc区SB16 (1 : 50、2・3期の竪穴住居)



写真2-2-91 01Bd区SB01・SB04 (北より)



d. 東墓域の形成（2期～4期、図2-2-44・図2-2-45）

今回の調査において2期～4期の方形周溝墓が9基推定できるようになった。以下においてその特徴を述べたい。

2期・3期の可能性の高い方形周溝墓は2基あり、01Bb区北隅部にSK21（西溝）とSD17（南溝）とSD28（北溝）に囲まれた一辺4m前後の墳丘のものが1基（東溝は01Bb区SK01と重複するか）、01Bb区南隅部にSD25（西溝、SK22も含む）とSD02（北溝）に伴うものが1基推定できる。4期の可能性の高い方形周溝墓は7基あり、99Ba区SD03（北溝）とSD04（西溝）とSD05（東溝）に囲まれた東西約3.0mの墳丘のものが1基、01Bb区西側にてSD04（東溝）とSD05（南溝）とSD06（西溝）とSD08（北溝）に囲まれた一辺6.5m程の墳丘のものが1基、その北に隣接してSD07（SD08より新しい）に伴うもの1基、01Bc区南側にてSD19に伴うものが1基（01Bb区側に墳丘があるものと思われる）、01Be区西側にてSD05（東溝）とSD06（南溝）に伴うもの1基、02Be区北側にてSD02（南溝）とSK07（東溝）とSK10（北溝）とSD08（西溝）に囲まれた南北5.2m程、東西6.0m程の墳丘をもつものが1基、03Bd区SD02の北にてSK45（南溝、SK04を含む）とSK95（東溝）に伴う1基、SK158（西溝）とSK161（南溝）とSK118（東溝、SK115・SK117・SK134を含む）に囲まれた東西2.5m程の墳丘をもつもの1基が推定できる。

方形周溝墓の軸線では、南側の03Bb区SD02に近い02Be区と03Bd区の方形周溝墓は全て03Bd

区SD02の方向と対応した軸線をもつようであり、03Bd区を流れる大溝を意識して形成されたことが窺われ、この地点の北側である99Ba区と01Bb区～01Bd区においては2期・3期の01Bb区の方形周溝2墓と99Ba区の方形周溝墓1基、01Bc区SD19に伴う1基は墳丘の軸線がほぼ南北方向にあるのに対して、01Bb区の2期・3期の方形周溝墓の周溝を切る方形周溝墓1基と01Bd区の方形周溝墓1基は墳丘の軸線が15°～20°前後、ほぼ南北から西に振る傾向が見られる。よって03Bd区SD02が4期まで存在する可能性を認めて考えると、この地点の方形周溝墓は2期・3期には墳丘の軸線をほぼ南北に合わせて築造していたものが、4期になると03Bd区SD02の大溝を意識してか、方形周溝墓の軸線をやや西に振って墳丘を築造している可能性が高いように思われる。

方形周溝墓の形態は全て墳丘をめぐる溝の4隅が途切れるタイプのものと思われる、一辺2.5m～6.5m前後の小型のものが主体である。溝の形態は4期の方形周溝墓において幅広で深い傾向があった。また埋葬主体と考えられるものでは、02Be区の方形周溝墓に伴うものとしてSD02とSD08に囲まれた南西陸橋部から墳丘内側2.0mのところ、東頭位のほぼ東西方向に横臥屈葬の人骨が1体出土した。99Ba区SD03の内部に長径1.30m短径0.65m、深さ0.30m、SD04の内部に長径1.70m、短径0.55m、深さ0.28mの溝内埋葬の可能性のある平面長楕円形の土坑があった。周溝との重複関係は区別できなかったが、埋土は黒褐色シルトで木棺等の施設の痕跡はなかった。



写真2-2-92 01Bb区2面全景（北東より）



写真2-2-93 02Be区2面全景（北より）

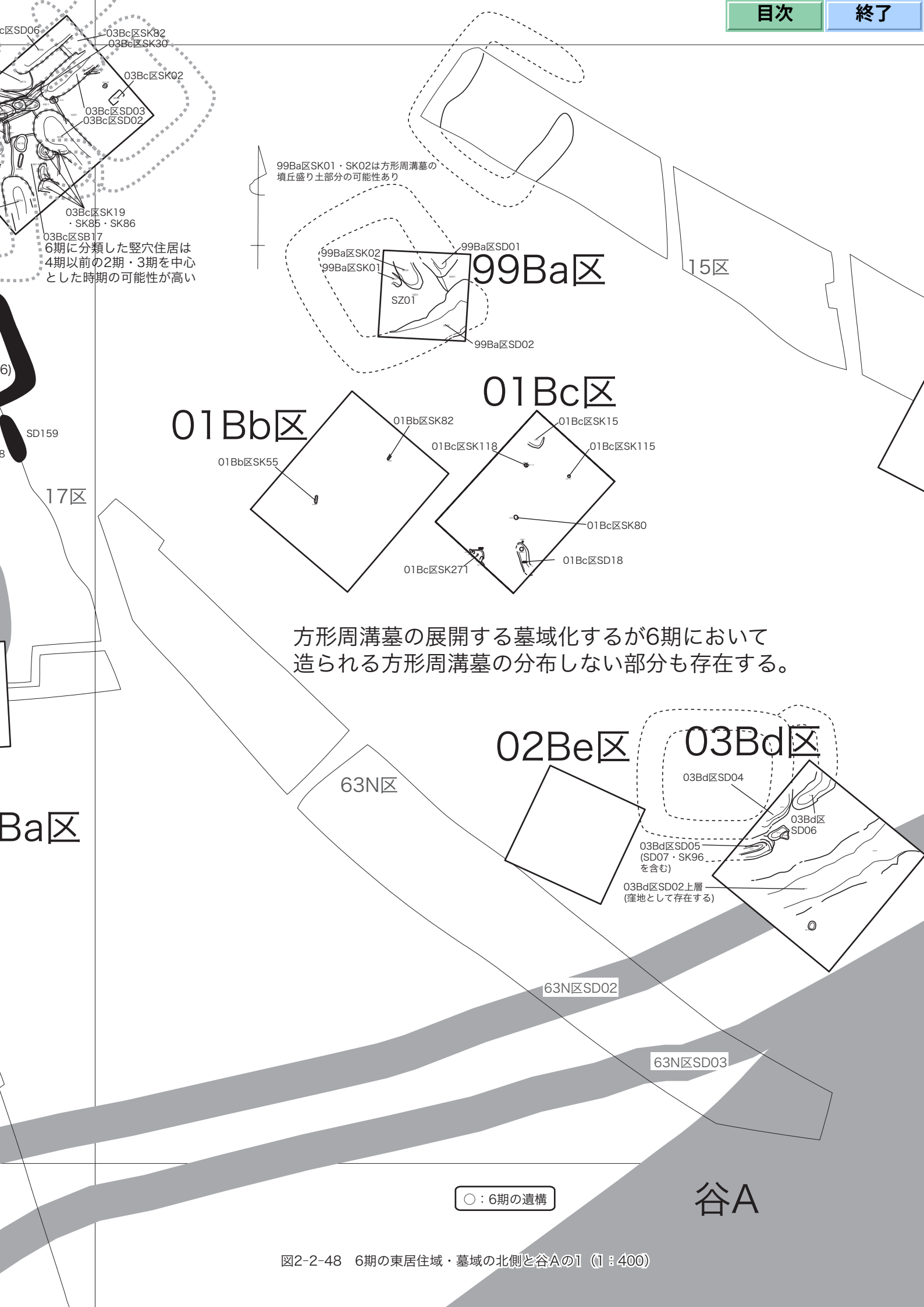
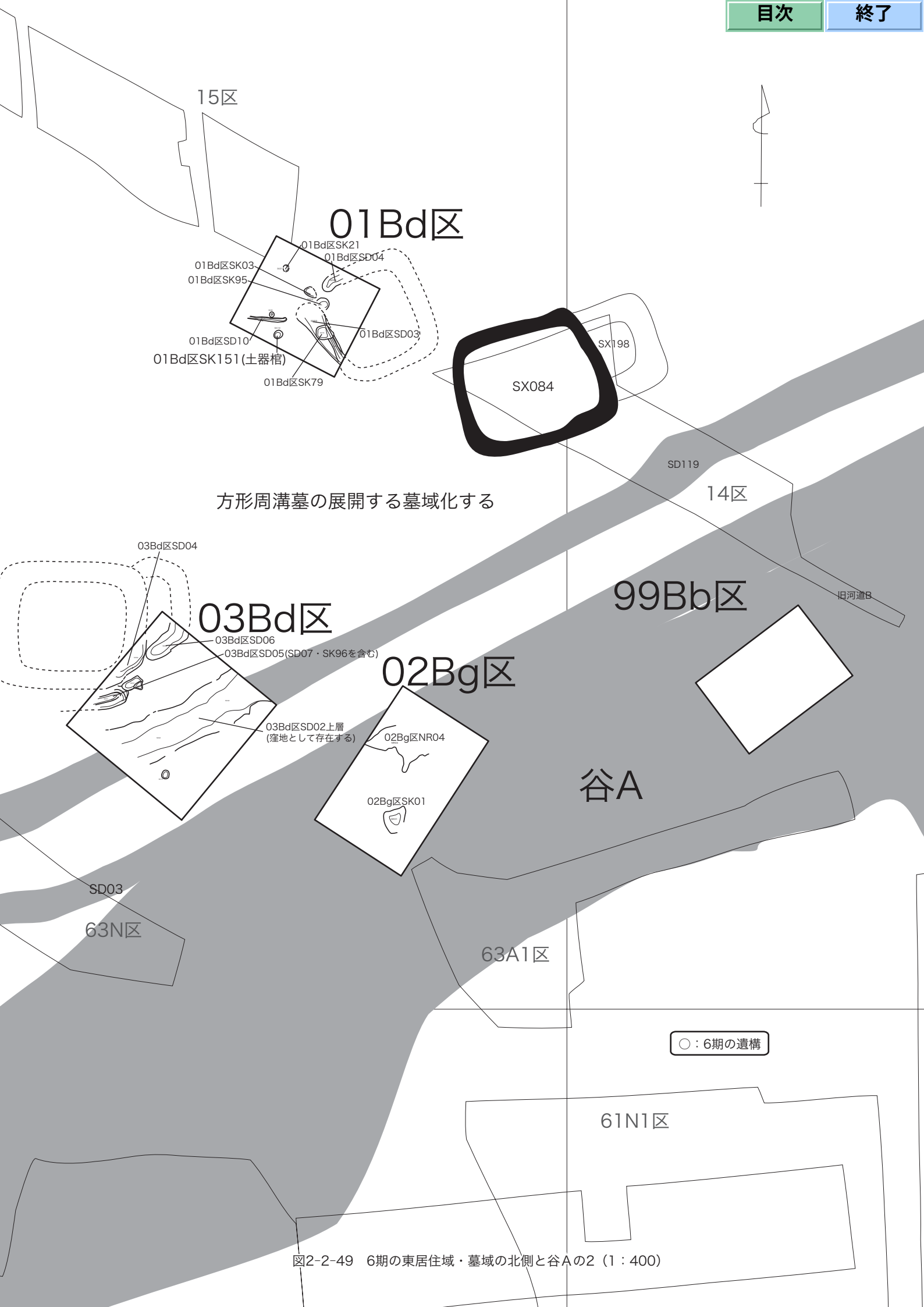


図2-2-48 6期の東居住域・墓域の北側と谷Aの1 (1 : 400)



方形周溝墓の展開する墓域化する

図2-2-49 6期の東居住域・墓域の北側と谷Aの2 (1 : 400)

e. 東墓域の展開（5期～6期、[図2-2-48](#)・[図2-2-49](#)）

5期と考えられる方形周溝墓は確認できなかったが、4期とした方形周溝墓の内、新しく造られたものと考えられるものは5期のものになる可能性がある。6期には99Ba区に1基、01Bd区に1基、03Bd区に2基（3基の可能性がある）を確認した。99Ba区では幅3.2mのSD02（南溝）とSD01（東溝）に囲まれた東隅が途切れる方形周溝墓が1基、01Bd区東側にてSD04（北溝）とSD03（西溝、SK148の上部、SD07を含む）に伴う1基、03Bd区SD02の北にてSD04に伴うものが1基（墳丘はSD04の北西側）、その北東に接してSD06に伴うものが1基推定できる。03Bd区SD05（03Bd区SD07・SK96を含む）は03Bd区SD04に伴う方形周溝墓を拡張した際の南溝の可能性がある。墳丘の軸線は4期の新しい方形周溝墓の軸線とほぼ同じで、南北よりやや西に振っている。

方形周溝墓の全体の形態が分かるものはない

が、99Ba区の方形周溝墓内側にてSK01とSK02として検出した長径2m～3mをこえる平面やや不整楕円形平底の大型土坑がある。当初、埋土が黒褐色シルトとにぶい黄色～暗灰黄色シルト（基盤砂層の可能性がある）の班土の遺構と認識した為、中世の方形土坑として調査を行ったが、断面が必ずしも明瞭な土坑状にならない点とその後の調査において6期の方形周溝墓の墳丘において、黒色～黒褐色シルト・細粒砂の上部に基盤砂層を含む班土が墳丘の盛土として確認できた点からこの2基の土坑も方形周溝墓の盛土と認識するのが妥当と考えた。また方形周溝墓の内部ではないが、01Bd区SK151では6期の壺を利用した土器棺墓と考えられるものを検出でき、03Bd区SK67（長径2.0m、短径0.9m、SK66も含むか）も土坑墓の可能性がある。

その他にも6期の土器が出土する細い溝や大小の土坑が少数認められるが、遺構の性格は不明である。



写真2-2-94 01Bd区SK151断面（北より、6期の土器棺墓と考えられる）

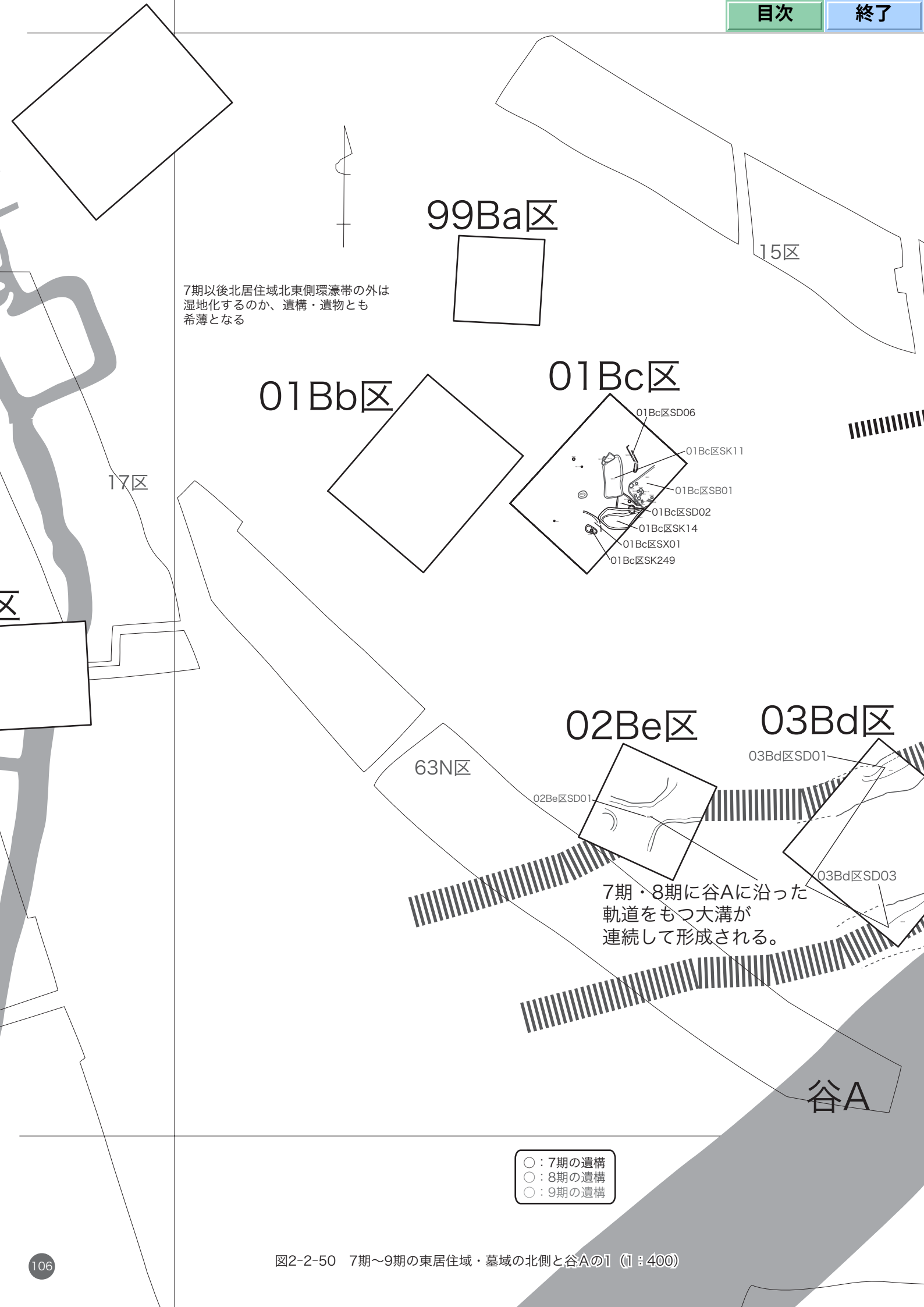


図2-2-50 7期～9期の東居住域・墓域の北側と谷Aの1 (1 : 400)

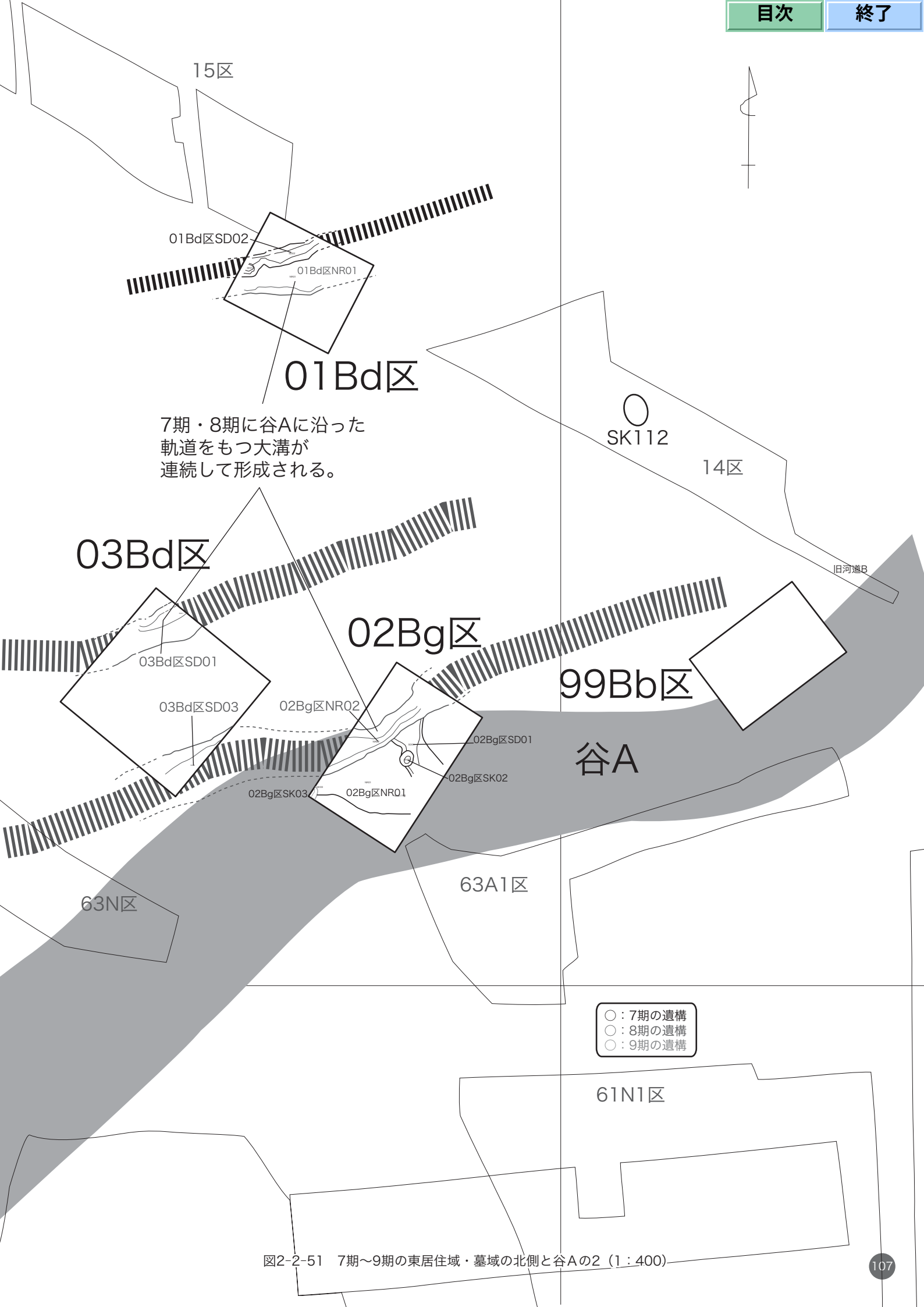


図2-2-51 7期～9期の東居住域・墓域の北側と谷Aの2 (1:400)



f. 弥生時代後期から古墳時代前期初頭(7期～8期)の区画溝(図2-2-50・図2-2-51)

6期には03Bd区SD02が埋没し、上部が溝状の落ち込みとして存在したようであるが、7期以後は埋没した可能性が高く、明確な遺構は少なくなる。7期～8期の明確な遺構としては溝が3条あるのみで、やや不明瞭な遺構として01Bc区において竪穴住居や土坑、溝として調査された遺構群がある。

7期の溝は01Bd区SD02があり、幅1.65m、深さ0.8mの断面丸底のもので、溝底の標高は1.45m前後である。埋土は黒褐色シルトで、下

層に基盤砂層が少量混じる。

8期の溝は先に述べた02Bg区のNR02・03Bd区SD03の1条とその北10mにてほぼ並行して流れる02Be区SD01・03Bd区SD01がある。02Be区SD01と03Bd区SD01は同一の溝と考えられ、幅3m前後、深さ0.6mの断面緩い丸底、溝底の標高は1.40m前後であった。埋土は黒色シルトで、上層に旧河道Aの上部の堆積と思われる黒褐色～黄灰色シルトが堆積していた。

この3条の溝は谷Aの北岸を等高線に沿ってほぼ並行に東西にのびる大溝と考えられ、区画溝や用水路のようなものが推定されるものである。



写真2-2-95 01Bd区1面全景(北より)

※写真2-2-95下側の溝が7期の01Bd区SD02

※写真2-2-96中央の凹み部分が02Be区SD01、埋土の上層はほとんど古墳時代前期後半以後の湿地性堆積物が全体を覆っていた



写真2-2-96 02Be区1面全景(北より)

(7) 谷A南の東居住域・墓域**A. 位置とこれまでの成果……………**

谷Aの南に位置する地点で、02Bh区～02Bj区の調査区がある。これまでの調査では、この3調査区の周囲を弥生時代中期前葉～中葉の墓域として6区～13区・18区～20区、61M1区～61N2区・61P区・63A1区・63A2区として調査されている。

これまでの調査成果においては、財団報告において2期～4期の超大型方形周溝墓を含む大小の方形周溝墓からなる墓群（東墓域）と、墓域形成以前の2期～4期初頭（最古）に平面隅丸長方形の竪穴住居、梁行1間・2間の掘立柱建物からなる居住域の存在が明らかにされている。また谷Aの南岸をはしる2期～5期と7期以後のSDXIIIとSDXIVが検出されており、南居住域を横断する大溝として指摘されている。63A2区では弥生時代中期以前の堆積である溝状遺構SX01の下から縄文時代後期の貯蔵穴と考えられる平面円形断面袋形の大型土坑2基が確認されており、埋土からブナ科の堅果皮が出土した。8期以後には、02Bi区と02Bj区間の地点を南北に蛇行して流れるSDXIX（6区SD080）が確認され、自然の流路状のものと考えられている。

B. 今回の調査成果……………

今回の調査においても、大きくは居住域から墓域への変化が追認できたものと思われる。これまでに調査された遺構との対応関係についても触れ、今回の調査成果を述べる。

a. 弥生時代中期中葉～後葉の大型方形周溝墓SZ206の北側（02Bh区、図2-2-52）

財団報告において4期の方形周溝墓SZ206・6

期の方形周溝墓SZ207（県報告SX048）とされた一辺20m程の大型方形周溝墓の北側部分に当たる調査区で、02Bh区SD04～SD07はSZ206・SZ207の北溝で調査区の西壁に沿って幅1m程調査ができた。溝は幅3.0m前後、深さ1.5m程の溝と想定されるが、溝の埋没は古い溝からSD07（溝底の標高1.20m前後）、SD06（溝底の標高1.30m前後）、SD05（溝底の標高1.60m前後）、SD04（溝底の標高1.60m前後）の順であるが、若干の混入があるのか、SD06から6期の弥生土器が出土した。溝の埋土はSD07とSD06の最下層が黒褐色シルトと基盤砂層の班土、SD06の中層・下層とSD05が黒褐色～オリーブ黒色シルト、SD06の上層とSD04が黒褐色シルトと黄灰色シルトの互層で、SD04では黒褐色シルト中に腐植物を含んでいた。

この02Bh区SD04～SD07の北には61P区のSK02（2期）と思われるSDと他に2条の溝がある。02Bh区北端には5期の自然流路状の堆積と思われるSD03を検出し、この落ち込みはSDXIIIの南岸に対応するものと考えられる。SD03に前後して2期・3期の平面方形状竪穴住居の周溝と思われる幅0.15m前後、深さ0.10m前後のSD09、小型土坑SK14・SK16等、SD03以後に幅1.0m前後、深さ0.25m前後のSD02（埋土は黒色シルト）があり、SD02は方形周溝墓の周溝の可能性もある。なお、土層断面上ではSD03の上から掘り込む小型土坑の堆積を確認した。

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果



写真2-2-97 02Bh区2面全景（西より、写真下側がSZ207）



写真2-2-98 02Bi区で検出できた溝（西より、4期～6期の方形周溝墓の周溝か）



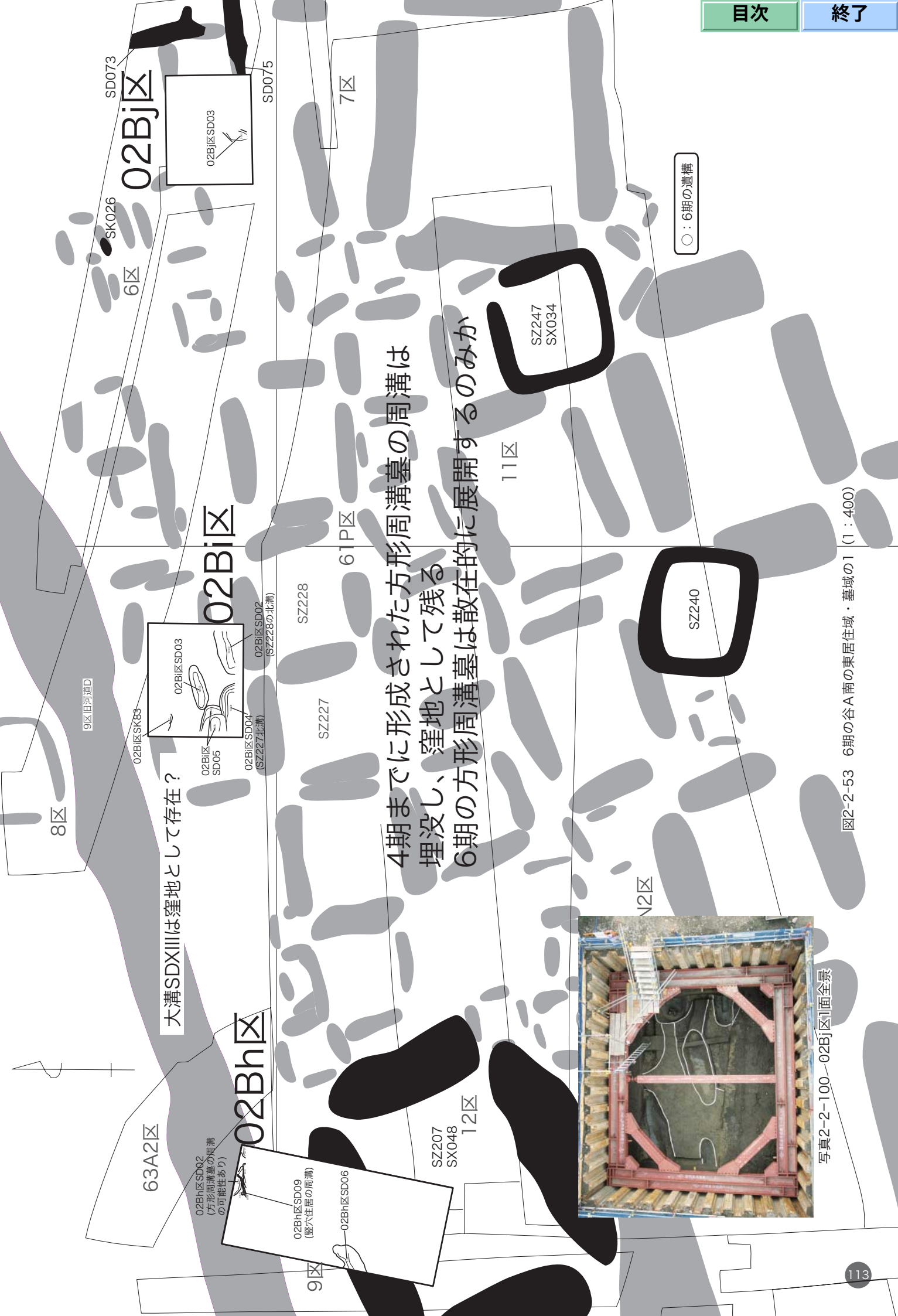
b. 弥生時代中期前半の方形周溝墓SX037の西側
(02Bi区、[図2-2-52](#)・[図2-2-53](#))

県報告において8区SX037とした方形周溝墓の西側で、SX037の時期は県報告では2期・3期、その後の財団報告において4期～5期に修正されている。今回の調査では02Bi区SD01とした幅0.80m前後の溝が対応するものと考えられた。SD01の埋土は褐灰色細粒砂と浅黄色細粒砂の互層になるもので、時期は5期と考えられる。また02Bi区SD02は61P区のSZ228の北溝（財団報告では4期）、02Bi区SD04は61P区のSZ227の北溝（財団報告では4期）に対応する溝と考えられ、今回の出土遺物では6期の弥生土器が出土した。埋土は黒褐色シルトを主体に、下層や最下層に基盤砂層が混じるものであった。

以上のこれまでの調査により判明していた遺構以外に溝として02Bi区西側において4期のSD07、5期のSD08、6期のSD03とSD05、SK83（溝である可能性が高い）が確認できた。全て方形周溝墓の周溝の可能性が高いもので、SD03が幅1.25m前後、他の溝が幅2.0m前後ある。埋土はSD03に灰色～褐灰色シルト・細粒砂を主体とするもので上層に灰白色シルト、SD05に黒色～黒褐色シルト、SD08の最下層に黒色細粒砂と基盤砂層の班土が、その上層に灰色シルトが堆積していた。その他には先に述べた溝より古い遺構としてSK23・SK86・SK16等の小・中型土坑と円形住居の可能性のあるSD12があり、2期・3期を中心とした時期のものと考えられる。



写真2-2-99 02Bi区2面で検出した溝と土坑（東より）





c. 弥生時代中期中葉の方形周溝墓SZ279の西側(02Bj区、図2-2-52～図2-2-54)

6区の東側と重複する調査区で、財団報告においてSZ279(県報告の6区SX022、4期～5期)とされた方形周溝墓の西側に位置する。SZ279の西溝で6区SK025の南側になる部分、SZ279の南溝、SZ279の南溝を掘り込む6期の6区SD075(西側の続く部分を02Bj区SD03として)、6区SD076に対応するもの(02Bj区SD04として)、6区SX022の南西に位置する土坑状の遺構と対応すると考えられる遺構を再掘削・調査した。02Bj区SD03は6期の遺構と考えられ、6区SD075が南に折れる部分と思われ、2つの溝が方形周溝墓の西溝と北溝になるものと考えられ、埋土は黒色シルトである。SZ279と関係する可能性のある遺構

として02Bj区SK06が長径1.60m、短径0.60m、深さ0.20mの平面隅丸長方形やや丸底の大型土坑で、SZ279の西側に掘られた内部主体の可能性はある。埋土は黒褐色シルトに基盤砂層の可能性のある黄色シルトの小ブロックが混じるもので、木棺状痕跡は確認できなかった。

8期と考えられる02Bj区SD02があり、幅3.0m以上深さ1.2m前後(溝底の標高0.65m前後)の南北に続く溝と思われる。これまでの調査では61P区SDXIX(6区SD080)に並行する溝である可能性が高く、埋土は最下層に黒褐色シルト、上部にオリーブ黒色シルトと灰白色シルトが互層に堆積していた。その他に長径3.4m程の平面楕円形土坑の02Bj区SK05、小型土坑の02Bj区SK08・SK18がある。



写真2-2-101 02Bj区2面全景(西より)

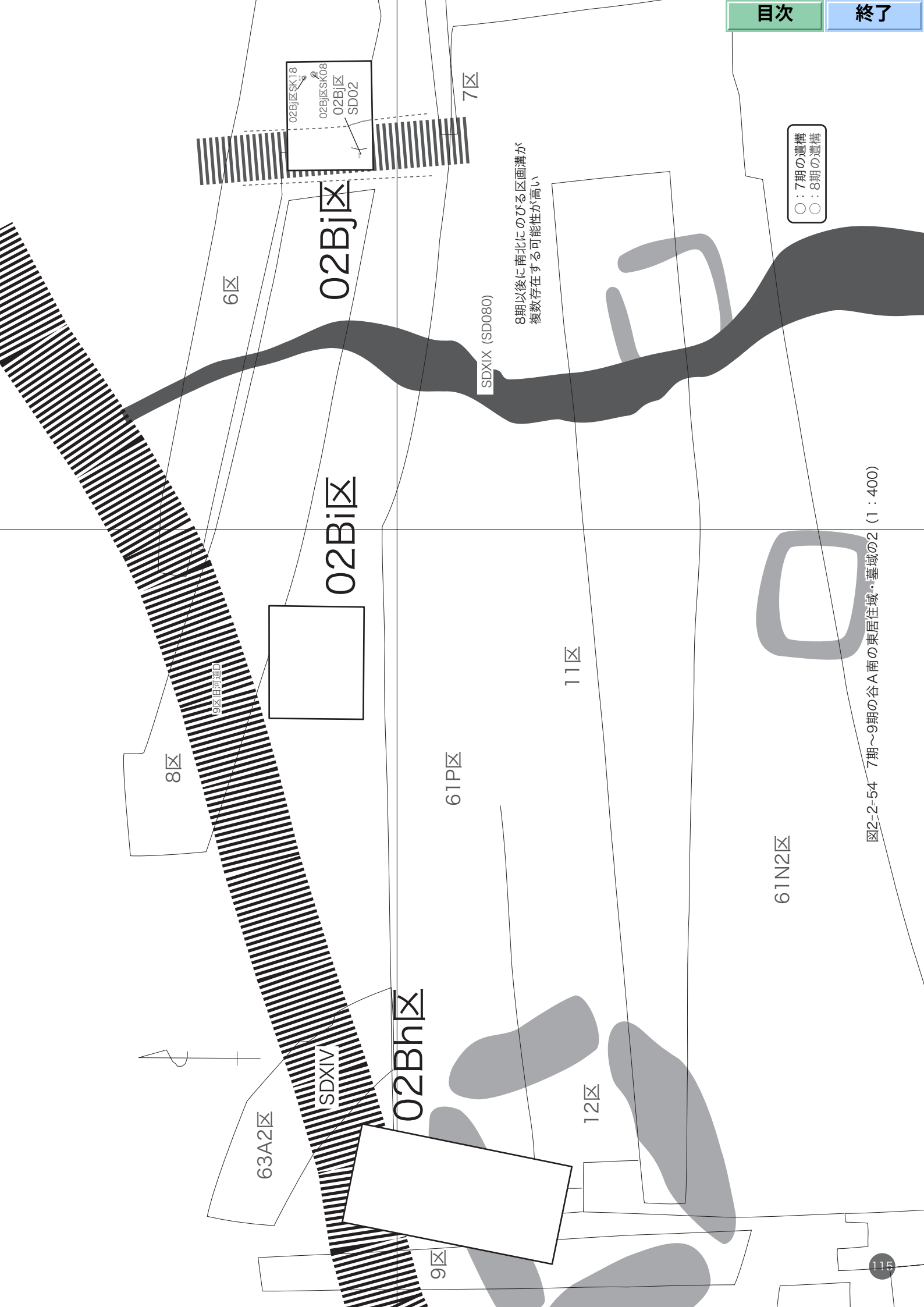


図2-2-54 7期～9期の谷A南の東居/住域・墓域の2 (1 : 400)



(8) 南居住域の南東側

A. 位置とこれまでの成果……………

南居住域の南東外側、谷Bが南東に流れる付近にある地点にあるもので、99Ca区～99Cc区・01Ca区・01Cb区・02Cb区～02Cd区の調査区がある。

これまでの調査成果では弥生時代中期中葉「S4居住域」とされる居住域から弥生時代中期中葉前半から弥生時代後期にかけての方形周溝墓からなる墓域へと変化することが分かっており、また弥生時代中期後葉以後に幅10m前後の谷Bが南東に南流することが分かっていた。

B. 今回の調査成果……………

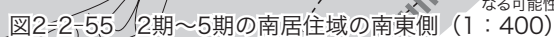
a. 居住域から墓域への変化 (図2-2-55～図2-2-58)

この地点の9調査区では、2期～3期の土器片は比較的多く出土するが、この時期の遺構と考えられるものは少なく、02Cb区SB14・SK26 (SK26は方形周溝墓の周溝の可能性あり)、99Ca区の方形周溝墓の周溝と考えられるSD02とSD04、02Cd区SK47・SK49と時期を分類する上で可能性が低い土坑が若干あるのみである。続く4期の遺構では主要なものでも、99Ca区SD03、99Cb区SD03・SD05・SD06、01Ca区SD01とNo.なしSD・SK01～SK03、01Cb区SK08・SK81・SK87、02Cb区SB15・SK08、02Cc区SB02・SK33等があり、他にも時期の細分は困難であるが、99Cb区の基盤堆積層上面にて検出されたSB・SK群のように4期以前と考えられる遺構は多数ある。4期の遺構の中で、99Ca区SD03、99Cb区SD03 (99Cb区のSD03に組み合う溝は6期のSD04により消滅)・SD05とSD06、01Ca区SD01とNo.なしSDは方形周溝墓の周溝と考えられるもので、02Cc区SD02・SD09も4期の方形周溝墓の周溝の可能性がある。以上、2期～4期の遺構分布から考えると居住域の遺構と考えられる竪穴住居と土坑は2期の段階では比較的散漫に全域に分布していたが、2期の方形周溝墓がある99Ca区付近の地点から続く4期にかけて徐々に

01Ca区・99Cb区・02Cc区と南居住域から遠い地点において墓域へと変化していく傾向がみられる。これらはマウンドの規模が一辺5m前後と推定できる小型のものばかりであることから墓域の周縁にあたるものと推定される。4期の居住域内部と考えられる01Cb区、02Cb区、02Cc区では居住域の遺構が継続してみられる。

5期の遺構では、方形周溝墓と考えられる遺構はなく、01Cb区SB03・SB15・SK44、02Cb区SB01・SB02・SB05・SB08・SK06、02Cc区SK27、02Cd区SB06・SK60等、居住域が4期に引き続き展開していたものと考えられる。

6期には大きな変化が訪れる。これまで居住域の内部にあった99Cc区に5期末～6期前半の方形周溝墓が造られ、5期まであまり重複しなかった方形集溝墓の上にさらに6期の方形周溝墓が造られるようになる。6期の遺構では方形周溝墓と考えられるものとして、99Ca区SD05・SD06 (SZ01)、SD01 (SZ01)、99Cb区SD02・SD04・SK01、99Cc区SD02・SD05、SD03・SD04、02Cb区SD02、02Cc区SD07・SD08 (調査時のSD04・SD05を含む)、02Cd区SD08があり、02Cd区SD08は財団報告63B1区SD04と対応する北溝と考えられる。99Cc区SD03とSD04の連結する部分は、基盤面が立ち上がっており方形周溝墓の陸橋部に当たる可能性があり、基本的には02Cc区SD07・SD08にみられるように方形周溝墓マウンド四隅の1つが陸橋部として墓の外とつながる型式と同じものと思われる。99Cb区SK01は平面長方形、1.45m×0.45mのもので、同SD02・SD04に伴う内部主体になるものと思われる。居住域の遺構としては、99Cc区SK12、01Cb区SB02・SB08・SB10～SB12・SB14・SB16・SK10・SK43・SK74、02Cb区SB11・SK05、02Cd区SB01～SB04・SB06・SD06・SK17・SK28・SK52があり、99Cc区SK12は方形周溝墓の周溝の一部の可能性もあるが、墓域になる前の土坑と認識した。6期に形成される方形周溝墓は、居住域の遺構を切って掘り込まれている





ことと遺構の分布から考えると、01Cb区の居住域に関する遺構群と02Cd区に形成された遺構群（02Cc区南側の遺構を含む）の大きく2つの遺構群に分かれるように思われる。また02Cd区の遺

構群は方形周溝墓の分布から考えると南北50m、東西25m程の範囲に展開する遺構群として認識できる可能性がある。



写真2-2-102 01Cb区2面全景（南東より、4期～6期の土坑が主体）



写真2-2-103 99Cb区3面全景（南西より、2期～5期の遺構群）



写真2-2-104 99Cc区（南東より、2期～6期の遺構群）

第Ⅱ部 遺構の分析 — ②遺跡の調査成果

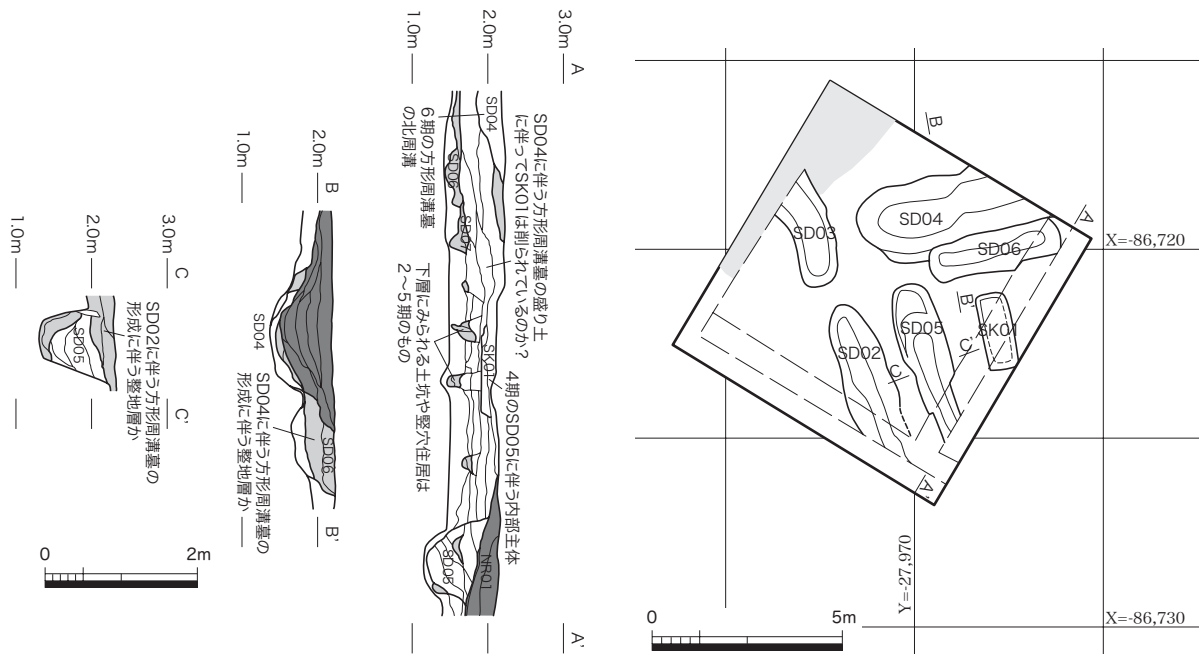


図2-2-56 99Cb区4期～6期の方形周溝墓（平面図1：200、断面図1：100）

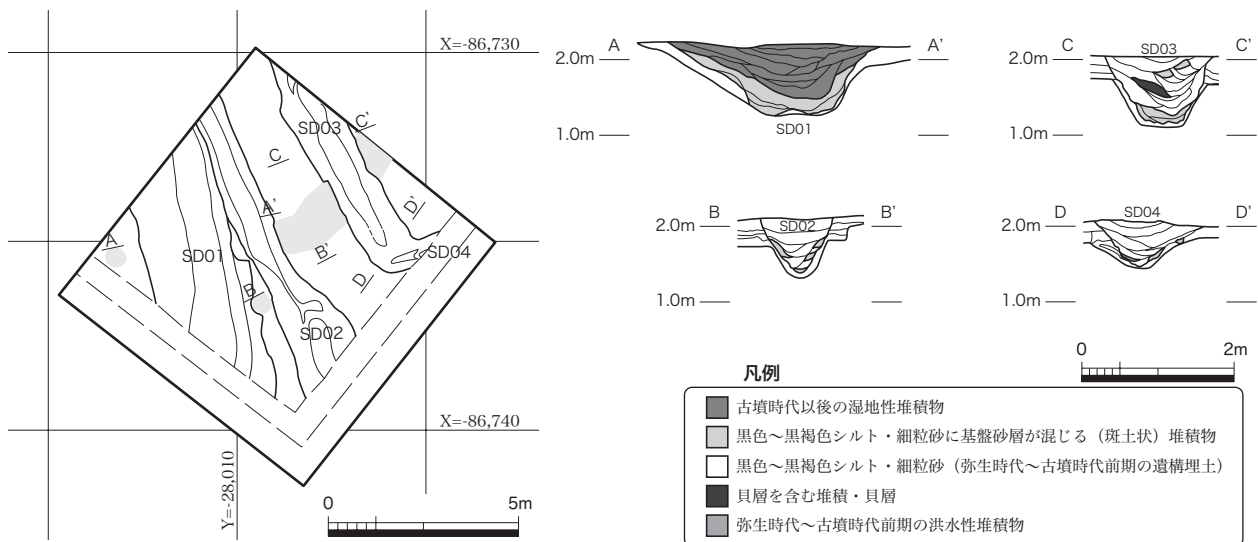
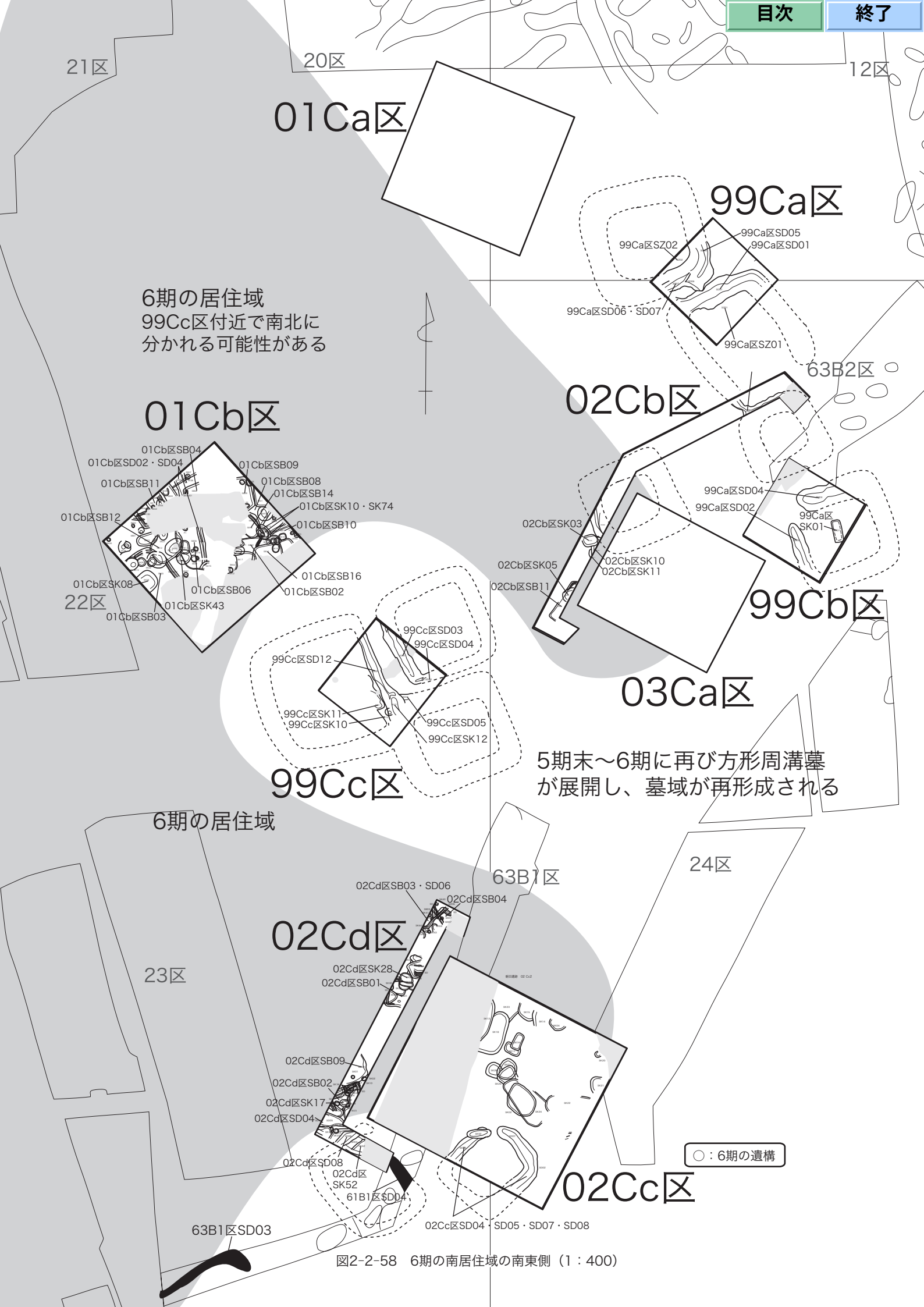


図2-2-57 99Cc区6期～7期の方形周溝墓（平面図1：200、断面図1：100）



写真2-2-105 99Cb区2面全景（西より）

※写真2-2-105では時期の異なる溝が同一面にて検出できる。本来は方形周溝墓の墳丘盛土があるので、異なる面のものである。



6期の居住域
99Cc区付近で南北に
分かれる可能性がある

5期末～6期に再び方形周溝墓
が展開し、墓域が再形成される

図2-2-58 6期の南居住域の南東側 (1:400)

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果



写真2-2-106 01Cb区SK03 (西より)



写真2-2-107 01Cb区SK12・SK65 (南より)



写真2-2-108 99Ca区1面全景 (南西より、6期の方形周溝墓2基と2・3期の方形周溝墓1基がみられる)



写真2-2-109 99Cc区SD03遺物出土状態 (南より)



写真2-2-110 99Cc区1面全景 (南東より)



写真2-2-111 99Cc区SD01断面 (南より)



写真2-2-112 01Cb区1面全景（南東より）



写真2-2-113 01Cb区SB01（南より）

b. 弥生時代後期（7期・8期）の居住域と墓域（[図2-2-57](#)・[図2-2-59](#)・[図2-2-61](#)）

居住域の遺構として01Cb区のSD01とSB01がある。SD01は7期から8期にかけての南居住域を二重に囲む外環濠で、SB01はSD01西肩まで約4mあり、外環濠の内側に当時堤が存在した部分を想定できるのであろうか。その他の調査区では方形周溝墓と考えられる溝以外からは7期の遺物がほとんど出土しておらず、居住域が環濠の外に展開しないことを示している。7期～8期の4基の方形周溝墓と考えられる溝、99Cc区SD01、

02Cd区SD01・SD03と02Cc区SD03、02Cd区SD02、02Cc区SD06・SK12を検出した。4基の方形周溝墓の内、02Cd区SD01・SD03と02Cc区SD03のものは財団報告のSZ160に、02Cc区SD06・SK12のものは県報告SD193に対応する溝と考えられる。02Cd区SD02、02Cc区SD06・SK12は出土した遺物からは7期の遺物は出土しておらず、6期にさかのぼる可能性はあるが、6期の他の遺構との重複関係や02Cd区・02Cc区付近にて検出された方形周溝墓の方位（N-40°-E）から7期の遺構として考えた。

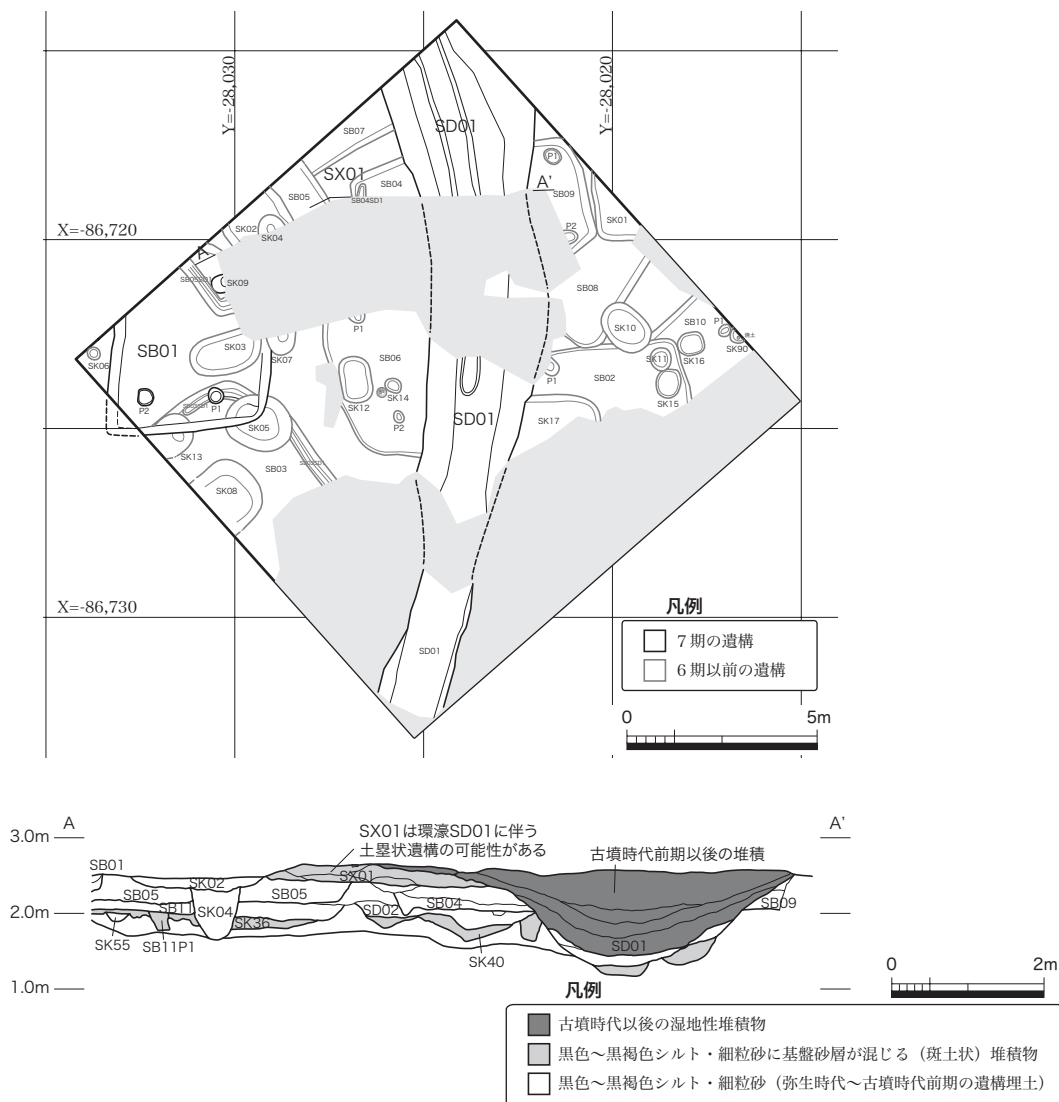


図2-2-59 01Cb区1面、7期の竪穴住居SB01と環濠SD01（平面図1：200、断面図1：100）



写真2-2-114 03Ca区NR01（西より、9期の谷A）



写真2-2-115 03Ca区NR02（西より、8期の谷A）



写真2-2-116 03Ca区NR02によって崩落した弥生時代中期の遺構（北より）

c. 谷Bと墓域の関係 (図2-2-60・図2-2-61)

谷Bと考えられる遺構は、北から01Ca区NR01（北東肩）・02Cb区NR01・99Ca区NR01（東肩）・03Ca区NR01・NR02（西肩）があり、検出された流路の幅は約10mである。谷Bと他の遺構との関係では、谷Bより古い遺構として01Ca区SD01・他SD（4期）、99Cb区SD02（6期）、02Cb区SD02、同SD05があり、谷Bより新しい遺構として02Cb区SK01・SK02・SD01がある。02Cb区SK01・SK02・SD01は谷Bと関係する洪水砂と思われる砂層の上から掘り込まれた遺構で、02Cb区SD01が6期までの遺物しか出土しない。出土遺物からは、02Cb区において、谷Bは2期から8期（廻間I式後半まで）の遺物が出土するNR02と2期から8期の遺物に加えて下層において9期（松河戸II式）の遺物を含むNR01に分けられる。よって今回の調査における谷Bの所属時期は6期の後半以後7期までには6期以前の方形周溝墓を削り込んで流れた流路といえる。

次に谷Bにおける新しい成果として、03Ca区の調査成果をもって述べる。NR02の下層において流路に直行した方向に並んで検出されたSA01がある。SA01を構成する杭は4本検出でき、上部をNR01によって削られているが、杭の下部は先が尖らせてあった。NR02は周囲にあった弥生時代中期の遺物包含層を削り、崩落させた堆積が確認できた。8期においても、NR02は流れていたものと考えられ、9期後半の流木（根まで存在するものがあつた）を含む洪水性堆積により埋没した状況がみられた。NR02において検出したヒノキの流木において年輪年代測定を行ったところ、木材外縁の年輪においてAD.2世紀後半の年代を得た。NR01の上層は中世前半（12世紀～13世紀）の遺物が出土する腐植物を多く含む堆積により埋没し、層位の上ではその後方形土坑が4基掘削され、近世頃の水田に伴う用水路が掘削されていた。

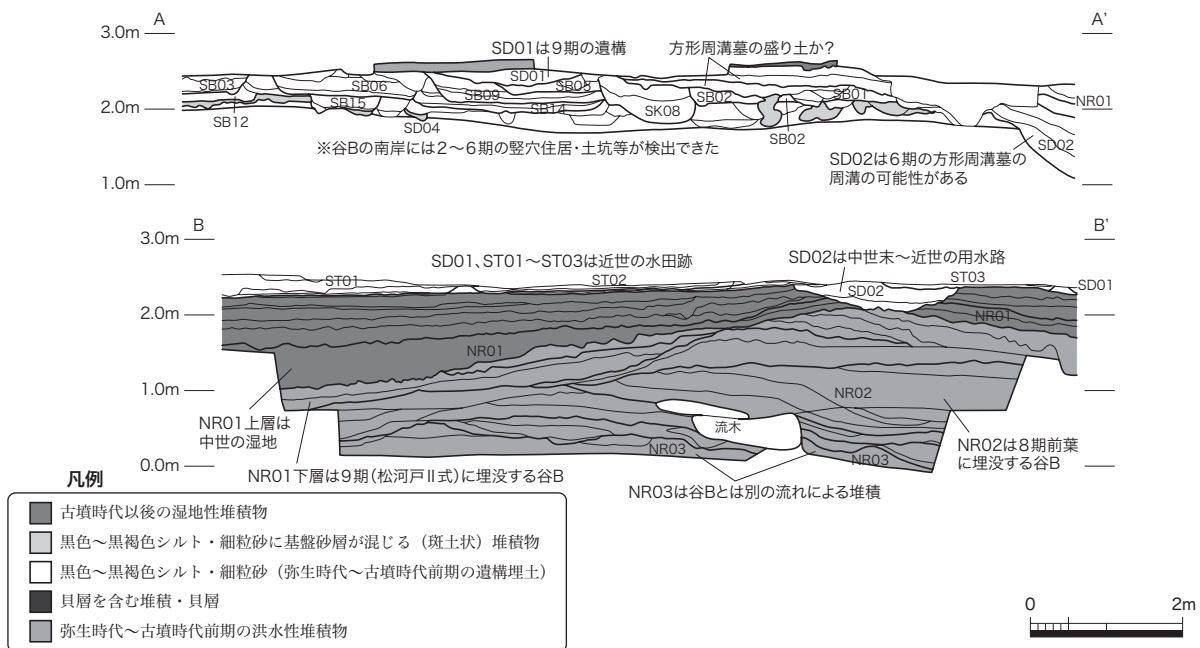
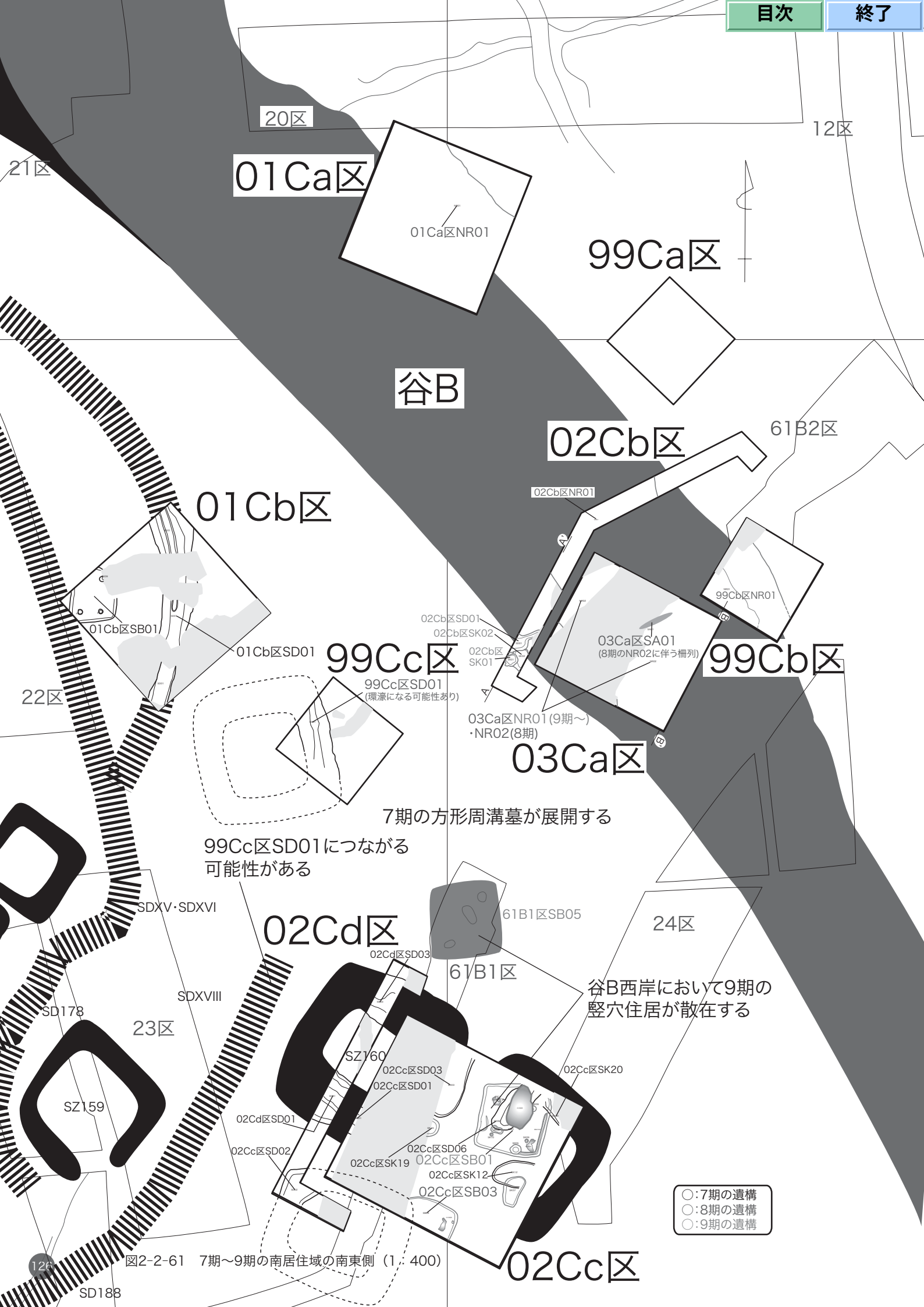


図2-2-60 谷Bと墓域の関係（1：100、上段は02Cb区のもの、下段は03Ca区のもの）



d. 古墳時代前期の居住域 (図2-2-61・図2-2-62)

02Cc区において8期の竪穴住居SB03と9期の竪穴住居SB01を検出した。SB03は一辺4.75m以上ある平面隅丸方形の竪穴住居で床面上で炭化物を検出した。SB01は6.25m×6.2mの平面方形、4本支柱の竪穴住居でほぼ床面上にて炭化物の広がりを大きく3か所検出した。土層断面から

はSB01全体に炭化物が広がる状況がみられる。両住居とも炉や垂木状などの炭化材は検出できなかった。県報告において確認されている63B1区の平面隅丸方形の竪穴住居(63B1区SB05)もこの時期に該当する遺構と考えられ、8期から9期にかけて散在的状态であるが、谷Bの西に居住域が展開した状況が想定できる。

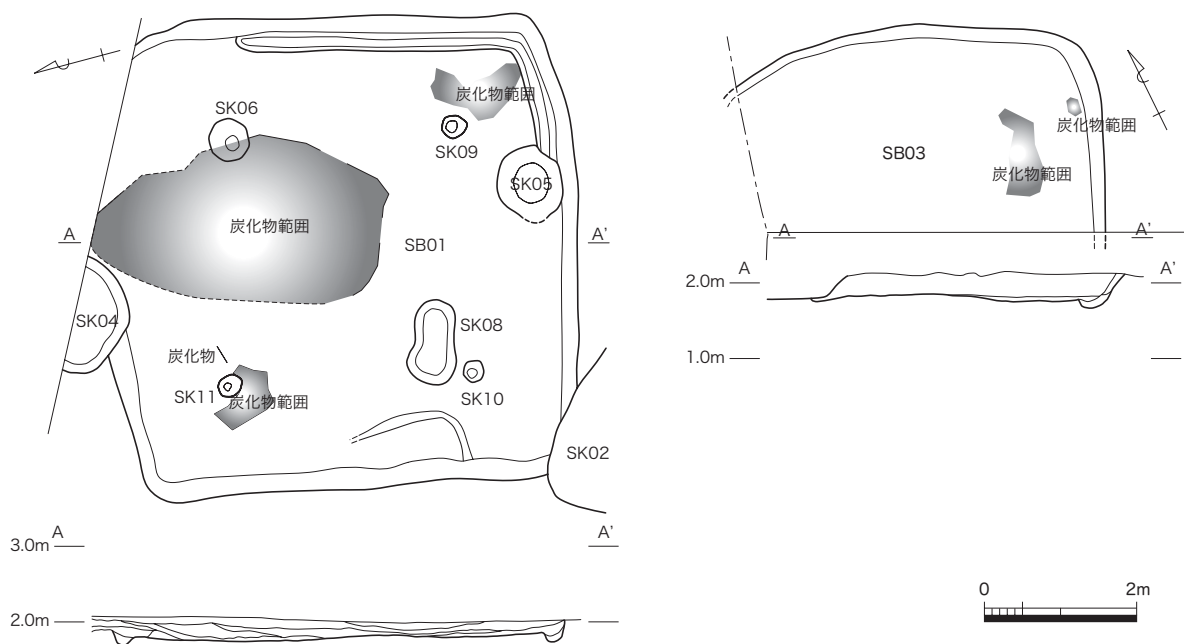


図2-2-62 02Cc区SB01・SB03 (1:100)



写真2-2-117 02Cc区2面全景 (北より)



写真2-2-118 02Cc区SB02・SB03 (北より)



(9) 南居住域南縁部東側

A. 位置とこれまでの成果……………

南居住域の南縁部東側の地点にあるもので、02Ce区・02Cf区・02De区の調査区がある。

これまでの調査では、02Ce区の西を61H区南地区-1、02Ce区の東を21区、02Ce区の南と02Cf区・02De区の北の間を61H区南地区-2、02Cf区東側と重複する地点を23区、02De区西側と重複する地点を30区、02Cf区と02De区の南を63B1区として調査されている。これらの調査では、2期から9期にかけての竪穴住居、大小の土坑、7期の掘立柱建物が確認され、居住域が展開する事が明らかにされている。その中で02Cf区や02De区においても検出された南居住域の2期～4期の溝63B1区SD01（30区SD219）と7期・

8期の内環濠SDXV・SDXVI（23区SD177・29区SD178）と外環濠SDVIII（23区SD188・29区SD177）が掘削され、南居住域内側を中心に囲む。2期～6期の南居住域と竪穴住居や土坑等の関係については不明な点が多いが、7期以後は内環濠の内側に沿って環濠の内外に方形周溝墓が形成され、環濠の外側にはほとんど居住域が展開しない事が明らかにされている。また63B1区のSD01に沿って柵状遺構が推定されている63B1区SD02（23区SD187）が検出されており、弥生時代の古い段階の遺構として位置付けられている。8期には内環濠の内側に沿って前方後方形周溝墓ともいえるSZ156が造られ、引き続き墓域が広がるようである。

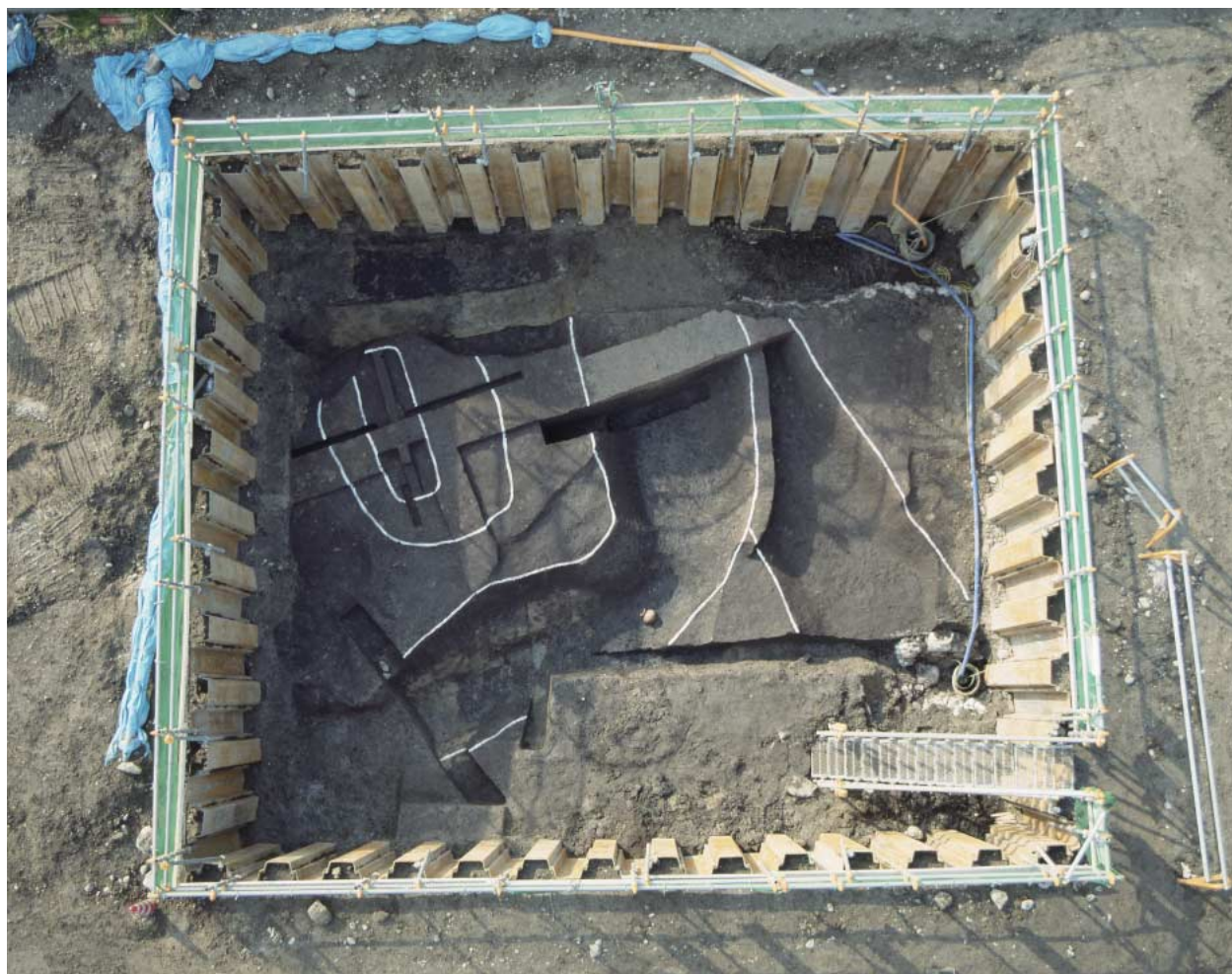


写真2-2-119 02Cf区1面全景（北より）

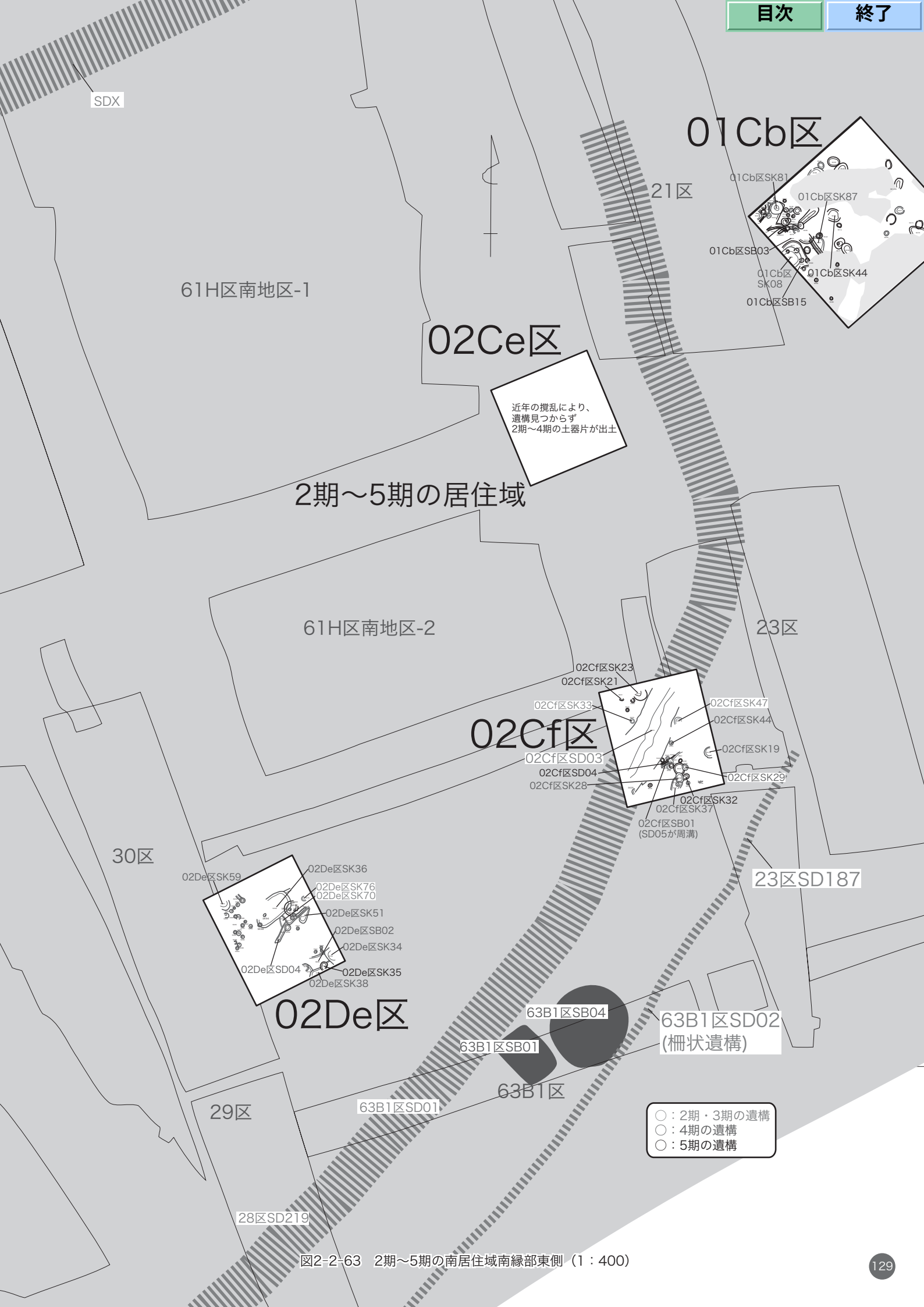


図2-2-63 2期～5期の南居住域南縁部東側 (1 : 400)



図2-2-64 6期の南居住域南縁部東側 (1:400)

B. 今回の調査成果

a. 弥生時代中期前半（2期～4期）の大溝02Cf区SD03（図2-2-63～図2-2-65）

02Cf区SD03は南居住域の2期～4期の溝63B1区SD01（30区SD219）と対応するもので、幅4.0m前後、深さ1.20m程（溝底の標高0.80m前後）の緩い丸底の溝で、埋土は下層が黒色～黒褐色シルトに2期・3期の土器が主体に出土する堆積、その上層に「貝層」として黒褐色シルトに少量の貝殻が混じるもので2期～4期の土器が多く出土する堆積、その上層にある中層は黒色シルトの下部に焼土や炭化物を少量混じるもので、2期～4期の土器が主体で（特に4期の土器が多く）、

6期の土器が少量入る堆積、上層が黒色～黒褐色シルトのもので6期の土器を主体に2期から7期の土器が出土する堆積で、上部を7期の方形周溝墓SZ01の周溝02Cf区SD01に掘り込まれている。また、SD03より新しい堆積であるSZ01内部は5期～6期の土器が主体に2期～4期の土器がやや少なく出土する。6期の土器が特に多い。このような状況から02Cf区SD03は2期・3期に掘削され、SD03貝層が堆積した後、4期の中でほぼ完全に埋没していた可能性が高く、5期には若干の窪地になっていた可能性があるが、6期にはSD03上部を居住域の遺構により完全に利用されていたものと考えられる。

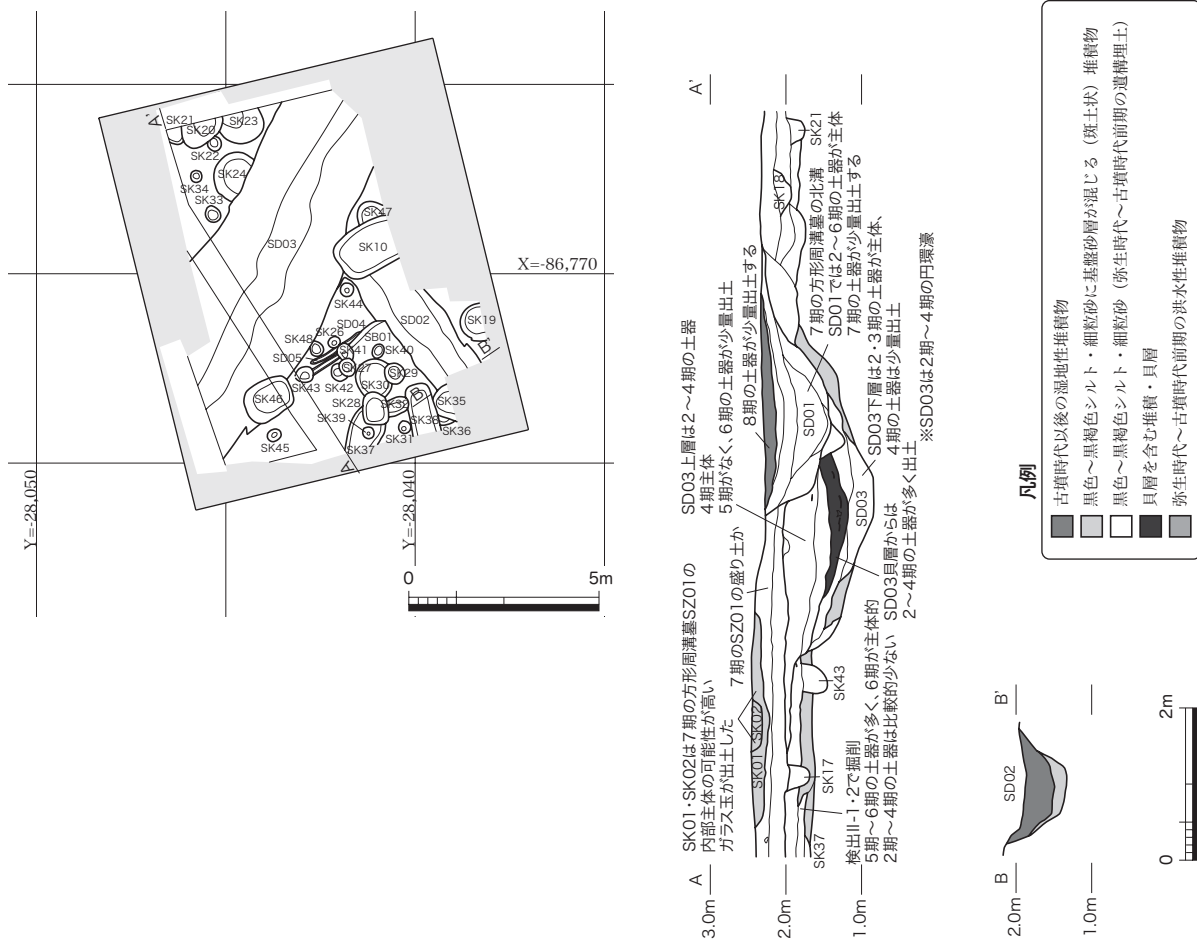


図2-2-65 02Cf区SD02・SD03（平面図1：200、断面図1：100）



b. 弥生時代中期（2期～6期）の南居住域南縁部（図2-2-63～図2-2-66）

2期～6期の居住域に係る竪穴住居や土坑が検出されている。主な遺構として、2期・3期の02De区SK70・SK76、4期の02Cf区SB01（SD05が周溝）・SK19・SK28・SK37・SK44、02De区SB02・SB05・SD04・SD05・SK34・SK36（平面隅丸長方形の竪穴住居状）・SK38・SK51・SK59、5期の02Cf区SD04（竪穴住居の周溝と思われる）・SK32・SK21・SK23、02De区SK35、6期の02Cf区SK10・SK18・SK18・他に土坑多数、02De区SB03・SB04・SD02（SK53と同一の遺構の可能性がある）・SD03・SK42・SK43（SK31と同一の遺構の可能性が高い）・他に土坑多数等がある。2つの調査区とも2期・3期の遺構は不明瞭で、その要因として両調査区とも6期の遺構が多く検出されていることから、後世の遺構形成により遺存していない可能性と02Cf区では先に述べた02Cf区SD03に関連して、SD03が機能している段階には同時併存する遺構はなく、SD03が埋没する4期に入り、遺構形成が始まった可能性が考えられる。4期と5期も遺構は存在するが少なく、続く6期の遺構が多数、深く掘削されている事が要因と思われる。

竪穴住居では02Cf区においてSB01（4期）とSD04を周溝とする竪穴住居（5期）がほぼ同位置において重複しており、方形状の平面形態が想定できる。02De区では6期のSB03が比較的大きい平面胴張り方形状の竪穴住居、同様にSD02とSK53が平面胴張り長方形の竪穴住居、SB04は幅0.15m程の周溝がある一辺3.5m前後の平面方

形住居である。他にも6期の土坑として短径2.5m前後の平面隅丸長方形土坑が数基検出されており、竪穴住居の可能性もある。4期の竪穴住居ではSB05が平面やや台形状の隅丸長方形のものがある。

土坑では02Cf区SK10は長径1.60m以上、短径1.25m、深さ0.55mの平面隅丸長方形平底の大型土坑で埋土は黒色シルトで上部には焼土や炭化物を含むもの、02Cf区SK18は長径2.10m、短径1.70m以上の平面隅丸長方形平底の土坑で埋土は黒色シルト、02Cf区SK21は径0.50m前後の平面円形状中型土坑で埋土は黒色シルト、02Cf区SK46は長径1.35m、短径1.00m、深さ0.55mの平面隅丸長方形平底の大型土坑で埋土は下層が黒色シルトに基盤砂層が含まれるもの、上層に黒色シルトに焼土や炭化物が含まれるものであった。02De区SK34は調査区東壁沿いに半分検出された径1.50m以上、深さ0.45mの平面隅丸方形状丸底の大型土坑で埋土は下層が黒色シルトに基盤砂層の小ブロックと少量の炭化物を含むもの、上層が焼土・炭化物と黒色シルトがラミナ状堆積をする。02De区SK42は調査区北壁沿いに検出された径1.95m以上の大型平底の土坑で埋土は下層が黒色シルトに基盤砂層が混じるもの、上層が黒色シルトの堆積であった。02De区SK43は上面で検出したSK31と同一の土坑と考えられるもので、径1.9m～2.1m以上の平面円形丸底の大型土坑で埋土は黒色シルトに暗灰黄色～オリーブ褐色細流砂の基盤砂層と思われる小ブロックが少量入るもので最下層には炭化物も少量混じる。



写真2-2-120 02De区4面全景（南より）



写真2-2-121 02De区SK43（西より）

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果

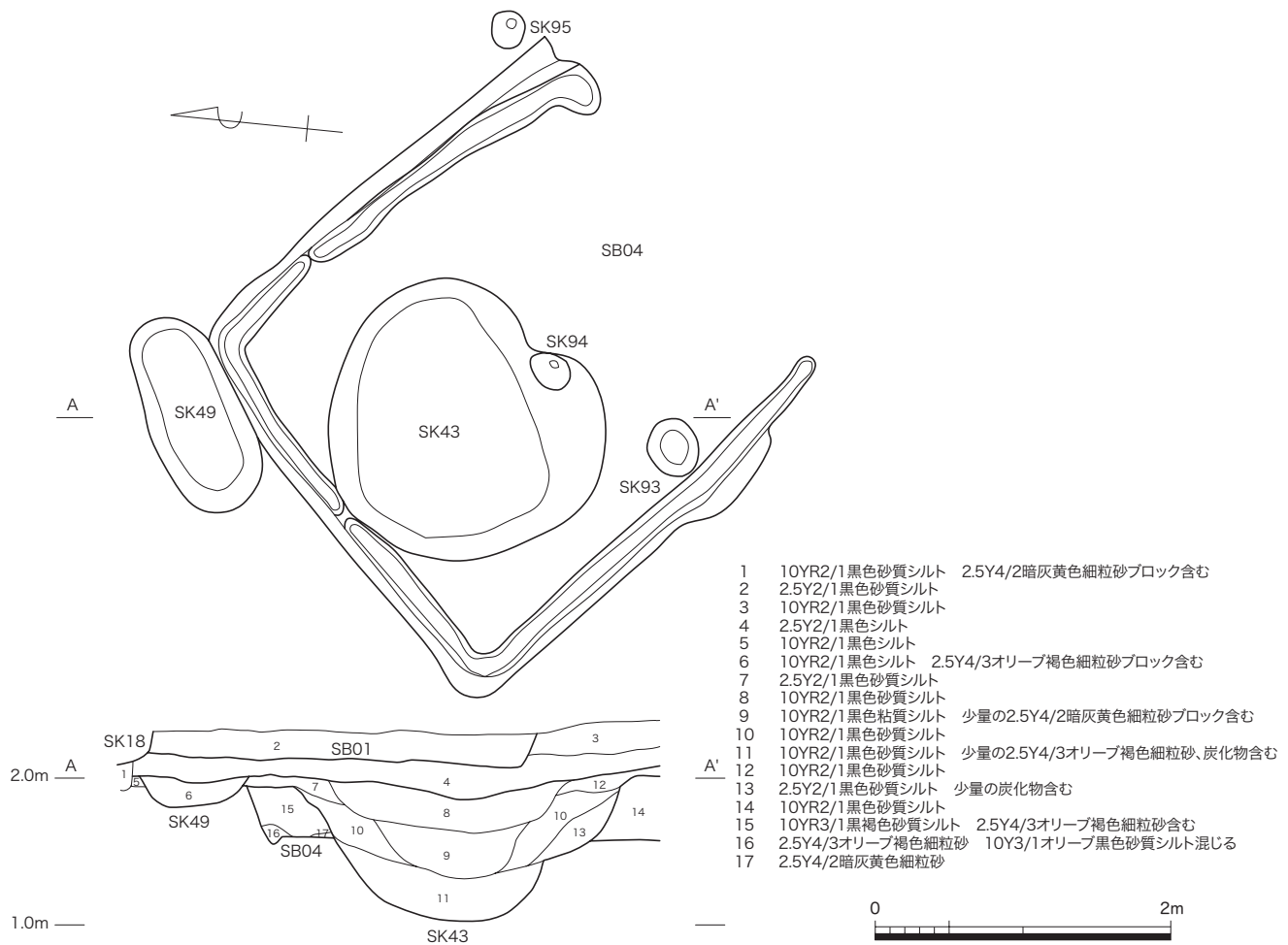


図2-2-66 02De区SB04とSK43の関係 (1 : 50)



写真2-2-122 02Cf区3面全景（北東より、写真中央が2期～4期の環濠SD03）



c. 弥生時代後期（7期・8期）の内環濠02De区SD01（[図2-2-67](#)・[図2-2-68](#)）

7期の02De区SD01は幅4.0m前後、深さ1.30m（溝底の標高0.05m～0.10m前後）で、南居住域の内環濠、財団報告においてSDXV・SDXVI（23区SD177・29区SD178）と報告された溝と対応するもので、SDXVが7期、SDXVIが8期に位置付けられている。これは02De区SD01の中においても確認でき、溝の横断面上ではあるが、堆積上新しい断面やや緩い「V」字状の形態の溝の堆積がSDXVIに、その下層にある断面逆台形状の溝の堆積がSDXVIに対応するものと考えられる。SDXVIに対応する断面やや緩い「V」字状の溝の堆積では、上層に古墳時代以降の湿地堆積物と思われる黄灰色～褐灰色シルト（最下部に薄い暗褐色シルト層）、下部には植物遺体を多く含む堆積があり、下層と最下層には黒色シルトが堆積している。この下層には7期～8期の土器が出土し、最下層からは7期後半までの土器が出土する。SDXVに対応する断面逆台形状の溝の堆積では、黒色シルト層と黒色シルトと基盤砂層の小ブロックが混じる層の互層堆積が確認できた。この

古い溝の堆積からは7期までの土器が出土する。今回の発掘調査時には、この溝を時期の異なる2条の溝という認識ではなく、1条の溝の堆積として断面やや緩い「V」字状の溝の堆積を7期の溝として、その外側にみえた黒色シルト層と基盤砂層を含む黒色シルト層の互層部分を溝の掘り方と溝の裏込め土として認識して調査した。この溝と同じ状況が01Db区SD01においても考えられた。よって02De区SD01においても最下層（断面「V」字状の形態）と下層（断面丸底の形態）の堆積上、再掘削の可能性があり、結論としては同様な解釈が可能であるが、溝の形態としては異なる性格のものといえる。

02De区の他の遺構では、7期の平面隅丸方形の竪穴住居が1棟あり、短径5.0m前後で埋土は黒色シルト、竪穴掘り方に沿って幅0.20m前後、深さ0.15m前後の周溝がめぐる。炉等は検出できなかったが、支柱穴と思われる径0.40m前後の平面円形の小型土坑2基（02De区SK10・SK11）がある。内環濠に先行して存在するものであろうか。02De区SK02・SK03・SK14・SK15は7期～8期の平面不整円形～楕円形の大型土坑である。



写真2-2-124 02Cf区SD01下層土器等出土状況（西より）



写真2-2-125 02Cf区SD01下層土器出土状態（北西より）

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果

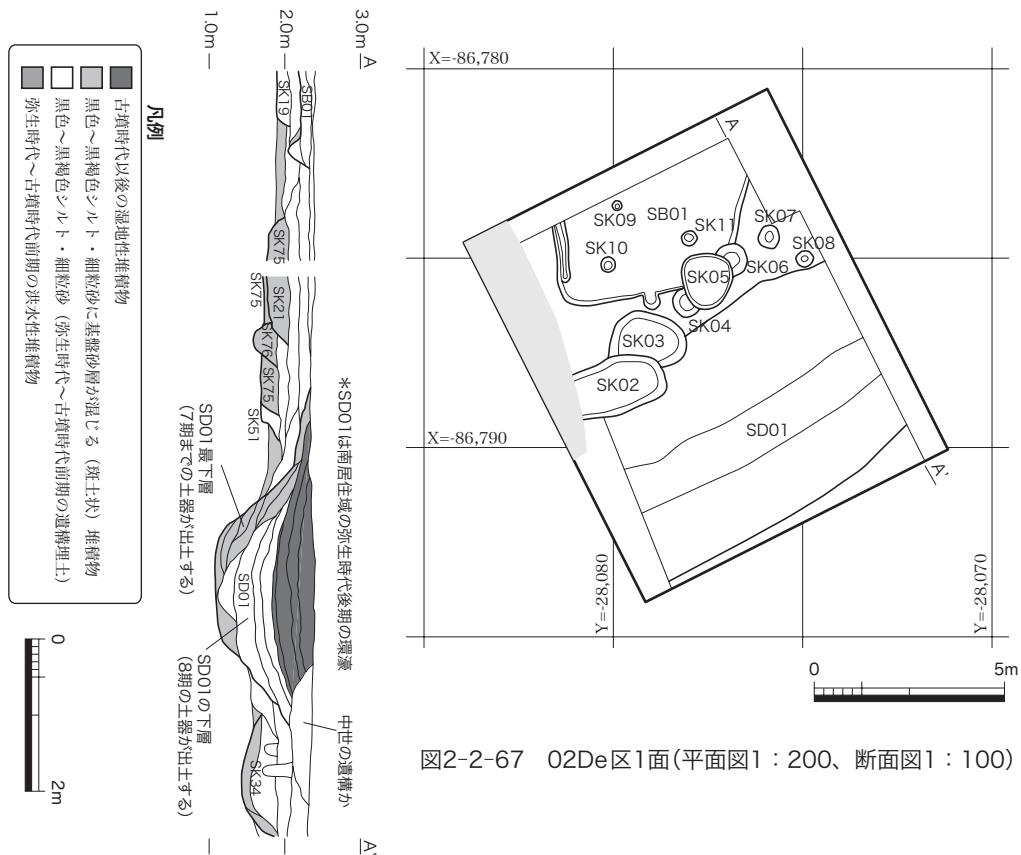


図2-2-67 02De区1面(平面図1:200、断面図1:100)

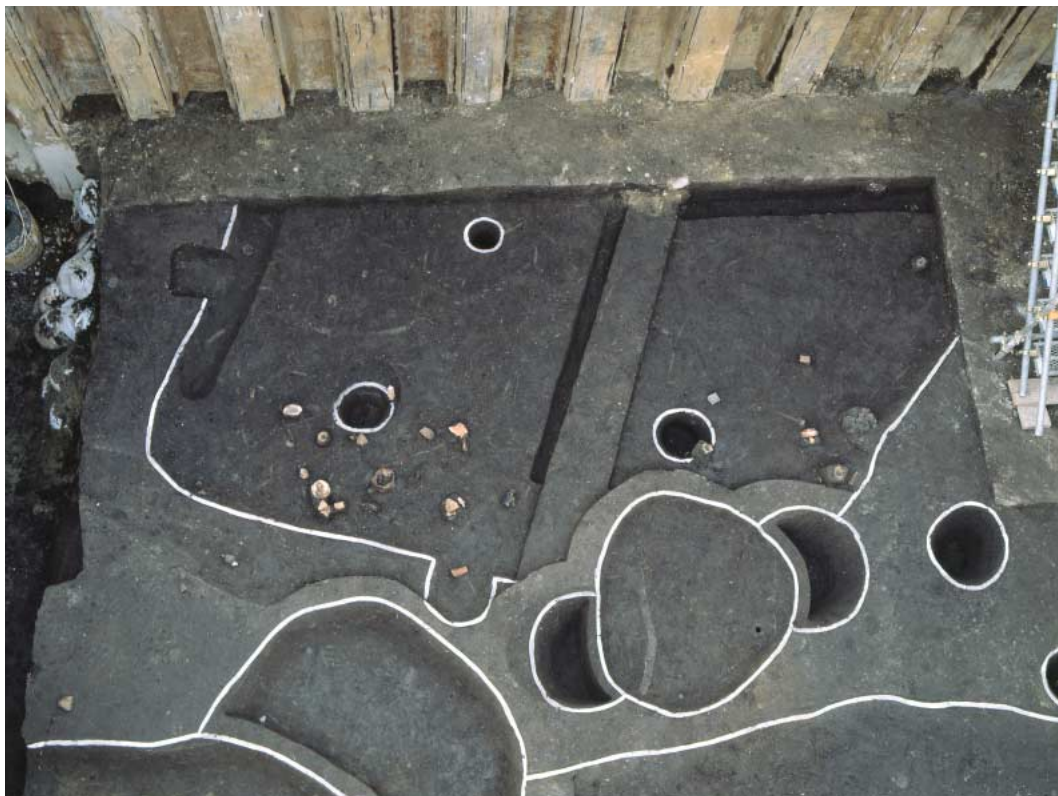


写真2-2-126 02De区SB01（南より）



d. ガラス小玉を副葬していた方形周溝墓（02Cf区SZ01、[図2-2-68](#)・写真2-2-123）

02Cf区SZ01は7期の南居住域の内環濠SDXV(23区SD177・29区SD178)と外環濠SDVIII(23区SD188・29区SD177)に挟まれた中にある方形周溝墓で、02Cf区SD01(北溝)とSD02(東溝)に囲まれた墳丘(SZ01)内に、内部主体と思われるSK02があり、埋土からガラス小玉が出土した。SK02はSK01(長径3.2m以上、短径2.5m、深さ0.20m前後の平面楕円形平底の土坑)の内部にある平面隅丸長方形平底の土坑で、長径2.30m、短径0.80m、深さ0.13mをはかる。埋土はSK02が黒色シルトに暗灰黄色細流砂の小ブロック(基盤砂層かSK01の埋土の影響があるもの)を含むもの、SK01が黒色シルトと暗灰黄色細流砂(基盤砂層か)の班土であった。SK02自体が何らかの構造物の痕跡の可能性もあるが、木棺と思われる痕跡は残っていなかった。SK02は浅いので、

方形周溝墓の墳丘SZ01は本来SK02の検出面標高2.40mより1m程は高いものであったと考えられ、墳丘の盛り土も全く残存していなかった(SZ01は6期の遺構埋土が主体と思われる)。周溝であるSD01・SD02も本来は深さ1mをはるかに超える深いものであったと思われる(検出状態でSD01が幅2.5m、深さ0.90m、SD02が幅2.0m、深さ0.80m)。SD01とSD02の埋土は下層が黒色～黒褐色シルト(7期の土器が少量出土、出土する土器の主体は6期以前のもの)、上層に古墳時代以後の湿地性堆積物と思われる灰黄褐色シルト(少量の7期～8期の土器が出土)が堆積していた。

尚、02Ce区は後世の攪乱により、弥生時代以後の遺物包含層がほとんど残存しておらず、2期～4期、6期～8期の土器がコンテナ1箱分出土したのみであった。



写真2-2-123 02Cf区1面全景(北より、7期の方形周溝墓)

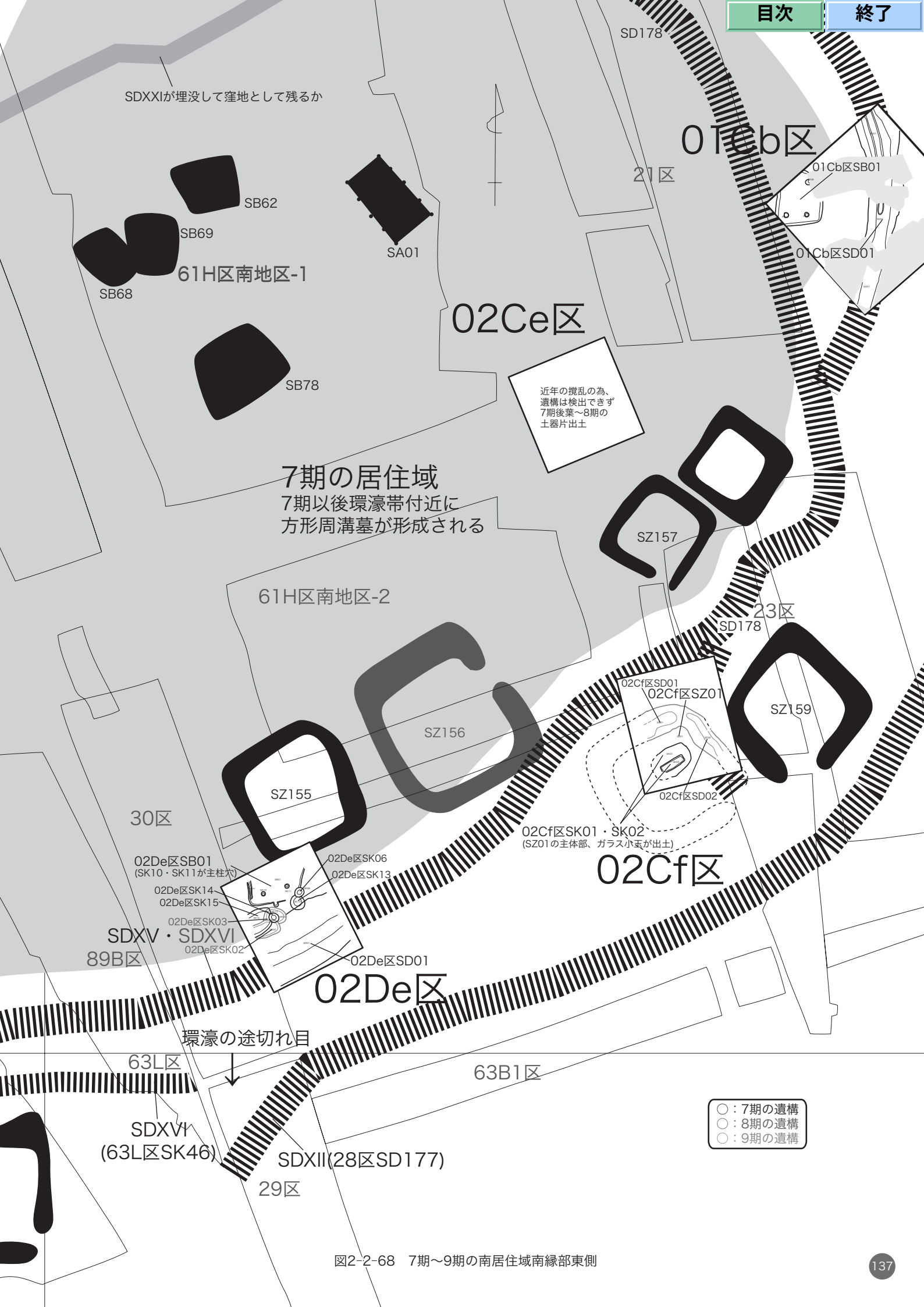


図2-2-68 7期～9期の南居住城南縁部東側



(10) 南墓域北側

A. 位置とこれまでの成果……………

南居住域の南に見つかっていた南墓域北側の地点にあるもので、98Ca区・99Cd区～99Cf区・01Dd区～01Df区・02Cg区の調査区がある。

これまでの調査では、01Dd区・01De区の西と01Df区の東の間の部分（幅8m程）を南北に26区が、01Df区の西を北西から南東にかけて26区（報告書で2つの調査区は1つの調査区として報告された為、同じ調査区となっている）の調査区がある。これらの調査では、5期以前の溝として県報告においてある南居住域の南側を北東から南西にのびる大溝31区SD222・SD223と28区SD219・27区SD211・27区SD212の南側に位置する南居住域の外側とされる部分で、2期から4期にかけての時期と思われる大小の土坑（4期と

報告された平面円形の大型土坑26区SK228等は井戸の可能性あり）と2期～5期にかけての方形周溝墓と思われる溝（土坑と報告されているものが多い）が多数確認されており、弥生時代中期前半を中心に墓域が展開する事が想定されている。

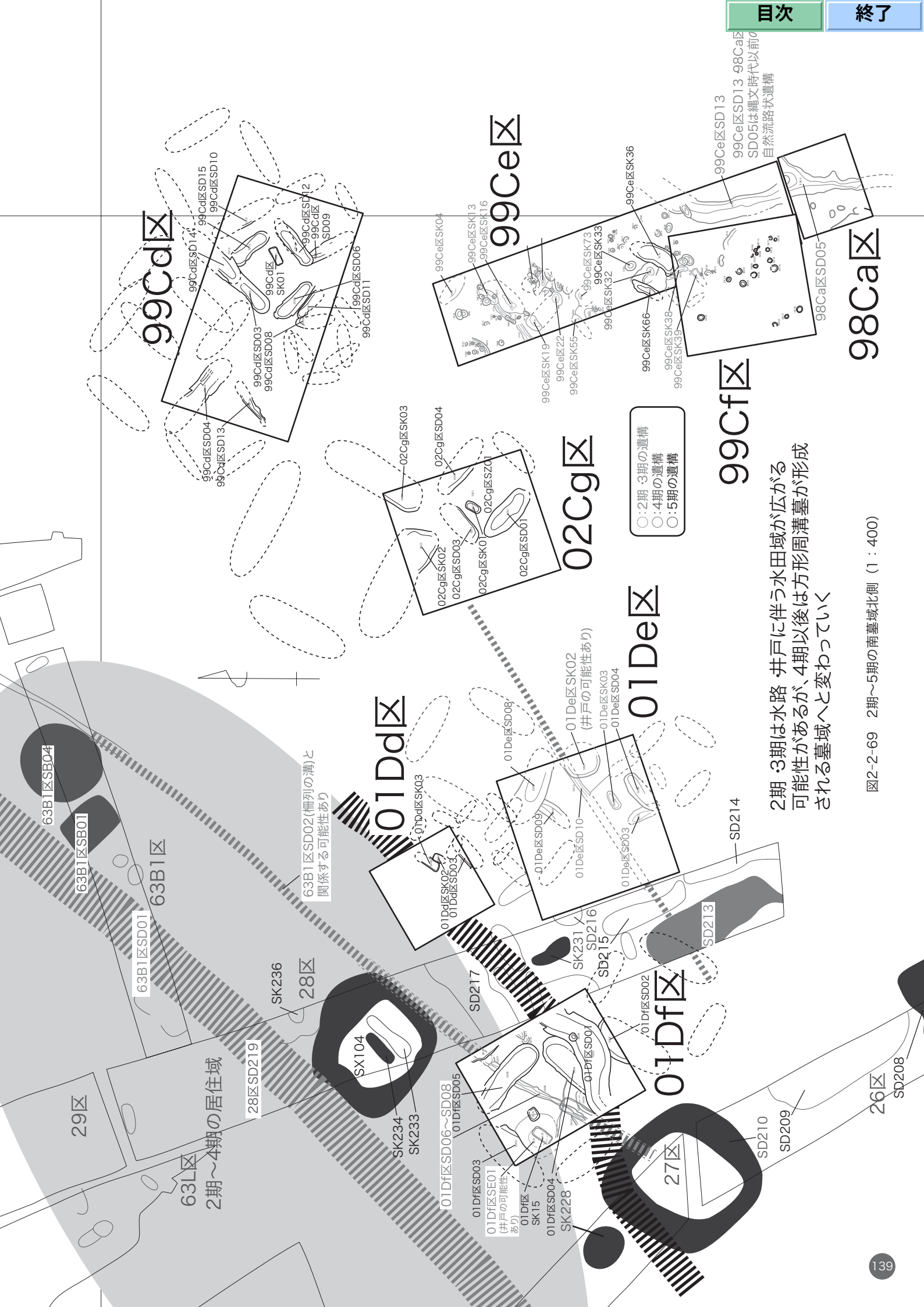
B. 今回の調査成果……………

a. 弥生時代以前（1期以前）の流路（[図2-2-69](#)）

99Ce区南側から98Ca区にかけて、弥生時代の遺物包含層であるオリーブ黒色シルトの下にて、自然流路と思われる落ち込み99Ce区SD13（98Ca区SD05）を長さ約18m検出した。埋土は灰オリーブ色細粒砂で幅3m以上、深さ0.20m程（溝底の標高0.50m前後）、土器片が1点出土した。層位では縄文時代の遺構である可能性が高い。



写真2-2-127 縄文時代の流路、98Ca区SD05（南より）



2期・3期は水路・井戸に伴う水田域が広がる可能性はあるが、4期以後は方形周溝墓が形成される墓域へと変わっていく

図2-2-69 2期～5期の南墓域北側 (1 : 400)



b. 弥生時代中期前半(2期・3期～4期)の居住域(図2-2-69・図2-2-70)

2期・3期の可能性ある遺構が検出できたのは99Ce区と01De区と01Df区がある。遺物は出土していないが、99Ce区の大小の土坑群(99Ce区SK05～SK73、その中で99Ce区SK14～SK16・SK19・SK22・SK26～SK28・SK32～SK33・SK36・SK38・SK39・SK55・SK66・SK73を除く)を多数検出したが、オリーブ黒色シルトと基盤砂層が混じるような埋土で不明瞭なものであった。01De区では、SD10は幅0.60mの東北東から西へ流れる溝がある。01Df区では調査区西側にて検出したSE01があり、平面円形断面擦り鉢状の丸底の土坑で、井戸の可能性もある。径4.0m前後、深さ1.25m(底の標高0.60m)で、埋土は最

下層に基盤砂層と思われる灰色中粒砂、下層に黒色～オリーブ黒色シルト、上層に灰色～灰オリーブ色シルトが堆積していた。南居住域の南側に上層の堆積時には、あまり人為的な影響がない環境であった状態で埋没した可能性が高い。このような井戸状の土坑は27区においてSK228(4期～5期)として調査されたものがあり、類似した性格の遺構の可能性はある。

続く4期には99Ce区SK28(径1.5m程)、SK32(径約3.0m)があり、平面円形丸底の土坑、01De区SK02は径3.1m程の平面円形丸底の大型土坑、01Df区SD08(埋土は黒褐色シルトが主体、一連の遺構としてSD06・SD07・SK16も含まれる)は北東から南西にのびる幅1m前後の溝として南居住域の外を流れる区画溝の可能性はある。

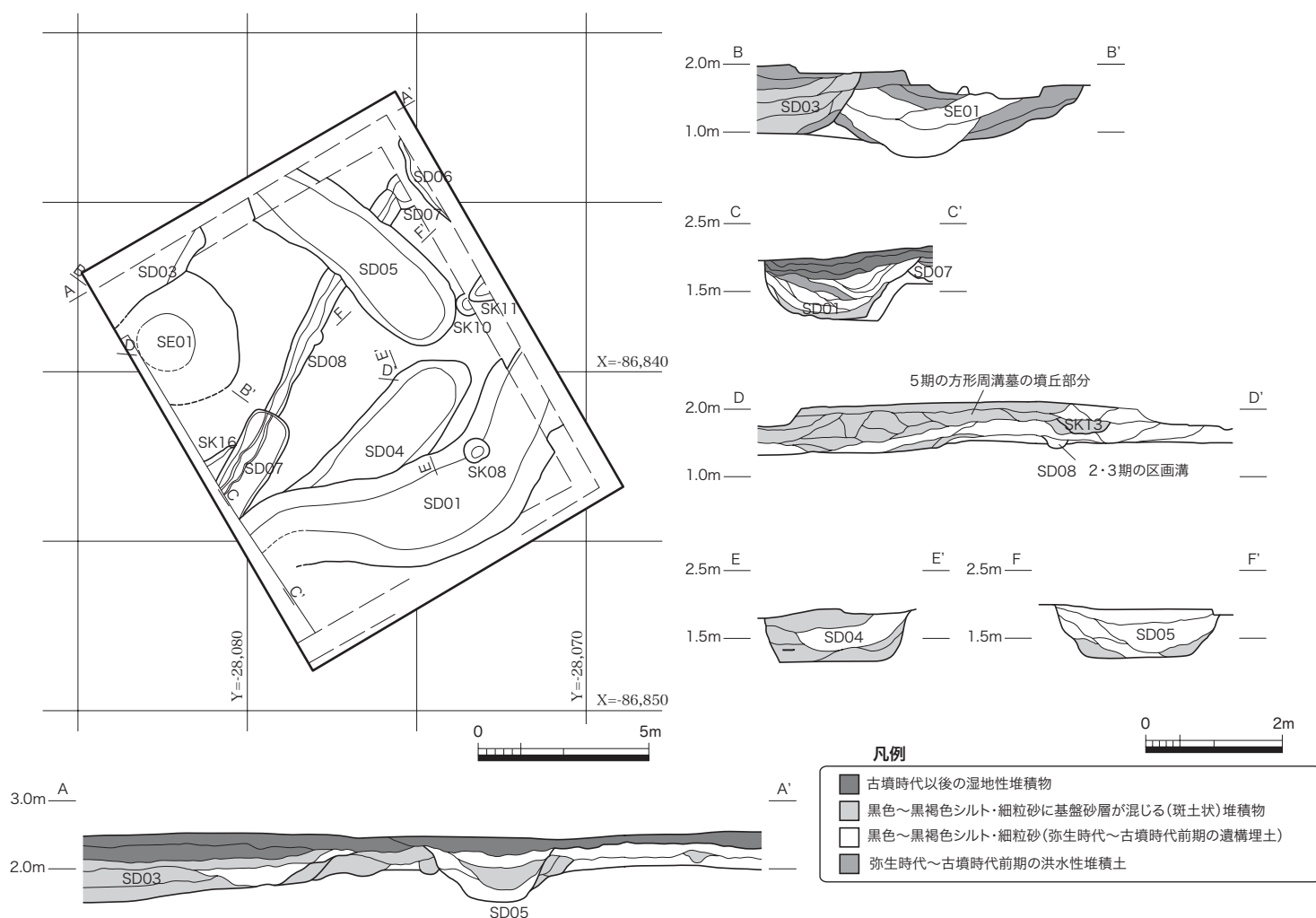


図2-2-70 01Df区における2期～6期の遺構(平面図1:200、断面図1:100)

c. 弥生時代中期中葉（2期～5期）以前の南墓域（図2-2-69・図2-2-70）

2期・3期にさかのぼる可能性がある方形周溝墓は99Cd区において4基、6期の遺構に掘り込まれる形で検出した99Cd区SK04（東溝）とSK15（南溝）、SK16（北溝）とSK27（西溝）、SK19・SK22（東溝）とSK55（南溝）、SK38（西溝）とSK39（南溝）は周溝の4隅が途切れる方形周溝墓（一辺5m程の墳丘のもの）の可能性があるので、溝と認識する場合軸線がほぼ同じ遺構群として認識できた為、遺構の可能性を指摘する。埋め土はオリーブ黒色シルトに基盤砂層が混じるものである。しかし、調査時にはあまり明瞭な遺構として調査しておらず、人為的遺構として把握するかの問題がある。その他には01De区の南側に検出されたSK03（北溝）とSD03（西溝）に囲まれた1基がある。2期・3期の方形周溝墓はいずれも4期以後の遺構により掘り込まれているものを抽出しており、遺物はほとんど出土していないが、5期以後の墓域の外側に分布する点は興味深い。

4期の方形周溝墓は01De区の3基の存在が推定できるのみで、続く5期の方形周溝墓の外側にある感が強い。SD09の北側に1基、SD09を掘り込む形で検出できたSD08の北東側に1基、01De区SD04の南側に1基が指摘できる。墳丘の規模も不明、SD08に伴うものが溝の規模（幅2.5m程）からしてやや大きい。

5期の方形周溝墓は15基以上推定され、99Cd区と02Cg区がある東側と01Df区のある西側の2群の造墓活動が展開する。4期の方形周溝墓の溝に比べて幅が1.5m～2.0mあり、墳丘の規模も一辺5m以上（墳丘が一辺8m～10m程の大きさのものまである）あるものが多い。99Cd区西側に

て検出できたSD04（東溝）とSD13（南溝）に囲まれた1基（SD04の東側にも存在する可能性がある）、99Cd区中央にて検出できたSD03（北溝）・SD06（西溝）・SD12（南溝）・SD15（東溝）に囲まれた1基（墳丘は一辺5.2m前後）、その北側にてSD14（南溝）に伴う1基、東にSD10（西溝）に伴う1基、南に接してSD09（西溝か東溝）、西に接してSD08（東溝）に伴う1基とSD11（東溝）に伴う1基が重複する。99Cd区中央付近にて検出できたSD36（南溝）・SK33（東溝）・SK66（北溝）に囲まれた1基（墳丘は一辺3m程）、01Dd区南東隅にて検出できたSK03やSD03（北溝か）に伴う1基、01Df区北西側に検出できたSD03（北溝）・SD04（南溝）・SD05（東溝）に囲まれた1基（墳丘は一辺8m程）、01Df区南隅に検出できたSD02に伴う1基、02Cg区東側に検出できたSD01（西溝）・SD03（北溝）・SD04（東溝）に囲まれた02Cg区SZ01（墳丘は一辺5.0m～5.5m）、その北に隣接してSK02（西溝）とSK03（南溝）に囲まれた1基がある。

内部主体の可能性のあるものは99Cd区SD03（北溝）・SD06（西溝）・SD12（南溝）・SD15（東溝）に囲まれた中にあるSK01が長径1.70m、短径0.70mの隅丸長方形平底の土坑、01Df区SD03（北溝）・SD04（南溝）・SD05（東溝）に囲まれた中にあるSK14が長径1.15m、短径0.90mの隅丸方形の土坑、SK15が長径1.87m、短径0.96mの平面隅丸長方形平底の土坑、02Cg区SZ01内の北側にあるSK01が長径1.50m、短径0.75mの平面楕円形やや丸底の土坑（埋土黄灰色中粒砂と灰オリーブシルト）がある。木棺等の施設の痕跡は確認できなかった。



写真2-2-128 01Dd区1面全景（西より）



写真2-2-129 IAS01De区2面全景（南より）



写真2-2-130 01Df区3面全景（南より）



写真2-2-131 02Cg区SZ01（北より）



写真2-2-132 99Cd区1面全景

※5期以前の方形周溝墓は墳丘をめぐる周溝が墳丘隅部にて途切れるもの。時期が新しくなる程、溝が大きくなる傾向があった。

d. 弥生時代中期後葉（6期）の墓域（図2-2-71・図2-2-72）

6期の方形周溝墓は5期の方形周溝墓と重複する部分もあるが、全体には周囲に形成されている傾向があり、99Cd区東端にてSD07（北溝）とSK02（西溝）に囲まれた1基、99Ce区南側にてSD11（北溝）とSD06（西溝）に囲まれた1基（99Ce区SZ03）、99Ce区SD10（東溝）・99Ce区SD09（99Cf区SD02が対応する、南溝）・99Cf区SD05（西溝）に囲まれた99Ce区SZ02（99Cf区SZ02と同一）1基、99Ce区SD05（東溝）・99Ce区SD04（南溝）・99Cf区SD01（西溝）に囲まれた99Ce区SZ01（99Cf区SZ01と同じ）、01Dd区南西隅にて検出できた01Dd区SD01（東溝）と27区SD217（北溝）、01De区SD01の上層にあるSD状の堆積（南溝）に囲まれた1基、その東に接して01Dd区SD02（西溝）とSK01（北溝）に囲まれた1基、01De区SD01（東溝）とSD02（南溝）に囲まれた1基、その東に接して01De区SD07に伴う1基、

01De区南東端にて検出できた01De区SD05（北溝）とSD06（西溝）に囲まれた1基が推定できる。全体を確認できたものはないが、墳丘は1隅に陸橋があるタイプと思われ、墳丘規模が一辺5m以下のものとして01Dd区東側のものと01De区南西隅のもの、99Ce区SZ02（99Cf区SZ02）のような一辺5m前後のもの、99Ce区SZ01（99Cf区SZ01）のような一辺8m程のものからなる比較的小型から中型の規模の方形周溝墓からなる墓群といえる。内部主体と考えられるものは99Ce区SZ01（99Cf区SZ01）の内部にて検出された99Cf区SK01（長径2.00m、短径0.90m）とSK02（長径1.75m、短径0.90m）があり、どちらも平面楕円形で深さ0.15m～0.20mのやや丸底の土坑で、木棺等の痕跡は確認できなかった。埋土はオリブ黒色シルトである。その他には99Ce区SZ03の西溝SD06の上から掘り込まれた99Ce区SK01（径1.0m程）には土器棺と考えられる壺が埋納されていた。

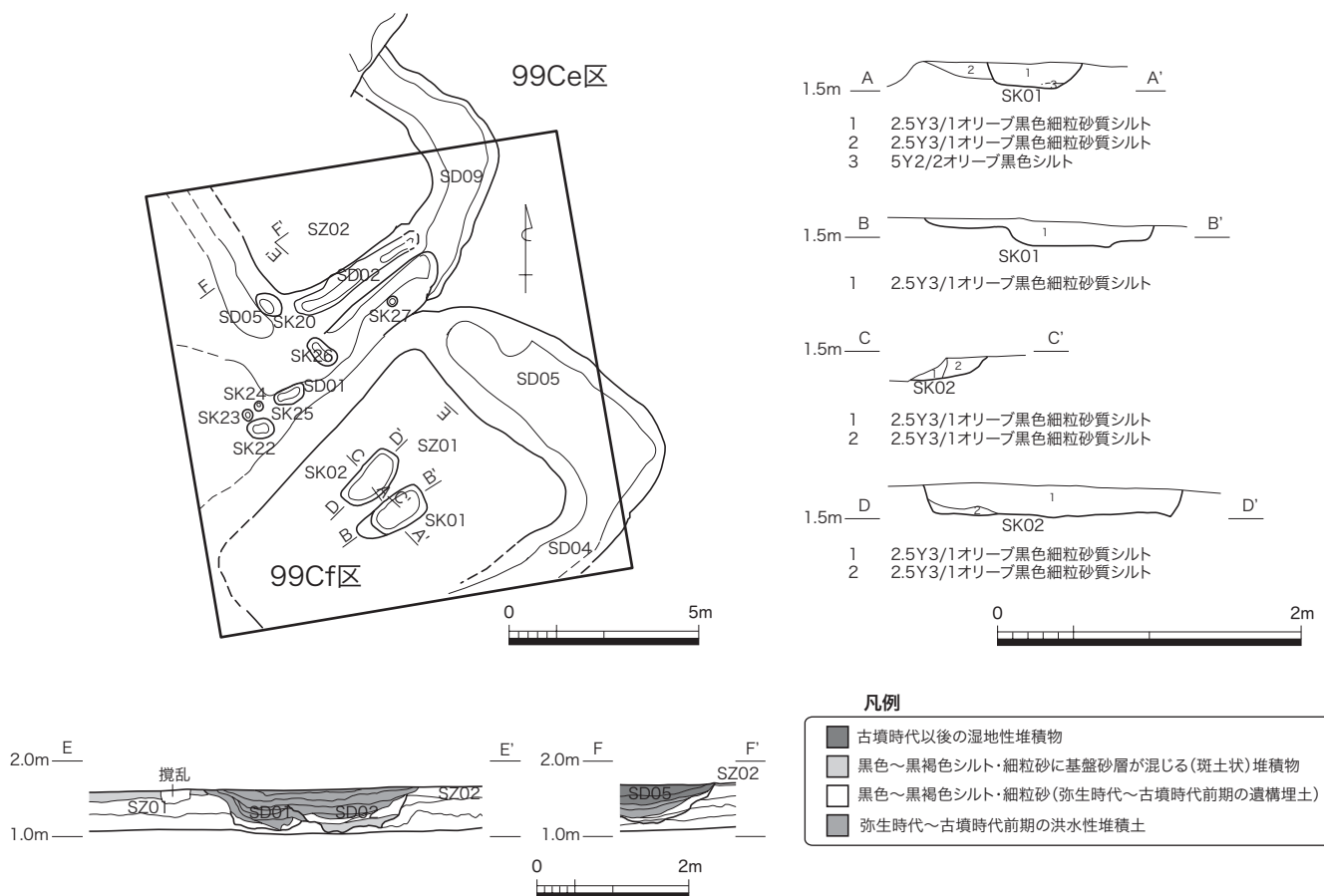
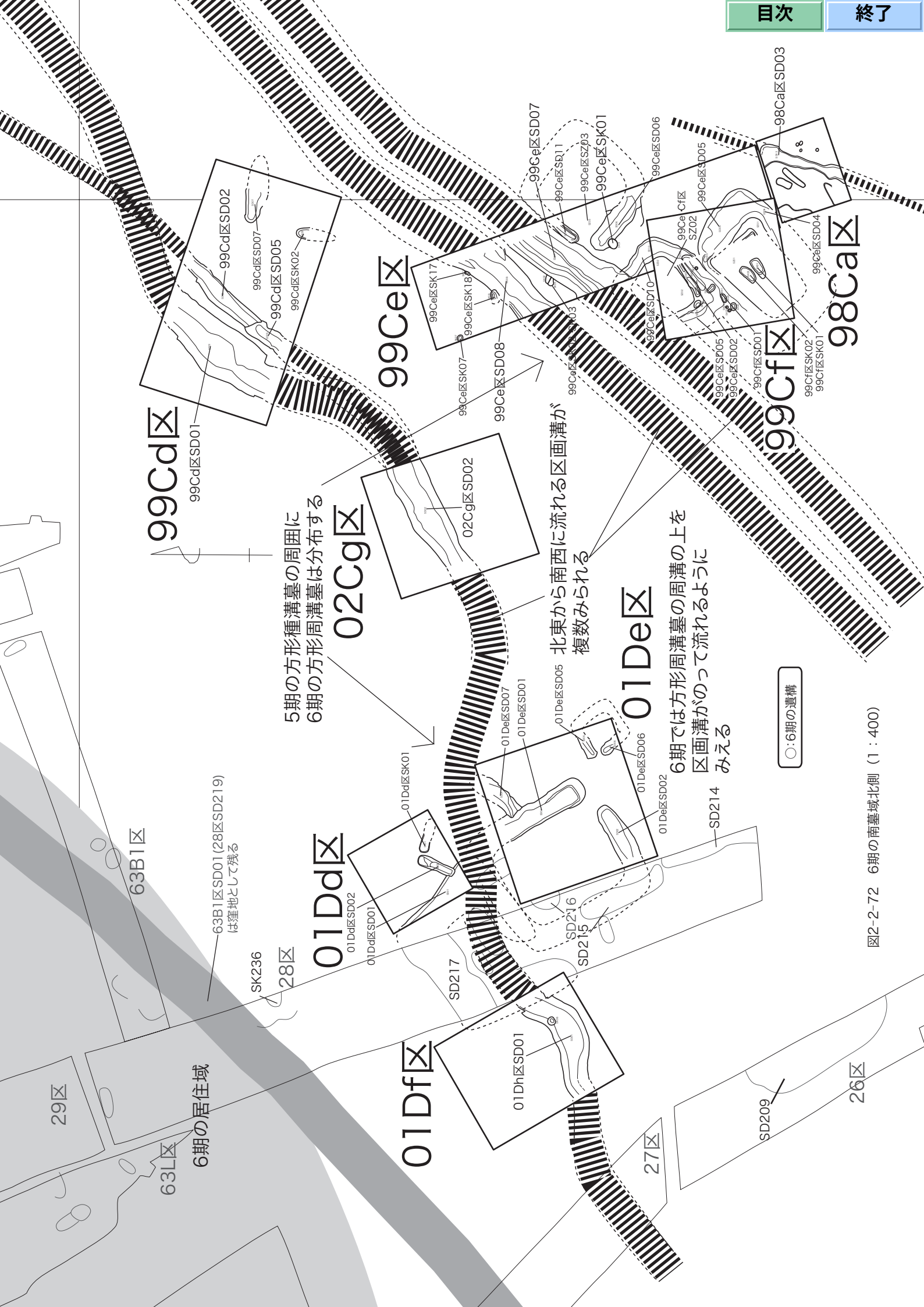


図2-2-71 99Cf区SZ01・SZ02（平面図は1：200、断面図は1：50と1：100）



5期の方形種溝墓の周囲に
6期の方形周溝墓は分布する

北東から南西に流れる区画溝が
複数みられる

6期では方形周溝墓の周溝の上を
区画溝がのって流れるように
みえる

○:6期の遺構

図2-2-72 6期の南臺域北側 (1:400)



写真2-2-133 南からみた99Ce区の墓域（南より）

※6期の方形周溝墓の墳丘は写真2-2-133のものより1m前後以上高い墳丘をもつ事が想定できるので、写真でみえるものより立体感に富むものであったと考えられる。



写真2-2-134 99Cf区1面全景（北より）



写真2-2-135 99Cf区SK01・SK02（西より）



e. 弥生時代中期後葉（6期）の大溝（図2-2-70・図2-2-72・図2-2-73）

6期には南居住域の南外を北東から南西にはしる大溝が5条検出された。これらの溝はやや蛇行したり、方形周溝墓の周溝のように屈曲したりしない点から用水路や区画溝のような機能を推定するもので、大型方形周溝墓に伴う周溝の可能性は残るものである。ただし、調査できた範囲が限られている為、これらの溝の軌道が不明な点が多い。以下その特徴を述べる。

最も北側を流れているのは01Df区SD01で01Df区南側にて東から西へやや蛇行して流れる溝として検出できた。西と東への軌道は不明であるが、27区の中央部付近の落ち込みに対応する可能性が高い。溝の幅は3.0m前後、深さ1.30m前後（溝底の標高1.10m）で、埋土は最下層がオリブ黒色シルトに基盤砂層を多量に含む斑土、下層が黒色～オリブ黒色シルト、上層を灰色シルトが覆っていた。その南を流れる99Cd区SD01は99Cd区西側にて検出された幅4.0m前後、深さ0.80m（溝底の標高0.68m、調査区南壁で0.20m）丸底の溝で、下層が黒色～オリブ黒色シルト、上層が灰色～灰オリブ色中粒砂・シルトが堆積していた。このSD01の東に0.8m程の位置にほぼ並行して99Cd区SD02・SD05があり、幅0.80m～0.90m、深さ0.75m前後（溝底の標高1.00m）丸底の溝で埋土は灰色シルトとオリブ

黒色シルトが互層になる堆積に炭化物が少量入っていた。溝の上部は方形周溝墓の周溝SD03と同時に灰色シルトによって覆われていた。この99Cd区SD02の溝のつながる可能性のある溝は、02Cg区SD02があり、幅3.0m前後、深さ0.80m（溝底の標高0.95m）丸底の溝で、埋土は黒色シルトが堆積していた。この02Cg区SD02は溝底の標高から考えると99Cd区SD02・SD05に対応する可能性が高いが、溝の規模から考えると99Cd区SD01に対応する可能性が高い。西の調査区では確認できていない。最も南側を流れる溝として99Ce区SD07とSD08があり、SD07は6期の方形周溝墓99Ce区SZ03の北溝SD11埋没後の掘削である。北側の99Ce区SD08は幅3.4m前後、深さ0.70m（溝底の標高0.80m前後）、南側の99Ce区SD07は幅4.0m前後、深さ0.90m（溝底の標高0.55m前後）で、両溝の断面は緩い逆台形で北肩は直線的な法面であるが、南肩側には底から0.30m付近に幅狭なテラス状部分があり、2段掘り状に観察できた。99De区SD07は99Cf区の北西隅を通り（99Cf区では溝底が標高1.20m前後）、南西にのびる。この2条の溝の内1条は99Da区SD01に対応する溝と考えられる。両溝の埋土は最下層に基盤砂層の斑土状の堆積が、下層にオリブ黒色シルト、上層に洪水性堆積と思われる黄灰色～灰色の細粒砂・中粒砂が覆っていた。

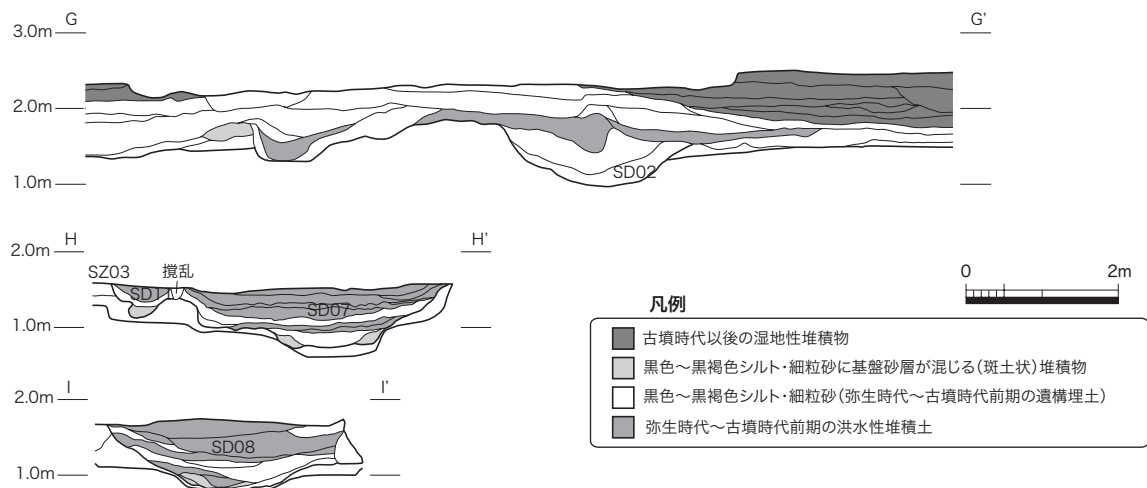


図2-2-73 南居住域の南外を流れる大溝断面図
(1:100、上図は02Cg区SD02他、中図は99Ce区SD07、下図は99Ce区SD08)



写真2-2-136 99Ce区SD07・SD08 (西より)



写真2-2-137 01Df区SD01 (西より)



f. 古墳時代前期（9期）の溝（[図2-2-74](#)）

9期の遺構として、99Ce区北西隅にて検出できたSD03と南側にて検出したSD02とSD01（SD02に直行する溝で、98Ca区SD01につながる）がある。どちらも幅1.0m～1.2m前後、深さ0.20m～0.30mの丸底の溝で、方形状にめぐ

可能性が高い。99Ce区南側のSD01とSD02に囲まれる範囲は15mを超える可能性が高く、古墳の周溝と考えるには溝が浅く、またSD03とも軸線が一致しない。何らかの区画溝であろうか。松戸I式の土器が出土している。



写真2-2-138 99Ce区SD02（南東より）



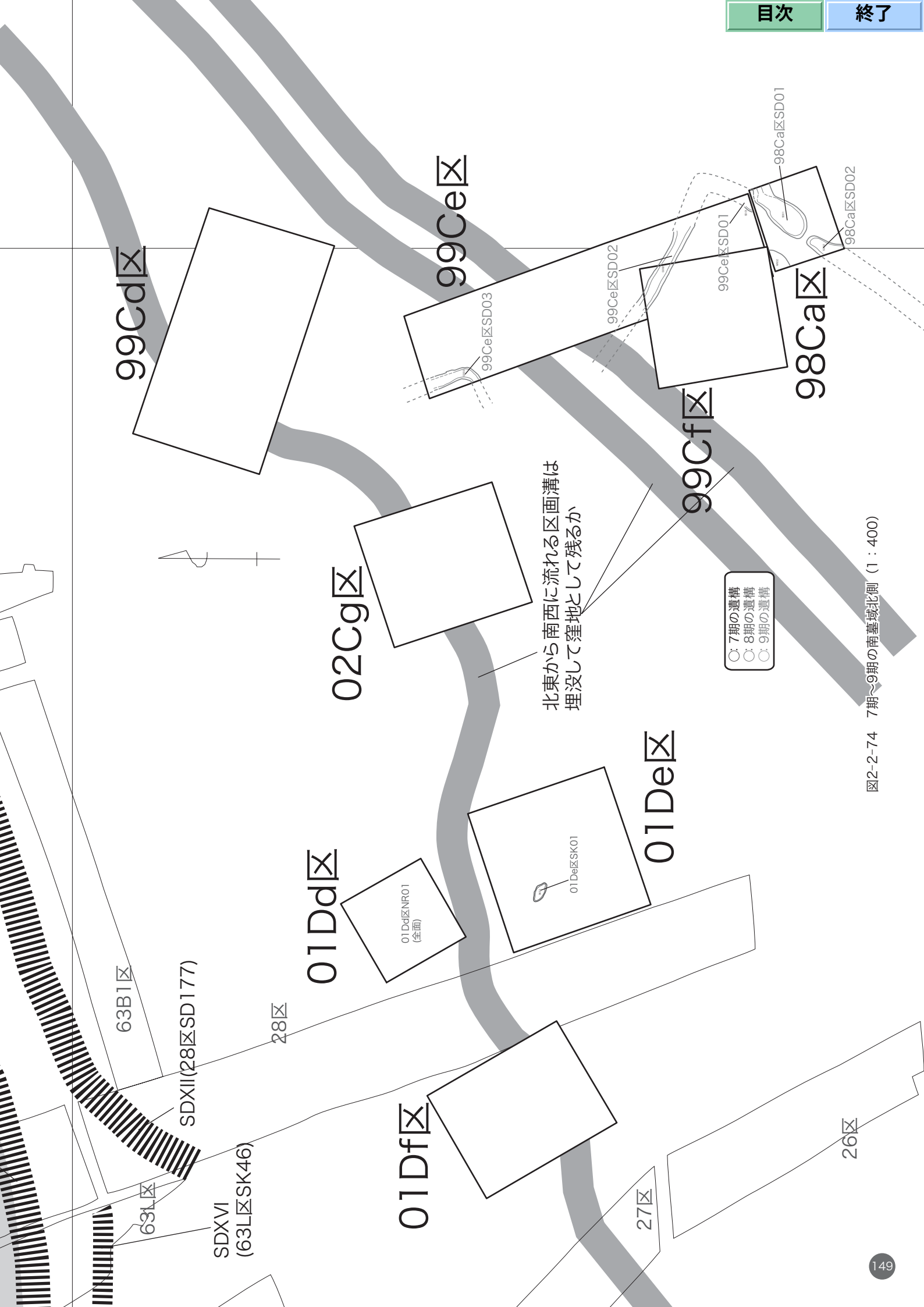
写真2-2-139 99Ce区SD03（南東より）



写真2-2-140 98Ca区SD01上層土器出土状況（南西より）



写真2-2-141 98Ca区SD01・SD02（南東より）





(11) 南墓域南側

A. 位置とこれまでの成果……………

南居住域の南に見つかった南墓域南側の地点にあるもので、98Cb区・98Cc区・99Cg区・01Dg区～01Di区・03Cb区の調査区がある。

これまでの調査では、01Dh区の西の部分を北北西から南南東に26区（幅8m程）が、99Da区・01Di区の西26区の南を北北西から南南東にかけて25区の調査区がある。これらの調査では、県報告において、4期以後（特に8期）の方形周溝墓と思われる溝（土坑と報告されているものが多い）が多数確認されており、弥生時代中期中葉から古墳時代前期前半を中心に墓域が展開する事が想定されており、25区SD194は時期不明とされているが、朝日遺跡の南限を画する溝として評価されてきた。

B. 今回の調査成果……………

a. 弥生時代中期後葉（6期）の南墓域南側の展開（図2-2-75・図2-2-76）

南墓域の南側では明確に5期と考えられる遺構は確認できず、01Dg区と01Dh区の地点において6期と考えられる方形周溝墓6基（拡張と考えたものを含まず）が推定できる。北から01Dg区北西側に検出できた01Dg区SD02（東溝）とSD04（南溝、拡張をしており拡張後の南溝はSD03）に囲まれた1基、その西に隣接して01Dh区北東側に検出した01Dh区SD03（西溝）とSD07（南溝）に囲まれた1基、01Dh区南西側に検出した01Dg区SK02（東溝を想定）に伴う南西側に墳丘を推定できる1基、01Dh区南端に検出できた01Dh区SD08（北溝）に伴う南側に墳丘が推定できる1基、その西に隣接して01Dh区南西隅にて検出できた01Dh区SD05（東溝）に伴う南西側に墳丘が推定できる1基、01Dh区の南東側に検出できた01Dh区SD04（西溝）とSD06（北溝）に囲まれた1基がある。この中で明確に新旧関係のあるものは01Dh区南東側の

SD04とSD06に囲まれた方形周溝墓の北溝SD06は01Dh区北東側にて検出できたSD03とSD07に囲まれた方形周溝墓の南溝SD07により古く、推定できる墳丘の軸線の方が他の5基の方形周溝墓の墳丘の軸線より約45°西に振っている。また01Dh区SD04の上にて検出できた01Dh区SK05は01Dh区SD07やSD08と長軸方向が合っており、6期の造墓活動に1つの画期が存在する可能性がある。

この地点に推定できる方形周溝墓の墳丘は全て一辺4m～6m前後の小型のものに限られており、01Dg区北西側にて推定できる方形周溝墓において拡張した南北が一辺8mに近い大きさになる可能性があるだけである。溝の形態は幅1.5m～2.5m程の断面逆台形のものと丸底のもので、埋土は個別では若干異なるが、大まかな傾向としては下層に黒色～黒褐色シルト・中粒砂が堆積し、上層に灰色～黄灰色中粒砂が主体に堆積する傾向が全ての溝に見られ、上層では炭化物や黒色シルトが黄灰色中粒砂と混じる傾向がある。

内部主体の可能性のあるものは01Dg区北西側にて検出した方形周溝墓に伴う01Dg区SK01・SK03・SK04があり、01Dg区SK01が長径1.30m以上、短径0.85m、深さ0.30mの平面隅丸長方形平底の土坑で埋土は最下層に黒色シルト、上層に灰色～灰オリーブ色シルト・細粒砂、01Dg区SK03が長径1.70m、短径0.80m、深さ0.20mの平面隅丸長方形やや丸底の土坑で埋土は灰色オリーブ中粒砂とオリーブ黒色中粒砂の斑土、01Dg区SK04が長径2.05m、短径1.07m、深さ0.42mの平面隅丸長方形平底の土坑で埋土は最下層がオリーブ黒色中粒砂と黒色シルトの斑土、上層がオリーブ黒色シルトの堆積であった。内部主体の施設等は確認できなかった。他には先に述べた01Dh区SK05があり、長径1.70m、短径0.65mの平面楕円形丸底の土坑で、方形周溝墓の外に形成された土坑墓の可能性が高い。

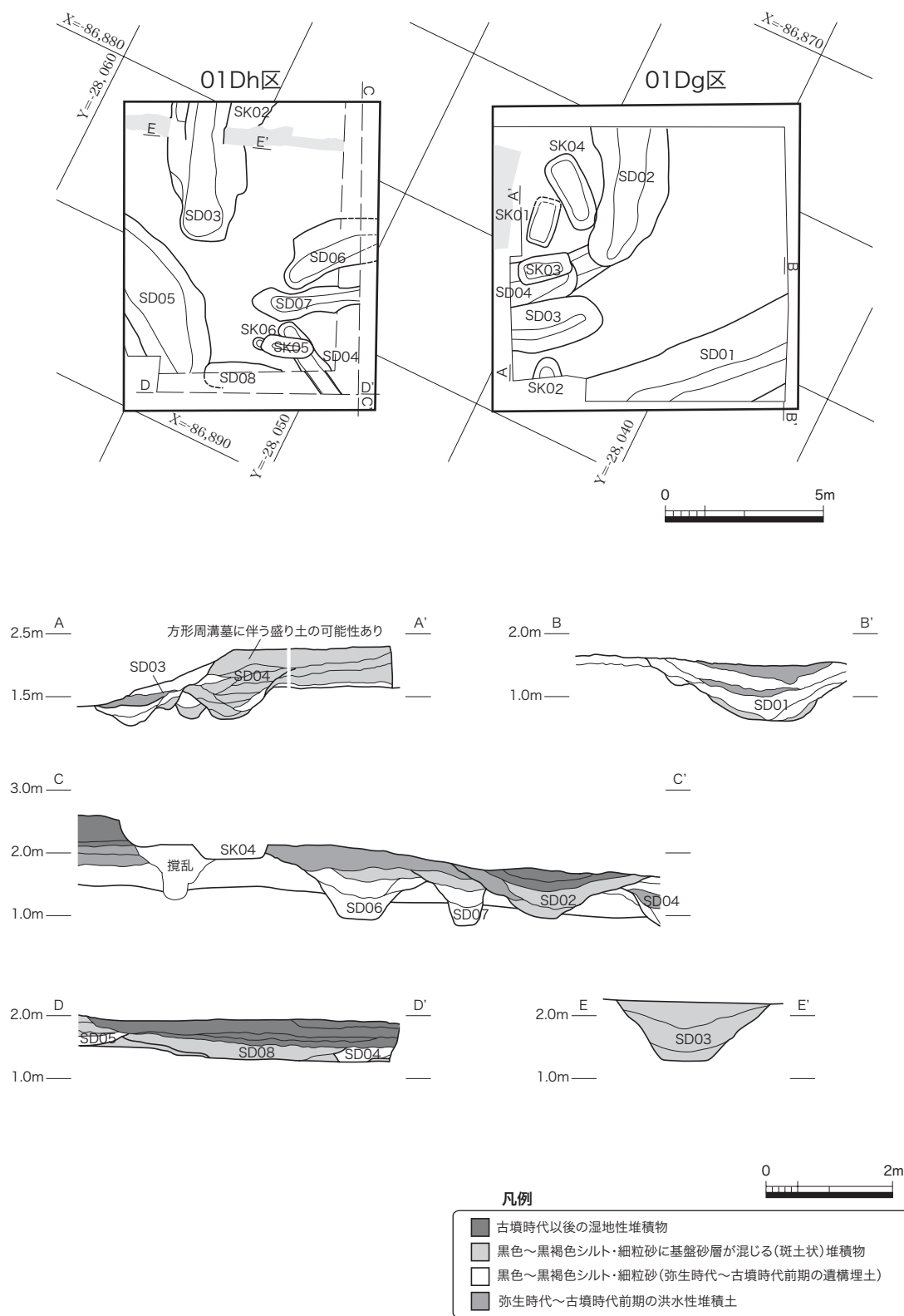


図2-2-76 01Dg区・01Dh区の方形周溝墓群と大溝（平面図1：200、断面1：100）

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果



写真2-2-142 01Dg区2面全景（南より）



写真2-2-143 01Dg区SK04（南より）



写真2-2-144 01Dh区2面全景（西より）



写真2-2-145 01Dh区SK05・SD04（東より）



写真2-2-146 03Cb区2面全景



写真2-2-147 99Da区1面SD01・SD02（南より）



b. 弥生時代中期後葉（6期）の大溝（図2-2-75・図2-2-76）

6期において朝日遺跡の南縁部を北東から南西にのびる溝3条（01Dg区SD01と01Di区SD01・99Da区SD01、03Cb区SD04）が検出できた。北側の溝から特徴を述べる。

01Dg区SD01は01Dg区の南隅にて検出できた幅約2.5m、深さ1.00m（溝底の標高0.60m）の丸底の溝で、他に確認されている同時期の溝の相対的位置関係から考えると、99De区SD08と26区SK202に対応する可能性がある。埋土は黒色～オリーブ黒色シルトと灰色～オリーブ灰色中粒砂が互層になる堆積で、最下層は水流の痕跡を示すラミナ状の堆積であった。01Di区SD01と99Da区SD01は幅約2.0m、深さ0.60m前後（溝底の標高1.02m）の丸底の溝で、他に確認されている同時期の溝の相対的位置関係から考えると、99De区SD07と25区SD194に対応する可能性があるが、地図上に載せると25区SD194は南に約3mずれた地点にあり、対応関係に問題が残る。埋土はオリーブ黒色シルトが主体で、上層に灰オリーブ色中粒砂と灰色シルト・細粒砂が堆積する。03Cb区SD04は幅約1.50m、深さ0.35m（溝底の標高1.05m）の丸底の溝で、やや蛇行する感じがある。他に確認されている溝との対応関係はなく、朝日遺跡で最も南を流れる溝といえる。埋土は下層に黒色シルト、上層に黄灰色シルトが堆積していた。

これらの溝は朝日遺跡において同様な位置において同じ方向に流れているが、やや異なる軌道をもっており、一時期には存在しないものと考えられる。また、埋土も機能時には黒色シルトが主体に堆積し、洪水性の堆積により埋没している可能性が高い点でも共通した特徴を持っている。これらの溝は弥生時代中期（6期を中心に）にただ単に区画溝として朝日遺跡南縁部に掘削された訳ではなく、恐らく溝周辺地帯の開発も伴った可能性が高く、繰り返し開発された痕跡を反映したものと思われる。その他の調査区では明瞭な遺構を確

認できなかった。

c. 弥生時代後期（7期）の方形周溝墓（01Dh区、図2-2-77）

7期の方形周溝墓は01Dh区に南側に検出できた01Dh区SD02に伴う南側に墳丘が推定できる1基があり、6期の方形周溝墓の墳丘の軸線よりやや東に振る墳丘が推定できる。01Dh区SD02は幅4.5m程、深さ0.80mの丸底で、埋土は最下層に薄く黒色～黒褐色中粒砂が堆積するが、その上層には灰色・褐灰色～灰白色・浅黄色のシルト～粗粒砂の互層からなる自然堆積があり、炭化物を少量含む。推定できる墳丘規模は西に隣接する形で確認されている26区SD203とSD205に囲まれる方形周溝墓と同程度のものと考えられ、一辺10m前後のものが推定でき、7期においてこの地点の比較的狭い範囲の墓域を形成していた可能性が高い。内部主体は確認できていない。

d. 古墳時代前期前半（8期）の区画溝と井溜状遺構（01Di区・99Da区、図2-2-77）

01Di区において検出できた2条の溝01Di区SD02（99Da区SD02に続く）・01Di区SD03と4期の平面円形大型土坑01Di区SK01～SK04がある。01Di区SD02（99Da区SD02に続く）・01Di区SD03は幅0.60m～1.00m、深さ0.15m～0.20mの丸底の溝で、埋土はSD03の下層にオリーブ黒色シルトが堆積しているが、主体は灰色シルトで、01Di区SD03の方がSD02より新しい。またこの2条の溝を切る形で検出できた01Di区SK01～SK04は径2.0m前後、深さ0.35m（SK03、底の標高1.12m）～0.75m（SK02、底の標高0.70m）の丸底の土坑で、埋土は最下層に黒色～オリーブ黒色シルトが堆積し、一部黒色シルトが間層に入るが、上層は灰色シルトが主体に堆積して埋没している。これらの土坑は溝と有意的機能を持つ性格のものと考えられ、農耕に関わる井溜と用水路の機能が推定できる可能性がある。

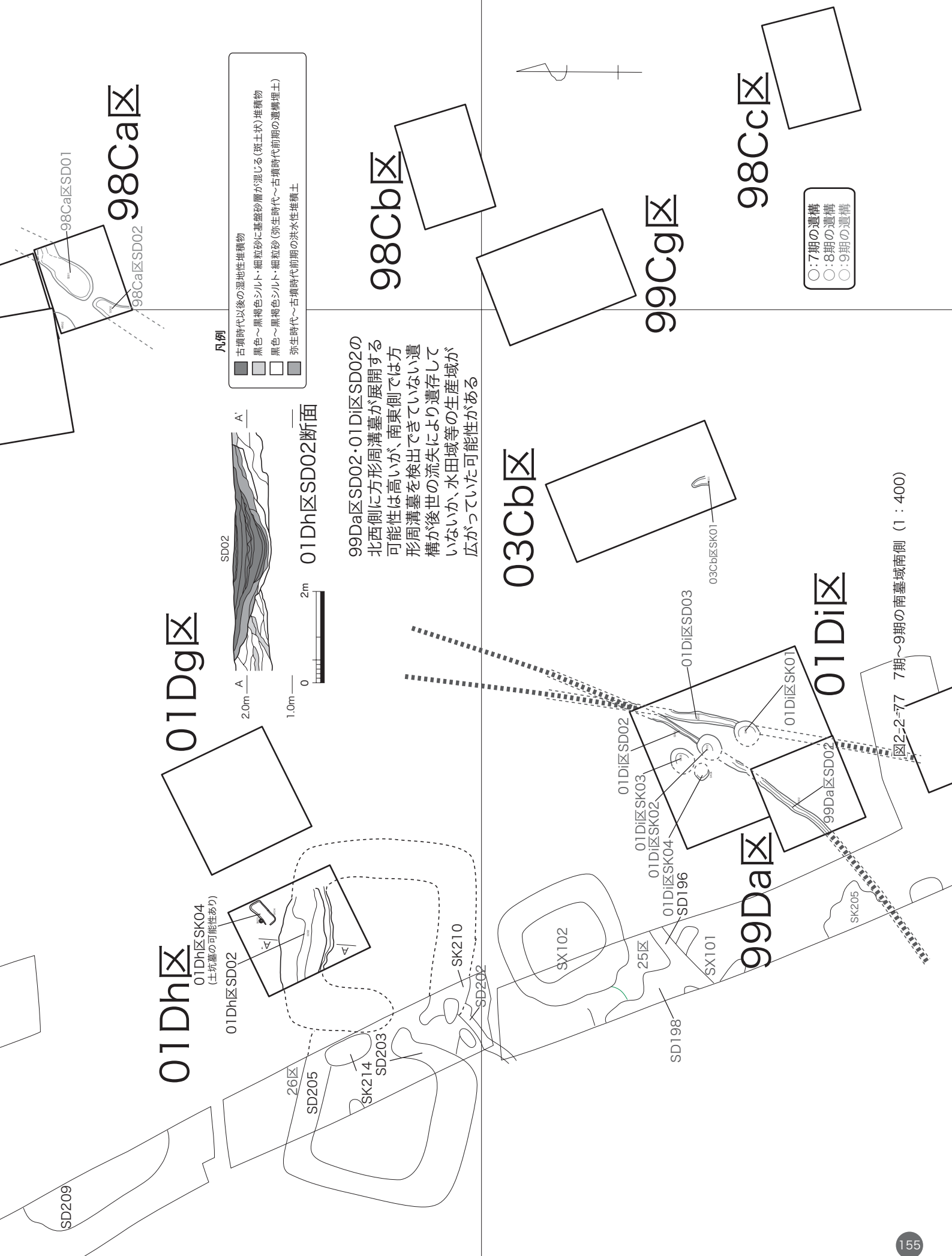




写真2-2-148 01Dh区SD01（南東より、7期の方形周溝墓の北溝）

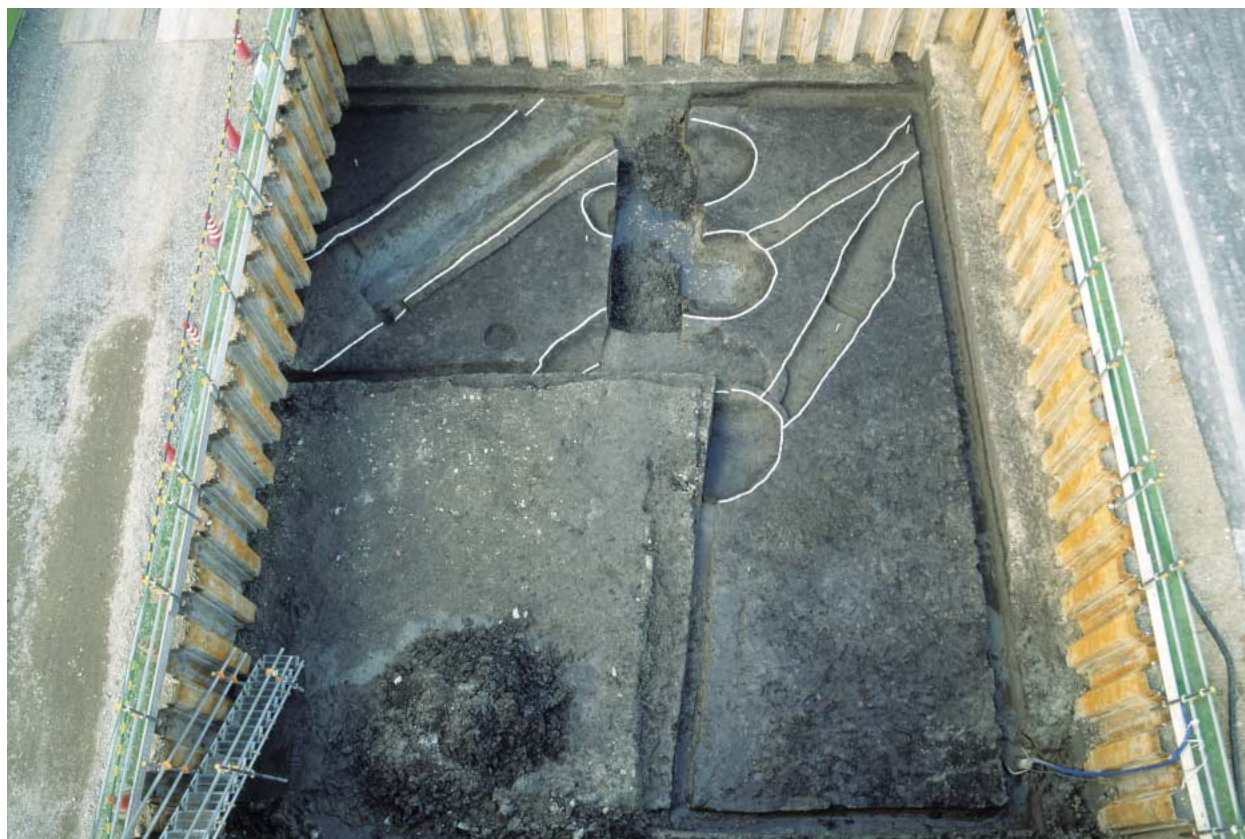


写真2-2-149 01Di区全景（南より、6期の大溝SD01と8期の溝SD02・SD03、井溜状土坑SK01～SK04）

(12) 南水田域北側

A. 位置とこれまでの成果……………

南墓域の南に位置する地点で、これまで朝日遺跡の南限の溝25区SD194の南側で、98Cc区・98Cd区・98Da区・99Ch区・99Db区・02Ch区・03Cc区・03Da区の調査区がある。

これまでの調査では、99Db区の西の部分に北北西から南南東にかけて25区の調査区がある。県報告25区については(11)において触れた。

B. 今回の調査成果……………

この地点の調査では、弥生時代までの遺物包含層と考えられる黒色シルト層上面他に古墳時代前期までの遺物包含層と考えられる黒褐色シルト(実際は黒色よりやや灰色味のある明るい色調を持つ)の上面、基盤砂層の上面の3面にて遺構検出を行なった。その結果、古墳時代前期までの遺物包含層上面からの掘り込みと考えられる明確な遺構を98Cc区、99Db区、03Cc区、03Da区において確認した。その他の調査区では基盤砂層の上面において小土坑を中心に検出したが、自然的遺構と思われるものであった。(図2-2-78)

a. 古墳時代前期(8期)の水田遺構(図2-2-79)

03Dd区と03Cc区において8期を主体とする水田遺構を検出した。先に調査を行なった03Cc区においては、溝を検出しようとする思いの余り、水田遺構(耕作土)の落ち込みを溝と誤って調査したものが03Cc区SD01(幅3.0m前後、深さ0.20m、埋土は黒褐色シルト)と03Cc区SK01(幅1m前後の不定形な土坑、深さ0.20m、埋土は黒褐色シルト)で、これらは、03Da区に続く

水田遺構の軸線方向とほぼ同じである。03Da区においては一辺2.0m～2.8m前後、深さ0.08m～0.20m前後の水田遺構16筆を検出できた。水田遺構は黒色シルトの上層にある黒褐色シルトを主体とする堆積に形成されていた。これらの水田遺構の耕作土の深度が浅いので、恐らく0.5m前後は上層の堆積により削平されているだろう。水田の畦畔跡は上面幅0.50m前後にて検出できた。他の調査区を含めて水田遺構の可能性のあるものは、99Da区北側の黒色シルト層上面にて検出した幅3.5m前後で北北西から南南東に約18mのびる99Db区SD01、03Cc区南側の黒褐色シルト上面にて検出した03Cc区SK02も水田遺構の下部の痕跡の可能性はある。

その他の遺構としては水田耕作土を掘り込む形で0.70m～0.80m、深さ0.40m～0.50mの円形中型丸底の土坑が2基03Da区SK01・SK02(約3.5m離れている)があり、水田と何か関連する遺構の可能性はある。同様な土坑が西に隣接する99Db区南側にて1基(99Db区SK01)確認できている。また98Cc区中央付近においても黒色シルト上面にて検出した98Cc区SD01(幅約0.50m)の溝があり、溝の流れる方向が水田遺構の軸線と類似しており、8期の水田遺構に関係する遺構の可能性はある。

尚、99Db区においては基盤砂層上面にて古墳時代前期の水田遺構に類似する方向で浅く落ち込む土坑99Db区SK03(長径4.0m以上、短径2.7m)他と99Db区SD02(幅0.60m前後)も検出できており、弥生時代にも水田遺構の存在した可能性はある。

○：6期の遺構

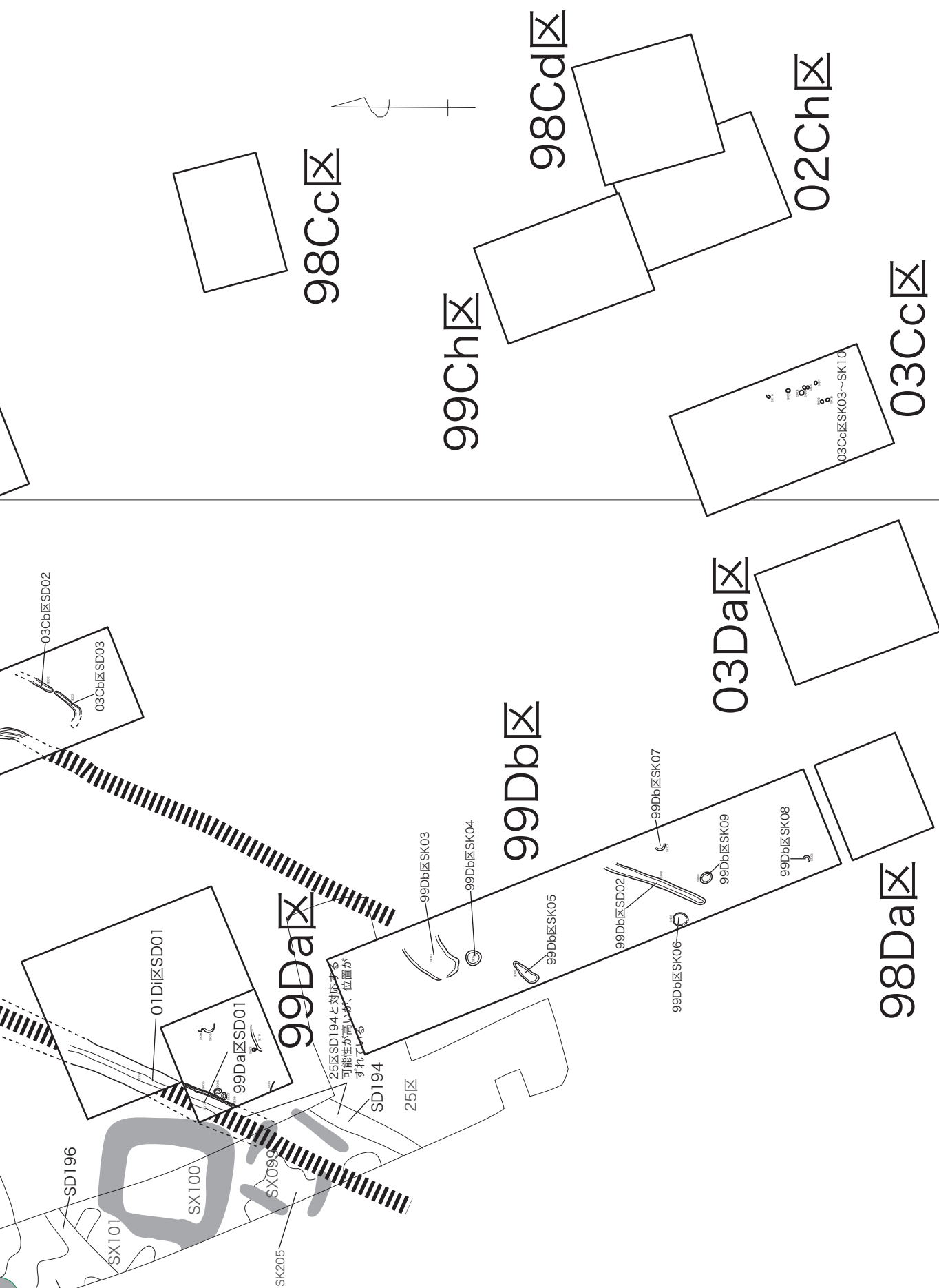
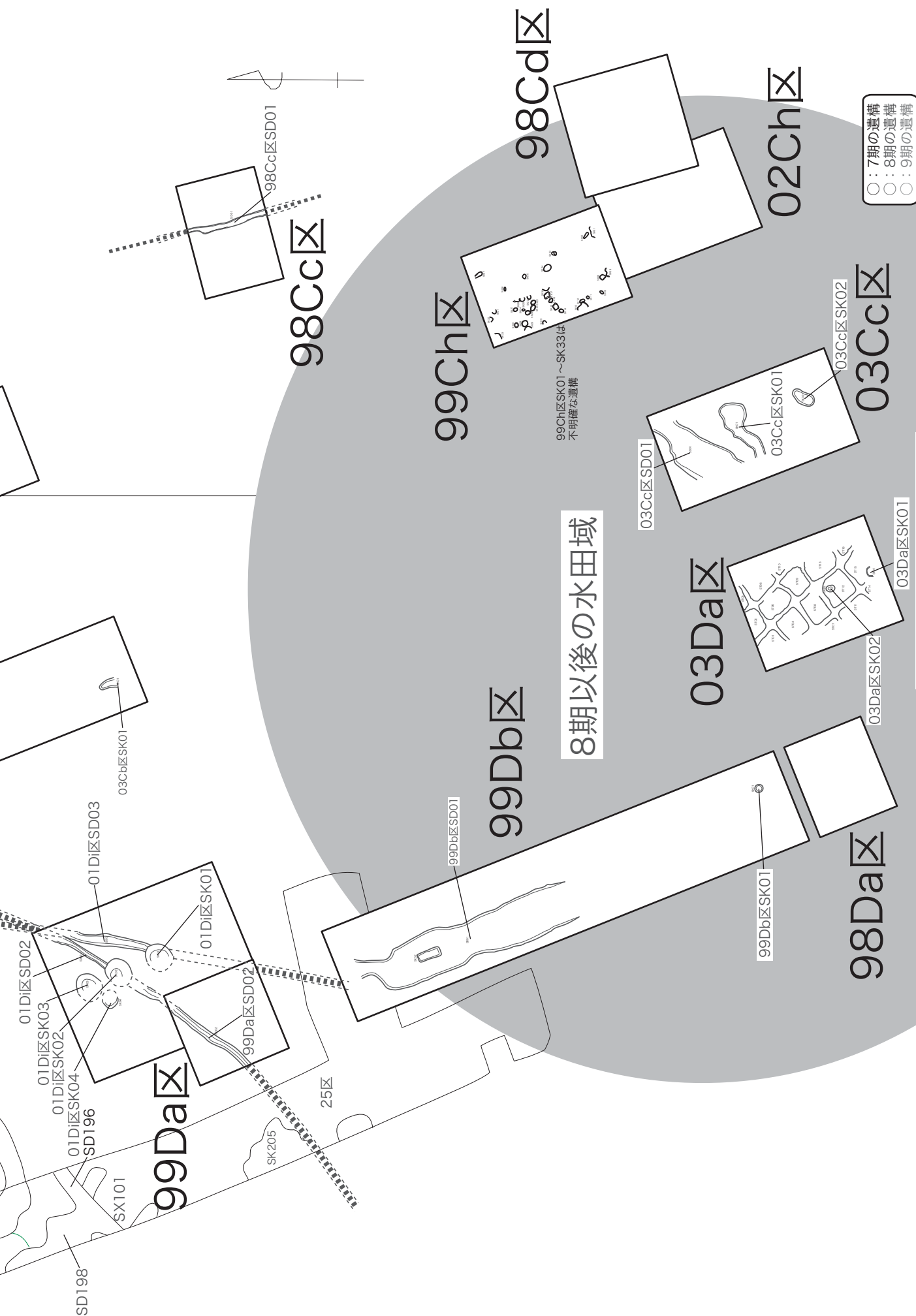


図2-2-78 6期の南水田域北側（1：400）



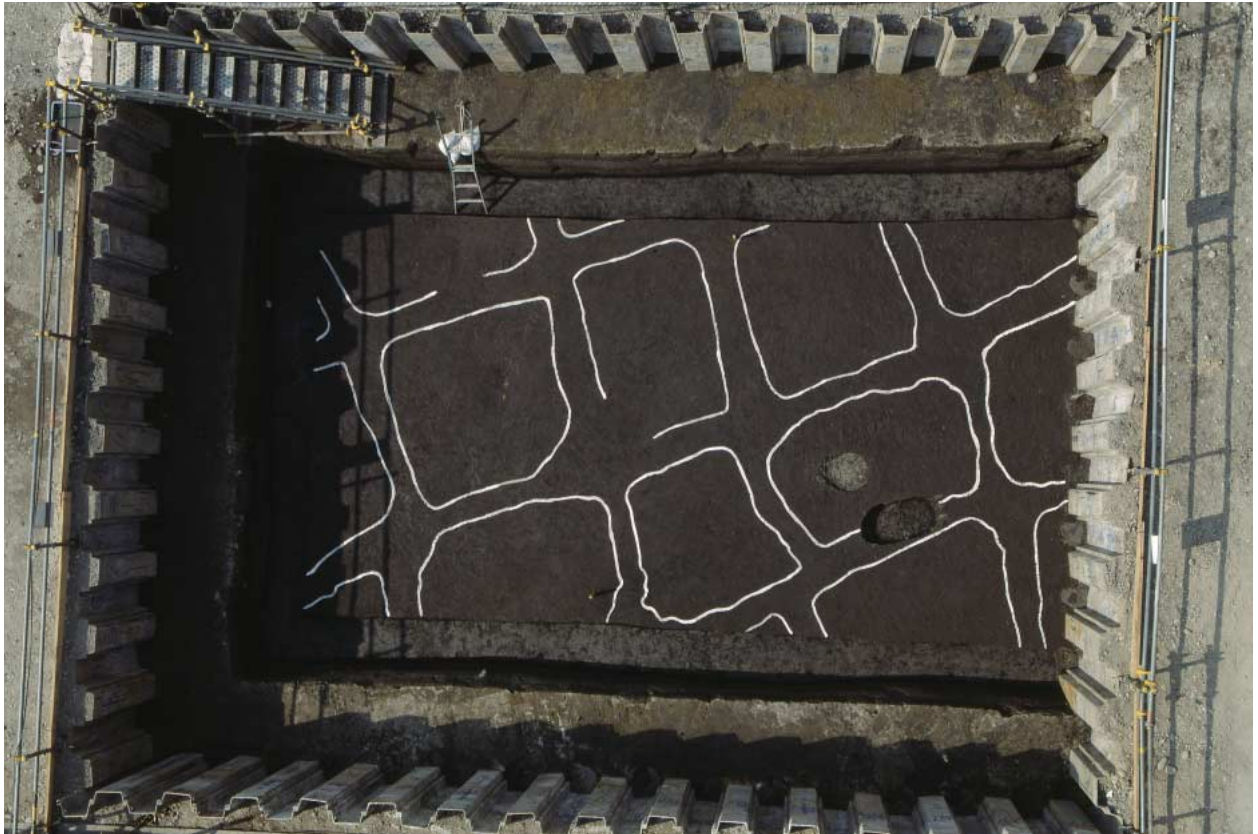


写真2-2-150 03Da区1面水田遺構（東より）



写真2-2-151 03Da区東壁水田遺構断面、写真中央下半に畦畔がみられる（西より）

(13) 南水田域南側

A. 位置とこれまでの成果……………

南墓域の南に位置する、南水田域の南側にあたる地点で、98Ce区・98Cf区・98Db区・98Dc区・99Ci区の調査区がある。

これまでの調査では、25区の南側を試掘調査されているが、明確な遺構は検出されていない。

B. 今回の調査成果（図2-2-80・図2-2-81）

この地点の調査でも、弥生時代までの遺物包含層と考えられる黒色シルト層上面の他に古墳時代前期までの遺物包含層と考えられる黒褐色シルト（実際は黒色よりやや灰色味のある明るい色調を持つ）の上面、基盤砂層の上面の3面以上にて遺構検出を行なった。その結果、掘り込み面は確認できなかったが弥生時代の溝と考えられる98Cf

区SD01（基盤砂層上面にて検出、埋土は弥生時代の遺物包含層に類似する黒色細粒砂、幅1.60m前後、深さ0.20m前後）と古墳時代前期（8期か、遺物は出土していないが、黒色土上面にて検出できた）の遺構と考えられる98Db区SD01（幅0.40m前後、深さ0.05m～0.10m前後）・SK01（径0.80m前後、深さ0.10m）を確認した。時期は詳細にできないが、98Cf区SD01は6期の大溝と同様な方向にて流れる溝であるので、この地点付近までは弥生時代の朝日遺跡に関する開発が存在した可能性が高い。

99Ci区において基盤砂層の上面で小土坑を中心に検出したが、自然的遺構と思われるものであった。



写真2-2-152 98Cf区SD01（南東より）

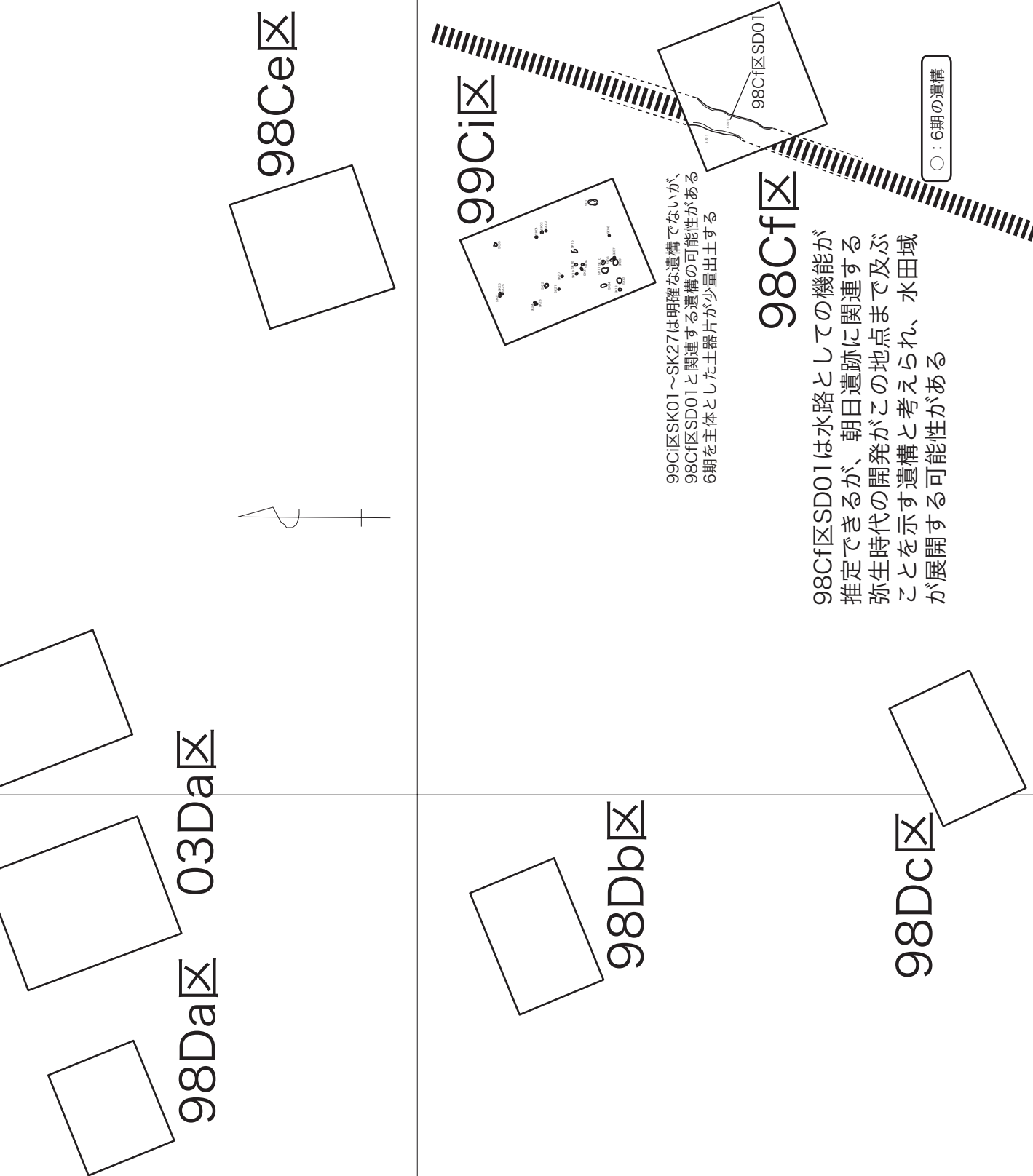


図2-2-80 6期の南水田域南側（1：400）

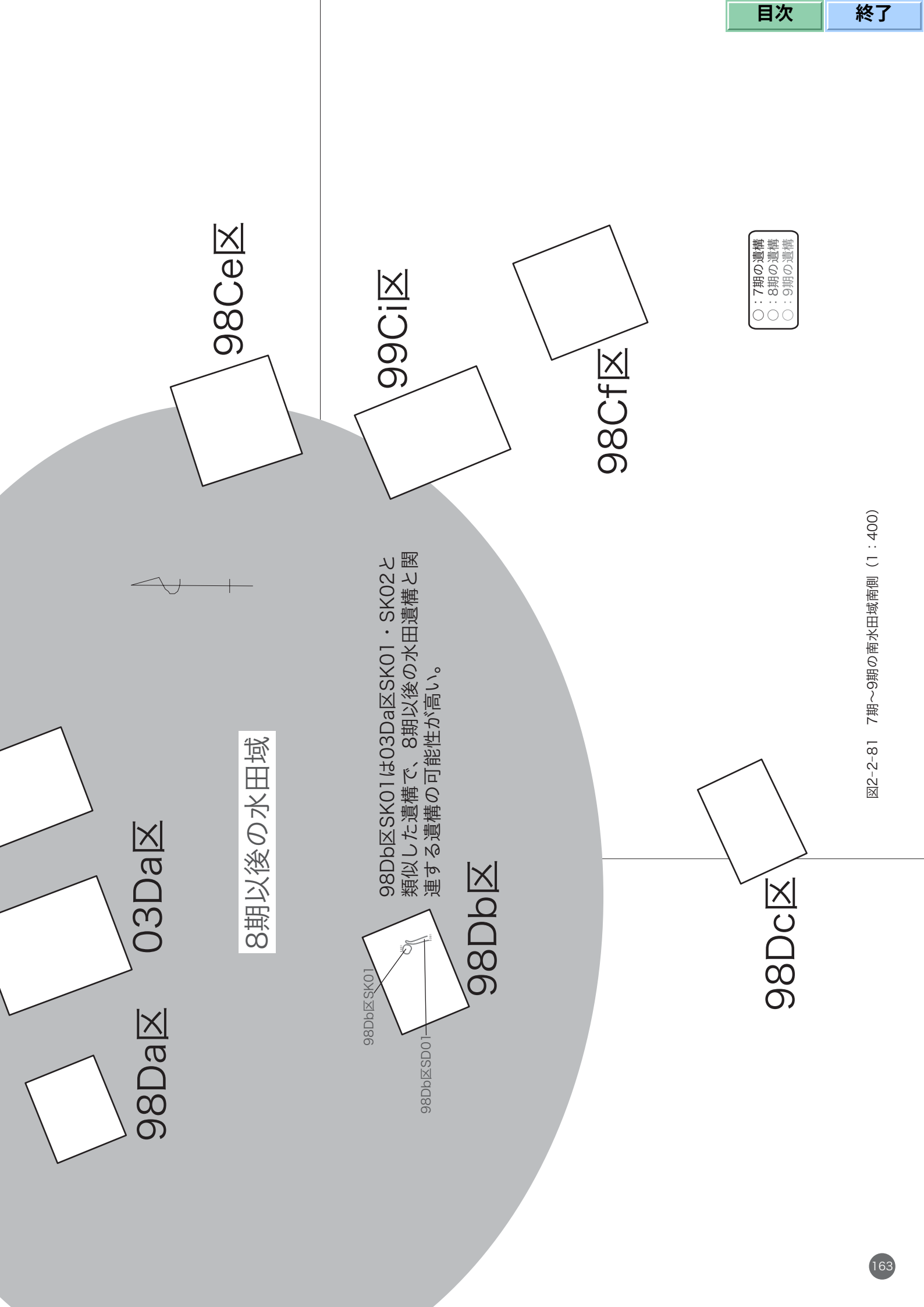


図2-2-81 7期～9期の南水田域南側（1：400）



(14) 南居住域北側

A. 位置とこれまでの成果……………

南居住域の南に見つかった南墓域北側の地点にあるもので、01Da区・01Db区・02Da区～02Dc区の調査区がある。

これまでの調査では、01Da区・01Db区の北側を01Da区と重複して61D区、50区・51区が、02Da区の北東側と重複して52区、02Db区の北側と重複して61A区、02Dc区の西側と重複して53区、02Dc区南側と重複して50区が調査されていて、他にも北側で60A区・61C区、南側を48区・55区～57区・63G区・63M区、西側を60B区として調査されている。

これらの調査では、60A区・61A区・53区にて谷Aの調査が行われ、南岸に沿って、2期～4期の南居住域北側を囲む区画溝、財団報告のSDIII、SDIVa、SDI Ibがはしり、相前後して2～6期の竪

穴住居、掘立柱建物、土坑等が連続して営まれ、その後61C区・61D区・50区～52区・55区・56区にかけて6期～7期の方形周溝墓が散在して展開する。7期～8期には、この地点の西側を環濠、内側（東側）より財団報告のSDV・SDVI（県報告SD178）、財団報告SDVb（県報告SD177、2期のものとして財団報告ではSDIVbも確認されている）と西に枝分かれしてのびる溝、財団報告SDVc（7期、県報告SD243）が確認され、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の南居住域の形態を明らかにしている。また、この地点では竪穴住居、掘立柱建物、大小の土坑、区画施設等からなる2期～8期に連綿として営まれる居住域が明らかにされており、63G区北側から60I区、49区において推定された大型建物の存在等、6期・7期の中心的建物の存在も推定される地点である。



写真2-2-153 古墳時代前期前葉（8期）の南居住域北東部（南より、01Da区・01Db区）

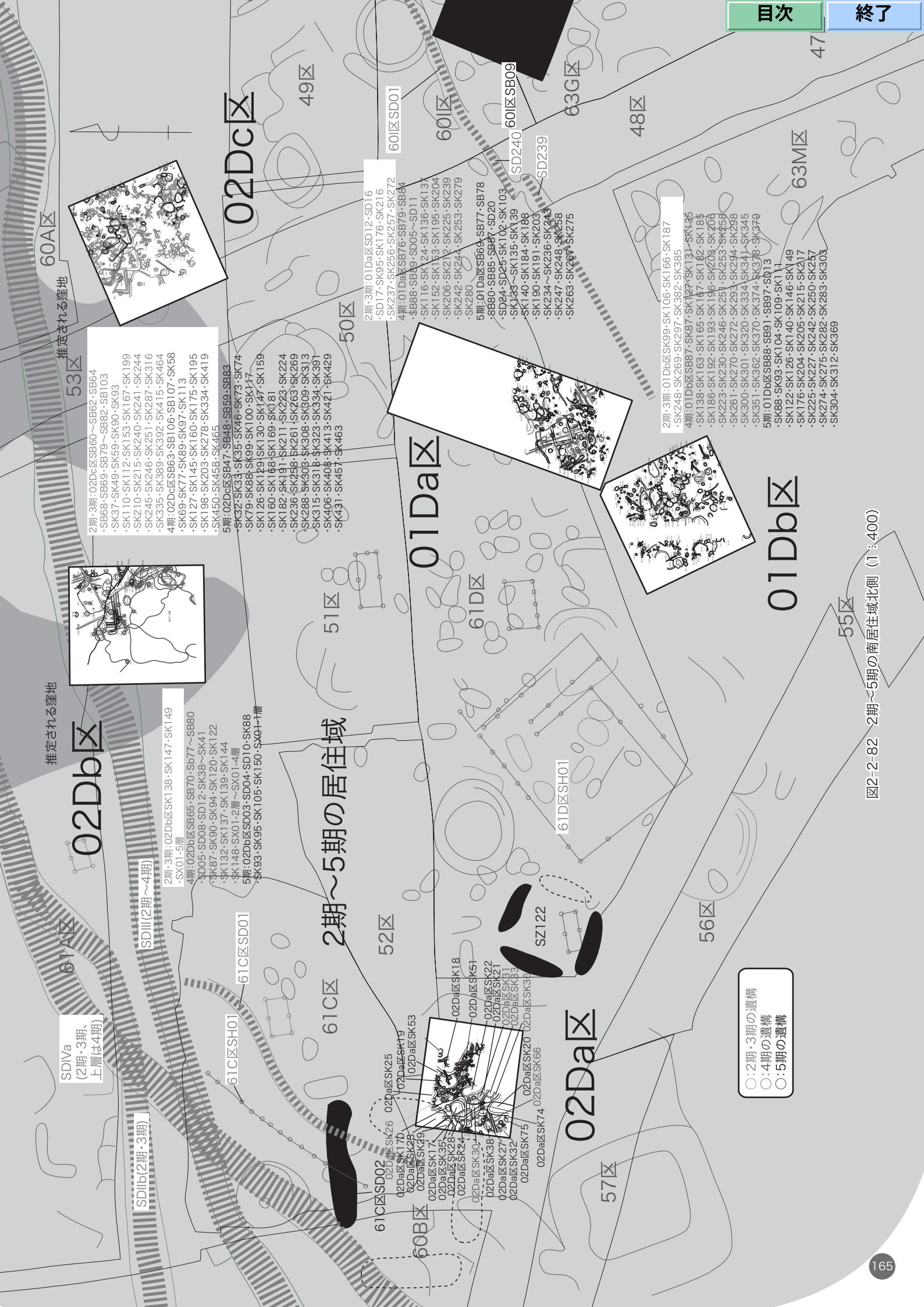


図2-2-82 2期～5期の居住域北側 (1 : 400)

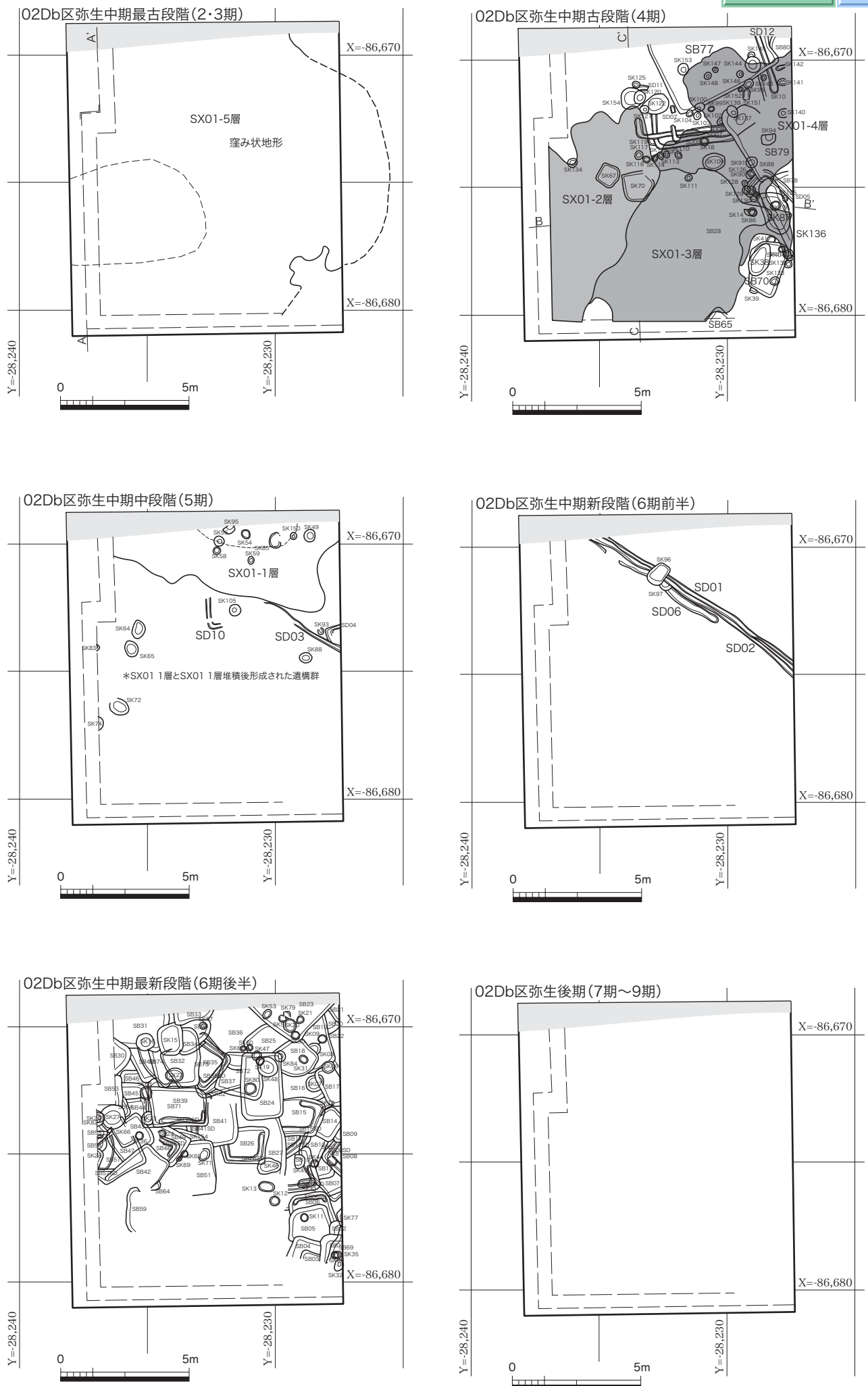


図2-2-83 02Db区における2期から9期の遺構変遷 (1 : 200)

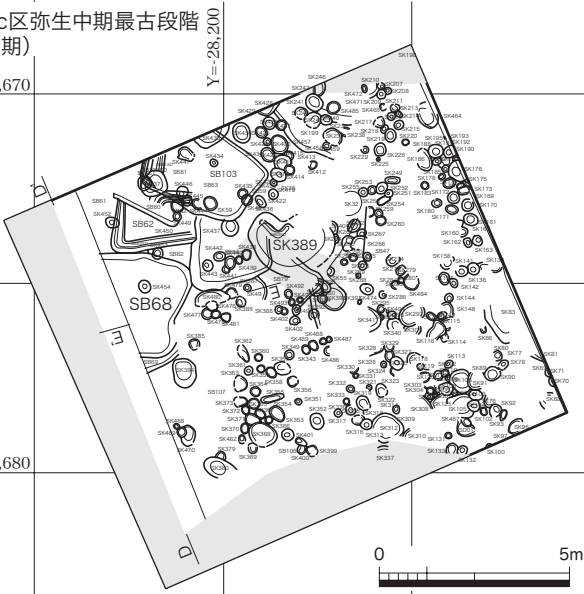
02Dc区弥生中期最古段階
(2・3期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680



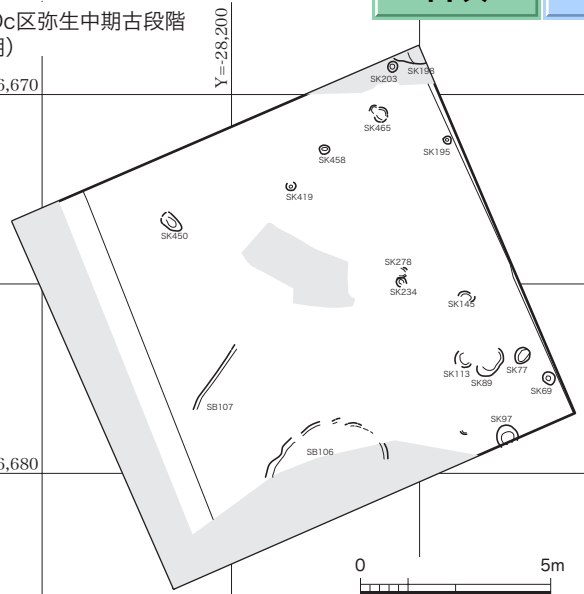
02Dc区弥生中期古段階
(4期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680



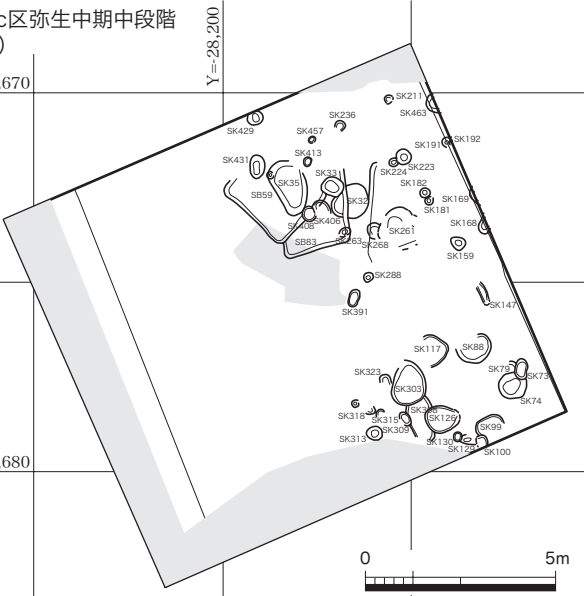
02Dc区弥生中期中段階
(5期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680



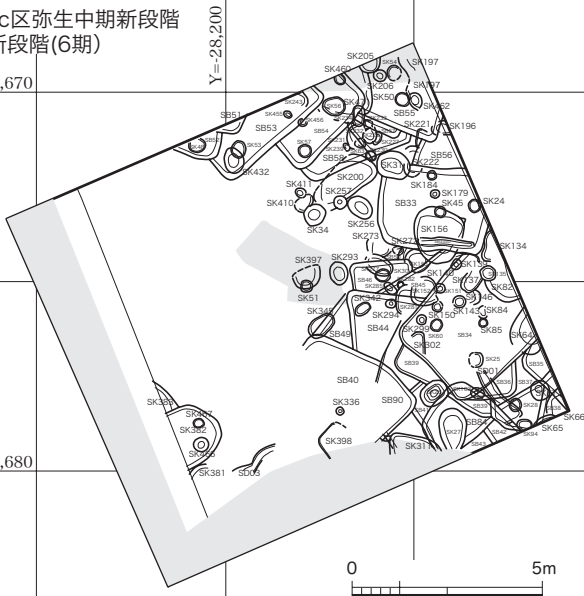
02Dc区弥生中期新段階
・最新段階(6期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680



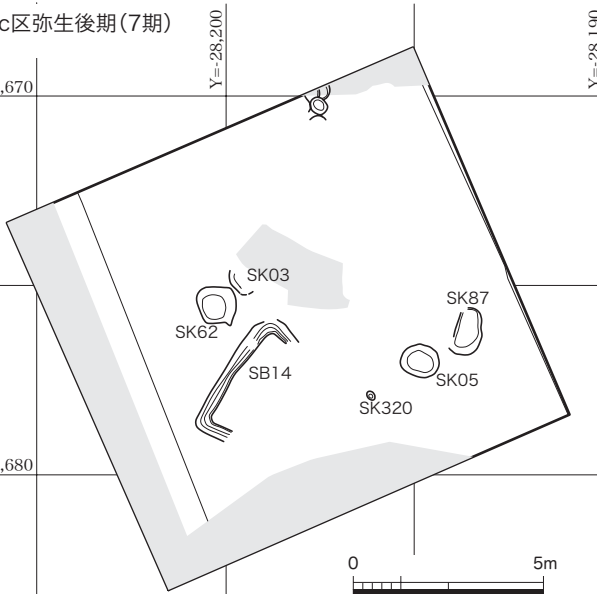
02Dc区弥生後期(7期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680



02Dc区古墳時代前期前半
(8期)

X=-86,670

Y=-28,200

Y=-28,190

X=-86,680

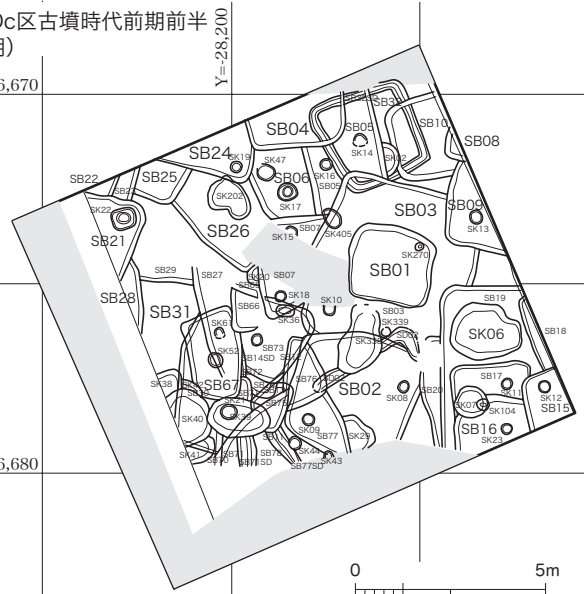


図2-2-84 02Dc区における2期から8期の遺構変遷 (1 : 200)



B. 今回の調査成果……………

a. 谷A南岸の居住域（02Db区・02Dc区、[図2-2-82](#)～[図2-2-85](#)・[図2-2-88](#)）

02Db区と02Dc区は谷A南岸の地点で、谷Aからの浸食作用を受ける地点であり、その後連動した変遷が推定された。大きくは南岸に沿って、2期～4期の南居住域北側を囲む区画溝、財団報告のSDIIIの南側で、7期以後には内環濠、財団報告のSDV・SDVI（県報告SD178）の西側地点である02Db区と東側地点である02Dc区に分かれる。

弥生時代中期（2期～6期）には大きく5段階（最古段階・古段階・中段階・新段階・最新段階）の変遷がある。最古段階は2期・3期を中心とする時期で、02Dc区付近から南東側を中心に居住域が展開した段階である。02Db区においては2期・3期の可能性のある小型円形ピットが3基あるが、基本的には02Dc区西端・53区付近から落ち込む谷Aからの凹み地形の中にあり、02Db区SX01の5層にみられるような貝殻が腐食したような黄褐色細粒砂と黒褐色シルトのラミナ堆積状のもの（炭化物を含む）が02Dc区西側SB68（2期と報告される県報告53区SA095に対応する可能性あり）の埋土付近まで広がる。この凹み地形は南側に展開する居住域住人の土器等の生活物の廃棄場として存在した。この堆積は時には谷Aからの流水を含む浸食作用も受けた可能性が高い。また興味深い事にこの02Db区南西側と02Dc区西側において基盤砂層が落ち込む堆積が確認できた。この点は朝日遺跡の成立以前の地形を反映する可能性がある。02Dc区には02Dc区SB68をはじめとする平面隅丸方形状堅穴住居が調査区西側に10棟程確認されており、調査区東側には大型土坑SK199・SK389等がある。

古段階は3期の中で起こっている可能性が高いが、財団報告SDIIIが02Db区北側に掘削された後に起こるものと考えられ、02Db区SB77～SB79をはじめ、4期と考えられる堅穴住居が形成される（他にも堅穴住居の周溝と考えられる

01Db区SD07～SD10があり、一部5期に下がる可能性もある）。堅穴住居周囲には平面長楕円形丸底の大型土坑02Db区SK136や平面円形～楕円形丸底の大型土坑02Db区SK122・SK137も相前後して掘削される。これらの遺構は北側に掘削された環濠の排土を利用している可能性もある。

中段階は5期を中心とした時期にあたる。中段階にも浸食作用は受けたようで、02Db区SX01の1層～4層にみられるような貝殻が腐食したようなにぶい赤褐色～暗褐色細粒砂と黒褐色シルトのラミナ堆積状のものが互層（炭化物を含む）となる堆積が浸食作用を伴いながら進行する。この浸食作用に伴って02Db区において4期に展開した堅穴住居の掘り方はほとんど削平された。02Dc区においても調査区北西隅部までこの影響が及ぶのか、引き続き調査区北西隅部を外した部分で堅穴住居や土坑が多数みられる。

新段階は6期前半を中心とした時期にあり、02Db区に南西から北西の谷Aに流れ込む02Db区SD01～SD03・SD06が掘削される段階で、これらの溝は検出面では幅0.20m～0.30m前後の細い溝であるが、その上層で調査したSX01において6期の遺物がこの付近においてのみ出土する事から、SX01堆積後の上から掘り込まれた、断面V字形をした幅1m前後の溝である可能性が高い。これらの溝は明らかに南東から北西に傾斜をもっており、南東側に展開した居住域の排水の溝（50区北西隅SK635の東にて検出されている幅0.45m前後の溝と対応する可能性がある）であった可能性が高く、居住域内部では何らかの区画機能も推定される。02Dc区では北西隅部をやや広く外した遺構の展開がみられる。

最新段階は6期後半を中心とした時期に考えられ、02Db区SX01の埋没後に多数の堅穴住居が形成される段階である。02Dc区においても多数の堅穴住居と大小の土坑が展開する。興味深いのは、02Db区では50棟程の堅穴住居が確認できるものの、一辺が2m前後のものばかりで、土坑がほとんどなく小型土坑が少数あるのみである

第Ⅱ部 遺構の分析 — ②遺跡の調査成果

が、02Dc区では一辺3m～4m前後の竪穴住居が連綿と営まれ、大型土坑を含む土坑が多数みられることである。02Dc区の南にある50区や49区付近ではより大型の竪穴住居の存在が推定されることから、居住域でも縁辺に位置付けられるものだろうか。またこの2調査区では2期以来の凹み地形が影響している為か、02Db区では南側を外して、02Dc区では北西隅部を外して遺構が展開する。

弥生時代後期以後（7期・8期）にはより対照的变化が見られる。恐らく2調査区の間で7期～8期の外環濠、財団報告のSDV・SDVI（県報告SD178）が掘削されることにより、02Db区と02Dc区が内環濠西側と東側に分かれ、居住域の外部と内部に分かれることに起因すると思われるが、02Db区では遺構・遺物が全く確認でき

ないこと、反対に02Dc区では8期の竪穴住居や土坑を中心に多数の遺構がみられる。02Dc区の7期と考えられる遺構は02Dc区SB14・SK87等少数あるのみであるが、これは8期の遺構と大きく重複している可能性が高く、8期には02Dc区北西隅部の凹みが埋没して、その付近にも遺構が形成される。土坑は少ない（大型土坑SK06・SK202・SK338等がある）が、竪穴住居は一辺3m～5m程の平面隅丸形状のものが多数形成される。

尚、興味深いのは後期の外環濠が02Dc区北西隅から北西側、02Db区の南東側にかけて展開する凹み地形の中心付近を掘削される事であろう。弥生時代後期の南居住域の形の選択は、このような弥生時代中期以来の微地形の起伏を利用した（影響を受けた）ものであったと考えられる。

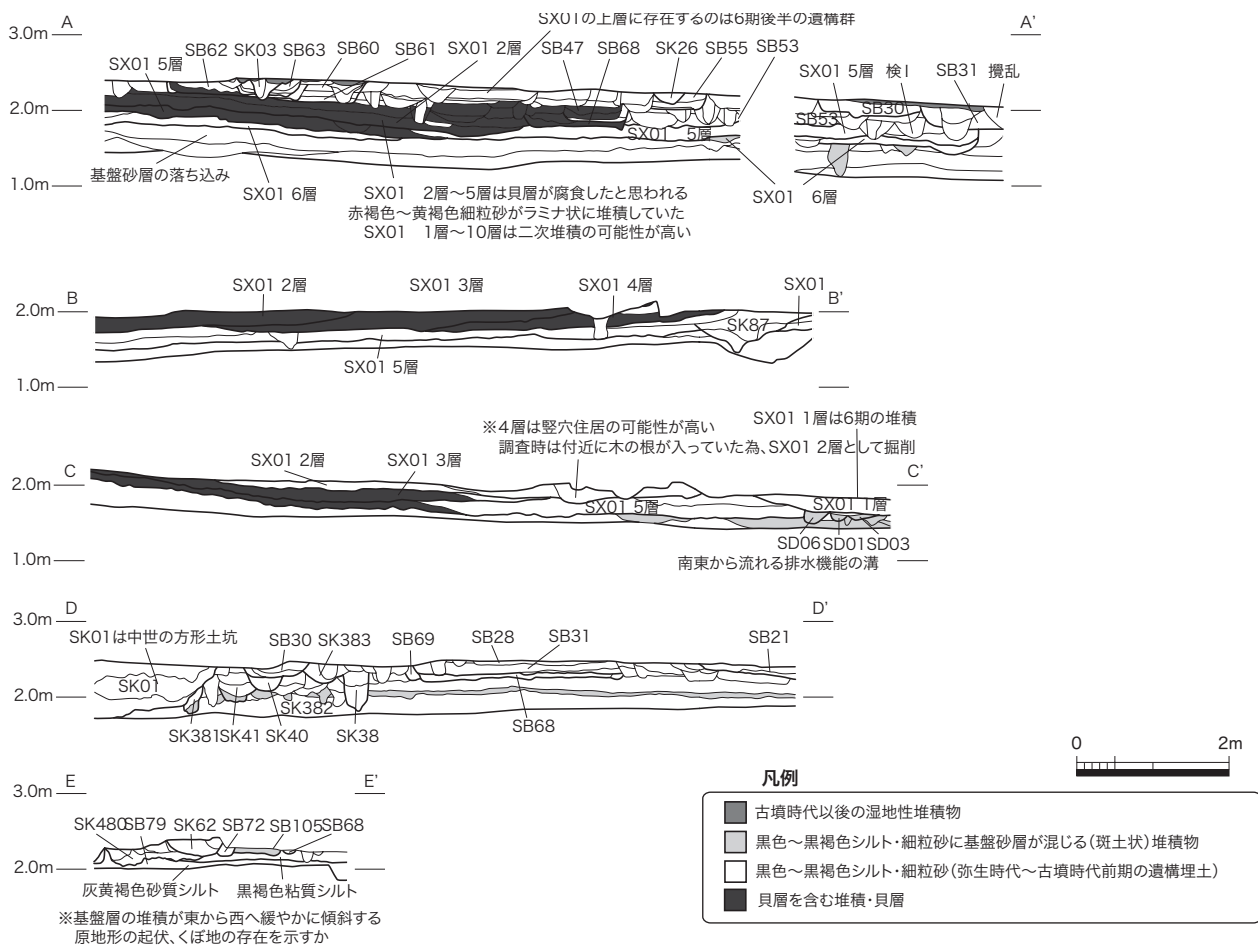


図2-2-85 南居住域北側にみられる窪地の痕跡
(1:100、上3段が02Db区SX01他の断面、下2段が02Dc区SB68他の断面)



写真2-2-154 02Db区5面、6期の溝群（南より）

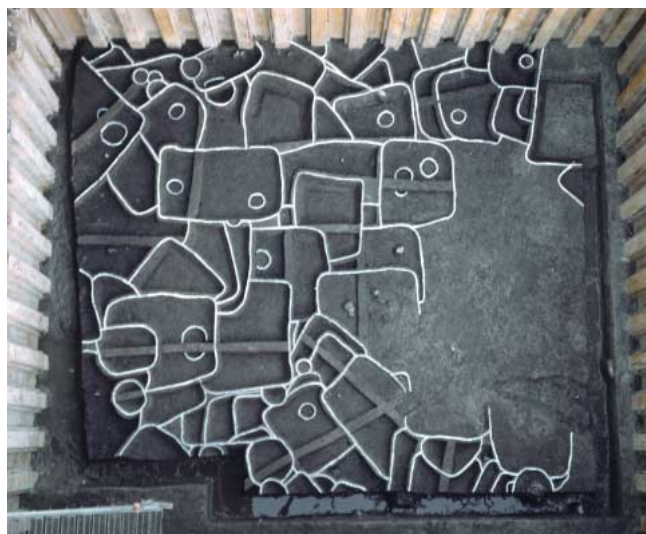


写真2-2-155 02Db区1面全景（西より）



写真2-2-156 02Db区西壁断面
（東より、下部がSX01）



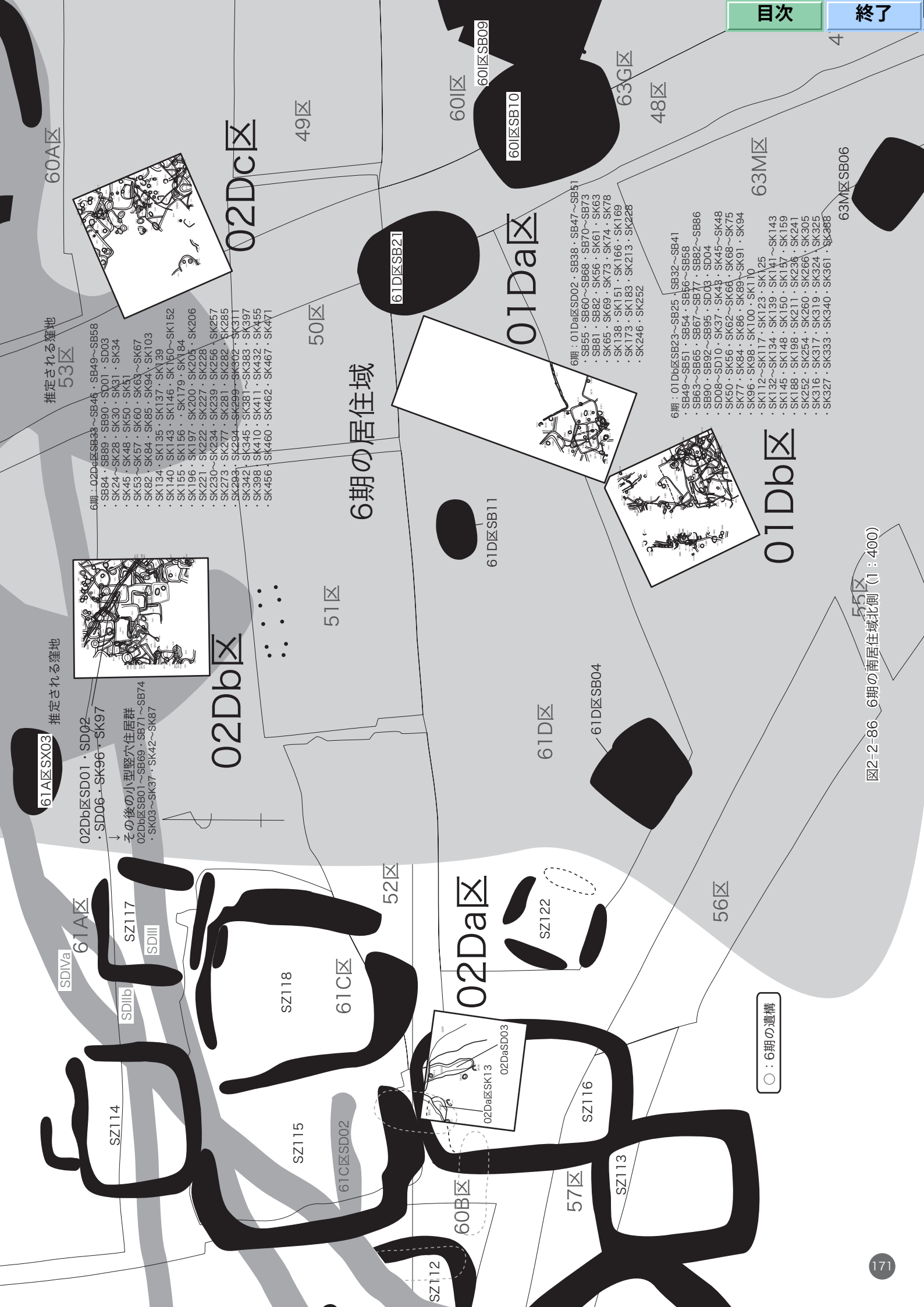
写真2-2-157 02Dc区SB68遺物出土状況（北より）



写真2-2-158 02Dc区SK31
（西より、甕が埋納されていた）



写真2-2-159 02Dc区4面全景（南より）



推定される窪地

推定される窪地

○：6期の遺構

図2-2-86 6期の南居住域北側 (1 : 400)



b. 弥生時代中期（2期～6期）の南居住域内部（01Da区・01Db区・02Da区、図2-2-82・図2-2-87）

南居住域内部の2期～6期では、02Da区が6期以後墓域化する関係で居住域の存在を示す竪穴住居や土坑の存在がなく、反対に墓域化される事により4期と5期の遺構が良好に残っていた。4期と考えられる大小の土坑が多数と5期の竪穴住居と思われる7基の土坑の他にも小型～中型の土坑が密に存在する。

01Da区と01Db区では6期の竪穴住居がほぼ全面から検出でき（約50棟）、長軸3.0m～4.0m、短軸2.0m～3.0mの平面隅丸方形～長方形の形態のもので、小型のもの程台形に近い形態をとる。この中で01Da区中央付近に幅0.20m前後の周溝01Da区SD02のみ検出されたものは方形の一辺5.0m以上の規模が推定できるもので、溝の内部に壁材を押さえた可能性がある径0.05m程の小ピットが0.50m前後の間隔で検出できた。

4期・5期にも同様な形態の小型竪穴住居が01Da区の南西側や01Db区の中央部から北側にかけて10数棟確認できた。さらに2期・3期の竪穴住居の周溝と考えられるのは01Da区の南東隅にて検出できた01Da区SD12・SD16の2棟あるのみである。

土坑では01Da区と01Db区を併せて主に2期～6期の土坑530基（7期以後のものは除く）が存在

するが、比較的4期から6期の土器が出土する各時期の土坑はほぼ同じように分布するが、2期・3期までの土器が出土する遺構は01Da区と01Db区を併せても20基程しかなく、明確に2期・3期の土坑と考えられるのは01Da区SK257（長径2.35m、短径0.85m以上）のみである。また01Da区と01Db区において長径1.0mを超える大型土坑は20基程で、2期～6期の土坑総数530基の4%程である。全体にみるとほとんどが遺構検出面における径0.50m前後の小型～中型土坑によって占められており、遺構形成のあり方としてこの地点の特徴と言える（先に述べた02Da区では主に4期～5期の土坑170基の内、長径1.0mを超える大型土坑の比率が約10%）。

よって01Da区と01Db区では時期が古くなるにつれて、確認できる竪穴住居は激減するが、4期以後の土坑数から考えると4期～6期の遺構数は比較的同様な数量において形成された可能性が高く、竪穴住居の数が時期とともに減少する傾向は、新しい時期の遺構形成に伴う削平により残存していない可能性が高い。一方、2期・3期の遺構は土器が出土していない土坑を全て含めると一定量あるが、4期以後の遺構形成に比べると全体にやや低調な印象を受ける。但し、2調査区全体に遺構が散在して分布している傾向があり、その評価には課題が残る。



写真2-2-160 02Da区SK17遺物出土状態（西より）



写真2-2-161 02Da区3面全景（南より）

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ②遺跡の調査成果

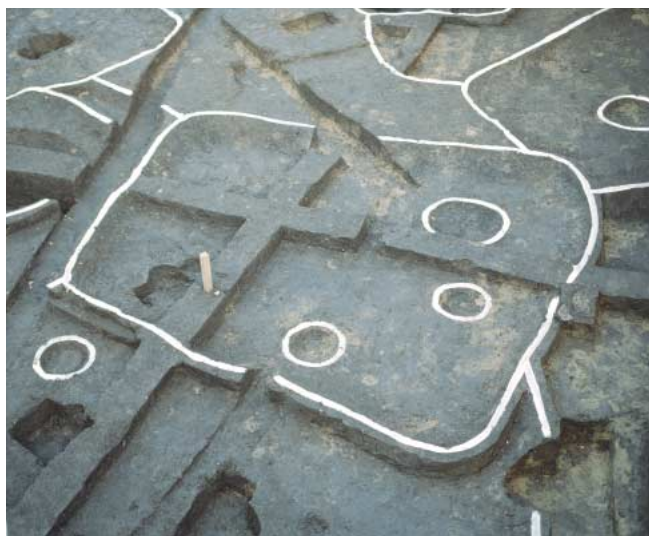


写真2-2-162 01Da区SB68 (南西より)



写真2-2-163 01Da区5面全景 (東より)



写真2-2-164 01Da区SK257断面 (北東より)

写真2-2-165 01Db区竪穴住居群
(東より、6期と8期の遺構が重複する)写真2-2-166 01Db区SB85遺物出土状況
(西より、6期のもの)

写真2-2-167 01Db区5面全景 (南より)

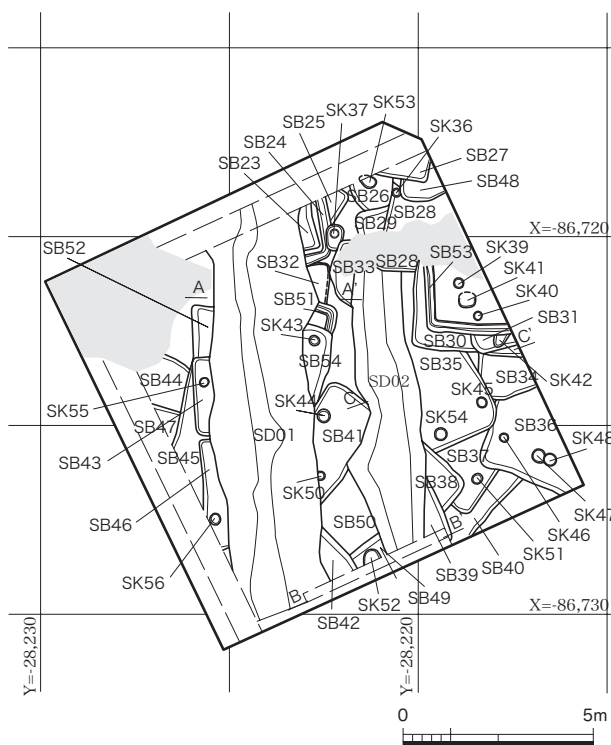
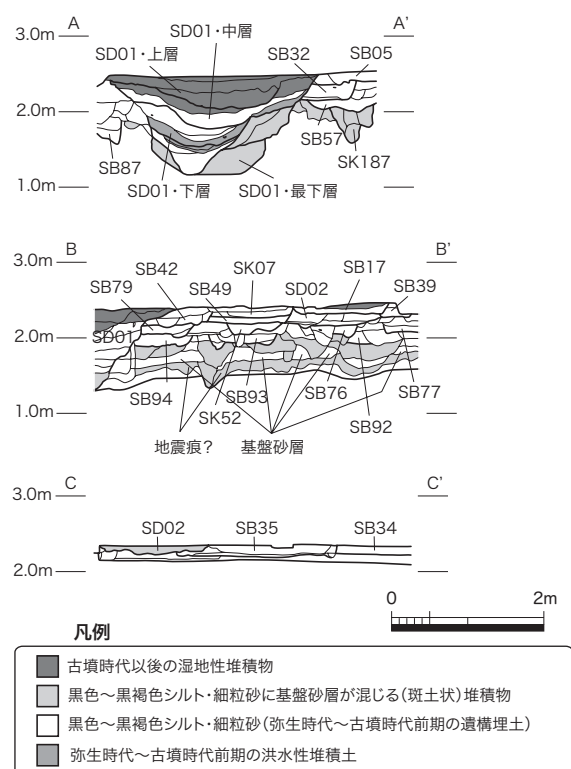


c. 弥生時代後期～古墳時代前期の内環濠01Db区SD01（図2-2-87・図2-2-88）

7期～8期にかけての内環濠01Db区SD01が01Db区中央やや西寄りの位置を南北に弧状にめぐることが確認できた。この溝は61D区において確認されているSDIXに対応する溝で、01Db区の北北東約20m位置（01Aa区の北西隅のあたり）から始まる溝で54区・45区にて確認されているSD177に続くものと考えられる。01Db区SD01は幅4m前後、深さ1.40m（溝底の標高1.17m）の溝で、大きく6回の埋没が確認できる堆積があった。最も古い堆積はSD01の最下層として遺物を取り上げたもので、7期中葉までの遺物を含む、黄灰色シルトと黒色～黒褐色シルトが互層あるいは斑土状に堆積する断面丸底の溝、その内側には断面「V」字形の溝で、最下層は黒色～黒褐色シルトが堆積した上に、黄灰色シルトが薄く堆積するもので、その上面には8期前葉の土器が少量出土した。最下層では7期の土器が主体で、8期の土器は混入と考えられる程度であった。下層は発掘調査時に断面「V」字形の溝と一連の堆積と考え調査したもので、最下部に黄灰色シルト

があり、その上部に黒褐色シルトが堆積するもので、8期前葉の土器が主体に出土した、溝底は標高1.56mである。中層は標高1.80m前後に溝底があるもの（丸底）で、最下部に黒褐色シルト、その上部に黄灰色シルトが堆積するもので、8期前葉から中葉の土器を含む。上層は1回～2回の下刈がある暗灰黄色～黄褐色シルトの堆積する古墳時代中期以後の湿地状堆積と思われるもので遺物も少なかった。この中で溝の掘削の可能性が高いのは、最も古い堆積である丸底の堆積、最下層の断面「V」字形の堆積、中層の丸底の堆積の少なくとも3回の掘削が存在した可能性が高く、断面「V」字形の堆積は全て8期前葉の時期になる可能性がある。

また01Db区SD01の東肩から0.50m～1.00m東に幅1.50m前後、深さ0.15m前後の丸底の溝01Db区SD02を検出できた。埋土は黒褐色シルトに基盤砂層の小ブロックが少量混じるもので、7期の土器が少量出土した。SD02の上部は8期の竪穴住居によって削平されていることから7期の環濠に伴う内溝か、相前後して掘削された環濠とは別の区画溝の可能性が高い。



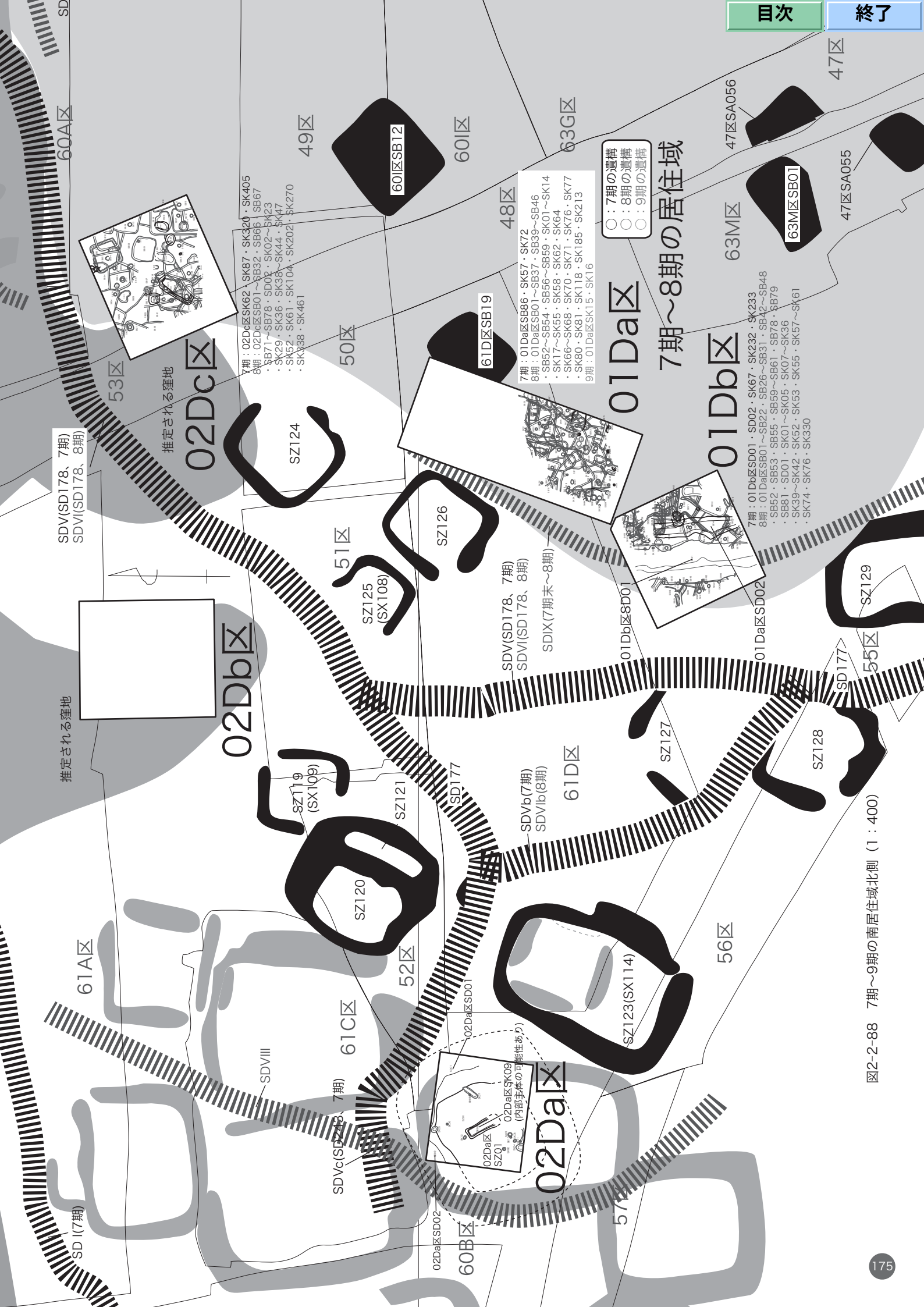




写真2-2-168 01Db区SD01（南より、7期の内環濠、断面V字形）



写真2-2-169 01Db区2面SD01とSD02（北より、写真左側が弥生時代後期の環濠集落内側）

d. 弥生時代後期～古墳時代前期の南居住域西側(01Da区・01Db区、図2-2-87・図2-2-88)

先に述べた内環濠01Db区SD01が以上の内容をもつと考えると、01Da区の西を通り、01Db区の西側を貫通する周辺の遺構との関係について説明する必要があるだろう。この2調査区では8期の遺物が混じらない7期の遺構は01Da区において確認できた01Da区SK72ぐらいで、8期の遺構は2調査区で竪穴住居120棟以上(一辺2.5m～4m前後の平面隅丸方形～長方形の形態)、大小の土坑120基以上を数える。01Db区において01Db区SD02より下層と考えられる竪穴住居群は少量の7期～8期の遺物を含むものの6期の遺物が主体である6期の遺構と考えられる(最下面の調査でも7期・8期の土器が出土する遺構は少数存在した)。以上の状況が正しいとすると、8期の遺構形成に伴って7期の遺構が削平・消滅した可能性はあるが、7期の内環濠東肩部より01Da

区SK72まで少なくとも8m前後、01Db区SK233まで1.5m前後の遺構の空闲地が存在する可能性が高い。またこの傾向は01Db区SD01下層の8期前葉の土器が大量廃棄された堆積まで継続していた可能性が高いものと考えられる。その後01Db区SD01が8期前葉に完全に埋没し、この2調査区一体に8期前葉から9期前半の遺構群が形成されたものとする。また8期中葉以後の後半には01Da区SD01中層がほぼ同じ軌道で深さ0.80m以上掘削される。興味深いのは7期の内環濠と同じかは不明であるが、8期～9期における遺構の上層がその後の01Db区SD01上層の堆積により少なくとも0.50m前後は削剥されている事から考えると、01Db区SD01中層の溝でさえ、深さは1.5m前後、幅2.5m～3.0m前後になる可能性が高いものであろう。8期中葉以後における朝日遺跡の集落形態を復元する意味で重要な要素と思われる。



写真2-2-170 01Db区1面全景(南より、SD01下層からは8期前葉の土器がまとめて出土した。SD01以外の竪穴住居・土坑は8期前葉～9期前半の遺構と考えられる)



写真2-2-171 01Da区1面にて検出できた
8期の竪穴住居群（南東より）



写真2-2-172 01Da区SK15・SK16
（北より、9期の土坑）



写真2-2-173 01Da区SB05（南西より）



写真2-2-174 01Da区SK71・SK72断面（北より）



写真2-2-175 01Db区1面全景（東より）



写真2-2-176 01Da区3面全景（南東より）

e. 弥生時代中期後葉（6期）～後期（7期）の方形周溝墓（02Da区、[図2-2-86](#)・[図2-2-88](#)・[図2-2-89](#)）

02Da区には52区西隅SD244から56区・57区にかけて推定されていた6期の方形周溝墓の北東隅と考えられる溝02Da区SD01（東溝）・SD02（北溝）が検出できた（規模は不明だがSD01は幅4m以上を測る）。財団報告において推定されたものとは異なり02Da区SD01と02Da区SD02は一辺9m～10m前後の方形状の墳丘をもつ7期の方形周溝墓と考えられ、墳丘の軸線も7期の大溝SDVcの流れに沿って南西側に、61D区西側に確認されているSZ122に相前後して造られたと考えられるものである。墳丘内部には、SD01と平行する軸線で、長径2.65m以上、短径1.00m、深さ0.25mの隅丸長方形平底の大型土坑02Da区

SK09（埋土は黒褐色細粒砂）が検出でき、土坑内部には一回り小さい長径2.45m、短径0.72m、深さ0.20mの隅丸長方形平底の内部施設（埋土は黒褐色細粒砂）が確認できた。内部施設の立ち上がりはやや斜め外側に立ち上がるもので、木棺痕跡は確認できていないが、木棺が存在した可能性はある。

6期の方形周溝墓は7期の方形周溝墓の下面から検出できた02Da区SD03（東溝）と02Da区SK13（北溝）に囲まれた南西側に1基か、別々の方形周溝墓の周溝の可能性があるもので、02Da区SD03は幅1.3m前後で長さ4.3m確認できた。02Da区の北で確認されている61C区SZ115とSZ118の軸線がほぼ一致しており、この2基の方形周溝墓を中心とする6期の墓群の一部と考えられる。

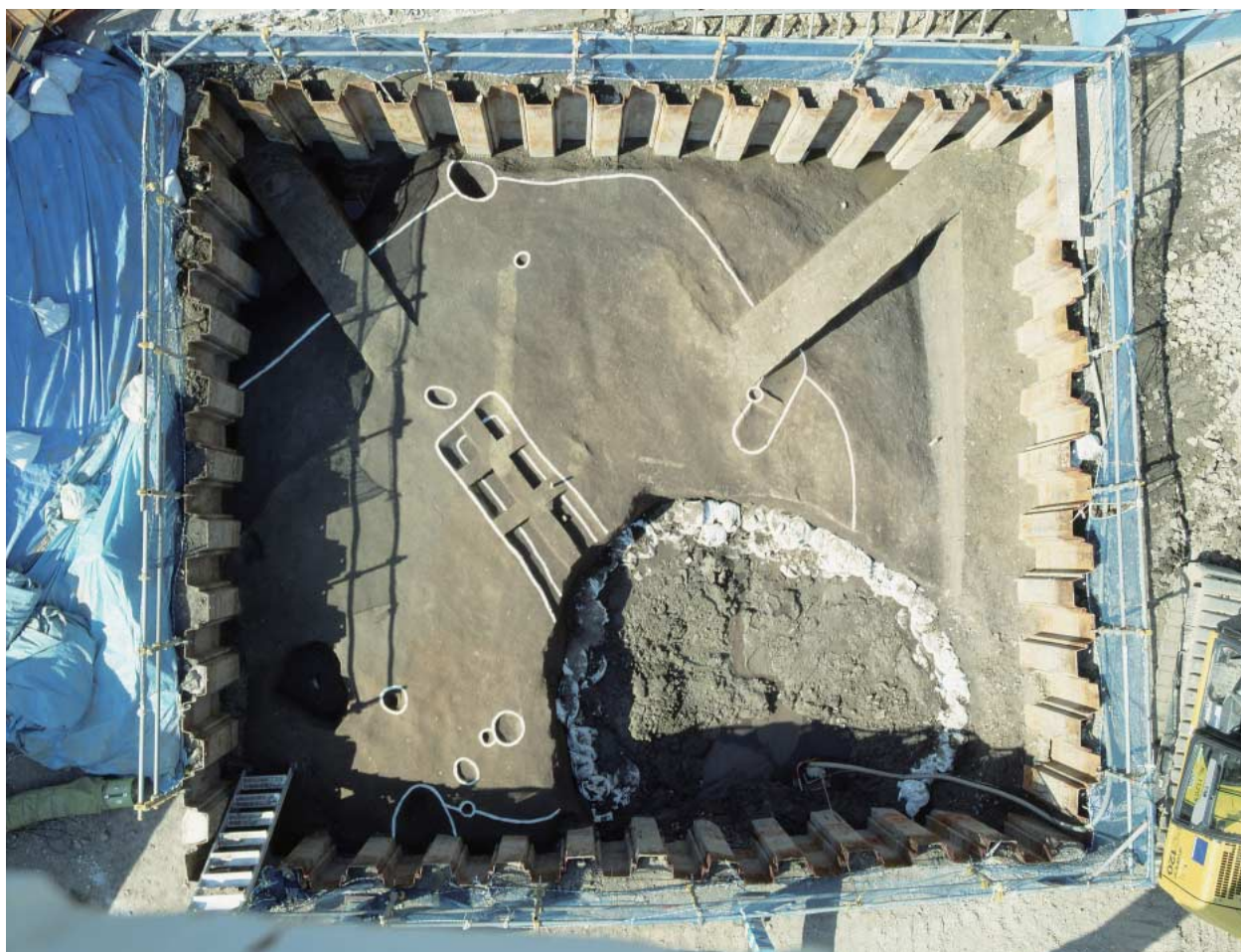


写真2-2-177 02Da区1面全景（南より、7期の方形周溝墓）

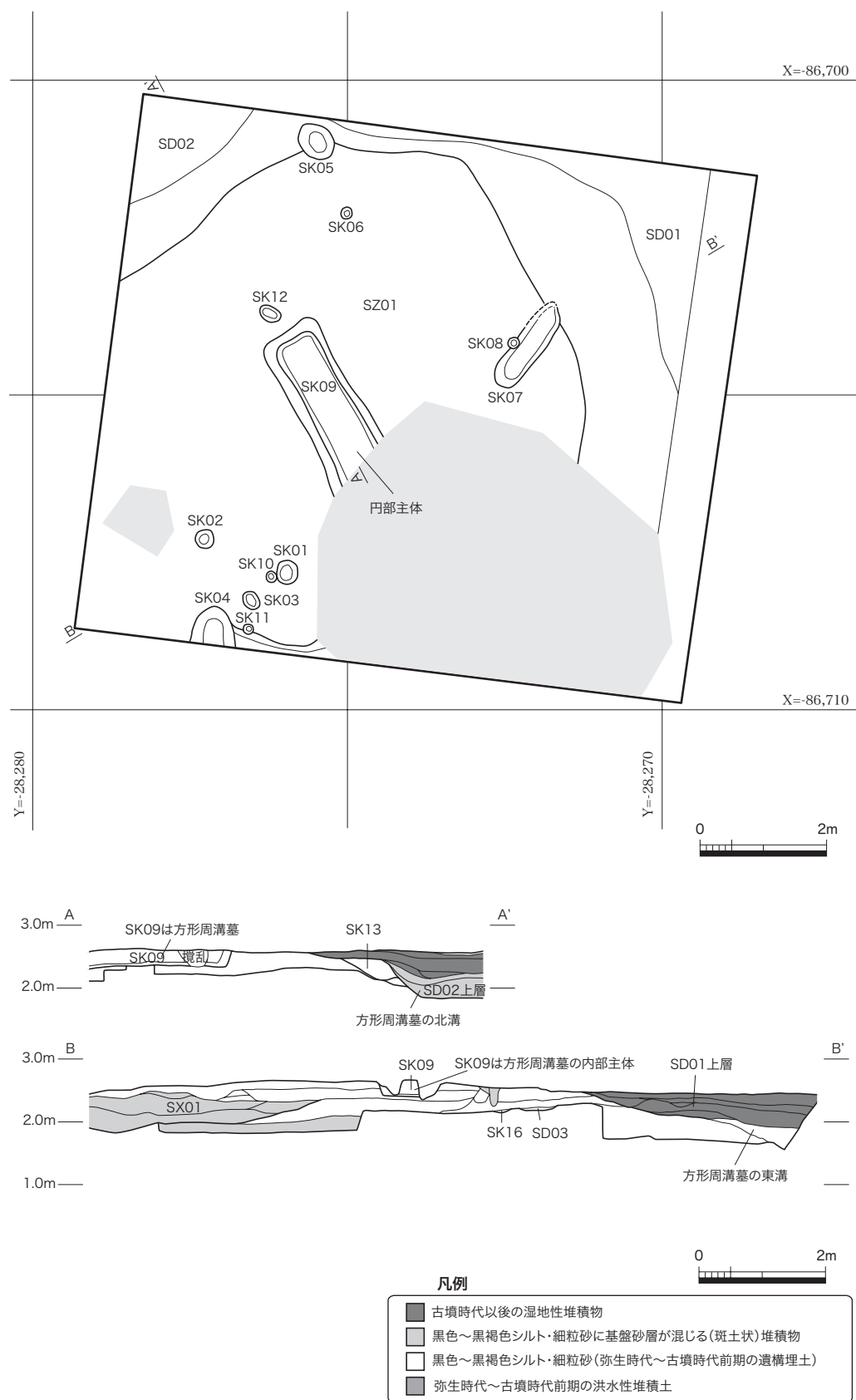


図2-2-89 02Da区SZ01 (1 : 100)

(15) 南居住域南側**A. 位置とこれまでの成果……………**

南居住域の南側に位置する地点にあるもので、01Dc区・02Dd区の調査区がある。

これまでの調査では、01Dc区の北東に西から63M区、47区、63G区、46区、01Dc区の南に北から43区、44区、34区、33区があり、02Dd区の北西に東から89A区、43区、02Dd区の北東に南から35区、63J区、37区、02Dd区の南に31区～33区の調査区がある。また01Dc区の南側は44区の東側と重複し、02Dd区の北側は主に35区の西側と02Dd区の南側は89B区と大きく重複する。

これらの調査では、まず33区・34区・89B区等において7期の南居住域をめぐる2条の環濠、財団報告のSDXV・SDXVI（県報告33区SD178と44区SD178）、SDXVII（県報告33区SD177）が明らかにされたことであろう。それにより弥生時代後期（7期）における朝日遺跡の南居住域

の集落形態が示された。内環濠は8期にも存続し、34区において途切れており、その部分に入口施設が存在する可能性が明らかにされた。つまり7期は南居住域南側を2重の環濠がめぐり、8期は外環濠が埋まり、内環濠のみ機能することが明らかにされた。また89B区SDXVII南とSZ162の北東の間には銅鐸が横位に埋納された状態で出土した。02Dd区の南南東約30mの地点である。その他の遺構に関しても、この地点は南居住域でも遺構（多数の竪穴住居、土坑、溝等）が濃密な地点であり、2期から8期の遺構が連続と営まれている事が明らかにされている。その中で南居住域を東北東から西南西に横断する大溝、財団報告（89A区等において検出された）のSDX-1・SDX-2・SDXI（県報告37区・43区・44区のSD180）が報告されており、弥生時代には流水により一部南居住域を浸食する事も指摘されている。



写真2-2-178 巴形銅器出土状態（南西より）



B. 今回の調査成果……………

a. 弥生時代中期前葉（2・3期）の区画溝（図2-2-90・図2-2-91）

02Dd区の2面において幅1.25m、深さ1.00m（溝底の標高1.95m）の断面「V」字形の溝02Dd区SD04を検出できた。埋土は黒褐色シルトを主体とするものであった。後に触れる居住域の遺構の展開と関係すると思われるが、02Dd区1面においてちょうどSD04の上にて検出された竪穴住居SB01から貝層が腐食した時に付着するような白い粉が付着した多量の2期・3期の土器が出土

しており、その中に1点のみ4期の土器の小片が出土した。よってSB01の存在を認めつつも、出土した土器の状態から考慮するとSD04は2期・3期の竪穴住居・土坑等の遺構の展開の後に掘削され、同じ時期の中で、ほぼ貝層を伴って埋没して行った状況が推定でき、その上部に4期の土器が紛れ込んだ（廃棄された）可能性が高く、埋没後は02Dd区1面にて検出されたSB01の堆積の一部やSK11・SK14・SK26等SD04にほぼ重複する2期～4期の土器が出土した遺構を含んで、窪地を形成していた可能性が高い。

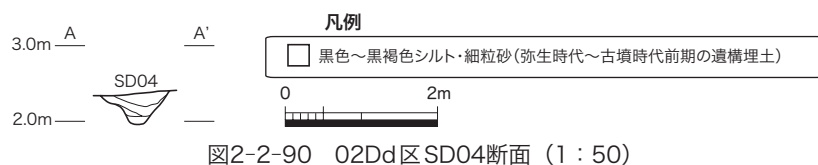


写真2-2-179 02Dd区3面全景（東より）

※写真2-2-179中央にみられる土管の上（西側）に2期・3期の区画溝がはいる。その周囲に2期～4期の遺構群が展開してみえる。

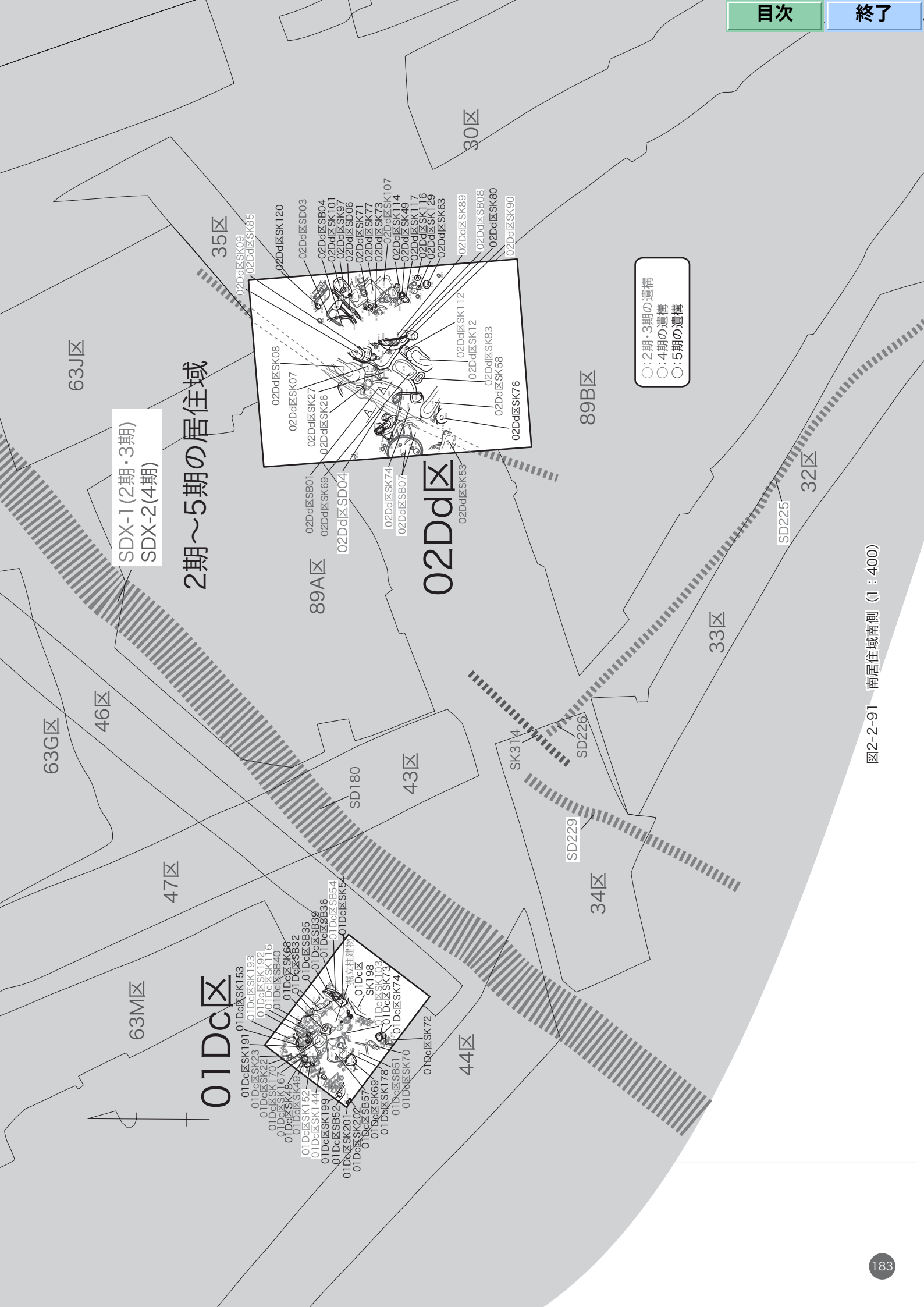


図2-2-91 南居住域南側 (1 : 400)

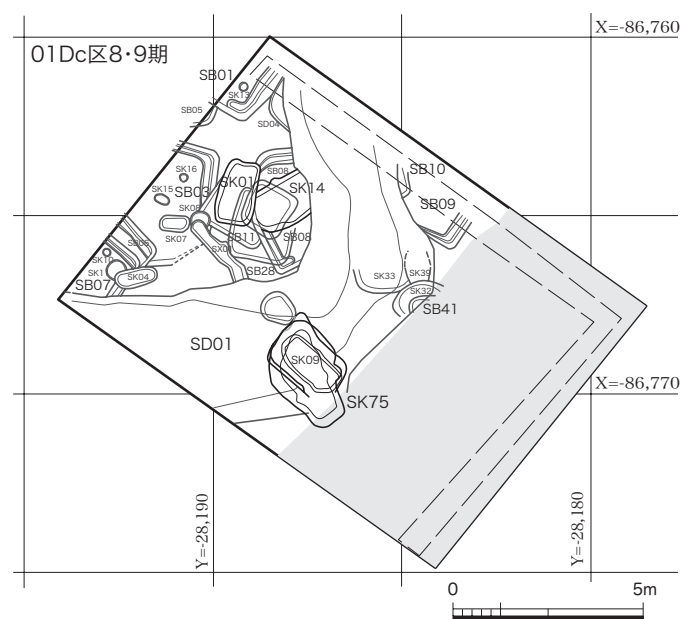
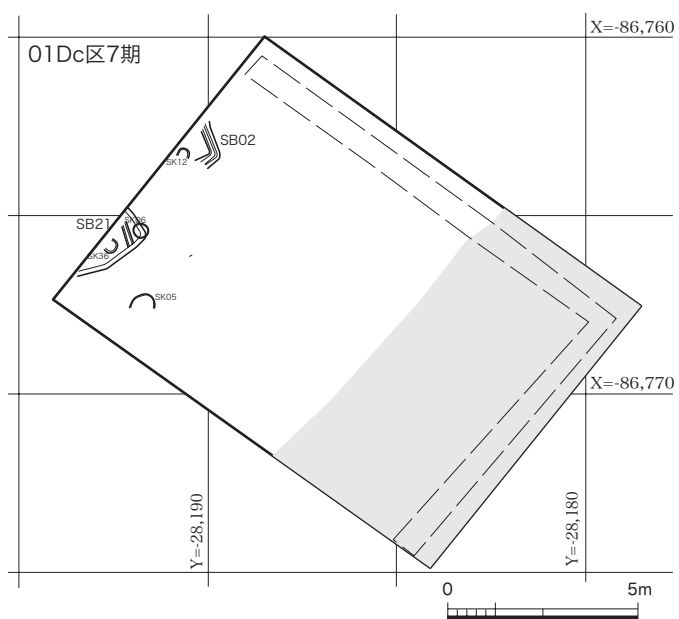
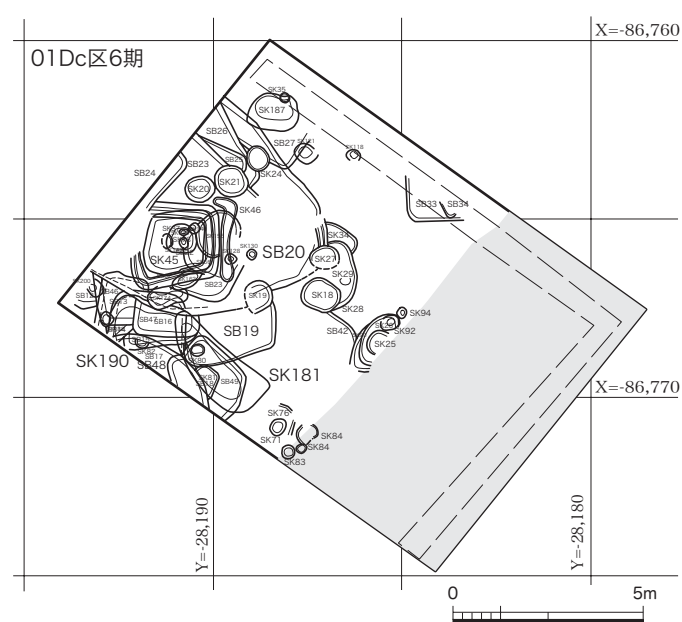
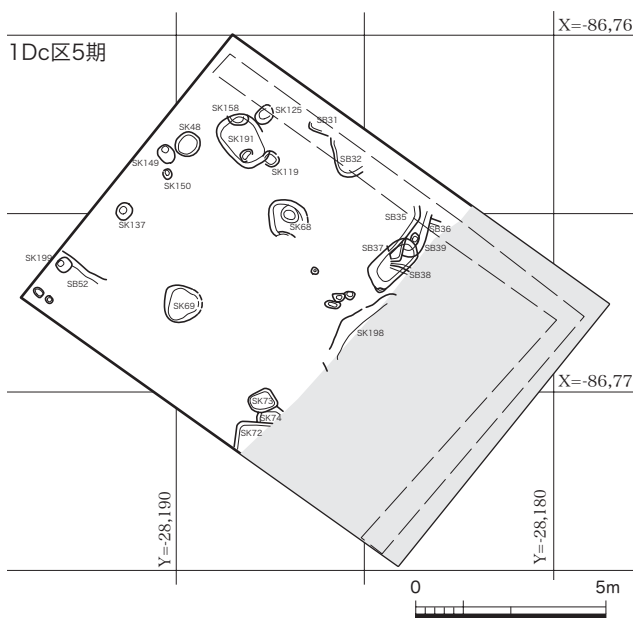
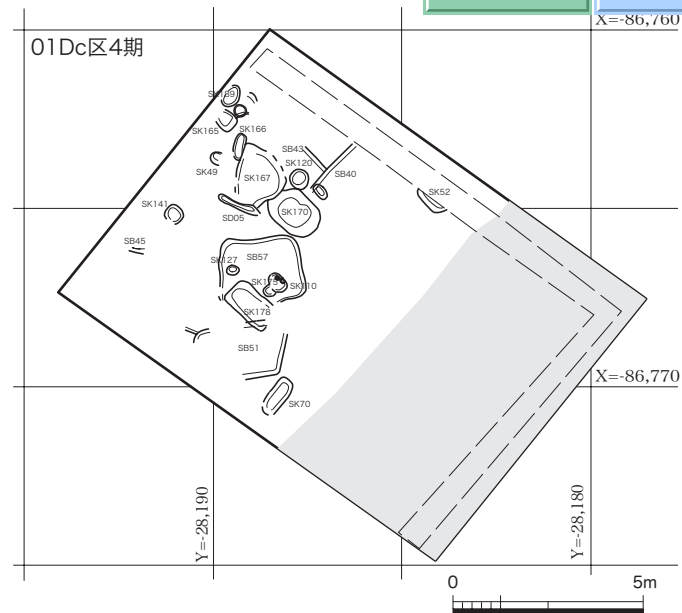
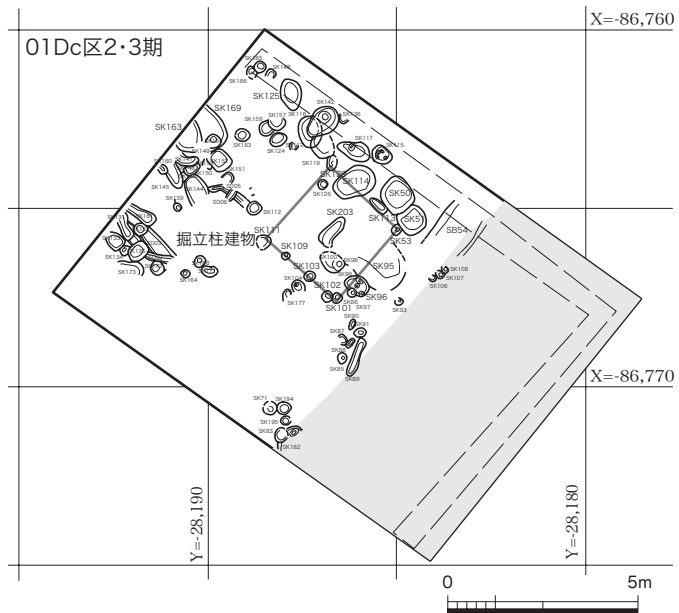


図2-2-92 01Dc区の遺構変遷 (1 : 200)

b. 弥生時代中期(2・3期)～古墳時代前期(8期)の南居住域南側(図2-2-91～図2-2-96)

従来、南居住域内部の遺構展開については環濠や主要な区画溝、ピット列などから分析される事が多かったが、今回は遺構分布や遺物の出土傾向によっておおまかな遺構の変遷が説明できるようになった。以下調査区毎に遺構の展開を述べる。

○01Dc区(図2-2-92)

01Dc区では、8期の方墳の溝01Dc区SD01を除くと遺物包含層が約0.40m前後あり、調査の都合と遺構のあり方から大きく4面に分けて調査した。ほぼ竪穴住居の遺存状態が深さ0.10m前後であり、補足調査のトレンチや遺構検出の為に若干の掘り下げ(厚さ2cm～5cm程)以外は遺構として掘削したのであまり取りこぼしはないように思われる(遺構の誤認はあると思われるが)。実質調査できた約60㎡の中で竪穴住居が57棟、土坑が202基検出できた。遺物の出土状態から遺構の時期を検討すると、1面では8期の方墳の周溝SK01と9期の土坑墓3基を除くとほとんど8期の竪穴住居を中心とする遺構で、その下に7期と6期の遺構の一部が見えている状態。2面は調査区西側全てが6期の竪穴住居で部分的に7期の竪穴住居がのる状態、東隅側に5期の竪穴住居群の上に6期の竪穴住居が1棟のり、5期と6期の遺構の隙間に4期の遺構が見える状態。3面目は調査区東側においてすでに基盤砂層が半分程度見える状態の為、調査区西側だけ遺構検出しており、ほとんど6期の竪穴住居と土坑の遺構の隙間に4期と5期の遺構が見せる状態(一箇所8期の遺構の下部が残る)。4面目はSD01の下で遺構で7期・8期の土坑が検出できた他は、初めて2期～6期の遺構がほぼ同数見つかる状態に至る(一応、4面目で遺物がでない実質時期不明の遺構はその上の遺物包含層の主体の時期2期・3期の遺構と考えた)。よって8期のSD01で深く掘削された以外の部分を除くとほとんど全面遺構となり、4期の遺構が調査区北側にやや偏って分布する以外は、2期～6期まで散在的に分布する。2期～4期の竪

穴住居の埋土は、6期の遺構形成により全く残存しておらず、5期の竪穴住居の埋土も調査ができたのは、東隅部の径2mの範囲のみであった。4面目の調査区西隅では5期と6期の土坑5基が存在し、それらの遺構は深いものと予想されたが、上部では範囲が狭くてこれらを下まで分けて掘削できない為、やもうえずSB52として掘り下げた(実際にも住居が重複してある可能性が高い)。

遺構の特徴としては、2期～7期の竪穴住居で検出できたのは一辺1.5m～3.5m程の平面隅丸形状の形態のものが主体で、一部台形になるものSB22(幅0.20m前後の周溝が確認できた)と弧状のラインが検出できたSB20とSB48が6期の平面胴張り長方形の竪穴住居になる可能性が高く、SB20は長軸5mを超えるやや大型のものになる可能性が高い(短軸も5.5mを測るが、東肩のラインは不明瞭であった)。土層断面上では貼り床(調査時には床面の柱穴を確認するため、基本的に掘り抜いた)、周壁の痕跡等を確認できるが、遺構としては検出できなかった。他に建物では、SK101・SK103・SK109・SK111・SK129・SK114(1基の土坑として調査したが2基以上の土坑の重複と考えられる)・SK113・SK53は2期の土器のみ出土するもので、桁行3間(2.5m)、梁行1間(2.4m)の掘立柱建物になる可能性が高い。土坑では2面において調査した6期のSK21(径0.85m前後、深さ0.25m、埋土は黒褐色シルト)は平面円形丸底の中型土坑で(隣接してやや重複する同形態のSK20がある)、遺構掘削中に緑色溶結凝灰岩の管玉未成品が出土した。周囲に玉作りの工房が存在した可能性があるが、より古い時期の遺構からの混入の可能性もある。他に特徴的な土坑としては01Dc区SK45・SK78・SK47・SK155・SK181・SK187があり、SK47は一辺1.25m前後、深さ0.20mの平面隅丸方形やや丸底の土坑で埋土は黒色～黒褐色シルト、他は6期の土坑で、平面隅丸方形丸底の大型土坑SK45とそれを掘り込む平面円形丸底の大型土坑SK78とともに深さ0.25mで黒色シルトの埋土、SK155



とSK187は平面円形～楕円形丸底の大型土坑で埋土は黒色中粒砂、SK181は平面不整楕円形丸底の大型土坑（長径3.10m、短径1.25m、深さ0.65m）で、埋土は黒色シルトを主体とするものであったが、最下層に木質層があり、その上に腐食した貝層と木質層が混じる堆積、さらに上層にかけて炭化物や焼土が含まれる比較的細かい互層が堆積していた。

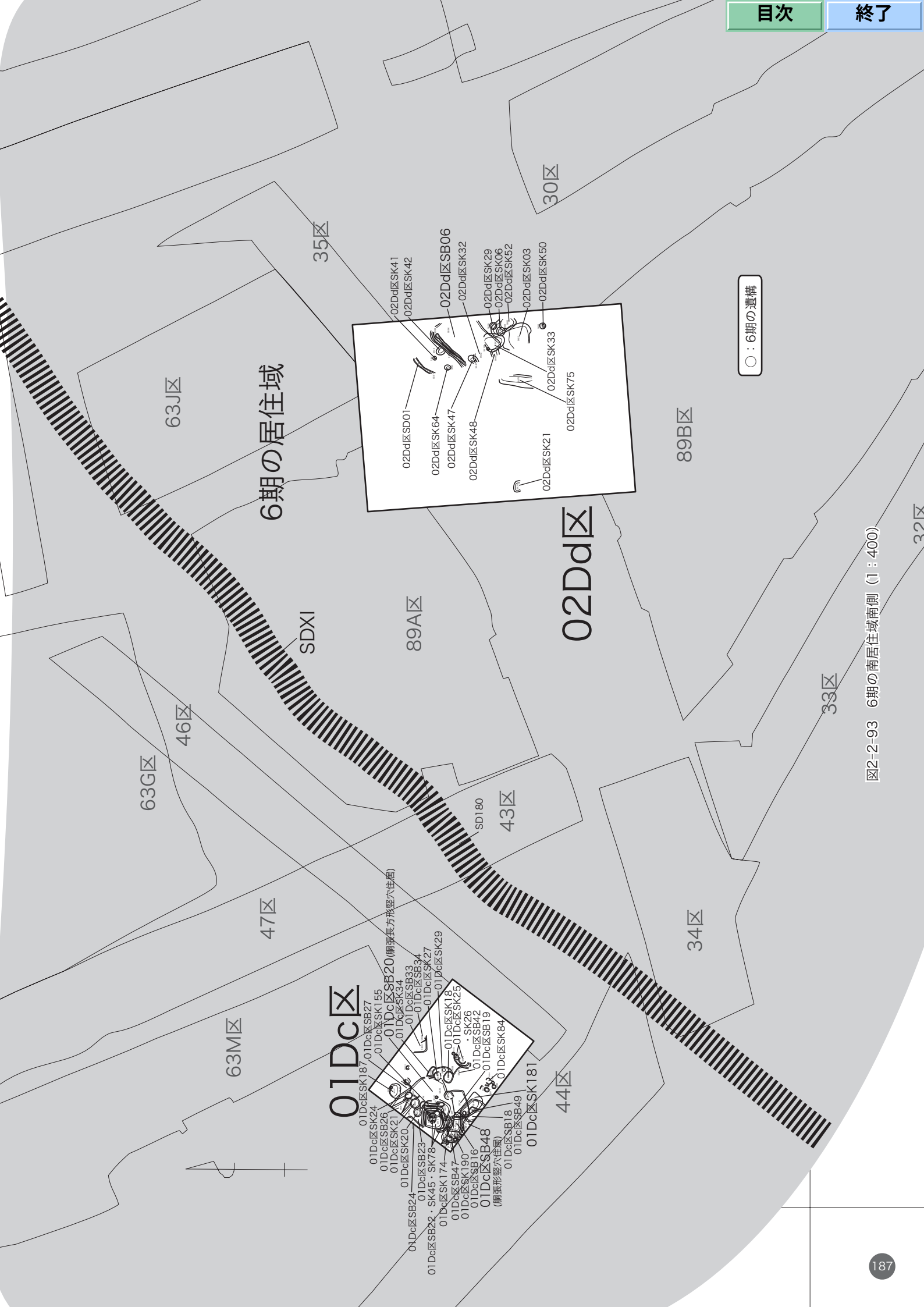
○02Dd区（図2-2-94・図2-2-95）

02Dd区は旧調査区が重複しており、調査できたのは135㎡程で、竪穴住居が10棟程と土坑145基が確認できた。この調査区では遺構の展開に興味深いものが観察できた。2期・3期の遺構は調査区西側の区画溝02Dd区SD04付近に分布し、4期の遺構は調査区全体に分布する。続く5期の遺構は希薄で、主に東側に分布する。6期と7期の遺構は調査区東側に分布し、6期は西側では土器もほとんど出土していない。8期の遺構は調査区全体に分布するが、西側に多い。調査区東側では6期の竪穴住居が深く掘り込まれている為に2期・3期の竪穴住居は存在していないように見えるが、6期・7期の遺構は8期の遺構形成による削平状況を考慮しても明らかに調査区西側で希薄な状態が想定できる。

竪穴住居では2期・3期の02Dd区SB08が当初02Dd区SB81として掘削していたもので、本来調査区東側にのびる平面隅丸方形の竪穴住居と考えられるものである、深さ0.50mを測り、掘り方は本来深いものと思われる。4期ではSB07があり、西壁断面からは長さ4.3m程の竪穴住居が窺われるが、平面では円形のものと同方形の住居が重複している可能性がある。その他にも02Dd区SD03は幅0.20mの溝で、4期の平面隅丸方形の竪穴住居の周溝と思われる。6期では02Dd区SB06が長軸5.50m、短軸3.95mの平面隅丸長方

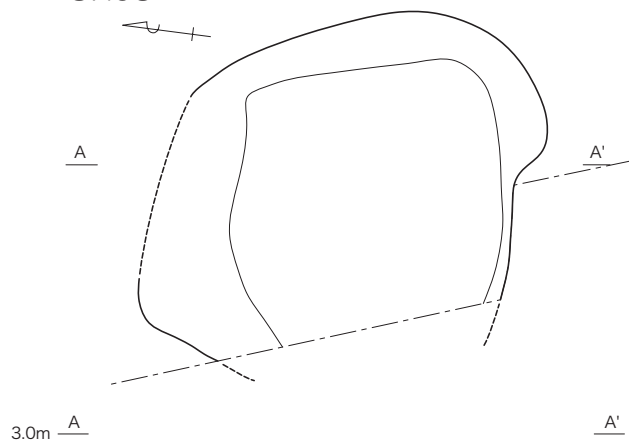
形のもので、幅0.20m程の周溝が2条めぐる、建て替えを含むものと考えられる。調査区東側で7期の02Dd区SB02が短軸4.0mで幅0.40m前後の周溝がめぐるもの、支柱穴と思われる小型円形土坑が2基（02Dd区SK30・SK31）ある。

土坑では大型土坑が多く検出された。02Dd区SK03・SK05・SK08・SK12・SK53・SK85・SK107等がある。SK85は2期・3期のもので、長径1.40m以上、短径1.10mの平面楕円形丸底の大型土坑で、埋土は黒色シルトと基盤砂層の斑土。SK08とSK12、SK107は4期の平面楕円形丸底の大型土坑で、SK08は長径3.30m以上、短径1.60m、深さ0.92mで埋土は最下層が灰色粘土、下層が褐灰色粘土と浅黄色シルトの互層、上層が黒褐色～暗オリーブ褐色シルトに少量の炭化物を含むもの、SK12は長径2.03m、短径1.36m、深さ0.83mで埋土は最下層が黒色細粒砂に基盤砂層が少量混じるもの、下層が黒色シルト、上層が黒色～黒褐色シルトに炭化物を含むもの、SK107が長径1.40m以上、短径1.30m、深さ0.60m前後で埋土下層が黒色中粒砂と基盤砂層の斑土、上層が黒色シルトの堆積であった。SK03とSK53は6期の大型土坑で、SK03が平面不整円形平底で径2.35m前後、深さ0.55m、埋土が黒色～黒褐色シルトに微量の炭化物を含む堆積、SK53が長径1.80m以上、短径1.30m、深さ1.02m、埋土が黒色シルトを主体とするもので、上層に少量の炭化物を含み、下層に大量の土器と木片を含む堆積であった。6期の土坑で01Dc区SK181と同じように最下層に木片を含む層が存在する点は興味深い。SK05は8期の不整楕円形断面やや逆台形の土坑で、長径3.33m、短径2.13m、深さ0.75m、埋土が最下層が黒色粘土と基盤砂層の斑土、上層が黒色シルトの堆積であった。



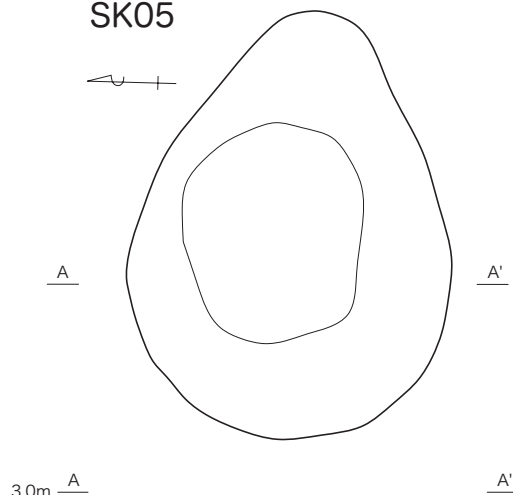


SK03



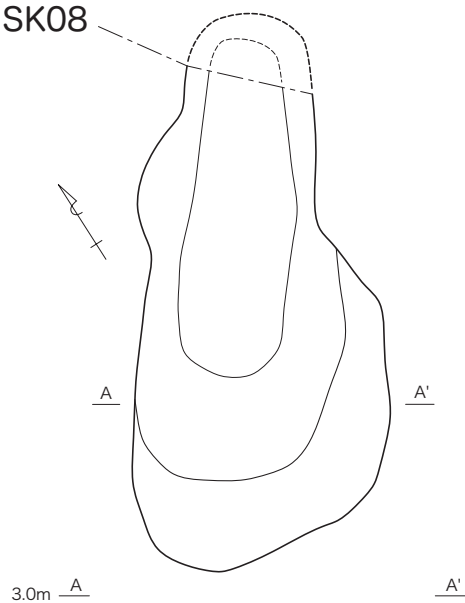
- 1 10YR2/1 黒色砂質シルト 微量の炭化物含む
2 2.5Y3/1 黒褐色シルト 微量の炭化物含む

SK05



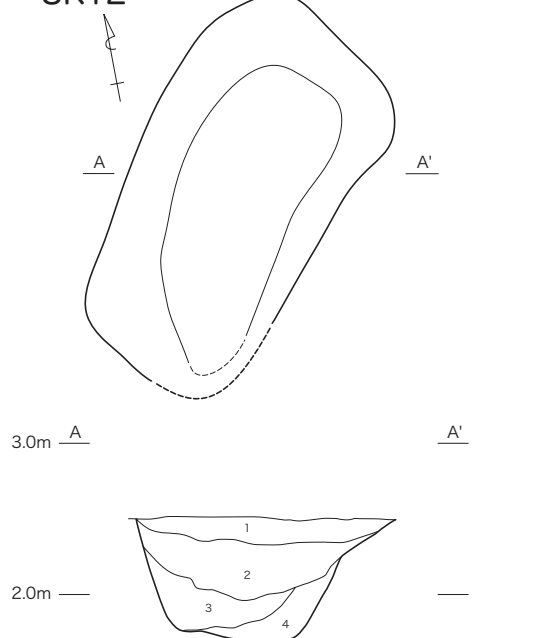
- 1 5Y2/1 黒色粘質シルト
2 2.5Y2/1 黒色粘質シルト
3 2.5Y2/1 黒色粘土 2.5Y7/6 明黄褐色粘土ブロック含む
4 2.5Y2/1 黒色粘土と7.5Y7/2 灰白色粗粒砂の斑土

SK08



- 1 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト
2 10YR3/1 黒褐色シルト
3 10YR3/2 黒褐色シルト
4 10YR2/2 黒褐色シルト 少量の炭化物粒含む
5 10YR4/1 褐灰色粘土
6 10YR3/1 黒褐色粘質シルト
7 10YR4/1 褐灰色粘土と5Y7/4 浅黄色シルトのラミナ
8 5Y4/1 灰色粘土
9 2.5Y3/1 黒褐色シルト 粘性あり

SK12



- 1 10YR2/2 黒褐色シルト やや粘性あり
2 10YR2/1 黒色粘質シルト やや粘性あり、炭化物粒含む
3 5Y2/1 黒色粘質シルト
4 5Y2/1 黒色細粒砂 少量の7.5Y7/3 浅黄色中粒砂含む



図2-2-94 02Dd区的大型土坑 (1:50、SK03とSK05は8期、SK08とSK12は2期～4期)

c. 巴形銅器の出土（7期、図2-2-95・写真2-2-178）

出土地点は、02Dd区竪穴住居SB02の南側に近接し、調査区を囲むシートパイルに設定したセクションベルト内（遺物包含層）で巴形銅器は表面を上にしてほぼ水平に置かれたような形状で出土した。層位的には、断面図から明らかなように、第3層上位に位置し、第2層から掘削されている竪穴住居SB02からは7期中葉（山中Ⅱ式1段階）の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02に重複するSK33から7期前葉（山中Ⅰ式2段階）の資料が確認できる。さらに第4層から掘削されたSK52は、6期後半の土器を主体に包含する。よって必ずしも確定できないが、層位的には6期後半から7期中葉（山中Ⅱ式1段階）の間の堆積から出土した点を重視し、巴形銅器の出土した地点の堆積（遺構）を7期前半の時期を中心に考えておきたい。

階）の高杯が床面上から出土している。また同一遺構検出面では、SB02に重複するSK33から7期前葉（山中Ⅰ式2段階）の資料が確認できる。さらに第4層から掘削されたSK52は、6期後半の土器を主体に包含する。よって必ずしも確定できないが、層位的には6期後半から7期中葉（山中Ⅱ式1段階）の間の堆積から出土した点を重視し、巴形銅器の出土した地点の堆積（遺構）を7期前半の時期を中心に考えておきたい。

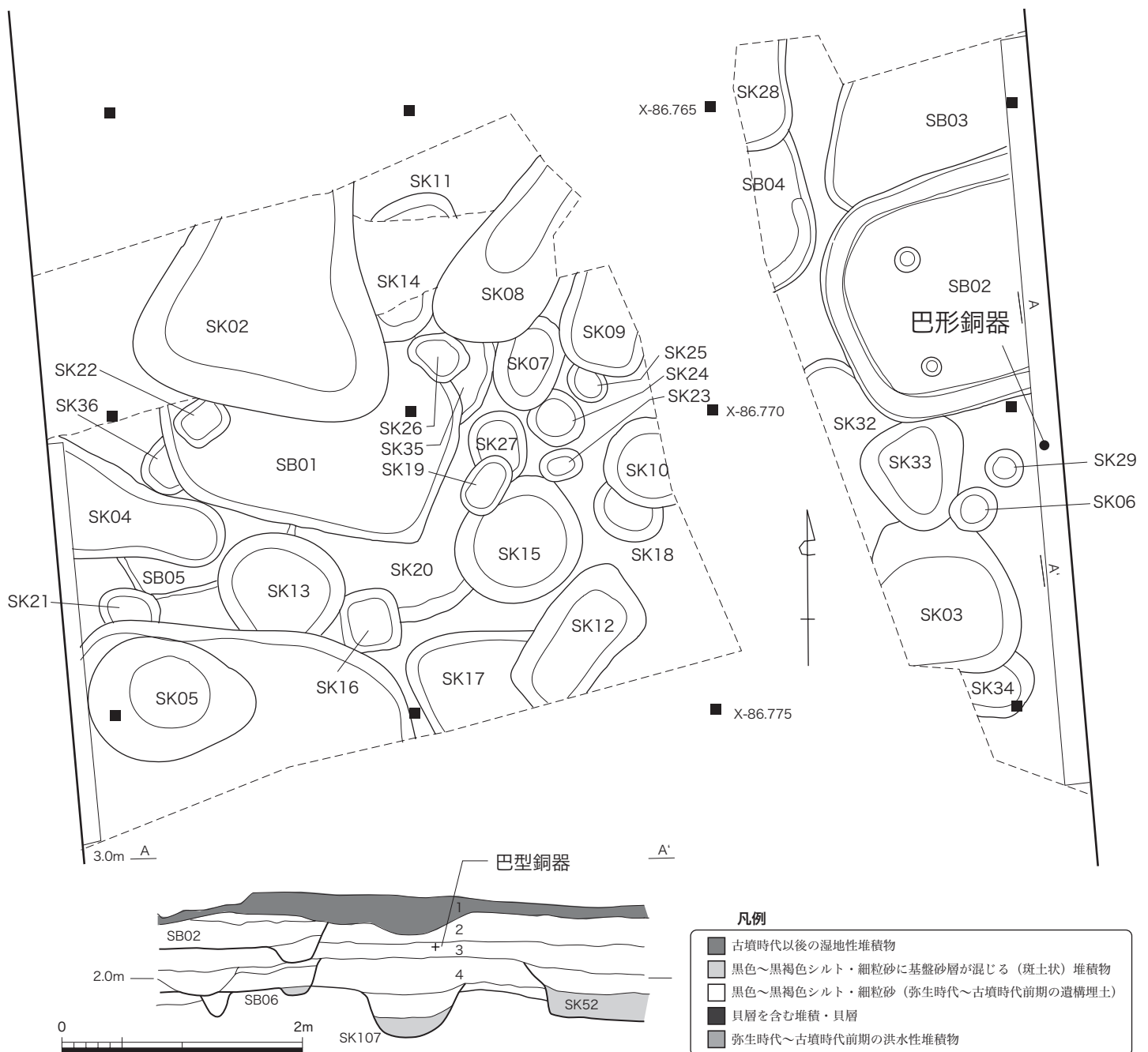


図2-2-95 02Dd区1面遺構（平面図1：100、断面図1：50）



写真2-2-180 02Dd区1面全景（東より）



写真2-2-181 02Dd区SK05（東より）



写真2-2-182 01Dc区2面北側（北より、主に6期～8期の遺構）

d. 古墳時代前期前半（8期～9期）の墓域（図2-2-92・図2-2-96）

周囲の調査区においては確認されていなかったもので、01Dc区において方墳（前方後方墳の可能性も残る）南西隅の周溝と考えられる01Dc区SD01とSD01の埋没後に溝上とその付近に掘削された土坑墓と考えられる土坑3基を検出できた。

01Dc区SD01は軌道が北からやや西に振る東溝が幅2.5m前後、深さ0.60m前後、東溝に直行する形で検出できた南溝が幅3.6m前後、深さ0.45m前後であったが、溝底は標高2.0m前後であり変わらない。埋土は下層に黒色～黒褐色シルトに少量の浅黄色・灰オリーブ色シルトの小ブロックを含むもの、上層に湿地堆積と考えられる灰オリーブ色～暗灰黄色粘土が堆積していた。墳丘の規模は不明であるが一辺8m以上で、埋葬主体は確認できなかった。盛土と思われる堆積は後世の湿地堆積による削平により全く残存していなかった。

01Dc区SK01・SK09・SK14はSD01埋没後の遺構で、表土掘削直後から灰白色の埋土が塊状に確認できる状態で検出できた。SK01が遺構の重複関係からはやや新しい可能性があり、長径1.70m、短径1.00m、深さ0.25mの隅丸長方形平底の土坑で下層がオリーブ黒色シルトと灰白色粘土の斑土、上層が灰白色粘土で、木棺等の施設は確認できなかった。SK09（下層をSK75として調査した）は長径2.5m前後に推定できる、短径1.50m、深さ0.15mの不整隅丸長方形平底の土

坑で土坑墓の掘り方と考えられるもので暗灰黄色シルトの埋土部分、SK09内部に長径1.83m、短径0.85m、深さ0.15mの主体部と考えられる楕円形の埋土（上層がオリーブ褐色シルトと黄灰色シルトの斑土、下層が黒色シルトに黄褐色有機物を含む）が違う部分として認識して調査した。しかしその後下層にて調査したSK75（長径2.85m、短径1.75m、深さ0.50mの平面不整楕円形丸底の大型土坑で埋土は下層が腐植物を含む黒褐色シルトと基盤砂層の斑土、上層が褐灰色シルトに腐植物を含むもの）が8期後葉の土器を含む同一の遺構である可能性が高くなり、上層で調査したSK09は誤認である可能性が高い。SK14は長径2.23m、短径1.46m、深さ0.16mの不整楕円形平底の土坑で土坑墓の掘り方と考えられるもので褐灰色シルトの埋土部分、SK14内部に長径1.83m、短径1.08m、深さ0.16mの主体部と考えられる不整楕円形の埋土（上層が黒褐色シルト、下層が黒色シルト）が違う部分があった。断面上ではやや斜めに内部の埋土部分が立ち上がる事から、木棺の腐朽した痕跡とも考えられるが、内部部分の平面形が楕円形である事からはSK09と同様、袋等木棺以外による埋葬方法の可能性が高い。この3基の大型土坑は古墳（可能性として）形成後のものと考えられるので、土坑墓の可能性を推定したいが、SK09・SK75のような形態のものが、墓として成り立つのか今後の課題である。よって居住域に関する廃棄土坑のような性格も可能性として残る。

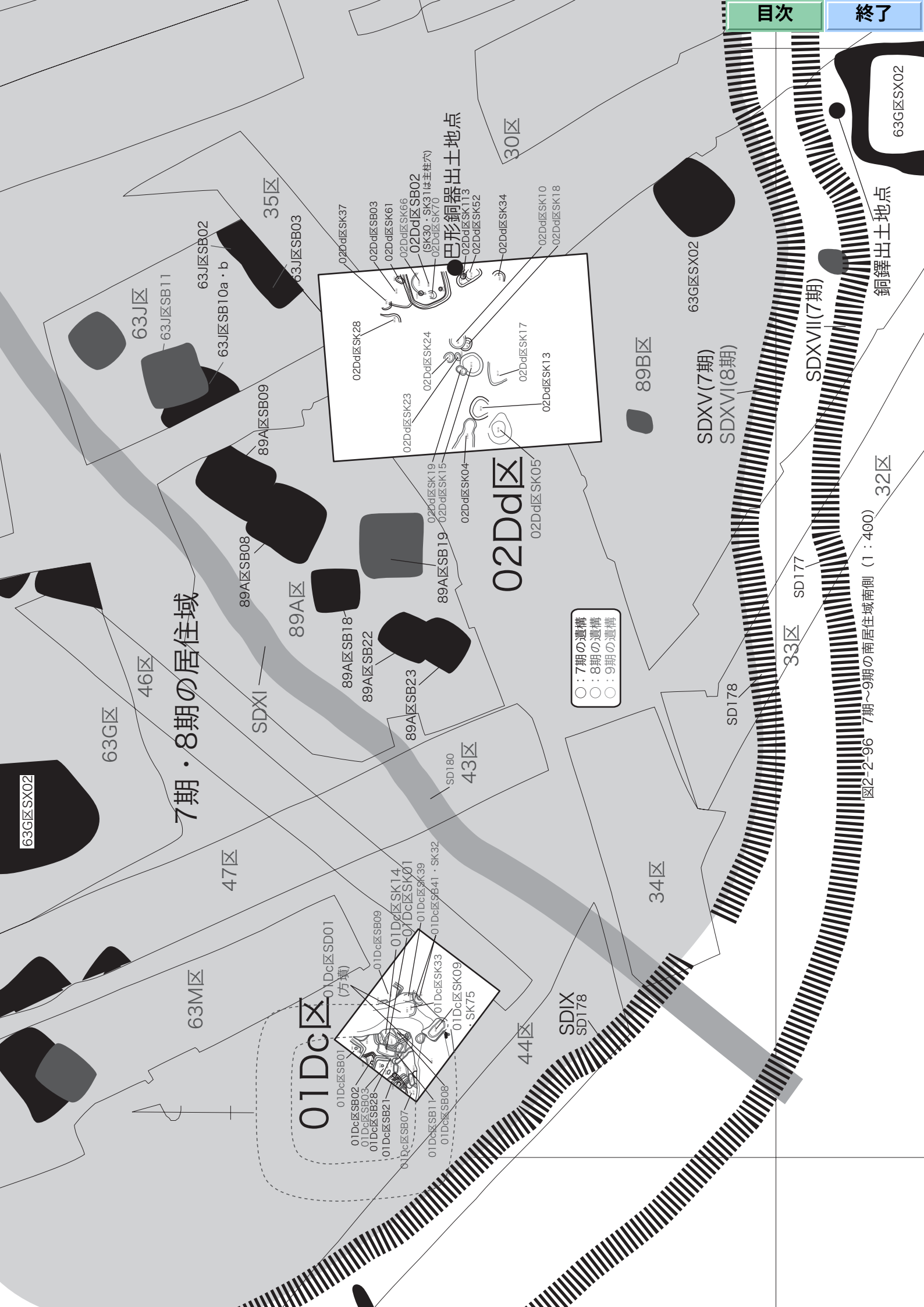


図2-2-96 7期～9期の南居住域南側 (1:400)



写真2-2-183 01Dc区SK14（南東より、9期の土坑墓）



写真2-2-184 01Dc区1面全景（北より、調査区南側に44区の発掘調査跡がみられる）



Ⅱ 3

中世から近世の遺構

古墳時代後期以後、古代の遺構については、弥生時代～古墳時代前期の遺構の上層を覆う湿地堆積物にみられるのみで、明確な遺構を検出できなかった。

中世では03Ca区において弥生時代の谷Bが埋没する過程で、12世紀～13世紀の湿地状の窪地地形を03Ca区NR01-1層と2層として調査した（同様な遺構は99Cb区や02Ca区、02Cb区の上層にも存在する）。NR01-1層は上部が暗灰黄色シルト、下部が黒褐色シルトの斑土状堆積となり、NR02-2層は上部が黒褐色シルト、下部が黒褐色シルトと流水性堆積物と考えられる暗灰黄色細粒砂～中粒砂の互層でどの堆積物にも多くの木片や腐植物が含まれていた。

その他中世の遺構では、03Ca区においてNR01が埋没した後に掘り込まれた中世の方形土坑が重複する状態で4基検出できた。長径1mを超える平面不整な方形断面逆台形の大型土坑で埋土は黄灰色シルトと灰色シルトの斑土であり、中世の谷Bを埋める堆積物が斑土状になって埋没したものである。明確な遺物はないが、時期は14世紀以後の中世後半期と考えられる。その他にも中世の方形土坑は98Ce区SK01（平面円形の土坑で板状木材が出土した）、99Ba区SK01・SK02、01Aa区SK01～SK07、01Bc区SK12、01Cb区SK01・SK02、01Db区SK05・SK06、01Dc区SK02・SK03、01Dd区SK01～SK03、01Dh区SK01・SK02、01Di区SK04、02Ac区SK01～SK04・SK06・SK08、02Ad区SK01～SK05、02Af区SK01、02Ag区SK01・SK02、02Bd区SK01～SK06、02Bj区SK01～SK05、02Db区SK01・SK02、02Dc区SK01、02Dd区SK02、

03Aa区SK01～SK04・SK14・SK15、03Ba区SK01、03Bc区SK01の22調査区で61基（03Ca区の4基を含めると23調査区で65基）が確認できた。全体の形状が不明なものも多いが、掘り方が平面方形で埋土は斑土状である点において共通するが、断面形態は皿形、逆台形、「U」字形等のバリエーションがある。

近世では03Ca区の上層において、一辺3.8m～10m前後の4筆の水田遺構（深さ0.15m～0.20m、耕作土は黄灰色～灰色シルト）と水田の中を通る用水路03Ca区SD01（幅0.85m、深さ0.20m前後、埋土は灰色シルトとオリーブ黒色シルトの斑土）を検出できた（図2-3-1）。この水田より先立つ溝として03Ca区SD02（幅1.30m前後、深さ0.40m、埋土は灰色シルトとオリーブ黒色シルトの斑土）があり、この溝は03Ca区SD01より北東に約0.60m外れた位置にほぼ同じ軸線で掘削されたもので、本来はこの溝に伴う水田遺構が存在した可能性が高い（写真2-3-1）。時期は03Ca区SD01に伴う水田遺構が近世～明治にかけて、03Ca区SD02が中世末～近世のものと考えられる。同様な水田遺構を02Cb区の土層断面にでも確認した。また01Ae区の西壁断面上層においても中世後半～近世の2層（面）の水田遺構を確認した（写真2-3-2）。

第Ⅱ部 遺構の分析 ― ③中世から近世の遺構

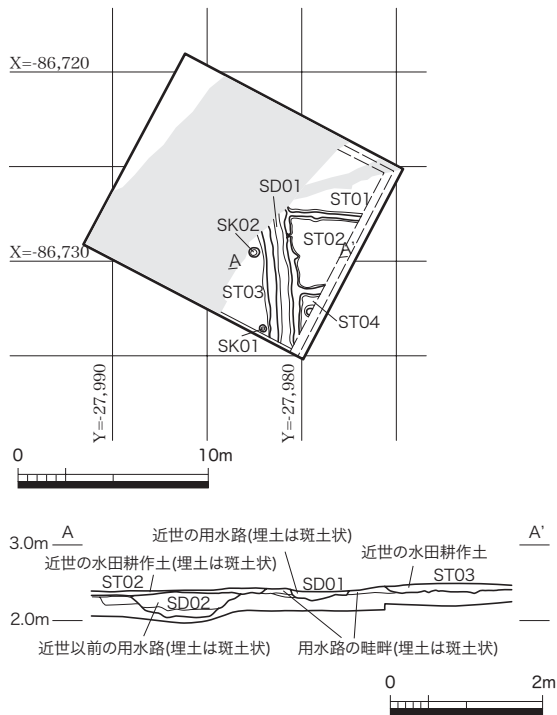


図2-3-1 03Ca区1面で検出した水田遺構
(平面図1:400、断面1:100)



写真2-3-1 03Ca区2面全景（北より）

※写真2-3-1左側（東側）に南北にのびる溝が03Ca区SD01の前身の用水路、少し軌道が東に振っている。写真上側にみえる4基の土坑は中世の方形土坑。



写真2-3-2 01Ae区西壁にて確認した2面以上の中世後半～近世の水田跡（東より）

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 138 集

朝日遺跡 VII

第 1 分冊 遺構

2007 年 3 月 31 日

編集・発行 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

DTP 株式会社ぎょうせい

印刷 サンメッセ株式会社